
逆行した日

水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆行した日

【Nコード】

N9232X

【作者名】

水

【あらすじ】

数十年が経った未来で、このかを失ってしまった刹那は、どういうわけか中学二年生の終わりに戻ってきていた。このかを失わない未来を目指して、刹那は歩き出す

まえがき

まえがき、ということ。最初に一言。

趣味と自分の好みで書き始めました。なので、話の構成、全体の物語の構成が雑な部分が多々あると思われます。

そのあたり、スルーしてくれると助かります。

他二つのネギまの連載でネタ詰まり……で、ポツと浮かんで書き出したら楽しくなってきた息抜きです。

更新速度は他二つの進み具合というか進行の調子によって変わりますので、気長に付き合って下さると助かります。

それでは、趣味と好みで物語の着地点が見えないお話でよろしければ……。

過去に戻った日

火の手が上がる。屋敷のあちこちで、燃え上がる炎を掻い潜り、私は走る。

目指すは一番奥、私が護ると誓った彼女の元へ。

「お嬢様!!」

長、と呼ぼうとするたびに止められた。名前で呼んでと言われて、駄目ですと困ったように笑えば、不満げにしながらそれでも、この呼び方を許してくれた。あの頃に戻れたような、気分になれるのだと。今は遠い友達を思い出せると、懐かしそうに言った。

部屋の襖を開き、驚く。既に炎はここまで及んでいて、部屋を中心に二人の男女がいた。

「ズ覚悟……!!」

絞り出すように男が言って刀を振り上げる。女は、悲しげに目を閉じていた。

駆け出し、腰に差した刀を抜く。十年以上愛用し続ける相棒が牙をむいて、男に襲いかかった。

「神鳴流———斬岩剣!!」

後ろからは武道に反する、そんなことを思って、それがなんだと、思い直した。

背中から血を噴出して男が倒れる。女はゆっくりと目を開けて、私を見た。

「せっちゃん」

「お嬢様……よかった、ご無事で」

逃げましょう、と手を差し出した。外は敵だらけ、急がなければまた襲われる。他の仲間が食い止めてくれているうちに、早くと。けれどその手を、お嬢様は首を振って拒絶した。立ち上がりず、座ったままで。なあ、と話しかけてくる。

「もう、手遅れみたいや」

「いいえ、まだ間に合います。とにかく、今はもう逃げましょう」

「手遅れなんよ。うちの体に、毒が入ってるから」

毒、ということは食事を用意した女中たちも、敵だったというわけだ。それは今となっては後回しの真実。

お嬢様にとって、毒は意味をなさないので。なぜ、と。

「……魔法がな、使えないんよ」

「え……」

「たぶん、結界やな。魔法を使えなくする。媒介がどこにあるのか、もう分からん」

治癒魔法を使えば解毒できる毒も、魔法を使えなければ意味が無い。お嬢様の口ぶりだと、今から別の方法で解毒を行おうとしても、間に合わないのだろう。絶望的だった。

「そん、な……」

口の中が乾いていく。どうして、お嬢様がこんな目に合うんだと、誰かを責める。

そんな私に、お嬢様は、とても綺麗な笑みを浮かべた。

「結局、お父様も、うちも、東と西を仲良くさせることは出来なかった」

「そんなことはありません。だって、和解を成立させたのは、お嬢様じゃないですか……」

「紙面だけの、協力しようって綺麗な言葉を並べただけの和解や。みんな、東に下ったのだと、怒った。せつちゃんも、知ってるやろ？」

「それは……」

東を倒せと、叫ぶ声は収まらなかった。それどころか、お嬢様が長となつてからは、さらに酷くなったように思う。表面上は穏やかで、けれど水面下は荒れ狂っていて、怒りと恨みの声は静まることを知らなかった。

「……うちが、過去に仮契約してたのも、原因やろうなあ」

「……そう、ですね」

否定の言葉を、吐けなかった。お嬢様は、もう全て分かっていた。西洋魔術師との仮契約を、今はもう解除しているとはいえ、行っていた。東の者の、従者だった。

それが、水面下で暴れていた者たちを、刺激した。彼らにとって、お嬢様は西ではなく、東に組みする者となっていた。

反発はあったけれど、それでもお嬢様は長となられた。東と西の関係を良くしようと、尽力した。それが余計に、いけなかった。

和解が成立し、彼らはお嬢様を敵とした。そして、敵は滅ぼすのだと、叫んだ。

「――ゴホッ」

「お嬢様!!」

咳き込んだお嬢様の体が倒れる。支えたその体は冷たく、口から血が溢れていた。もう、限界なんだろう。

悔しさに唇を噛みしめる。刀を握った手に力が籠る。どうしても、もう意味を成さない問いが頭の中で繰り返される。

どうして、このちゃんがこんな目に合うんだと、何もかも遅い、今になって。

「はっ…せつ、ちゃん……」

「お嬢様……」

「みんな、はな……西を、守りたいだけ、なんや。それは、うちも、みんなも…同じ、気持ち」

「はい……わかって、ます」

「せやから、お願いや……みんなのこと、恨まんという」

「それ、は……」

このちゃんをこんな目に合わせた人を、恨むなど。たしかに彼らは彼らなりに、西を守ろうとした。その結果が、このちゃんをこんな目に合わせた、それだけのことなのかもしれない。

でも、許せることじゃない。だってこのちゃんは、私の大切な親友だから……許せるわけが、ない。

「うちな、みんなに…せつちゃんにも、みんなにも、傷ついてほしくないんよ」

「でも、お嬢様……」

「うちが守りたいと思ったのは、西とかそんな大きなもんやなくて、みんなや。東と仲良くすれば、守る力が増える、みんなを守ることが出来ると思ったんやけど……駄目やった、みたいや。急ぎすぎたのかも、しれんな」

「……間違ってなんか、いませんよ。私が、保証しますから」
「ほんま？なら、よかったえ……」

東と和解するのは、間違ってなんかいなかった。ただ、それ以外の
たくさんのことが、間違いだった。でも、それは言いたくない。言
えない。それなのに、このちゃんは自分で、言ってしまう。

「うちじゃ、駄目やったんや……」

「お嬢様……」

「うちは東に近すぎたんや。何も知らなかった、あの頃にうちは、
間違いを犯してしもた」

無知とは時に罪である。そして世の中には、知らなかったですま
されないことがあるのだと、今になって私たちは思い知らされる。絶
望の中で、つきつけられる。

「後悔は、してへんけど……うちは、知らなきゃあかんかった」

「……そう、ですね」

「仮契約、な……うちは、絶対にしては、ならなかったんよ」

「……ええ」

何も知らず、後のことも何も考えず。ただ、その一瞬の為に。
知っていれば、別の道があったかもしれない。けれど知らなかった
私たちは、その道を選ぶほかになくて。

あの数年間で得た絆は、かけがえのないものだったけれど、本当に
これでよかったんだろうか。

「……なあ、せっちゃん」

「はい」

「名前……呼んでえな」

開けているのもつらいだろう目を、開いて。伸ばされた手を、強く握り返した。

「この、ちゃん……」

「もっと……」

「このちゃん…このちゃん、この、ちゃん……」

「……せっちゃん」

嬉しそうに、笑って。握った手から、力が抜けた。

すり抜ける手を掴もうとして、それなのに掴めなくて、落ちていく。目が、閉じられた。

「この、ちゃん、このちゃん、このちゃん！」

揺すっても、叫んでも、このちゃんは目覚めない。目を開けてくれない。

「ああ、あ、あああああ——！！！！」

慟哭、それが正しいのだろうか。溢れる涙を拭うことも出来ず、このちゃんの体に縋り付いて、泣いた。

「どうして、どうして！！」

何を間違えていたのか。取り返しのつかない間違いを犯したのは、あの頃で。もう、遅すぎた。

後悔も、懺悔も、今更になってしまった。無知が罪だと、気づくべきだったのだ。

結局、私は名前の通りに、刹那を生きるだけで、先のことなんて見

ていなかった。止めればよかった、そうすれば、こんな未来ではなくて、違う未来へ続く道を、選べたかもしれないのに。
私も、このちゃんも、間違えてしまったのだ。

「ごめんっ、ごめん、このちゃん。ごめん……」

体が熱い。火が、すぐそばで燃えている。逃げることは出来るだろうか。出来ないかもしれない。
でも、逃げるつもりはなかった。私はもう、ここで終わる。

「私も、すぐに行きますから」

護れなくてごめんと、謝ることしか私には出来ない。

「刹那!!」

切羽詰まった龍宮の悲鳴に閉じていた目を開けた。目の前に迫る巨大な斧と、それを振り下ろす鬼がいる。

瞬時に状況を確認。右手には愛用の刀、周りには十数の妖怪。龍宮はそのうちの数体に囲まれて動けない。服を見下ろす。中学の頃に着ていた裏の仕事用の仕事着。

「……え？」

思考時間はコンマ数秒。変わらず迫りくる斧をすりりと避けて鬼の懐に入り、横薙ぎに刀を振るった。

「どうして、私は……」

「刹那、ぼんやりしている暇は無いぞ！」

「あ、ああ……」

突拍子もない事態に、記憶が混乱して意識がぐちゃぐちゃだ。龍宮への返事も、どうにも気の抜けたものになりがちで、これでは駄目だと意識を無理矢理に切り替える。

どうにも状況が呑み込めないが、これが仕事で、今が戦場だとだけ考えればいい。落ち着きさえすれば、長年の経験が勝手に気持ちを切り替え、体を動かしてくれる。

「っし、はあああ!!」

振り上げ、振り下ろし、振り抜き、突き刺し、突き上げ、薙ぎ払う。数は多いが、それほどの強さでも無い。だが、麻帆良に侵入してくる妖怪にしては強い。先生方なら心配は無いだろうが、生徒だと苦戦するかもしれないな。

「神鳴流——雷鳴剣！」

粗方斬り捨て、残りは雷で一掃する。視線を巡らせ、辺りの気配も確認するが、私たちの管轄の分は終わったようだ。龍宮の方を確認すれば、ちょうどそちらも終わったらしい。

「お疲れ」

声をかける。とても不思議そうな目で見つめられて、首を傾げた。というよりも、私はいったいどうしたというのだろう。改めて自分の姿を確認すれば、やはり着ているのは中学の頃の仕事着で、持っ

ている刀は夕風だった。おかしい。

「刹那、でいいんだよな？」

「……当たり前だろう。何を言い出すんだ」

おかしいことを言い出す龍宮。そもそもなぜ、彼女がここにいるのか。いや、違うか、ここにいていいんだ。別におかしくない。前に一緒に仕事をした時も相変わらずの腕前で——あれ？

前っていつだ。確か半年ほど前に一緒に仕事をして、随分と会っていなかったからいろいろと話をしたはずだ。なのに、何故だ。昨日も会った……いや、というよりも今日、学校で、普通に同じクラスで、先生の授業を——

「おい、刹那？」

「ッ……」

どうした、そう問いかける龍宮を見上げる。おかしいな、こんなにこいつと身長差があったか？私も背が伸びてもう少し縮まったはずなのに、でもいつもこんな風に見上げていたような。分からない。私は、いったいどうしたんだ？何を覚えている？

「た、龍宮……」

「……さっきから様子がおかしいな。いったい、どうしたっていうんだ」

「そ、の……あ、ああ、そうだ。このちゃんの事なんだけど……」

「近衛？」

「そ、そうだ……」

このちゃん、その名前を口にして激しく頭の中を揺さぶられるような、そんな衝撃に襲われた。何十年分の記憶が纏めて、滝のように

流し込まれる。そんな感覚。

燃える炎の熱さ、嘗ての仲間を斬る感触——抱いたこのちゃんから伝わる、冷たさ。

ああ、駄目だ。ぐちゃぐちゃの記憶がさらにぐちゃぐちゃで、ぐるぐる回っている。思わず頭を抱えて、その場にしゃがみ込んだ。

「珍しいな、お前がお嬢様と呼ばないなん——っおい、刹那？どうした、大丈夫か？」

お嬢様、ああそうだ。私は今も昔もこのちゃんをそう呼んでいて……今も、昔も？昔なのか？未来では無く？いや、そもそも今とは何時だ。

それに变だ。このちゃんは死んでない、だって今日も神楽坂さんやネギ先生と一緒にいて、私はそれを見守って……でも、確かにこのちゃんは死んだ。冷たいこのちゃんの体に縋った感覚は消えない。擦り抜けて行った手を掴めなかったあの瞬間を、私は覚えている。なんなんだ？このちゃんは死んだ？それとも生きてる？分からない、私に何が起こっている？

「龍宮、頼む。教えてくれ……」

震える声を絞り出して、心配と不審を宿す目で私を見る龍宮の腕を掴み、引き寄せる。その力に驚いたように目を見開かれて、そんなことを気にすることも出来ずに私は叫ぶように問うた。

「今はいい、いつなんだ——！？」

流れ続ける記憶の濁流に、私はもがき続けるしかなかった。

過去に戻った日（後書き）

仮契約が原因かどうかとかそのあたりは触れない方向で……あくまで、もしかしたらこうなっているもおかしくない？という世界です。とりあえず、刹那逆行。主役は刹那です。

色々と変わった日

目を覚ますと、外はまだ暗かった。二月もう終わり頃、太陽の昇りは遅い。

二段ベッドの上から飛び降りて、部屋を見回す。見慣れたような、懐かしいような、そんな気分になって、その違和感にこめかみを指先で叩く。

「——ん、刹那：随分と早いな」

「ああ……おはよう、真名」

後ろで欠伸をかみ殺して起き上がる真名に、そう返事を返す。

昨日一晩、真名には随分と付き合ってもらった。全てを話したわけでは無いが、私が多少なりとも『未来』の記憶を持っていることは話してある。

そう、未来。このちゃんが死んでしまう、あの未来だ。私はどうやら、中学二年生の頃にまで戻ってきたらしい。

らしい、というのは、もしかすればこのちゃんが死んでしまう未来は、中学二年生の私が見た夢かもしれないからだ。数十年という長い夢を、生死を賭ける戦場で見たというなら、修行のやり直しが必要だろう。

だがもし、本当に私が過去に戻ってきたのなら——私は、このちゃんが死ぬ未来を回避する。絶対に。

「ああ、真名。朝食は和食でいいか？」

「……………作れるのか？」

「……………え？」

不思議そうに問いかけられて、首を傾げる。ああ、そうか。この頃

の私は、剣の修行とこのちゃんを守ろうとすることばかりで、料理なんて作れないんだった。

何時だったか、このちゃんに手料理が食べたいと駄々をこねられて、それから色々と練習したんだったなあ。今じゃ結構な種類の料理が作れるようになった。味はこのちゃんのお墨付きで。

「まあ、一応な」

「それなら、任せようかな」

面白そうに笑う真名に任されて、私は朝食作りを始めた。

「……美味しいな」

「そうか。よかった」

ご飯に味噌汁、焼き魚にほうれん草の胡麻和え……何の変哲も無い普通の朝食。それでも、味の好みもあるし僅かに緊張していたが、真名の感想にほっと安堵の息を吐く。

「これなら毎日食べなくなるな」

「別に構わないぞ？ ああ、後、一応弁当もお前の分作ってあるが、どうする？」

「もらう」

即答されてちょっと驚いた。まあ、それだけ気に入ってもらえたってことだろうし……いいか。

それから、朝食を食べ終え学校の準備も終わらせて、私は机の前に座っていた。やはり早く起きすぎたようで、時間にはまだまだ余裕がある。もしかして、真名も早起きさせすぎたかなと少々罪悪感に

襲われるが、当の本人は私の後ろで銃の手入れをしている。

朝から誰か訪ねてくることは無いと思うが……いいのか、そんな堂々と。

「さて、と……」

そんなことを言う私の横にも、鞘には入れているとはいえ夕風が立てかけられている。

机の引き出しを漁り、いくつか目当ての物を取り出して並べる。白紙のお札と筆と紐。紐は後で使うとして、まずはお札と筆だ。

深呼吸を繰り返して気を落ち着かせる。これからするのは、お札を作る作業だ。基本的なお札は、専用の紙に気を籠めて文字を書くことで、その文字に力を持たせる。お札作りを専門にする職人も、裏の世界にはいる。腕の立つ者が作れば、その分強いお札が出来上がる。

ただ、幅広い知識が必要となるので、私もあまり多くの種類は作れない。元からあるお札は買った方が早いから、それ以外の、新しい効果のお札を作るだけだ。数十年で、時間はかかったが作れるようになった。色々と研究の余地のある物が多いけれど。

筆に墨を付け、ゆっくりと書きつける。むらなく気を籠め続け、決して文字を間違えないように慎重に書いていき——出来上がる。

「ふう……」

戦闘で気を使うのとはまた違った使い方で、酷く疲れる。筆を仕舞い、出来上がったお札をもう一度確認する。書き間違えも無いし、気の状態もいいな。

今度は夕風を手に取り、それを分解する。手入れの時に分解して行うから、これ自体はいつものことだ。

違うのは、刀身の根元、柄に差し込む部分に、今作ったお札を巻き

つけることだ。

「刹那、何をしているんだ？」

「ん？ああ、見ていれば分かる」

鞘に戻し、見た目は何も変わらない夕凧。私は少しだけ気を籠めて、口の中で言霊を唱えた。

一瞬の後に、夕凧の姿が消える。私の右手には、赤い勾玉が残っていた。

「それは…？」

「夕凧だ」

「は？」

首を傾げる真名。まあ、これだけ見ればそんな反応をされても仕方がないと思うが。

私は立ち上がり、今度はその勾玉に気を籠める。それだけで今度は、夕凧が私の手に握られていた。

「……」

「さっき作ったお札の効果なんだ。こうしておけば、持ち運びが楽だろう？」

また夕凧を勾玉に戻して、取り出しておいた紐を穴に通して輪を作る。それを手首に引っかければ、何の変哲も無いブレスレットだ。数十年も生きればいろいろ学ぶというか……得物を持って誰かを護衛するのは無理があると学んだ結果の行動だった。何があったかは聞かないでほしい。

「ん？……おい、真名。どうした、ハトが豆鉄砲食らった顔してる

ぞ」

「…………いや。本当に刹那なのかと思ってね」

「……ああ。私は桜咲刹那だ。まあ、ちょっと変わったかもしれないが……」

手首に光る勾玉を撫でる。変わった、と思われても、仕方ないのかもな。

なんかかんやでのんびりと過ごしていた結果、早起きしたわりに普段と変わらない時間に学校に来了。このちゃんは……まだ、来ていない。

正直、未来を変えようと思っているのに、踏ん切りがつかないでいる。いや、変える決意はもうしているのだが……今のこのちゃんに話しかけてもいいんだろうか。どうするのが一番いいのか、分からなくて……ただ、このちゃんの元気な姿を早く見たいと、それだけを思っている。

「おおっ!?!」

とりあえず、席に座って時間が過ぎるのを待っていたら、後ろの方で驚いたような声があがって振り向く。クーフエイが、期待に満ちた瞳でこちらを見ていた。

「……」

周りを見る。いつもと変わらず、クーフエイが喜ぶようなものは無い。肉まんを売ってるのはあっちだし……何を見ているんだろう。

「刹那!!」

「おはよう、クーフエイ。どうかし——」

「勝負するアル!!」

「はっ？」

ズダダと駆けてきて開口一番、勝負。意味が分からず首を傾げれば

「その勝負、拙者もお願いしたいでござるな」

「長瀬!？」

声が聞こえたかと思えば、シュタツと目の前に着地。やけに楽しそうに笑っている長瀬に、目を輝かせて構えているクーフエイ。何か話したのかと真名の方を見れば、面白そうに笑ってはいたものの首を振られた。

「クーフエイ、長瀬。いきなりなんだ？勝負ならこの前も手合わせをしたばかりだろ？」

「刹那の気配が昨日と違うネ!だから、勝負アル!!」

「いや、意味が分からん」

「一晩にして随分と強くなったようでござるからな、是非とも手合わせ願いたい」

「いや、だから……」

はた、と思い当たって言葉に詰まる。

昨日、一晩で。私の身に起きたことを考えれば、何となく二人の言いたいことが分かる。見た目に変化は無くとも、内面に随分と変化が起きている。数十年分の記憶と、それに伴う経験。

……自分では分からなかったが、もしかしたらそういう意味で昨日の私と違っているのかもしれない。だから、真名は何度も聞いてきたのか。本当に刹那か、と。

「……悪いが、今度にしないか？さすがにここだと…」

「なら外に行くネ!!」

「いや、これから授業が…」

「放課後ならいいでござるか？」

「今日は、ちよつと……」

まだこのちゃんに会うかとか、いろいろ考えたいのに。困り果ててどうしようかと思って、辺りを見る。騒ぎすぎて注目されていた。

「うゝ、じれったいアルヨ！」

「っちょ!？」

我慢できなかったクーフエイが拳を突き出してきて、驚きながらも右手で受け止め、そのままクーフエイの体のバランスを崩させる。

「うわっと」

体勢を立て直される前に、あと長瀬にまで何か仕掛けられる前に、二人の間を擦り抜け教室の後ろへ逃げる。口笛やら囃し立てる声が聞こえたが、この際無視だ。今はとにかく、あの二人を大人しくさせてこれからのことを――

「せっちゃん？」

「ッ……!？」

懐かしい声、普段から聞きなれた声。呼ばれ慣れた名前、呼ばれないようにしていた名前。

戻ってきた自分と、昨日までの自分が、頭の中で混乱する。声を聞こえた方を向けば、驚いた様子のこのちゃんと、目が合って。

「あ……」

声が出ない。目が熱くて、なんでだろう、手が震える。

「お、おはよ、せっちゃん」

緊張したみたいで、このちゃんがおずおずと声をかけてきて

『あ、せっちゃん。おはようさん』

目の前のこのちゃんよりも大人びたこのちゃんの声が、頭の中で木霊する。

面影が重なる。目の前のこのちゃんは間違いなく私の知るこのちゃんで、それがこの上なく――嬉しい。

「この、ちゃん……」

「――！！せっちゃん、うちのことわわっ!？」

気づいたら、このちゃんの手を握って、教室から飛び出していた。擦り抜けてしまった、掴めなかった右手の温かさに、涙が零れた。

半ばこのちゃんを引きずるようにして走っていることに気づいたのは、教室を飛び出してだいぶ走ってからだった。

「い、ごめんっ、このちゃん――!」

階段の踊り場で慌ててブレーキをかける。握っていた手を離そうと

すると、息を荒くしたこのちゃんが握りしめてきて、離せなかった。

「え、ええよ、大丈夫やから。にしても、せっちゃん足速いなあ」

「……………ううん、そんなことないよ」

静かに首を振る。ああ、でも、懐かしい。昨日まで確かに見ていた筈なのに…………遠目から見ていただけだから、なのかもしれない。正面から、こんなに近くでこのちゃんを見たのが、随分と昔の事になっている。

「……………このちゃん」

「うん？」

「っこのちゃん!!」

「わっ、せっちゃん……………」

思わず抱き着いてしまった。だって、このちゃんが目の前にいる。私の前で死んでしまったこのちゃんが、こうして生きてる。

それがとても嬉しくて、そして同時に襲ってくる——後悔。

「護れなくてごめんっ、ごめん、このちゃん…私、私はっ…………」

「せっちゃん…………」

「っ絶対に、護る、から!!このちゃんを、護って、みせるから…………!!」

目の前のこのちゃんは、私の目の前で死んだこのちゃんじゃないと、分かっているのに。

溢れだす涙と言葉を止める術を、私は知らなくて。そんな私を抱きしめてくれるこのちゃんを、今度こそ護りたいと、護ってみせると、誓った。

「なあ、せつちゃん」

「ふっ…はい…」

「うちはな、せつちゃんがどうして泣いてるのかとか、分からないんよ」

「分からなくても、いいんです。私が、勝手に泣いているだけ、だから」

「それは、うちが嫌や。うちは、せつちゃんのこと知りたい。話せなかった時間の間に、せつちゃんがどんなことをしてて、どんなふうに思ったのか、知りたい」

「…話しますよ。時間はかかるし、話せないことも、あると思うけど」

「ええよ。でな、せつちゃん」

「なに、このちゃん」

「せつちゃんは、うちと友達で、いてくれるん…?」

不安そうな声だった。二年近くも、再会してからまともに話してないし、目も合わせていないんだから…当たり前なんだと、思う。ごめんね、このちゃん。ずっと、不安にさせて。もう、大丈夫だから。

「もちろん。私は、今も昔も、この先も——ずっと、このちゃんの友達です」

「——せつちゃん!!」

二人して抱きしめあって、喜びの涙を流しながら。私たちはしばしの間、互いを離すことは無かった。

大丈夫、今度は絶対に、護ってみせるから。

呼び出された日

過去に戻ってから（もう過去に戻ったのだと考えることにしている。一応は）翌日にしてこのちゃんと再会して色々と話した結果、私たちは二人揃って、一限目の授業をサボってしまいました。

「サボりなんて初めてやから、なんや楽しいな」

「すみません、このちゃん。私のせいで……」

「気にしないでええよ。うち、今すごく嬉しいんやから。あ、それと」

このちゃんと手を繋いで教室へ向かうために廊下を歩きながら話していたら、立ち止まってこのちゃんが言った。

「敬語は嫌や言うたやろ。せっちちゃんがうちの護衛いうのは分かったけど」

「う……ごめん、このちゃん。気を付ける」

「うん」

私は、このちゃんに自分が護衛の立場であることを明かした。何から護るのかは、まだ言えない。魔法の存在については、長の意向もあって教えるわけにはいかない……私としては、教えてしまいたいだけだ。そうすれば、仮契約だって防げるから。

「でも、お父様も心配性やね。大丈夫やいうのに」

「……危険は、いつどこに潜んでいるか分からないよ、このちゃん。もしどこか探検したりするときは、私に言ってね？」

「オーケーや。あ、ならせっちちゃんも図書館探検部に入ろうや。楽

しいえゝ」

「……入るのは、遠慮しておこうかな」

「えゝ、なんでや？」

「部活はちよつと。でも、探検の時は付き合いたいんだけど……い
いかな？」

「もちろん、大歓迎や！」

よかった、そう笑うと、このちゃんが不思議そうな顔をして私を見
つめてきた。何か、拙いことを言っただろうか。

「んー、せっちゃん、話し方変えたん？」

「え？」

「ずーっと標準語やし……それに…」

「それに？」

「なんて言うんやろ。落ち着いてる言うか……大人っぽい？」

「ああ……」

まあ、中身はプラス数十だから……言えないけど。

「練習してたら、これに慣れちゃって。大人っぽいかは分からない
けど……変、かな？」

「ううん、全然。せっちゃんはせっちゃんやしな」

「……うん」

そう笑ってくれるこのちゃんが、とても嬉しい。何だかまた泣いて
しまいそうで、私は随分と涙腺が脆くなってしまったようだ。

「さて、と。それじゃせっちゃん、いくえ？」

「いつでもいいよ」

教室の扉の前に、二人で顔を見合わせる。休憩時間とはいえ、朝に教室を飛び出してから丸々一時間は行方不明だったわけで……このクラスが騒がないはずが、無い。

二人で覚悟を決めたところで、このちゃんが教室の扉を開ける。少しでも被害を少なくするために、後ろの扉を、それも静かに開けてこのちゃんがこそそと侵入を試みようとしたところで――

「このちゃん、ちょっと待ってて」

「ふえ？」

言うが早いかこのちゃんを追い越して教室の中へ。どう細工したのか頭上から落ちてきた金ドライを誰もいない方向へ弾き、足元の糸は気を通して踏み抜く。左右から飛んできた矢は僅かに上体を反らして躲し、何故か極めつけに目を輝かせて襲って来たクーフエイと長瀬は、二人の間を擦り抜ける際に足をかけてさようなら。

サツと周りを見てぽかんとしたクラスメイトを確認。罾の類はもう無さそうなので、教室の外で待機してもらったこのちゃんを振り向いた。

「もういいよ、このちゃん」

「ふわぁ……せっちゃん、凄いなぁ。うち吃驚したわ」

「私も驚いた」

特に最後のクーフエイと長瀬に。あれは絶対にあの二人の独断だろう、このちゃん相手にもやったなら一発殴るところだ。

「え、えーと……?」

「桜咲、さん？」

「はい？」

戸惑い気味に呼ばれて、とりあえず振り返る。どういうわけか、やけに注目されている——真名と目が合うと、声も無く諦めろと言われた。何を、諦めろと？

すこぶる拙い状況なのは分かって、私は一歩、その場から後ずさりする。

「せっちゃん？」

「このちゃん、私は今日はそのまま帰ろうかなと思う」

「え、なんでや？」

「……クラスメイトの視線が、怖い」

「んー……なあ、せっちゃん」

「うん？」

「諦めや」

「……………え？」

このちゃんまで、何を——！？

次の瞬間、何故か押し寄せてきた人の波。え、待って、意味が分からない。

というかどうしてそんなにキラキラした目でこっちを見てくるのか教えてください。

「すごいすごい、ねえさっきの何!？」

「木乃香とどこに行ったの？」

「ってか二人はどういう関係!？」

「二人ともなんか目が赤いけど、もしかしてもしかしちゃったの!？」

「運動神経が良いだけですこのちゃんとはちよつと用事があつてでこのちゃんは普通の友達でもしかしちやってません!!このちゃん助けて!!」

「あはは、せっちゃん頑張れ」

人波の向こうで手を振るこのちゃん。なんでこのちゃんは無傷なんですか！？

「つとと、さーて桜咲さん。色々取材させてもらおうか？」

「はっ？」

「桜咲さん、いつも教室でも一人だしあんま話してくれないから、こっちとしてはどういう心境の変化があったのか知りたいんだけどね？」

「つ……」

そうか、それが原因か。つまり今までの私から考えられない行動をしたせいで、こうも注目を浴びるはめになったと。心底、後悔する。もう少し考えて行動すればよかった。といよりも、たったそれだけで騒ぎすぎだろ。こんなに騒がしいクラスだったけ……だったな。

「で、桜咲さん、答えは？」

「黙秘権を行使しますっ」

「いやいや、それは駄目だって」

「駄目も何もあります。私から提供できる情報はこのちゃんとは友人関係であることだけです！」

「ほほう。木乃香と友達ねえ……木乃香、桜咲さんとはどういう関係なわけ！？」

「んー、せやなあ」

タタツとこのちゃんが人を掻き分けて私の隣までやって来る。えーつと……このちゃん？

「せっちゃんは、うちの大事な人や」

「おおおおお!!!!」

「このちゃん!?!」

なんでそんな曖昧な表現を!?!はっ——!!!

「えへっ」

目が合ったこのちゃんが、にっこりと笑う。これは楽しんでいる表情だ……昔も変わらず、このちゃんは人が困るのを——とりわけ、私が困るのを楽しんでいる節があったが、何も今じゃなくともいいのに。

「桜咲さん、どういうこと!?!」

「だから、違います——!!!」

次の授業の先生が来るまで、私はこのちゃんとクラスメイトの方たちに振り回されることになるのだった。

放課後。私はこのちゃんと一緒に、買い物に来ていた。

「せっちゃん、見てみーこれ」

「あ、可愛い。猫かな?」

「犬もあるな」

女の子向けの雑貨屋に入って、このちゃんは終始ご機嫌にしながら歩き回っている。一方の私も、見慣れない物にちょっと楽しんでたりする。

こういうお店は、あまり入らなかったからなあ。このちゃんと仲良

くなった後に、たまに出かけることはあったけど……どうにも、場違いな気がして、居づらさを感じていたから。
今は、そんな気持ちも感じないんだけど。

「せっちゃん、次はあっち行こう！」
「うん」

そうして歩き回って、日が沈み始めたころ。私とこのちゃんは寮に帰った。

寮の廊下でこのちゃんと別れて、部屋へ戻ろうと歩き出したところで、声をかけられた。

「桜咲さん」
「はい？」

振り返って立っていたのは、茶々丸さん。絡繰さんと、呼んだ方がいいんだろうか。

「これを」
「……手紙？」
「はい」

差し出されたのは、一通の封筒。受け取って後ろを見ると、案の定そこに書かれていたのは『エヴァンジェリン』の文字。
エヴァンジェリンさんが、私に手紙か。あまりいい予感がしない。

「それでは」
「あ、はい。ありがとうございます」

一礼して去っていく茶々丸さんを見送って、今度こそ私は部屋へと

戻った。

「さて」

問題となる手紙の封を切り、中身を取り出す。入っていたのは一枚のカードだった。

「今夜十時に、桜通りに、か」

そういえば、エヴァさんとネギ先生が関わる最初の事件というのが、桜通りの吸血鬼だったはずだけど……詳しい話は、聞いていないから知らないんだよな。まあ、呼び出されているのは確かだし――

「行くしかない、か」

手首の勾玉を撫でて、私はそっと手紙を机の引き出しに仕舞った。

密かな対決の日

夜、九時五十五分。待ち合わせの五分前きっかりに桜通りについた私は、その場で立ち止まり考えていた。ちなみに服はジャージ上下。何事も無く終わったならランニングして帰ろうかと思ったのだ。

「終わらなければ、どうするのがいいんだろうな……」

何事かあった場合、私はどうするのが一番いいのだろう。なまじ未来を知っている分、過去に無い出来事が起こると弱みみたいだ。私は、エヴァンジェリンさんに呼び出されたことなど、無かったのだから。

——それを言うと、教室でいきなりクーフエイや長瀬に襲われたことも、無かったのだが。

「——来たか、桜咲刹那」

「こんばんは、エヴァンジェリンさん」

街灯の上に立つエヴァンジェリンさんを見上げる。すたっと地面に降りてきてくれて助かった、見上げたまま話すのは、正直つらいものがあるから。

「絡繰さんから手紙を受け取りましたが、いったい何の用ですか？」

「なに、お前に興味があってな」

「興味……？すみませんが……」

エヴァンジェリンさんは同性愛者だったのだろうか？否定はしないが、さすがに困ってしまった。

「私に、その趣味はありません」

「阿呆か！私にもない！！」

「そうですか、それならいいんです」

本気で安堵。知らないだけでその趣味がある可能性も否定できないだけに、余計に不安になってしまった。

「つたく——で、お前、いったい何があった？」

「またその質問ですか……」

今日一日で、クーフエイや長瀬にも言われているし。ああ、あの二人といっ手合わせをしよう。近いうちにしておかないと、また教室で襲われ——

「おい、聞いているのか」

「……聞いてます。何があったか、ですけど……正直、お答えできません」

「ほう」

「言って信じてもらえるのかわかりませんし、あまりたくさんの人に話すようなことでもありませんから」

「ということは、知っている奴が少なくとも一人はいるわけだな？」

「……まあ、そうですね。その人も、全部を知っているわけでは無いですけど」

真名に話したのは、とても大まかな表面上の事だけ。私が未来を知っているのは知っているが、その未来がどんなものかを、あいつは殆ど知らない。

「それが分かれば、お前が腑抜けになった理由も分かるのか？」

「……腑抜け？」

「そうだ。昨日までのお前と、今日のお前。力は増したようだが――実につまらない」

「つまらない、ですか。ちなみに、エヴァンジェリンさんから見ると、私はどう変わったんですか？」

「気になるか？」

「多少は」

真名たちはみんな、感覚で私が変わったのを感じているだけで言葉にはしてくれないし……このちゃんは、大人っぽいと言っていたけど、まあ、それは仕方ない変化だとも思うけど。これで子どもっぽいと言われた方が、正直複雑だ。

「そうだな、まあお前にとって分かりやすい例えをするなら――刀だな」

「刀……」

「昨日までのお前が、触れる物全てを斬る抜身の刀だったのに対し、今日のお前は鞘に仕舞った上に、それに布を巻きつけているような感じか。触れる物を絶対に傷つけないようにしている」

「……そこまでですか？」

「じゃなければ、クラスの中の馬鹿騒ぎを、ああも容認してやるか？」

「あ……」

なるほど、確かに昨日までの私なら無視を決め込んでいるな。そう考えると、エヴァンジェリンさんの例えにも納得がいく。誰も傷つけないように、か。

「無関係な人を傷つけるわけには、いかないですし？」

「だとしても、たった一晩で随分な変化だ。私が知りたいのは、何

がお前をそこまで変化させたのかだよ」

「そう言われても、私は何も言えませんよ。それに、私はつまらないんじゃないんですか？」

「ああ、つまらん。つまらんから、聞き出すついでに壊してしまおうと思ってな——！！」

「ッ！」

言うが早いのか、投げられたフラスコから氷が襲いかかってくる。これは、エヴァンジェリンさんの魔法……？

その場から飛び退き、回避。地面が凍りついているが、腑に落ちない。同じ氷の魔法でも、彼女の魔法はもっと強力だったはずなのに。

「エヴァンジェリンさん」

「なんだ？」

「力が、制御されているんですか？」

「っなぜ知っている！？」

やはり、か。登校地獄の呪いとは別の、学園結界が原因なのだろう。ということは、先ほどのフラスコに入っていた液体が魔法の触媒で、それがなければ戦えないということだ。

単純に考えるなら、触媒を消費させてしまうのが一番いいかもしれない。触媒が無くなれば、魔法を使えなくなるわけだし。

「まあ、そうもいかないんでしょうけど」

背後から急接近してくる気配。突き出された右拳を半身捻って避け、逆にその腕を掴んで投げ飛ばす。

エヴァンジェリンさんの横に着地した茶々丸さん。二対一、か。

「卑怯、と言ったら、どうしますか？」

「魔法使いの戦闘に従者はつきものだからな。まさか、それすら忘れて腑抜けになったか？」

「いえ、言ってみただけですよ」

厄介、ではあるが……どうにかするしかないのも、また事実。

右手の勾玉に気を籠める。元の姿に戻った夕凧を握りしめ、左手を添えた。

「む……武器を持っていたか。何も持っていないから、どうしたかと思っていたが……」

「持ち運びを楽にしたんです。この方が便利ですから」

「なるほど。いつの間にそんな芸当ができるようになった？」

「……いつでしようね」

惚ける。いつかと言われたら、未来でと答えるしかないから。ピクリとエヴァンジェリンさんの唇が引き彎った。どうやら、気分を害してしまったようだ。

「全く、お前は随分と憎たらしい性格になったな。まさか、それがお前の本性か？」

「まさか。私の根本は、何も変わっていませんよ」

「ならば、なんだと言う？」

「……教えません」

斬りかかる。前に出た茶々丸さんに対し、躊躇いも容赦も無く刀を振り上げ、振り下ろす。躲されたそれが制服を掠り、ボディを露わにするのを確認する前に、頭上から降り注ぐ魔法の嵐に舌打ち。

「神鳴流、斬空閃……！」

頭上へと気を飛ばして相殺する。茶々丸さんが身を屈めて接近してきて、左腕を突き出すのを、自分で後方に飛ぶことで威力を弱める。受け身を取って立ち上がり

「斬岩剣!!」

地面に向かって技を放ち、コンクリートを粉碎する。細かな石粒となったコンクリートは技の威力に押されて、迫って来ていた茶々丸さんに襲いかかる。

「これは――」

「捕縛結界、五角楼」

一瞬の隙を生んだ茶々丸さんの背後に回り込み、捕縛する。対象にお札を貼り付け動きを封じ、またその周りを五つの見えない壁で囲い外から遮断する捕縛用の結界。
これで少しは、時間を稼げるだろう。

「ほう、東洋の結界か。さすがにそれは解除に時間が必要かな？」

「はい、マスター。申し訳ありません」

背後から聞こえた声にその場を飛び退く。可笑しそうに愉快そうに笑うエヴァンジェリンさんがいた。

「だが、何故だ？最初のお前の一撃は、茶々丸を壊すつもりのようなだったが」

「クラスメイトですから、腕を斬ってしまうのはどうかと思いましたが。それに、そうしたらエヴァンジェリンさん、怒るんじゃないかもしれませんか？」

「なんだ、私を怒らせたくないのか？」

「ええ」

力を制御されているとはいえ、エヴァンジェリンさんの相手は出来るなら避けたい。彼女がそれを良しとしてくれるとは思えないけれど。

「どうしたら、見逃してくれますか？」

「お前の身に変化を齎した原因が分かれば、とりあえずは考えてやらんでもない」

「原因を聞いても何だかんだで襲ってきそうな言い方ですね…」

「ふっ、どうかな」

ああ、そうだ。思いついたようにエヴァンジェリンさんが笑う。

「お前のやる気を出させてやろうか」

「……何をやる気ですか？」

「今、ここで私を倒せなければ——近衛木乃香の血を貰う」

「……」

エヴァンジェリンさんの言葉は、私の予想した通りだった。過去の私なら激昂して斬りかかるところだろう。予想していたとはいえ、実際に言われると私もブチリと切れるものがあった。

「どうした。お前のその鞘に仕舞って布にくるんだ刀で斬れるなら、存分に来るがいい。近衛を守りたいならな」

「——ええ、そうさせてもらいます」

ただし

「刀は鞘から抜きますけれどね」

怒りではなく、理性で、冷静に、布を払って鞘から引き抜く。あくまで静かに、怒りで湧き上がる力は理性で制御して、私は刀を振るおう。

「神鳴流——斬鉄閃」

放つ、同時に走り避けたエヴァンジェリンさんの前に躍り出て、右手に握った刀を振り抜く。

「はっ、隙だらけだよ」

「どうでしょうね」

左手を突き出し、身を躲したエヴァンジェリンさんからいったん距離を置くために飛び退く。

「なんだ……?」

驚いた表情のエヴァンジェリンさん。彼女の頬からは血が流れていた。

そこを狙った左手は、確かに回避された。したと、彼女は思った。

「なるほど、気を使っているのか」

「あたりです」

斬魔掌、弍の太刀。手の先に気を集めて剣として、相手を斬る技。青山宗家ゆかりの方にしか伝承されない弍の太刀だが、私はそれを教わる機会に恵まれた。

「二刀流というわけか、面白い」

「私は、つまらないんじゃないんですか？」

「ああ、撤回しよう。お前は昨日までのお前より——面白くなった
！！」

頭上と、何時の間に仕掛けたのか私の周りに転がされたフラスコから、魔法が放たれる。

「氷爆」

「っ斬空閃！！」

咄嗟に、頭上へと気を放ち相殺する。撃ち漏らしはあるが多少のダメージは覚悟の上で、その場から飛び退き回避しようとして、飛んだ矢先で背後に現れたエヴァンジェリンさんに捕まった。

「凍れ」

「ッあああああ！？」

至近距離で放たれた魔法に、私は無様に地面に落とされる。

「ぐっ、うう……」

叩き付けられた痛みに呻き、腕に力を籠めて起き上がろうとして、失敗した。右腕と左腕の一部が凍りついている。頬や体の一部が他にも冷たいことから、おそらくそこも凍っているんだろう。

体の自由が利かず、視線を巡らせてエヴァンジェリンさんを探して、彼女は目の前に降りてきた。

「この程度か。まあ、なかなか楽しませてもらったよ」

「こっちは、楽しくないですけど……」

出来るならこのまま終わりにしたいのだが、そうもいかない。私はまだ、彼女を倒せていないから。

「まだ立ち上がれるか？」

「ええ、まあ……貴方を倒さないと、いけないですから」
「近衛の為か？」

不意に、不機嫌そうに彼女の眉間に皺が寄って、見下ろされる。冷え切る体に浅く呼吸を繰り返しながら、私はそんな彼女の変化に僅かに首を傾げた。

「どうして、あの女の為にそうまで頑張れる」

「それは……」

「昨日までのお前もしかり、今日のお前も、表面上は変化しようとも結局は同じだ。何を思って、そうまでする」

「……エヴァンジェリンさんには、無いんですか？」

「なに？」

「護りたいもの」

背中に意識を集中させる。大丈夫、私はやれる。まだまだ、やれる。

「護りたいもの、だと？」

「ええ」

「はっ、悪の魔法使いが何かを護る、だと？有り得んな」

「そうでしょうか。私には、貴方の護りたいものが、少なくとも一つは分かりましたけど」

「……なんだと？」

「茶々丸さん、傷つけたら、怒りますよね？」

大切だから、傷つけられたら怒る。それがたとえ物でも、人でも。家族でも、友人でも。大切だから、護りたいと思う。

「私は、このちゃんを護りたいんです」

だから飛ぼう。護る為に翼を広げて、今度こそ。

「もう二度と、傷つけないから」

翼を広げる。気が溢れて、パキパキと体に張り付いた氷を剥がしていく。

そうして私は、高く高く、飛び上がる。

「護ると、決めたんです」

そのためなら、誰よりも高く飛んでみせる。今度こそ。

分かり合えた日

空で、エヴァンジェリンさんと相對する。右手には夕風、左手にはまだ気は集めず、夕風に添えて。

くだらない、そう彼女は馬鹿にしたように鼻で笑った。

「近衛木乃香を護りたい、か」

「ええ。そのためなら、私はいくらでも立ち上がれます」

「本当に、それほどの価値があの子にあるのか？」

「……怒りますよ？」

このちゃんを侮辱するのは、許さない。

「まあ、待て。確かにあいつは、桁違いの魔力を持っているようだが……所詮は何も知らない、ただのガキだ」

「真祖の貴方からすれば、私もただのガキでしょうに」

「違うな。お前は少なくとも、覚悟を持っているよ」

彼女にとっての違いは、そこなんだろうか。分からないけれど、たぶん褒め言葉と受け取っていいんだよ、な？

「魔力を持っていようと、それを知らなければただのガキ……いや、魔法使いどもからすれば、いい餌だな」

「激しく同意しますね。私の役目は、そんな輩からこのちゃんを護ることでもありますから」

「無駄なことだな。近衛が何も知らないうちは、いくらでもそいつらは沸いてくる」

「全部斬り捨ててまでですよ」

それだけでこのちゃんを護れるなら、むしろ安いくらいだ。強くなればいい話なんだから。

「……やはり分からんな。そうまでして近衛を護ってどうするといふのだ？」

「言っている意味が、よく分かりませんけど」

「いくら護ろうと、お前は受け入れてもらえないということだよ」

自然な動作で、エヴァンジェリンさんがフラスコを投げ氷の矢が放たれる。上空へと回避して、彼女の頭上で刀を構えた。

「斬鉄閃!!」

ひらりと躲される。それは承知の上、急下降してエヴァンジェリンさんに接近し、至近距離で放った。

「斬岩剣!!」

「甘い!!」

ギシッと妙な音と感覚。エヴァンジェリンさんを前に、刀がそれ以上進まない。視線を巡らせれば、彼女の指先から細い糸が放たれ、私の体に巻きついていった。

「人形使い……忘れてました」

「忘れるな、阿呆が。さて、私の方もそろそろ触媒が切れるんでな、やり易い方法を取らせてもらおうか」

「ッ……」

覗き込まれた目に、吸い込まれる。そうして次に気づいたとき、随分と懐かしい場所にいた。

「これは……」

「幻想空間だ。ここでは私の力も制御されず使えるからな、さっきまでのお遊びとは違うぞ」

「…………それは、私にも言える事ですよ？」

「なに？」

足に気を籠めて一気に距離を詰めて、エヴァンジェリンさんの懐に入り込み、刀を振るう。右下から振り上げてそれを避けられたなら、次は左手で彼女の脇腹を突く。彼女の右手に集まる魔力が爆発し、それを気に同時に飛び退いた。

気を集めていてよかった。でなければ、左手が吹っ飛んでいたんじゃないかと思う。

「ずいぶんと無茶をするな」

「これくらいは、まだいけますよ。幻想空間は、実体には影響しませんから……死なない限り」

「確かにそうだ。だが、もし腕がなくなれば……」

「動かなくなるかも、ですね」

もちろんそれは困るので、気を付けるけれど。

「神鳴流決戦奥義——」

それにあまってお喋りをしている余裕も無い。明日だって普通に学校があるし、わざわざ互いに傷つけあうことをしようとは思っていないから。

夕風を構え、意識を集中させる。彼女には悪いけれど、一気に決めさせてもらおう。

「真・雷光剣!!」

「エクスキューションーソード!!」

不思議なことに、ぶつかり合った技は学園祭と同じ技。激しい光と力のぶつかり合いで、ガラガラと建物が崩れていく音を聞きながら、夕風を握った右手の力を弱めることは絶対にしない。

「ははっ、予想以上だよ、刹那!!」

「そうですかっ…!」

こっちは結構いっぱいはいですよ。

「その力で、お前は近衛を護るのか？」

「ええ!」

「――受け入れられないとしてもか!？」

「っ……」

押してくる力が強くなる。これは、エヴァンジェリンさんの叫びなんだろうか。彼女の抱える何かの、重みなんだろうか。

「人外である私とお前が、本当に受け入れてもらえられているのか」

「っええ!」

「友達だからと言っても言うつもりか？今日のお前はなぜ、あんなにも笑っていられた？」

「笑ったら、いけないんですか？」

「さあ、どうだろうな。ただな、仮初の幸せに溺れる姿は、見ていられん」

「ッ……」

「仮初が崩れた時の絶望を味わうのは、お前にはまだ早い。だから、

私が壊してやろう」

この戦いは、彼女なりの優しさなのだろう。私なんかの数十倍の年月を生き抜いてきた彼女には、今日の私が束の間の幸福に酔っているように見えただろう。

鳥族のハーフでありながら、表面だけは人間のふりをして、その幸せを得て。その事実を受け入れられず拒絶されたとき、私がどれほど絶望するのかは、想像したくも無いことだ。

この葛藤は、このちゃんにも分からない。人は自分に無いものを真の意味で理解することなど出来ないから。

でも、それでも私は――

「信じているんです!!」

「つなを…!?!」

「今日の幸せが、嘘じゃないと! 私は、このちゃんを信じているんです!!」

「……信じたところで、裏切られるだけだとは思わないのか?」

「思いません。だって、このちゃんは――」

『せーっちゃん』

『はい、なんですか? お嬢様』

『むう、またお嬢様言うたな。嫌や言うたやんか』

『あはは…ごめんなさい、このちゃん』

『うん! んで、あんな』

『はい』

『うちらずーっと、親友でいような』

『もちろん』

「私の、親友ですから」

ずっとずっと、そう信じている。

光が弾けて、音が遠のく。土煙の向こうで、倒れた影を見つけて――私の意識もまた、消えて行った。

「(いい匂い……)」

そう思って、目が覚めた。窓から差し込む太陽の光に目を細めて、体を起こす。二段ベッドではないふかふかのベッド。ここは、どこだ？

「おはようございます、桜咲さん」

「あ、茶々丸さん……」

「……？」

ガチャリと扉が開いて入ってきた茶々丸さんに、思わず慣れ親しんだ名前の方を呼んでしまったのに気付く。不思議そうに首を傾げた彼女に笑って誤魔化して、ベッドから降りた。

「ここは、エヴァンジェリンさんのお家ですか？」

「はい。昨夜の戦闘後、桜咲さんは倒れたまま起きませんでしたので、マスターが連れて帰るようにと」

「そうですか……ありがとうございます」

「いえ。リビングでマスターがお待ちです。どうぞ」

案内されるまま着いていくと、大仰にソファ―に座ってお茶を飲むエヴァンジェリンさんがいた。

「起きたか」

「おはようございます、エヴァンジェリンさん。とりあえず、ご迷惑おかけしました」

「仕掛けられたのはお前だと言うのに、変なことを言う奴だ。まあいい、座れ」

促されて、彼女の向かいの席に座る。すぐに茶々丸さんがお茶を出してくれて、どうも、と小さく会釈した。

茶々丸さんがエヴァンジェリンさんの後ろに控える。さて、と口を開いたエヴァンジェリンさんに、私は身を固くした。

「昨日の勝負だが、覚えているか？」

「それが……幻想世界で戦ったのは覚えているんですが、その後は全く。結局、勝敗はどうなったんですか？」

「幻想世界だけで見るなら、私の負けだ」

そうやけにあっさりと、彼女は負けを認めた。といっても、私も彼女が倒れた後に気を失っているから、本当の意味で勝てたとは言い難い気がする。

いくらエヴァンジェリンさん相手とはいえ、あれだけで気絶してしまうとは……弱く、なったのかなあ。

「情けない……」

「ん、どうした？」

「いえ。それで、幻想世界だけでというのは、どういうことですか？」

「……お前は、そのまま実体でも気を失っていたんだよ。それに対して私は意識もあったし、茶々丸もいたからな。お前を殺すことが

出来た」

「それじゃあ……私の、負けてことですか」

「そうなるな」

ふむ、そうするとどうしようかな。今この場で彼女に斬りかかって、もう一度戦おうか。卑怯だとは思うけれど、彼女を倒さないこのちゃんが襲われてしまうし。

「物騒なことを考えるなよ？別に、近衛を襲ったりはせん」

「あ、そうですか」

「……分かりやすいくらいに殺気が収まったな。わざとか？」

「半分は」

深く深く、呆れたように溜息を吐かれる。

「まあいい。それより、負けたんだからお前の身に何があったのか話せ」

「そんな約束は、してないじゃないですか」

「近衛を襲わないと言っているんだ。代わりの代償だよ」

「……」

理不尽だなあ、相変わらず。まあ……信じてもらえるかも分からない話で、このちゃんの安全を得られるならそれでいいのかな。

「大まかな部分だけでいいですか？」

「それで分かるなら構わん」

「では……私は、今から数十年先の未来の記憶を持っています」

そんな出だしで、真名より詳しく、けれど詳細——事件や、出来事はあまり触れず、ただ漠然と、そして私にとって一番重要な部分

の、このちゃんが死んだ事実について話した。これで納得してもらえなかったなら、諦めてもらうしかない。私はこれ以上のことを話すつもりは無いから。

「……なるほど、それでか」

「何がですか？」

「一晩で人が変わるには十分な事だな。それに、貴様が気絶した理由も分かった」

「…気絶した、理由？」

それは、どうということなんだろう。

「お前の話から考えるなら、今のお前は中学二年生の桜咲刹那の体に入った、数十年後の桜咲刹那ということになる」

「そう、ですね。はい」

「つまりお前の体と精神には、数十年分の経験の差がある」

「………はい？」

「おかしいと思ったんだ。あれだけ実力があれば、もっと余力がありそうなもののに、呆気なく倒れるからな」

エヴァンジェリンさんの話は、つまりこういうことだった。

私の中身は、記憶とそれに伴う経験を持つが、私の体にはそれが無い。

記憶から習得していた式の太刀を使うことが出来たが、体にとってはぶっつけ本番。それも出来る精神に出来ない体が無理矢理引きずられる形となってしまう、体にすぐに限界が来た。

要は足の遅い体が足の速い精神を追いかけて走った結果、ペースを保てず置いてきぼりを食らったと。

「……………修行のやり直しか、あ…」

「まあ、実際の経験が中身にある分、成長も速いだろう。死ぬ気で頑張ることだな」

「そうします…」

でも、それならばしばらくは気を付けないといけないな。忒の太刀なんて使ったら、またすぐに倒れそうだし……。

「で、だ。刹那。お前はこれからどうするつもりでいたんだ？」

「このちゃんを護りますよ」

「それはもう聞いている。お前は、近衛にすべてを話すのか？」

「……魔法については、長の意向がありますから」

「貴様の存在についてはどうする？信じているんだろう？」

私を試すように、エヴァンジェリンさんが問いかける。私の存在、ハーフであることを、このちゃんはまだ知らない。

「翼については、まだ言いませんよ。魔法にも近いことですし……」

「所詮は言い訳だな。どれほど綺麗ごとを並べたところで、結局は拒絶されるのが恐いんだろう？」

「……このちゃんは、大丈夫ですよ」

ちよつとだけ、嘘が混ざる。それを敏感に感じ取ったエヴァンジェリンさんの瞳が、剣呑に煌めいた。

こういう事は、似た境遇だけに、誤魔化せそうにないかなあ。

「……………認めてくれるって、信じてます。そりゃ、ちよつとは恐いですけど……そう思うのも、仕方ないんじゃないですか？」

過去に一度でも迫害を、拒絶を受けたなら、それはいつまでも消えない。根強く、根深く、心に突き刺さってその事実を忘れさせない。

なら、私はそれに恐怖したままでいるしかないのか？そうやって自分を偽って、それこそ仮初の幸せを喜ぶしかないのか？

昔の私ならそれも仕方ないと諦めただろう。卑屈になって、自分の存在を卑下して。でも、そうすると、このちゃんが怒ったから。だから私は、違うと叫ぼう。

「その恐怖を飲み込んで、踏み出さないと……先へは、進めませんから。私は、このちゃんを信じると決めたんです。だって、友達ですから」

「友達、ね……仲良しこよしがいつまで続くかな」

「友達でいる限り、何時までも続きますよ」

「ふうん……」

認めようとしてくれないエヴァンジェリンさんに、困る。だって目の前の彼女が、まるで拗ねている子どもに見えてくるから。

私の数十倍は生きてるのになあ。やっぱり、見た目が原因なんだろうか。

「あの、エヴァンジェリンさん……」

「なんだ」

「そんなに疑うんでしたら、その……私と、友達になってくれませんか？」

「はあっ？」

本気で驚くエヴァンジェリンさんに、私は顔が熱くなる。正直、改めてこういう事を言うのは初めてで、結構恥ずかしいものなんだと思う。このちゃんも明日菜さんも気づいたら友達だったり親友だったり師匠だったりで、私から行動を起こすことはしなかったしなあ。自分からこうして言い出せるようになった分、成長はしているんだな。うん。

「なぜ私が……」

「仲良くしてもらいたいですし……それに、エヴァンジェリンさんが、悪い人じゃないって、知ってますから」

「私は、悪の魔法使いだぞ？」

「知ってますよ。でも、私のことを心配してくれたりする、優しい人です」

「んなっ……!!」

あ、赤くなった。真っ向からこういう事を言われるのは、照れるみたいだ。私としては、そんな彼女を見られて嬉しいんだけど。

「それで、どうですか……？」

「……ふんっ。まあ、そうだな。お前の言う友達ごっこがどんなものか、付き合ってやらんでもない」

「そうですか」

つまりは、友達になってくれるということだ。私としては、十分に喜ばしいことだ。

「あの、ちゃちゃま……えっと、絡繰、さん」

「茶々丸で結構です。桜咲さん」

「あ、それじゃ私も刹那で……えっと、それです。ね。よかったら茶々丸さんも、友達になってくださると……嬉しい、んですが……」

きょとん、と茶々丸さんが驚いたように見えた。無表情であまり変化はしないけれど、それでもそんな風に見えたんだから、それでいい。

「構いませんが……」

「よかった。こういうのもあれですけど…よろしく願いしますね」
「ふんっ……」

……にしても、エヴァンジェリンさんって、あれだろうか。あの…
ツンデレとかいうやつ。

「今、何か妙な事考えたか？」
「いいえ、何も」

恐いくらいに睨まれて、本気で焦る。エヴァンジェリンさんの前で、
下手なことは考えない様にしよう……。

常識人に会った日

一晩、泊めてもらったことと、怪我の手当てをしてもらったお礼に朝食を用意したら、エヴァンジェリンさんにとっても喜ばれた。

茶々丸さんも、栄養の摂取は出来ないものの味覚はあるようで、美味しいと言ってくれたので嬉しかった。二人とも、特にエヴァンジェリンさんは日本茶が好きなようだし……今度、和菓子でも作ろうかな。喜んでくれるといいんだけど…。

「むむむっ、こ、これはどういうことだ!？」

「あ、せっちゃーん」

そのまま二人と学校に行くことにした。制服は、茶々丸さんが持ってきてくれたんだけれど……いつの間に。私が寝ている間にだろうか？

とりあえず教室に入ると……どうしてだろう、また注目された。このちゃんが何だか安心した表情で駆け寄ってきたので、どうしたのかと思いつつも笑いかける。

「おはよう、このちゃん。どうかしたの？」

「んとなー、朝せっちゃんと一緒に学校行こうと思ったら、いないって真名ちゃんが言うてどうしたのかなあって思ってたんや」

「ああ、そっか。ごめんね、このちゃん」

「ええよー。あ、エヴァちゃん、おはようさん」

「……ああ」

ぷいっと顔を背けて自分の席に座るエヴァンジェリンさんと、それを追う茶々丸さん。クラスに馴染むのはまだまだかかりそうだなあ。

「桜咲さん、これはいったいどういうこと？何があったの？」
「へ…？」

マイクを片手に突撃してきた朝倉さんに、後ずさる。周りの人たちも気を抜いたら昨日のように雪崩になって襲ってきそうで怖い。とりあえず、朝倉さんの言っている意味が分からなくて、首を傾げて聞いた。

「何のことですか？」

「マクダウェルさんのことだよ。茶々丸さんも一緒に三人で登校って、何があったのさ？」

「何が、って言われても……」

話せるわけが無い。一晚戦った挙句、朝ご飯を一緒にしましたなんて。

「あ、うちも知りたい。な、せつちゃん。なして？」

「えっと、その……」

このちゃんにまで聞かれて、答えに詰まる。どうしよう、なんて言えбайいんだろう……誤魔化すか？

「今日は、ちょっと早めに出て……散歩しながら学校向かってたら、偶然、ばったり……」

「そうやったんかあ。ほな、せつちゃん。今度はうちも一緒に散歩する」

「う、うん。いいよ、今度は一緒に行こうね」

「んー、それじゃただの偶然、かあ。一夜かけてあんなことやこんなことがあったりは」

「しません!!」

何を期待しているんだ、この人は!?

その日の放課後、手合わせを求める長瀬とクーフエイから逃げるように教室を飛び出して、私は寮への帰り道を歩いていた。

このちゃんは占い研究部に出ると言っていたので、一緒にはいない。ただ、お願いしてお守りを持ってもらっている。見た目は普通のお守りだが、中に入っているのはお札の一つで、このちゃんに危険が迫ったとき、私にそれを知らせてくれるものだ。これなら遠くにいなくてもこのちゃんの危険に駆けつけることが出来る……一番いいのは、やはり一緒にいることなただけだ。

それはそうと、この後はどうしようかな。寮に帰って、せっかくだしエヴァンジェリンさんのところにお邪魔しようか。あれ、でもエヴァンジェリンさんって学園から監視されてたり……まあ、問題があるなら向こうから言ってくるか。友達に会いに行くだけなんだし……。んー、でもよく考えると、エヴァンジェリンさんは魔法使いなんだよなあ、西としてもそれはあまり良くない……いやでも、今の私は西の裏切り者扱いだし……うん、とりあえず、友達に会いについてことで誤魔化そう。友達なのは事実なんだし……うん。

深く考えすぎると動けなくなりそうだから、考えるのはやめておく。考えすぎて自分で抜けられなくなるのは昔からの悪い癖だしなあ。

「と、あれは……」

考えから抜け出したところで、見覚えのある後ろ姿を前方に見つける。千雨さんだ。

本でも読んでいるんだろうか、足元への注意がちょっと不足してる

……あ、つまずいた。見捨てることもできず、私は足に気を集め一気に千雨さんの後ろに立ち、倒れかけた体を引き戻した。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ……ありがとうございます」

「どういたしまして」

お礼を言いつつ、どっから現れたんだ？とばかりに千雨さんが私を見つめている。まあ、私との距離は結構あったから、気づいていなくても可笑しくない。

にしても、そんなに不思議そうな顔をしなくても……ああ、そうか。認識障害があるから誰も気にしていないけれど、突然、こんな風の人がすぐ傍に現れるのは、普通の人からすればおかしいことなのか。確か千雨さん、認識障害が効きづらい体質だったか。だから、こんなに不思議そうにするんだろう。

「寮へ帰るんですか？」

「ああ」

「よかったら、ご一緒してもいいですか……？」

「…別に、かまわねえよ」

本を閉じて鞆に仕舞う千雨さん。それから歩き出して、けれど特に何か話すことも無く私たちは歩く。

「……なあ」

「はい？」

不意に、千雨さんが口を開いた。

「今朝、絡繰たちと一緒に学校来てただろ？」

「ええ、まあ」

「どう思った」

「……」

千雨さんの問いかけの意味。聞いた彼女はどこまでも無関心を装いながら、鞆を握る手を緊張に震わせて。

私はと言えば、彼女の問いに答えを出すこともせず、首を傾げた。

「長谷川さんは、どう思うんですか？」

「……」

問い返されるとは思わなかったのか、千雨さんはぴたりと足を止めてしまった。私もつられて立ち止まり、一歩分だけ先に進んでしまった体を振り向かせる。頼りなく彷徨う瞳を見上げた。

「聞きたいのは、茶々丸さんの性格ですか？それとも、茶々丸さんが、ロボットであることですか？」

「っ分かるのか!？」

千雨さんが知りたいのは、後者。誰もが茶々丸さんをクラスメイトとしか認識していない中で、彼女をロボットだと考えるのか、否か。

「……ロボットがクラスメイトなのは、おかしいですか？」

「普通に考えておかしいだろ？いや、絡繰だけじゃない、他の奴らもなんか変だろ。異様にガキみたいだったり、やけに運動神経が良すぎたり……極めつけは」

「子ども先生」

そうか、千雨さんはこういう事にも悩んでいたのか。

私たちの世界からすれば、子どもが力を持っていようと何ら不思議

ではない。子どもが大人を倒すのが普通に有り得る実力世界だから。けれど、彼女はそうではない。普通の、この麻帆良では通用しない外の常識を持った存在だ。彼女にとって、私たちの世界で起こりうることは、有り得ないの一言なのだろう。

「おかしいだろ。なんで誰も不思議に思わないんだよ。法律とか常識とか、いろいろあるだろ……」

私を話を通じる人間と捕えたのか、途端に千雨さんは弱弱しく言葉を紡ぎ出した。

「誰も何とも思っていない。変だろ。科学技術も、身体能力も、麻帆良の外と比べたら異常すぎる。あちこちで普通に乱闘だってあるし、みんなそれを危ないとも思わないで観戦するし……意味がわかんねえよ。なんなんだよ、私がおかしいのか？ 私だけが、変なのか？」

「おかしく、ないですよ」

千雨さんは、おかしくありません。そう言うと、彼女の表情が途端に泣きそうに歪んでしまった。どうしよう、さすがにこの場で泣かれるのは困るなあ。

「しょうがない……長谷川さん、ちょっと失礼しますね」

「は？…おわっ」

よいしょ、と千雨さんの後ろに回って横抱きにする。身長差はあるけれど、まあこれくらいなら平気だ。

「で、長谷川さん。ちょっときついかもしれないですけど」
「あ……？」

「貴方の言う『異常』を、体験してみてください」

言って、私は気を集めた足で思い切り地面を蹴った。それは明らかに、彼女の言う異常な速さだった。

とりあえず、千雨さんは私と真名の部屋に招待した。真名はまだいないので好都合。

ぐったりとしていた彼女を座らせて、私といえば、お茶を淹れてる最中。ちなみに日本茶。お茶菓子は饅頭。

「どうぞ。落ち着きました?」

「あー……あんまり」

「そうですか」

お茶を飲んで一息吐く。少しの沈黙を挟んでから、私は笑った。

「で、どうでした? 異常体験は」

「普通にありえねえよ……」

「まあ、麻帆良は私みたいなことが出来る人がそこらじゅうにいて、しかもそれが容認されているということですよ。裏事情もいろいろありますけど……それは、聞かない方が身の為かと思いますから」

「危ないこと、なのかな?」

「生死を賭けるくらいには」

「……」

そういう世界だから、むやみやたらに人を巻き込めない。けれど、放っておいたら千雨さんはまた長い時間を一人で悩み続けることになるし、そう思うと見捨てられなくて。

力になれるなら、なってあげたいと思ってしまった。

「……愚痴があったら、いつでも話に来てください。話を聞くくらいは、できますから」

「いいのか？」

「長谷川さんが、私みたいな異常でもいいと、言ってくれるなら」

「……あー、その……悪かったな」

「構いませんよ。普通と違うのは自覚してますし……それに、それを誇りにも思ってますから」

「誇り？」

「人と違うけど、そうだからこそ出来ることもあるんです」

誰かを護ったり、とかね。

「ああ、それから」

不意に思い立って、机の引き出しからお札を一枚取り出す。このちゃんにあげた物の予備で、効果は同じだ。

それを小さく折りたたんで、お守り袋に入れてから、千雨さんに渡す。

「どうぞ」

「んだよ、これ」

「危険が迫ったら、私にそちらの場所が分かるようになってるんです」

「……どういう仕組みか、聞いてもいいのか？」

「聞かない方が良いですね。ただ、そういうものだとだけ思ってくれば」

「……もし、本当に私に危険が迫ったとして、お前は どうするっていうんだよ」

「やるだけのことをします」

私に、やるだけの力で、護る。このちゃん以外まで護るつもりなのかと言われれば、そうだと言うしかない。本当にそんなことが出来るのかと言われれば――出来ると言うしかない。

だって、見てしまったら。触れてしまったら。私は、その人までも護りたいと思ってしまったから。

「……桜咲って、見かけによらずお人よしなんだな」

「あはは……本当に、自分でもそう思います」

せめて私の手の届く分だけは、護りたいなと。

図書館島初探検の日

「図書館島？」

『そうなんや〜』

テストまで残り数日、エヴァンジェリンさんの自宅にお邪魔していた私の元に、このちゃんから電話がかかってきた。

なんでも、図書館島にある魔法の本を探しに行くとかなんとか……そういえば、この期間にこのちゃんが行方不明になって、探し回ったような……まさか、これが原因か？

「このちゃんも行くの……？」

『うん。パルとのどかは地上で連絡係やけどな。せっちゃん、この前、探検に一緒に行く言うてたし、どうかな思うて』

「……私も行く。待ち合わせは？」

『七時に図書館島入口や。必要な物はうちが持ってくから、手ぶらでええよ〜』

「うん。それじゃ、絶対に先に行かないでね」

『了解や〜』

さて、図書館島ね……あそこ、色々と仕掛けがあるって聞いてたけど、魔法関係の仕掛けとは違うのかな……？

「近衛木乃香か？」

「ええ。図書館島に、魔法の本を探しに行くそうですよ」

「魔法の本ねえ……」

くつくつと喉を鳴らしてエヴァンジェリンさんが笑う。

「本当にあるんでしょうか？」

「まあ、あったとすれば十中八九、あの爺の仕業だな」

「……学園長、ですか」

「知らず知らずに魔法に関わらせていくつもりだろうな。でなければ、あんなクラス構成は有り得んよ」

「それは、まあ……そうでしょうね」

昔は、私も何も不思議に思わなかったけれど。こうして見ると、ネギ先生の為に用意したと言ってもいいクラスだ。

エヴァンジェリンさんも私の話を聞いて改めて調べてみたようだけど、揃いも揃って潜在魔力や身体能力がおかしいそうだ。優秀な従者になれると言っていた。

……このちゃんも私も、まんまと利用されたってことなんだろう。

「さて、お前が行くなら、私は桜通りにでも顔を出すとするか」

「テスト前ですし、程々にしてあげてくださいいよ。勉強もしないといけないでしょうから」

「分かっているさ。お前のせいで溜めていた魔力も消費してしまっただしな、暫くはばれない様にまた集めなおしだ」

「……私のせいじゃないですよ」

喧嘩を売ってきたのはそっちだ。

図書館島の入口までやって来ると、このちゃんが手を振っていた。

「せっちゃん」

「このちゃん。他のみんなは？」

「先に侵入口に行ってるえ」

「（……侵入口？）」

どういふことか、案内されるままに着いていけば言葉の意味はすぐに分かった。図書館探検部しか知らない入口……つまり、本来なら入ってはいけない場所に入るといふ事なんだろう。まあ、仮にも魔法の本……普通の場所には無いか。

「あ、桜咲さんだー」

「なにに、桜咲さんも一緒に行くの？」

「ええ、まあ」

明日菜さんに佐々木さん。そういえば、バカレンジャー五人の為とか言ってたけど……嫌な予感がした。

「むっ、刹那！勝負アルヨ！！」

「今日は逃がさないでござる」

やっぱりか。バカレンジャーということは当然のようにクーフエイと長瀬もいるわけで……今は相手をしている場合じゃないのに。

「これから侵入するんだろ？騒ぐと見つかるぞ」

「そう言って、また逃げるアル！！」

「……テストが終わったら、手合わせするから」

「約束でござるよ？」

「ああ」

仕方ない。いつまでも逃げられないし……体に経験を積ませるには、修行あるのみだ。

……それから、さっきから気になっていたんだが、どうしてネギ先

生がいるんだろう。確かに行方不明時はネギ先生も一緒にいなかったが……ああ、それもこれが原因だったんだ。

「このちゃん、ネギ先生はどうして？」

「んー、明日菜が連れて来たんや」

「……そう」

もしかして、ネギ先生と明日菜さんは既に仮契約を？ 分からないな……様子を見るしかないか、それとも、明日菜さんをネギ先生からどうにかして切り離すか――。

「それじゃみなさん、行くですよ」

「「「「「おー」「」「」「」」」」」

……今は、こっちに集中するか。

進んでいくうちに、徐々にトラップが物騒になっていく。盗難防止の為とはいえ、遣り過ぎだろう。後方から打たれる矢を払って、つくづくそう思う。

「このちゃん、足元にトラップがあるよ」

「ふえっ、わ！ほんとや。ありがと、せっちゃん」

「物騒だし、気を付けないとね」

「せやねー」

ちなみに、ここまでの道中で分かったのは、ネギ先生が魔法を使えないことと、神楽坂さんが現時点では仮契約をしていないが、魔法の存在は知っているらしいこと。

図書館島が危険な場所であることは割と知られているから、対策としてネギ先生を連れて来たんだろうが……魔法を使えないネギ先生じゃ、ただの足手まといだ。とりあえず私は、このちゃんを優先的にトラップから守りつつ、着いていくことにしよう。

「着いたー！！」

「わっ、なにこれすごーい！！」

それからひたすら進み続けて……ジャージで来てよかった。道なき道ばかりだから、服が汚れてしまったし。

というよりも、ネギ先生……魔法の本が珍しいのは分かりましたから、落ち着いてください。このちゃんに魔法の存在がばれます。

そう思っている間に、他の人たちが次々と本に向かって走り出す。嫌な予感がして、とっさにこのちゃんの腕を取った。

「このちゃん！」

「ふえっ？」

ガコン、と石橋が割れる。どうにかこのちゃんを引き寄せたおかげで、私とこのちゃんは巻き込まれずにすんだ。

「せっちゃん、ありがと」

「ううん。それより、これって……」

「ツイスター、ゲーム……？」

『その通り！！』

ゆっくりとした動きで、石像が動き始めた……え、どうしようこの状況。

『魔法の本が欲しければ、儂の質問に答えるのじゃ。ただし!!』

悲鳴を上げてパニックに陥る佐々木さんたち落ちた面々をよそに、石像は私とこのちゃんを指差した。

『そちらの二人もゲームの舞台に降りてもらうのじゃ。じゃなければ、ゲームへの挑戦も認めん』

「……ど、どないしよ、せっちゃん……」

「罠だと分かり切っている場所に、下りるつもりは無い」

『ならば、永久にこの地下を彷徨うんじゃない。ゲームに勝てたなら、本と出口への近道を教えてやるぞい』

なんとしても、私たちを……いや、このちゃんを、その場に下した
いらしい。このちゃんを連れて脱出するのは簡単だが、その場合は
他のみんなを犠牲にすることになる。

「せっちゃん、下りよ?」

「このちゃん……」

「大丈夫やって。ゲームに勝てばいいんやから」

「……うん」

……大丈夫だ、少なくとも、すぐに命が危うくなるようなことは無
いはず。このちゃんを抱えて、石版の上に降り立つ。石像が満足そ
うに笑い声をあげた。

——腹が立つ。

『では、第一問』

ゲームの内容は、英語を日本語訳したものを、ツイスターゲームの
要領で踏むだけ。ネギ先生のヒントもあって順調に進んでいたんだ

けれど――

「お、さ――る!?」

『ハズレじゃな』

間違えた瞬間、石像が巨大なハンマーを振り下ろす。石版が割れ暗闇がぼっかりと口を開けて、私はこのちゃんを庇うように抱きしめた。

「せっちゃ――」

「大丈夫」

後から一緒になって落ちてくる瓦礫を気で弾きながら、私たちは暗闇へと落ちて行った。

「ふうむ、どうしたもんかのお……」

まさか、刹那君が一緒におるとはのお。彼女の成績もあまりよろしくないから、一緒に勉強してもらおうのはありじゃが……。

「もう少し、影から守つとると思っていたんじゃがの」

今回の目的は、ネギ君と生徒を地下に落とすことで、そこで集中的に勉強してもらい2-Aの最下位を脱出させること。そして、パートナー候補でもある彼女たちとネギ君に交流を深めてもらうつもりだったんじゃが……いやはや、困ったぞい。

「ん、でも刹那君も候補の一人じゃし……むしろ、よかったかのお

「？」

彼女がネギ君の味方になったなら、力強い仲間となるじゃろう。そう考えれば、予想以上の成果ともいえるの。

「ふおおおっ……」

さてさて、テストまでの三日間、みっちり勉強してもらおうかしょうかの。

地底図書室で勉強会の日

さて、どうしようかな。

石像によって地下に落とされた私たちは、幸いにも湖に落とされ無傷で済んだ。気絶したこのちゃんを抱えて近場の陸地に上がり、同様に落ちてきた皆さんを陸地に連れて行く。

……これ、下手すれば溺れて死んだんじゃないか？

「ん、う……」

「このちゃん、目が覚めた？」

「……あ……せつちゃん……」

「うん」

気が付いたこのちゃんに安堵の溜息。怪我は、と聞くと小さく首を振った。大丈夫なようだ。

次々と他の人も目覚めていき、一様にこの空間に驚いていた。綾瀬さんの話だと、ここは幻と言われた地底図書室……なんだとか。生きて帰れた人はいないというが、それなら誰がその存在を他の人たちに伝えたんだろう。

「大丈夫ですよ、皆さん！絶対に脱出できますから！！」

力強くメンバーを励ますネギ先生。落ち込んでいても仕方が無いと、とにかく勉強することになった。

都合よく食料や全教科のテキスト、キッチンにトイレと揃っている。学園側が一枚噛んでいると思った方がいいかな。

「幸せや」

「このちゃん……」

バカレンジャーが勉強会する傍ら、このちゃんのはのんびり読書に勤しんでいる。私は私で、勉強しつつこの地底図書室を探索していた。水浸しの本は、どういいうけか濡れてもいないし痛んでもいない。やっぱり魔法が関わっているんだろう。明らかに魔法を示唆する本が無いことに本気で安心する。

というよりも、そろそろ本気で長に連絡を取った方が良いかもしれない。西からすれば裏切り者の私が、下手に連絡を取って長に不利益があつては困ると思っていたが……少なくとも、修学旅行までに長にこのちゃんの状況について説明しなければ。修学旅行で長に届けられる親書も、強硬派の人間を随分と刺激するものだったし――

「せっちゃん、何してるん？」

「っなんでもないよ」

気づけば、このちゃんが後ろから私を覗き込んでいた。いけない、考えに集中し過ぎていたかな……。

「ご飯の準備が出来たんや。食べよ」

「うん」

食事は、これで四回目。外ではもう一日が経っているし、テストは明日だ。そろそろ、脱出を考えた方がいいころだろう。

「あれ、他の人たちは？」

「水浴び行くなって言ってたえ。呼んでくるから、先に食べててな」

「うん」

今度のご飯はサンドイッチ。手近な一つを取って食べつつ、耳を澄ませてこのちゃんが戻るのを待っていると、少し遠いところで騒ぎが起こったらしい。騒がしさに顔を顰めて、最後の一欠けらを口に放り込んで飲み込み、立ち上がる。

このちゃんに危険が迫った感じでは無いけれど、良い状況では無い。そう思ったところで、そのこのちゃんがこっちに向かって走ってくる。

「このちゃん！何かあったの？」

「せっちゃん！！そ、それがな……」

このちゃんの話によると、地下で私たちを落とした石像が現れたという。それで、このちゃんはみんなの荷物を取りに戻ってきて、これから逃げるところ。

「それじゃ、急ごうか。このちゃん、背中に乗って」

「え？」

「私の方が、足速いから。急ぐんだよね？」

「う、うん！」

逃げるだけなら、このちゃんを背負った方が楽だ。これが戦ったりだと話は違うけれど。

荷物を持ったこのちゃんを背負って水辺へ走り、他の人たちと合流する。あとは逃げるだけ、と。

『ま、待つんじゃない』

「やだよー」

「ありました、滝の裏側に非常口です」

「え……？」

非常口なんて、そんな危険から逃れるための物があるんだ。思わず本気で驚いてしまった。

扉に書かれていた問題を、本を持ったクーフエイが答えて中へ入る。長い螺旋階段が上へと続いていた。

「せっちゃん、うち一人で行けるえ？」

「……大丈夫？」

「もちろんや」

追いつかれた場合の事を考えて、このちゃんの言葉に従って別れて階段を上る。壁を壊して追いかけてくる石像を眼下に捕えつつ、途中中の壁に書かれた問題を解いて上を目指した。

「あった！地上への直通エレベーターです！！」

「これで地上へ帰れるの？」

ネギ先生の言葉通り、前方にはエレベーター。これに乗りさえすれば、逃げ切れるか。

そう思ったが、大急ぎで全員が乗った次の瞬間、ブーツとブザーの音が鳴った。

『——重量オーバーです』

「うっそおおお！？」

悲痛な叫びをあげて騒ぎ出すみんなが服を脱ぎだしたりする中、思う。もしも、このちゃんたちが行方不明時にこれを使って脱出したなら——一人、人数が多い。

それはつまり、どんなに頑張ろうとも誰か一人が降りなければ、助からないという事だ。

「ぼ、僕が降ります!!」

私の思考の答えを出すかのように、ネギ先生が叫びエレベーターから降りた。魔法は使えずとも生徒を守る意志は称賛しますが……それは、明日菜さんが許さない。

「あんたを置いていけないでしょ!こーすんのよ!!」

ネギ先生をエレベーターに引き戻し、魔法の本を石像に向けて投げる。石像がぐらついた。落ちるまでは行かなかったが、今エレベーターが動けば逃げられただろう。

『重量オーバーです』

「なんでえええ!?!」

『ふおふお、逃がさんぞ』

「や、やっぱり僕が——」

無情な機械音に、石像の手が伸びてくる。立ち上がり盾となろうとしたネギ先生の襟首を掴んで、明日菜さんに押し付けた。

「えっ」

「せつちゃん……?」

エレベーターを出た瞬間に、ボタンを押す。扉が閉まり始める向こうで、呆然としていたこのちゃんが慌てて手を伸ばしてきた。

「せつちゃ——!!」

チンツと何とも軽い音を立てて、扉が閉まる。ガコンと動き出した

音を後ろで聞いて、笑みが浮かんだ。

「よかった」

『自分を犠牲にして他を逃がすか。しかし、儼に勝てると思うておるのかのお?』

石像が話しかけてくる。伸ばされた手をひらりと躲して、勾玉を夕凧に戻した。

「貴方の思い通りにはさせませんよ——学園長」
『ふお!?』

斬るのは石像ではなく、階段。崩れた足場ごと落ちていく石像に背を向けて、閉じたエレベーターの扉を切り刻む。

上へと長く続く暗闇。これを上って行けば、地上へ戻れるんだよな。

「行くか」

刀を勾玉に戻し翼を広げて、私は地上へと飛び始めた。

「せっちゃん!せっちゃん、せっちゃん!!」

「木乃香、落ち着いてってば!!」

「いやああああ!せっちゃん、せっちゃん!!」

開かないエレベーターの扉を叩いて、木乃香が泣き叫ぶ。私はそれを抱きしめる様にして、どうにか押さえつけていた。

「離して明日菜！！せっちゃん、せっちゃんがあああ！！」

「お、落ち着いてください、木乃香さん」

「せっちゃん！！」

私たちを助けるために、エレベーターを降りた桜咲さん。何の躊躇も無いその姿に、私たちは止めることも出来なかった。

どういうわけか地上へと戻ってきたエレベーターはうんともすんとも言わず、扉は閉じたまま一向に開こうとしない。これじゃあ、助けに行くことも出来ないじゃない。

「せっちゃん、せっちゃんああん……」

「木乃香……」

泣きながら桜咲さん呼び続ける木乃香。幼馴染なんだと、教えてくれた。事情があって中学で再会してから話せずにいたけれど、つい最近、桜咲さんの方から話しかけてもらえて、以前の関係に戻れたんだと話していた。

本当に嬉しそうに話していて、話を聞いたときはこっちまで嬉しくなった。その桜咲さんが、あんなよく分からない相手を前に一人で行ってしまった。木乃香が泣き叫ぶのも無理は無いと思う。

「と、とにかく助けをよばなきゃ——」

まきがそう言った、瞬間。ガシャンッ、とエレベーターの奥で音がして、みんな揃ってビクッと体を跳ねさせる。

まさか、さっきの石像が上まで追ってきた？じゃあ、桜咲さんは——そう青ざめる私の目の前で、ガンガンと何度か叩き付ける音がした後、ゆっくりとエレベーターの扉が開かれた。

「っはあ……」

扉をこじ開けて現れたのは、桜咲さんだった。

「せっちゃん——っ!!」

「このちゃん! よかった、無事でわあああ!？」

力の抜けた私の腕から抜け出して、木乃香が桜咲さんに飛びつく。受け止め損ねた桜咲さんが木乃香と二人揃ってその場に転がった。

「せっちゃん、せっちゃん!!」

「……ごめんね、このちゃん。心配かけて」

「ひぐっ、ほんまや。せっちゃんの、あほ……」

「うん、ごめんね」

謝りながら、桜咲さんは優しく木乃香の頭を撫で続けていた。とても大切そうに目を細めて、木乃香を見つめる彼女を、私たちは無言で見つめることしか出来なかった。

その翌日、テストは無事に終了し、結果は2-Aのトップで終わることが出来た。遅刻した時は慌てたけど、ネギも無事に先生になれたし。

ただ、ちょっと気になるのが桜咲さんで。あの後、木乃香が落ち着いてからエレベーターの中を覗いたら、凄いことになってた。エレベーターの底に大きく穴が開いていて、扉の内側は酷く凹んでいた。どうやったのか聞いてみても、結局何も教えてもらえなかった。っていうか、それ以前にどうやって地上まで登ってきたんだろう。まさか桜咲さんまで魔法使いとか、そんなわけないし……ああ、わか

んない。

そして、桜咲さん実は頭が良かったらしい。普通に上位に食い込んできていた。何時の間に勉強してたのか、それもちょっと気になった。

春休みの帰省した日

春休みに入る数日前、長に手紙を出した。

このちゃんの現状と、麻帆良の対応。詳しいことを会って話したい旨を伝えると、春休みに京都へ戻るよう返事が来た。

寮にこのちゃん一人を残すのは不安だったが、その間の代わりの護衛を寄越すということだし、安心していいだろう。

そうして私は今――

「お久しぶりですね、刹那君」

「はい、長。お久しぶりです」

長と、そして数名の重役たちの前にいる。

穏健派、強硬派、それらが一同に会したこの場で私が話すことになるとは思わなかった。

「手紙の方は、読ませてもらいました。木乃香の現状は、思わしく無いようですね」

「はい。東側には、木乃香お嬢様に魔法を知らせないことを伝えてあるにも関わらず、あちらは子どもとはいえ、魔法先生を同じ部屋に住まわせています。さらには、日常的に魔法による恩恵を受けて生活している有様です。あちらが、木乃香お嬢様に配慮しているとは、考えがたいでしょう」

「なんと……」

「だから奴らに任せるのは反対したんじゃない!!」

穏健派が頭を抱え、強硬派が憤った。長も苦い顔をしている。

「長、どうするつもりです？」

「即刻、お嬢様を連れ戻してこちらで教育をするべきです！！」

強硬派が長に詰め寄り、怒鳴るようにして言う。それに対して、穏健派が慌てだした。

「いや、ここは早急に東と和解の場を設けるべきだ」

「木乃香お嬢様への配慮をしっかりとしてもらわんといかん」

「なぜこちらが下に出る必要がある！和解など認められるか」

意見のぶつかり合い。

穏健派は東と争うのを恐れて、早急な和解を主張し、強硬派は和解はせずに、このちゃんを連れ戻し教育することを主張する、か。

……正直、どちらも賛成しがたいな。穏健派の和解には賛成するが、強硬派の言うとおりこちらが下に出る必要は無い。だからといって、強硬派に賛成も出来ない。このちゃんのことを無視して、こちらの都合で振り回すのは、したくない。

「長、どうするのですか！？」

「……」

双方が長に意見を求めた。長は穏健派の人間だし、賛成するならそちらだろうか。けれど、今そちらに賛成されて、本当に和解されたら、西が崩壊してしまう。それは、止めなければならないことだ。

「――発言、よろしいでしょうか」

「刹那君……ええ、許可します」

「では……長は、木乃香お嬢様に対する東の反応を見るために、お嬢様を東へ預けたのですよね？」

「え……」

長が戸惑った。それに気づかずに重役たちが私の言葉に驚き、意識を向けてくるうちに言葉を続ける。

「あくまでお嬢様には魔法を知らせず一般人として、その上であらがお嬢様にどのような対応を取るのか。また、お嬢様があちらに對してどのような印象を持ち、生活するのか……それを、確かめたかったのではよね？」

「なんと……では、全て考えの上であつたということですか？」

「敵を騙すにはまず味方から、という言葉もありますし……長も、ご自分の愛娘を危険かどうか判断しかねる場所に送るのは、さぞお心を痛めたことでしょう。せめてもの想いで、長は私を木乃香お嬢様の護衛と、その様子を報告させる要員としてお選びくださいました」

「そういうことであつたか……」

各々が勝手に納得して、一先ずは場の空気が収まりをみせる。おそらく、これで今すぐに決断する必要はなくなるだろう。少なくとも、議論をするだけの余裕は双方にあるはずだ。

「剎那君……」

「申し訳ありません、長。話した方が、いいかと思ひまして……勝手な真似を致しました」

「……いえ、君の判断に間違いはなかったでしょう。ありがとうございます」

困惑した長に頭を下げる。まあ、私が話したのは全て——嘘なんだけど。

そのまま話し合いは一度お開きとなり、部屋を出たその足で私は、長の私室へと向かっている。

先ほどのことについて、話さなければならぬから。

「長、刹那です」

「どうぞ、入ってください」

「失礼します」

襖を開ければ、中には当然ながら長一人。部屋に入り扉を閉めると、盗み聞き防止に防音のお札を張った。

「……先ほどは、申し訳ありませんでした」

「いえ、むしろ助かりました……刹那君の言葉が無ければ、あの場でどちらかに賛成する必要があったでしょう」

考えがあって行動したのであれば、その報告について議論してから決断ができる。もちろん、双方が議論の余地ありと判断した場合のみだが……思惑がどうあれ、一先ずは良かったと思っておこう。

「それにしても弱りましたね……お義父さんからは、問題ないと言われていたんですが……」

「あちらの考えの全てが、こちらに伝わるわけではありませんから……ですが、おそらくは木乃香お嬢様を、ネギ・スプリングフィールドの従者にと、考えているのではないでしょうか」

「……ナギの息子、ですか」

最後にぽつりと呟かれた長の言葉は、聞こえなかったことにしよう。うん。

私にとって重要となるのは、ネギ先生が誰の子どもかではなく、ネ

ギ先生が魔法使いであることだから。

「麻帆良の認識阻害もあって、現状ではお嬢様に魔法の存在は気づかれていません。ですが、お嬢様の周りに危険が蔓延っているのもまた事実です。強硬派の中には、既にお嬢様を狙って学園への侵入を試みる者もいます」

「……護衛は、難しいですか？」

「いえ、現状では私で対処できます。ですが……今後の事を考えれば、長にもご決断いただきたいところです」

「そう、ですか……」

襲ってくる輩なら、いくらでも斬り捨てられる。それだけで護れるなら安いものだ。

「——木乃香お嬢様に、魔法の存在を教えることは、なりませんか」

「それは……」

言って、すぐに決断は無理だろうなと思う。長はこのちゃんに、平和な世界で生きてほしくて麻帆良に逃がしたのだから。このちゃんの魔力が、利用されない様に。

誤算は、敵がここだけではなく、向こうにもいたことだけけれど。

「魔法の存在を知っていれば、逃げやすくも避けやすくもなります。それに、知らず知らずに巻き込まれるようなことも、無いでしょう」

「巻き込まれる可能性が、あるのですか？」

「あります」

現に、神楽坂さんは魔法の存在を知り、関わってしまっているから。殆ど流れて、危険性も知らずに。

それは一歩間違えれば、このちゃんだったかもしれないことだ。

「魔法の存在を知ったうえで、お嬢様に選択してもらうべきでは無いでしょうか。関わるも、関わらないも——私は、お嬢様の望みを叶えるために、全力を尽くすつもりです」

このちゃんが望むなら、茨の道を切り開く剣となり、敵から護る盾となろう。どんな手段になろうとも、絶対にこのちゃんを護ってみせる。

この先が私の知らない未来に繋がっていようとも、私は負けるつもりは無い。

「刹那君……」

長は静かに呼吸を繰り返し、やがてゆっくりと言葉を吐き出した。

「——私も、このままではいけないのでしょうかね」

長が何を思ったのかは分からないけれど、その心に何かしらの変化があったのだけは分かる。そうして長は一度、情けないと呟き力の抜けた笑みを見せた。

「決断しなければならないと分かっても尚、木乃香のことをすぐに決めることが出来ない。けれど、僕の方でも一度、改めて考える時間をください」

私はその言葉に小さく頷く。長では無く、詠春様——このちゃんの父親の言葉のように思えた。

そうして長は笑みを収め、じっと私を見て言った。

「今しばらく、木乃香をお願いします。まだあの子には、普通の生活を満喫してもらいたいです」

「承知しました」

どう変わるかは分からない。けれど私は、出来るだけのことをやるだけ。

「あ、そうだ」

それはそうと、せっかく京都に来たんだし、エヴァンジェリンさんにお土産でも買って行こうか。このちゃんには京都に来たこと内緒にしてるけど、彼女には伝えてある。

言った瞬間に不機嫌な顔をしていたけれど……エヴァンジェリンさん、日本の景色が好きだったはず。何をお土産にしようかなあ。

桜通りの吸血鬼事件の日

「せっちゃん、おはようさん」

「桜咲さん、おはよー」

「おはようございます、桜咲さん」

「おはよ、このちゃん。神楽坂さんに、ネギ先生も」

今日から新学期が始まり、私たちは三年生になる。

このちゃんたちと一緒に学校へ行くことが増えて、明日菜さんやネギ先生とも話すようになった。ただ困っているのが、図書館島でのことを未だに時々聞かれること。

たぶん、私が魔法を使えるのかどうかと疑っているんだと思うけれど……どうしたらいいんだろうなあ。

「そーいや聞いた？あの噂」

「噂？」

時間は過ぎて、今は教室で着替え中。新学期早々、まずは身体測定が行われるので、そのためだ。

「あ、知ってる。桜通りの吸血鬼ってやつでしょ」

「えーっ、何それ何それ？」

「せっちゃん、知ってる？」

「う、うん、一応」

桜通りの吸血鬼、満月の夜に寮の桜並木に現れる謎の存在。まあ、うん。知ってるも何も友達だしなあ。

「こんなかな!？」

「いや、このちゃん…違うと思うよ」

チュパカブラって…なに？

「先生、大変やー! まき絵が、まき絵がつー!」

「何! まき絵がどうしたの!？」

外で待っていたネギ先生に向けられた声に反応して、全員がそろって騒ぎ出す。

ちらりとエヴァンジェリンを見ると、にやりと笑い返されて…
…ああ、やっぱり貴方が原因ですか。

更に時間が過ぎて、夜。私たちは少し買い物に、宮崎さんだけ先に寮に帰ると別れた矢先、心配になった明日菜さんが送ってくると言って追いかけて行った。

「んー、うちも心配やし…ちょっと行ってくるわ」

「あ、このちゃん。私も行く」

「ほな、一緒にいこー」

昨日の今日で、エヴァンジェリンさんが動くかは分からないけれど…いや、でもそういうえば、この前から頻繁に夜に出かけてるような。あれ、もしかして遭遇しちゃったり

「(しますよねー)」

明日菜さんに追いついたところで、ネギ先生がボロボロの制服姿の

宮崎さんを抱えていた。というよりも宮崎さん、ほぼ裸……これは、どうしよう。このちゃんはわけが分からないでいるから、上手くフオローしないとだし……。

「とりあえずこのちゃん、宮崎さんにこれ着せてあげて。何も無いよりは、良いと思うから」

「う、うん。せやな」

ベストを脱いで宮崎さんに着せる。下は、どうしよう。着せるよりかけた方がよかったかな。
ものすごい速さで走っていくネギ先生は、まあ足が速いってことにして、とにかく明日菜さんも一緒に連れて寮へ――

「ま、待ちなさいよ!!」

「神楽坂さん!?!」

え、走って行ってしまった……もしかして、明日菜さんもう引き返せない場所まで行ってしまってるんじゃない。ああ、いや、十中八九そうなんだろう。自分から関わりに行くなら、私にもどうしようもない、かなあ。

「あ、明日菜――!!」

「このちゃん、今は先に宮崎さんを寮に連れて行こう。服、着せてあげないと」

「う、うん……でも……」

「ネギ先生は神楽坂さんが連れてくるよ、たぶん」

宮崎さんを背負って、見えなくなった二人を心配するこのちゃんの手を握り、寮に向かって歩き出した。

「ほい」

「ありがとうございますー」

宮崎さんの同室者がまだ帰ってきていなかったの、仕方なしにこのちゃんたちの部屋へ連れてきた。ベストは回収して、今は応急処置にバスタオルを巻いてもらってる。

「にしても、いったい何があったんや？」

「それがー、私もよく覚えて無くて……すごく恐かったのは覚えてるんですけどー」

「……まあ、怪我が無くてよかったですね」

「はい。ありがとうございますー」

たぶん、エヴァンジェリンさんが血を吸う前に、ネギ先生が駆けつけたんだろう。運が良かったと言わざるを得ないな。

「にしても、明日菜たち遅いなー。大丈夫やろか？」

「どうだろう。もう少し待っても来ないようなら、私が探しに行ってくる」

「駄目や。それやと、せっちゃんが危ない目にあうかもしれん」

「でも……」

「駄目や」

……図書館島の一件以来、このちゃんが頑固です。何も言わずに飛び出したのは、拙かったかな……。

結局、ネギ先生が泣きながら帰ってきたのは、それから一時間ほど経った頃だった。

翌日、授業中のネギ先生は常にぼうっとしている。昨日のエヴァンジェリンさんとの戦闘が相当に堪えたようだ。

そのエヴァンジェリンさんもサボタージュだとか。舐められてるなあ、ネギ先生。真祖相手だし勝てないのも無理は無いと思うけれど。

「あの……つかぬ事をお尋ねしますが、和泉さんは十歳の年下の男の子がパートナーなんて、嫌ですよね……？」

「えっ……」

何を言い出すかと思えば……ネギ先生、改めて見ると迂闊すぎる。パートナーとはつまり、魔法使いのパートナーのことを言っているんだろうが……大丈夫なんだろうか、一般人ばかりの生徒に対してその発言は。

昔の私も、どうしても不思議に思わなかったかな……いや、不甲斐ないとは思っていたけれど、でも改めてみると酷い。色々と頑張ってるごいことはしてたけれど、それもな……。

そのうちチャイムが鳴ってネギ先生が出て行くと、なぜかパートナーに立候補する人が多数。というよりネギ先生が王子様って、どういふ噂だろ。よく分からない。

「刹那さん」

「はい？」

騒ぎの中、茶々丸さんに声をかけられる。いつも一緒にいるエヴァンジェリンさんは、サボリ中なのでやっぱりいない。

「放課後、マスターが来るようにと」

「そうですか……場所は？」

「私がお連れしますので、教室でお待ちください」

「分かりました」

用事、か。なんだろう。昨日の事を聞くにはちょうどいいけれど…。

「なあなあ、せっちゃん」

「ん、なに？」

「せっちゃんは、ネギ君のパートナーってどう思う？」

「……そうだね……」

笑みを浮かべて、私は言った。

「遠慮しておくよ」

約束の放課後、鞆に入っている物を確認して私は茶々丸さんと一緒に教室を出た。このちゃんは、何やらクラスで企んでいるそうでそれを手伝うんだとか。

「ん…来たか、刹那」

「こんにちは、エヴァンジェリンさん。ずっとここでサボってたんですか？」

「いや？屋上で日向ぼっこもしていた」

「……つくづく、物語の吸血鬼から想像できませんね…」

「不老不死が日光ごときでやられて堪るか」

連れて行かれた先で、エヴァンジェリンさんが退屈そうにしていた。彼女にとっては授業も退屈なものなんだろう。

「それで、どうかしたんですか？」

「あの坊やに私の正体が知られたんでな。少々騒がしくなると、教えてやろうと思ったただけだ」

「……もう十分、騒がしいです。とりあえず、このちゃんだけは巻き込まない様に気を付けてください」

「お前は巻き込んでもいいのか？」

「……私、ですか？」

どうしてそこで私の名前が出てくる。

「私は、このちゃんを護るので忙しいです」

「その割に長谷川千雨の相手をしたりと、余裕がありそうだが？」

「……なんで知ってるんですか」

「さあな」

エヴァンジェリンさんの言うとおり、確かに時折、千雨さんの話し相手をしてたりはする。今まで話せる相手がなかったんだろうし、時間があれば話しているが……基本、寮の部屋で話してるんだけど。どうやって知ったんだろう。

「はあ……巻き込むって、具体的にどうするつもりですか？」

「そうだな、仮契約でもしてみるか？」

「本気で怒りますよ？」

「はっ、冗談だ」

このちゃんに仮契約はさせないようになっている私が、仮契約してどうするんですか。エヴァンジェリンさんの冗談は冗談に思えないから怖い。

そう思っていたら、エヴァンジェリンさんが何かを投げてきて、思わずキャッチしてしまった。これは、ネックレス？

「念話用の魔法具だ。私が呼んだらすぐに来い」

「なんで私に…？」

「私はお前を気に入っているんだよ。常に着けておけ、いいな」

「……分かりました」

気に入っている、か。私にそこまで価値があるとは思えないんだけどな。

受け取ったネックレスを首に下げ、制服の下に隠す。その時、ふと思いついたことがあって、ああと声をあげた。

「そうだ、エヴァンジェリンさんに渡したい物が……」
「ネギー……！」

叫びながら、明日菜さんが建物の影から現れる。こちらに気づくとバツと身構えてきた。

「ほう、神楽坂明日菜か」

「あんた達！……え、桜咲さん？」

「どうも、神楽坂さん」

一緒にいた私に気づいて、明日菜さんは戸惑ったように表情を変えたけれど、すぐに首を振ってエヴァンジェリンさんたちを睨んだ。

「ネギをどこへやったのよ？」

「…む、知らんぞ」

「えっ」

明日菜さんは、ネギ先生を探していたらしい。エヴァンジェリンさんが犯人という予想は外れたみたいだが。

昨日の件で明日菜さんもエヴァンジェリンさんを警戒しているみたいだ。エヴァンジェリンさんは、自分に力が無いのを説明している。……いいのかな、私の前でそんなに説明して：明日菜さん、疑うんじゃないかなあ。

「そ、そうだ、桜咲さん！なんでここにいるの！？」

ネギ先生のことを言われて僅かに顔を赤くした明日菜さんの矛先が私を向いた。私は、鞆に入れていた物を取り出して困ったように笑う。

「春休みに、ちょっと実家の方に行って来たんです。エヴァンジェリンさんにお土産を買って来たので、それを渡そうと……」

「そ、そっか」

「すみません、慌ただしくて皆さんの分までお土産買えなくて……」

「いいよ、全然。こっちこそ、いきなり訳わかんない会話しちゃって……えっと……」

「？」

首を傾げる。そうすると後ろから肩を叩かれて、振り返れば意味が分からないというエヴァンジェリンさんが立っていた。

「おい、何のことだ」

「言ったじゃないですか、京都に行くって。お土産です」

「おお！！」

八橋と、お茶っ葉、あと京都の景色の写真。まとめて渡すと、エヴァンジェリンさんが目を輝かせた。本当に好きなんだな……。

「……ん？」

ピクツと眉が跳ねる。僅かだけれど、反応があった。私の変化に気づいたエヴァンジェリンさんが訝しげに見上げてくる。小さく笑って、それじゃ、と声をかける。

「急用が出来ましたので、失礼しますね」

「ああ」

「お気をつけて」

「神楽坂さんも、それじゃ」

「え、あつ、桜咲さん？」

タツと走り出す。反応は僅かだから、命を狙うものじゃない。このちゃんに渡したお守り袋に入れられたお札。それが、このちゃんに危険が迫っていることを教えてくれる。

「（場所は……お風呂？　なんでそんな所で……）」

伝わってきた場所に首を傾げつつ、飛び込むようにして中に入れば、外に漏れる声以上の音量で騒ぎ声が耳に飛び込んできて顔を顰める。

「このちゃん!？」

「あ、せつちゃん!　大変や、ネズミやネズミー!!」

「ネズミ?」

危険の正体は、それか?　このちゃんを背中に庇いつつ、視線を巡らせる。走り回る細長い生き物が、どういうわけかクラスメイトの水着を脱がしていた。

「（なんで水着、というよりこの生き物、絶対にカモさんだろ）」

エロオコジヨ、と呼ばれていたあの白い生き物が、まさかこんな騒動を起こしていたとは――。

そう思っていたら、その生き物がこっちに向かってきた。キラんと目を光らせたように見えたけれど、襲って来たそれを片手で弾き飛ばす。

「ギャン!!」

ベシヤツとお風呂場の壁にぶつかったオコジヨが、素早い動きでお風呂場から出て行く。とりあえずこれで終わり、なんだけど……参ったな。

「っ何やってんのよー!!」

後ろから明日菜さんが怒鳴り込んでくる。

参ったな、あのオコジヨがこのちゃんを巻き込まない様に、気を付けないと。

従者が狙われた日

このちゃんの話によると、カモさんはネギ先生のペットなんだとか。うちの寮、そういえばペット可だったっけ。忘れていた。

「でも、下着で寝るって……いいの？このちゃん」

「気持ちいいんやろ、きつと」

学校に向かって走りながらそんな会話。全然良くないと思うよ、このちゃん。長が知ったら何を言い出すか……あの人、結構な親馬鹿だから。

「というより、このちゃん。ネギ先生たち置いてきたけど、いいの？」

「んー、大丈夫やろ。でも、なんやネギ君がエヴァちゃんのこと恐がってるみたいなんやけどなあ。どうしたんやろ」

「さあ……」

エヴァンジェリンさんはたぶん今日もサボりだろう。そう思いつつ、騒がしい教室の扉を開けた。

放課後、私はこのちゃんと千雨さんと服屋に来ていた。私経由でこのちゃんと千雨さんも仲良くなって、千雨さんはこのちゃんの天然っぷりに時折眩暈を覚えながら、それでも楽しそうにしている。

「この服、ちーちゃんに似合いそうやなー。なあ、着てみんか？」

「あ、ああ……」

このちゃんが千雨さんにそう言って渡したのは、ひらひらが一杯のワンピース……なんだっけ、ゴスロリ？ ロリータ？ そんな服。麻帆良にこんな服屋があったことにも驚いたけれど、このちゃんがその店を知っていることにも驚いた。

「せっちゃんも、これ着てみる」

「わ、私は……やめとくよ」

「えー、なんでなんで？」

「おい刹那、テメエだけずりいぞ」

試着室に押し込まれる直前の千雨さんに睨まれる。いや、だって私はそんな服似合わないし。

「このちゃんは、着てみないの？」

「うちか？ んー……どないしょ」

とりあえず誤魔化せて、ほっと一息。そう思ったら

「あ、せっちゃん！ これこれー」

「私はいいつてばー！」

別の服を持ってきて突進してくるこのちゃんを避ける。そんなひらひらふりふり来たら、私の何かが壊れる。絶対に壊れるから、勘弁してこのちゃん。

「お、おい、木乃香。やっぱこれは……」

「ふわああ、ちーちゃん、かわええなあ」

「本当……すごく似合ってますね」

「っ……」

顔を真っ赤にして姿を見せた千雨さんに、感嘆の溜息。服以外はいつも通りだけれど、それでも可愛い。眼鏡を外して、髪を下したらもっと似合うんだろうけど。

「なあ、ちーちゃん。眼鏡外さへん？あと、髪も」

「む、無茶言うなよ！？」

「えー、でも勿体ないえ。一回だけでええから…な？」
「無理だって！！」

眼鏡は伊達だってこの前教えてもらったが、やっぱりまだ外してはもらえない。ゆっくりと慣れてもらうしかないかな。

と、私がのんびりとこのちゃんと千雨さんのやり取りを聞いていた時、妙な感覚と共に頭に声が響いた。

『おい、刹那』

『……エヴァンジェリンさん？』

『ああ』

声に出さず、頭で思うだけで相手に伝わるらしい。なるほど、これがこのネックレスの効果か。貰ってから、実際にこうして話すのは初めてだ。

『どうしました？』

『悪いが、茶々丸に付いていてやってくれ。今、あいつは一人だ』

『……何か、拙いことでも？』

『あの坊やにアドバイザーが付いたみたいでな。念のためだ』
『わかりました。茶々丸さんの居場所？』

『辿ってみる。分かったら教える』

『お願いします』

ぷつりと何かが切れる感覚。たぶん、エヴァンジェリンさんが繋いだ回線が切れたんだろう。これ、こっちからも連絡できるのかな？
今度試してみようか…。

「このちゃん、千雨さん」

「ん？どうしたせつちゃん？」

「ごめんなさい、ちよつと急用があったの思い出して。先に帰って？」

「そうなん？うう、残念やね…」

しょんぼりするこのちゃん。罪悪感に胸が痛い。

「…：もうちよつと抑え目な服なら、今度来たときに着てみるから。それで許して？」

「約束やえ？」

「うん。それじゃ、千雨さんも、すみませんけど」

「…ああ、んじゃな」

あの眼は、たぶん何かあったことに気づいているんだろう。詳しくは知らなくても、千雨さんはそれがあるのを知っているから、あっさりと見送ってくれた。

『刹那』

『場所が分かりましたか？』

『移動している。今は——』

『——わかりました。では、そちらに行ってみます』
『頼む』

店を飛び出したところで、エヴァンジェリンさんからの念話で茶々丸さんの大まかな居場所を把握する。

人を蹴散らさない程度に速く走って、街の中心から離れた。方向は、エヴァンジェリンさんの家がある方。おそらくこの辺りにいる筈なんでしょう……。

その時、微かに猫の鳴き声を聞いて、ふと思う。茶々丸さん、たまに家で猫缶の用意をしていたことがあった。もしかして、野良猫の世話をしていたりするんだろうか。試に声のした方に歩いていくと、確かに茶々丸さんの姿があった。そして同時に、ネギ先生と明日菜さんの姿も。

「まさか……」

彼らが戦っているようなのは、すぐに分かった。エヴァンジェリンさんを倒す前に、まずは従者である茶々丸さんを狙ったのか。戦法としては、正しいんだろうけれど。

「魔法の射手 連弾・光の11矢!!」

「……!!」

明日菜さんの攻撃を躲した茶々丸さんに、ネギ先生の魔法が迫る。

「追尾型魔法接近弾多数、よけきれません———すみませんマスタ———もし、私が動かなくなったら猫の餌を———」

「———ッ」

気づいた時には、私は茶々丸さんの前に立ちはだかっていた。懐からお札を取り出し、指に挟んで構える。

「防御結界——透壁」

結果が私と茶々丸さんを、魔法から守る。さすがネギ先生、なかなかの威力だ。どうにか守り切ったところで、お札が炎に包まれ灰と化す。大きく、息を吐き出した。

「刹那さん……」

「茶々丸さん、エヴァンジェリンさんが心配していますので、とりあえず今日は早めに帰ってあげてください。いいですか？」

「はい…ありがとうございます」

「いえ。それじゃ」

茶々丸さんが頭を下げて、ジェット噴射で飛んでいく。土埃が目染みて痛い。

「さ、桜咲さん……」

「あ、こんにちはネギ先生、神楽坂さんも」

さて、問題はこっちかな。驚愕しているネギ先生と明日菜さんを前に考える。

驚きのあまり何も言えずにいる二人の後ろから走ってくるオコジョを見つけて、ややこしくなる前に口を開いた。

「凄い光でしたね、今の。吃驚しました」

「え、えっと、その……」

「雨は降ってないですけど、雷でも落ちたんでしょうか？眩しくて私、目を開けてられなくて。二人は大丈夫でしたか？」

「うっ、うん、大丈夫！吃驚したね」

明日菜さんが話を合わせてきた。ネギ先生は固まったままだったけれど、それは明日菜さんに任せても大丈夫だろう。

「エヴァンジェリンさんから、茶々丸さんに早く帰るよう伝えてほしいって言われて、探してたんですよ。茶々丸さん、よく寄り道するらしくて」

「そ、そうなんだ……」

「ええ。それじゃ、私はこれで――」

「おいおいやいてめえ！ テメエもエヴァンジェリンの仲間か！？」

「うえっ！ カモくん！？」

ネギ先生の肩によじ登ったオコジョが叫んだ。それに我に返ったネギ先生が慌てだして、明日菜さんもどうしようといった顔をしている。

「アニキ、こいつもエヴァンジェリンの従者に違い無いはず！」

「ええっ！？」

「ちよっ、何言ってるのよエロオコジョ！！」

やんやんやと私を無視して騒ぎ出した明日菜さんたちに、首を傾げて困ったように笑うしかない。とりあえず、事無きを得て終わりたい私としては、多少の強引さを感じつつ誤魔化すことにした。

「面白いですね、腹話術ですか？」

「へっ……あ、ああ！ そう、そうなのそうなの！！」

「ぶぎゃっ」

明日菜さんがオコジョの首を絞めて笑った。オコジョの顔が真っ青に染まるが、そんなこと関係なしに笑っている。ネギ先生は、変わらずあわあわしたままだ。

「それじゃあ、私はこれで」

「う、うん。じゃあね」

「さようなら、桜咲さん」

戸惑い気味の二人に背を向けて、私はその場を後にした。

真祖が怒った日

目の前で怒るエヴァンジェリンさんを眺め、どうしようかなと思う。茶々丸さんからネギ先生に襲われたことを聞いたようで、最初は明日菜さんがパートナーになっていたことに面倒くさそうな、面白そうな顔をしていたけれど、どうやら私が間に入ったことまで聞いてしまったらしい。

私が間に入らなければ、機能停止していたかもしれないと茶々丸さんが言って、それを聞いて今に至る、と。

「坊やの分際で、頭が回ることだ……くくくっ」

「恐いです、エヴァンジェリンさん……茶々丸さん、どうにかできませんか？」

「無理です。今のマスターは、過去に類を見ないほどに怒っております」

「どう甚振ってくれようか。腕を引きちぎってやるのも面白そうだ」

「いや、エヴァンジェリンさん、落ち着いてください……気持ちはいよく分かりますけど、とりあえず落ち着いて……」

私からすれば、このちゃんを殺されかけたも同然な事だけに、強く言えない。このちゃんが同じ目に会ったら、私も同様に怒るだろう。でもこのまま放っておいたらネギ先生が本当に殺されてしまうかもしれない……どうしよう。

「刹那さん」

「はい？」

「マスターは、何故あれほどに怒っていらっしゃるのでしょうか」

「……茶々丸さんが、傷つけられたからですよ」

「私が？」

ああ、そうか。ネギ先生と交流する前の茶々丸さんは、まだ感情とかそういうのを理解しきれていないんだ。だから、目の前のエヴァンジェリンさんが何に対して怒っているのか、それが分からずにいるんだろう。

「茶々丸さんが大切だから、傷つけたネギ先生が許せないんです」

「私が、大切……？」

「そうですよ」

まだよく分かっていない様子の茶々丸さんが、何となく微笑ましい。ロボットとはいえ、生まれたばかりなんだよな、茶々丸さんって。こういうところを見ると、子どもを見てる気分になってくる。私も見た目は子どもだけど。

「――刹那」

「落ち着きましたか？エヴァンジェリンさん」

「ああ……刹那、礼を言う。茶々丸を助けてくれて、ありがとう」

「お気になさらず。私が、見ていられなかっただけです」

「それでも、私の家族を守ってくれたことに違いは無いさ」

ああ、ほら。やっぱりエヴァンジェリンさんは茶々丸さんが大切なんだ。そうでなければ、この人が私に礼を言うなんてありえない。

「ね、茶々丸さん。私の言った通りでしょう？」

「……はい、そのようです」

そう言った茶々丸さんがどこか嬉しそうに見えて、私は思わず笑ってしまった。

翌日の土曜日、私は学園長室に呼び出された。連絡があつた時は驚いた。仕事の依頼をされたことは結構頻繁にあるが、こんな形で呼ばれることは殆ど無いことだったから。

「さて、刹那君には少々、聞きたいことがあるんじゃないか？」

「私に答えられる事でしたら……」

学園長室には、学園長だけでは無く高畑先生も一緒にいた。今日は出張じゃないらしい。

「なぜ、あんな事をしたのかの？」

「……と、言われましても」

抽象的すぎて、どのことを言っているのか分かりません。

「……そうじゃの、では、先日の事から聞こうかの。なぜ、茶々丸君を助けたんじゃない？」

「友人が殺されかけるのを、むざむざ見過ごすことも出来ませんでしたので」

「ここ最近、やけにエヴァンジェリンと親しくしておるようじゃが、彼女とも友達かの？」

「ええ」

「彼女も魔法使いじゃが、よいのか？」

「大丈夫ですよ。彼女とは普通の友人でしかありませんから」

さらりと嘘を吐く。この口ぶりだと、私とエヴァンジェリンさんが戦ったことは知らないのかな……どうだろう。警戒はした方がいい

かもしれないけれど。

「木乃香とも、随分と一緒にいるようじゃが、どういう心境の変化かのお。お前さんは、木乃香にあまり近づかない様にしていると聞いておったが」

「……私が、このちゃんの友人でいるのは、いけませんか？」

「そういう意味じゃないよ、刹那君」

少しばかりムツとして学園長の言葉に返すと、高畑先生が苦笑して言う。

「木乃香君には、魔法の存在を知られてはいけないだろ？ 君も気づかれるのを警戒して離れていると思っていたから、どうして行動を変えたのかと思ってね」

「……お嬢様の周りには、ここ最近になって危険が多くなりましたので。護衛するにも、近くにいた方がいいと判断したまでです。これ以上、お嬢様に寂しい思いをさせたくもありませんでしたから」

「危険、とな……」

「身に覚えがあるわけではありませんか？」

「無いのお……ふむ、そうか。なら、こちらでも気を付けるようにしようかの」

「必要ありません」

「ふお？」

学園長の言葉を両断する。ここでお願いしますなんて言ったなら、どうせネギ先生辺りに妙な情報を流して、このちゃんの周りをうろつかせるだろう。そうしたら、なし崩しで魔法に気づかれる可能性だってあるし、他にもそういった手を打ってくる可能性がある。そんなの、許してたまるものか。

「そういった危険から遠ざけるために、私はお嬢様と以前の関係に戻ったのです。そちらは、必要以上の干渉をしないでいただきたい」「しかしのお、木乃香は儂の孫娘でもあるわけだし、それくらいは……」

「学園長は、同時に関東魔法協会の会長でもあるのです。必要以上の手出しは、ご自分のお立場を悪くする恐れもありますから、お止め下さい」

手出しして来たら、長への報告内容が増えることになるし、関係の悪化も免れないだろう。現時点で西側の印象が悪くなっているのだから、何もこれ以上悪くしなくてもいいのに。

「仕方ないのお……して、図書館島でのことはどうということじゃ？」

「図書館島？」

「あの言葉の意味を知りたくてのお」

「……学園長」

「ふお？」

「先ほどの茶々丸さんの一件から、お聞きしたいと思っていたのですが――ご自分の学園の生徒の危機を、ただ見ていらしたのですか？」

「ふおふお!？」

「刹那君？」

思わぬ切り返しに驚く学園長と高畑先生をよそに、私は言葉を続けた。

「図書館島ではクラスの数名とネギ先生が石像に襲われ、茶々丸さんはネギ先生と神楽坂さんに襲われ命の危機に晒されています。図書館島や茶々丸さんの件に、私が関わっていたことを知っているということは、それを見ていらしたんですね？」

「そ、それは、そのお……」

あれらの私の行動は、あくまでこのちゃんや茶々丸さんの友人として行った行動。仕事ではないから報告の義務は無い。つまり、私がいたことを彼らが知っているのは、その様子を見ていたからに他ならない。

「そちらがどういうつもりで、不干渉に徹したかは知りませんが……友人の危機を捨て置けるほど、私は冷酷にはなれませんので。あの石像の正体や、どうして茶々丸さんがネギ先生に襲われていたのかは、私も知らぬところですのでお答えできませんが」

「そ、そうか……刹那君は、何も知らないんじゃない？」

「詳しいことは。ただ、学園長、一つお聞きしたいことが」

「なんじゃ？」

「先ほどの質問の、図書館島でのあの言葉の意味、というのは……私には、思い当たるのが石像に対して言った一言しか無いのですが」

「う、うむ……それが、どうしたんじゃない？」

「どうして、石像に対して私が言葉を発したのを、学園長が知っているんですか？」

「ふおおおおお！？」

この驚きようからするに、やっぱりあの石像を操っていたのは学園長で正しいみたいだな。だからああして、釘を刺すつもりであんな事を言ったんだけれど……理解してもらえていなかったらしい。いや、理解していないふりかな？どちらでもいいけれど。……良くはないか。

「まさか、学園長自らが生徒を危険に晒したんですか？さすがにそれは、お嬢様の護衛としての立場からしても、何かしらの対処を取らせてもらわなければならぬのですが」

「対処、とな……」

「長には当然ながら報告させていただきます。東は西の長の娘に危害を加えようとしたと――」

「せ、刹那君!」

「はい?」

「儂は、あれかの?何か質問を、したかのお?」

「………いいえ」

変わり身の早さに本気で驚いてしまった。というより、これはあれだろうか。私がした行動は、脅しと言っても良いんだろうか……:ちよっと早まったかもしれない。まあ、向こうが取り消してきたんだし、全面的に向こうが悪いとして大目に見てもらおうかな。

「お話は以上ですか?」

「い、いや。もう一つあるんじゃない?」

「なんででしょう?」

「今回の……ネギ君とエヴァンジェリンの一件については、関わらんで欲しい」

「それはつまり、先日の茶々丸さんのような事態を目撃しても、手を出してはいけないと?」

「うむ」

「……分かりました。お話が以上なら、私はこれで失礼します」

了承して、学園長室を出る。別に、好きで事件に介入しようとは思っていない。昨日の件も、エヴァンジェリンさんに頼まれて茶々丸さんを探した結果の行動だし……助けられて良かったとは、思っているけれど。

あくまでエヴァンジェリンさんとネギ先生の問題のようだし、私に間に入ってどうこうするものでも無い。ならば、大人しくこのちゃんが巻き込まれない様に注意を払うのが、私の仕事だろう。

とりあえず、今日はこの後、エヴァンジェリンさんとお茶をする約束だったし、このまま向かおうかな。

看病をした日（前書き）

無駄に長めです。一行にも満たないですが女の子同士でのキス？シンがあります。

ただし、百合ラブ臭要素は無しです。苦手な方はご注意ください。

看病をした日

月曜日、いつものように学校へ行く準備をしていたところで、声が頭に響いた。

『おい、刹那』

『エヴァンジェリンさん？どうかしましたか、こんな朝早くに』

『……今すぐ、うちに来い』

『何か用事でも？』

『茶々丸が煩いんだ。私はいらんと言っているのに』

『……あの、意味がよくわからない』

『いいから来い！いいな！？』

一方的に念話が切られ、私はその場に取り残された気分で用意していた鞆を片手に、首を傾げる。

どうやら、エヴァンジェリンさんでは無く茶々丸さんが私に用事があるらしいけれど、いったいなんだろう。

「刹那、もう行くのかい？」

「あ、ああ。悪いが真名、先に行かせてもらう」

「……？」

首を傾げる真名に曖昧に笑いながら、部屋を出る。何の用かは分からないけれど、行かないわけにもいかないし……遅刻、しないといけれど。

電車は使わず、走ってエヴァンジェリンさんの家に向かった。人目につかないように気をつけさえすれば、こちらの方が速い。

実は時々、エヴァンジェリンさんに別荘を借りて修行をさせてもらっているから、そのおかげで体の経験がだいぶ増えてきた。彼女の言うとおり、記憶がある分、すぐに色々と身に着けられている気がする。この場合は、取り戻していると言った方が良いのだろうか。そんなこんなで割とすぐにエヴァンジェリンさんの家に到着し、扉を叩く。茶々丸さんが出迎えてくれて、どうぞと促されるままに中に入った。

「それで、用事というのは？」

「はい。実は――」

「要らんとやっているのに、茶々丸が聞かないんだよ」

上の方から声がして、二階への階段の手すりに腰かけたエヴァンジェリンさんが、未だ寝間着姿で笑っていた。

パツと見でも分かるくらいに顔が赤く、いつもの調子で言っているつもりなんだろうが、何となく弱弱い声。明らかに具合が悪いと見て取れて、顔を顰めた。

「エヴァンジェリンさん、風邪をひいたんですか？」

「風邪？何を言っている。私は元気だぞ」

「いえ、マスターはご病気です」

「おいこらっ、茶々丸！」

キッパリと言い切った茶々丸さんに、心外だとばかりに叫ぶエヴァンジェリンさん。どちらを信じるかは、もうはつきりしている。

私は持っていた鞆を壁際に置いて、茶々丸さんに振り返った。

「エヴァンジェリンさん、普通の風邪ですか？熱は？」

「十五分前に計った時は三十九度でした。マスターは風邪だけではなく、花粉症も患っています」

「茶々丸、余計なことを言うな!!」

「……茶々丸さんが私を呼んだのは、エヴァンジェリンさんの看病の為ですか？」

「はい。私はこれから、ツテのある大学でよく効く薬を貰ってこようと思っていますので、その間、マスターをお願いできますか？」

なるほど、そういう事だったのか。さすがにこんな状態のエヴァンジェリンさんを一人にするのは不安だろう。私は頷き、首を傾げて聞いた。

「エヴァンジェリンさん、朝食の方は？」

「食欲が無いと、食べようとしません」

「なら、私が何か食べやすいもの作りますから……その薬は、それから飲ませてもいいですか？」

「はい。お願いします」

「っお前たち二人揃って、何を勝手に進めている！私は元気だと——っ」

階段を下りてきたエヴァンジェリンさんが、掴みかかろうと茶々丸さんに手を伸ばした。けれどその手は少しあげただけでだらりと落ち、彼女の体がふらりと揺れる。慌てて手を伸ばして、その体を受け止めた。小さくて軽い体。私も小さい方だが、それよりも小さい。

「だいぶ具合が悪いみたいですね」

「魔力の減少したマスターの体は、元の肉体である十歳の少女のものと変わりありませんので」

エヴァンジェリンさんの体を抱き上げて、階段を見上げる。ベッド

は二階だし、一度寝かせてから朝食を作ることにしよう。

「茶々丸さん、薬はそこに置いといてください。後で、朝食と一緒に持って行って、きちんと飲ませますから」

「はい。それでは、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げて、茶々丸さんが出て行った。私はすぐに二階へと上がり、エヴァンジェリンさんをベッドに寝かせる。

息が荒いのを見て、朝食よりも先に水を飲ませるべきかと考え直す。キッチンでコップに水を汲み、桶に氷水を入れてタオルも一緒に持つ。少しだけどうにか水を飲ませて、濡れたタオルを額に乗せた。

「エヴァンジェリンさん、ご飯を作ってきますから、大人しく寝ていてくださいね」

「……………」

返事は無かった。このまま大人しく寝ていてくれれば良いと思いつながら一階へと下りて、キッチンに立つ。病人には定番のお粥で大丈夫かな。そうして作り始めてから暫くした頃、からんころんと呼び鈴が鳴った。

「茶々丸さん……………」

「あの、こんにちはー。担任のネギですけど、家庭訪問に来ましたー」

「……………え？」

思わずぽかんと口を開けて、時計を見る。八時を過ぎているが、まだ朝だ。こんな時間に家庭訪問というのは、どうなんだろう。

「すみませーん」

「は、はい」

放置するわけにもいかず、慌てて駆け寄り扉を開けて顔を覗かせる。驚いたようにネギ先生が目を見開いた。

「えっ、桜咲さん!？」

「おはようございます、ネギ先生。あの……エヴァンジェリンさんに、何の用ですか？」

勝手に家に入れることも出来ないの、その場で応対する。ネギ先生ははっと我に返ったような顔をして、あのと聞いてきた。

「エヴァンジェリンさんは、いないんですか？あと、桜咲さんがどうしてここに……」

「えっと、ネギ先生。エヴァンジェリンさん、風邪をひいていて。私は看病するためにお邪魔しているんです。それで、今日は――」

「そ、そんなまさか。彼女が風邪だなんて……」

「いや、ひきますよ。なのでネギ先生、今日はエヴァンジェリンさんはお休みしますので――」

「いらん、刹那」

「……エヴァンジェリンさん。寝ていてくださいと――」

「エ、エヴァンジェリンさん!!」

どうしてだろう。ことごとく話終える前に言葉を遮られる。

振り返れば、私が来たとき同様に階段の手すりに腰かけた彼女が、こちらを見下ろしていた。大人しく寝ていてくださいと言ったのに……。

そう思ったところで、ネギ先生が私を押しつけて家の中に侵入してきた。そのままエヴァンジェリンさんに向かって歩き出し、何かを突き出す。

「……なんだそれは」

「は、果たし状ですっ。僕と、もう一度勝負してください！——あ、それにちゃんと学校にサボらず来てください！卒業できなくてもいいんですか？」

「だから、呪いのせいで出席しても卒業できないんだよ」

「あの、エヴァンジェリンさん……」

無駄話はしないで、早く寝てほしい。寝なければ治るものも治らないのに。

「——まあいい。じゃあ、ここで決着をつけるか？私は一向に構わないが」

構いますから、魔力を高めないでください。フラスコも持たないでください。興奮して余計に熱が上がります。

とりあえず、開けたままの扉を閉めて二階への階段へと向かって歩く。

「……いいですよ。そのかわり、僕が勝ったらちゃんと授業に出てくださいね」

よくありません、ネギ先生。杖を構えないでください、そんな風にしてこのちゃんを魔法に巻き込むのだけは、勘弁してくださいよ？無言で階段を上り、エヴァンジェリンさんに近づく。手を伸ばせばすぐに届く距離まで来た。

ニヤリと彼女が笑った瞬間、その手からフラスコが落ち、体がぐらりと揺れて倒れる。

「わ~~~~っ!!」

「つと」

床めがけて倒れかけるエヴァンジェリンさんに、ネギ先生がパニックになったのか大声で叫ぶのを尻目に、その体を掴んで後ろに引き寄せ抱きとめる。ふらふらしていたから危ないと思ったけれど、やっぱりまた倒れた。床に落ちて割れたフラスコは、後で掃除しないといけないな。

「見ての通り、倒れるくらいには重症です。風邪だけじゃなくて、花粉症も患っているようなので」

「その人本当に——ッ!!」

何か言いたげに口をパクパクさせて、ネギ先生は未だパニックに陥っている。たぶん、本当に吸血鬼なのかと言いたいんだろうなあ……ことあるごとに、私もそう思うから。

一先ずはさっさと寝かせてしまおうと二階に連れて行く。さっき持った時より、体が熱い……まさか、熱が上がっている？最後に計ったのは一時間ほど前になるけれど……もう一度、計ってみたほうが良さそうだな。

エヴァンジェリンさんをベッドに寝かせ、布団をかける。お粥はもう殆ど出来ているから、それを食べさせて薬を飲ませて、あと服を着替えさせて。枕の横に落ちていたタオルを濡らし直して、額に乗せると立ち上がる。後ろを振り向いて、所在なさ気に立っているネギ先生に首を傾げた。

「何をしているんですか？」

「え……？」

「見ての通り、エヴァンジェリンさんは病気ですので……私も、彼女を一人にしておけませんので、今日は欠席します。先ほどの話がよく分かりませんが、家庭訪問は彼女が治ってからにした方がいい

「と思いますよ……？」

「あ、は、はい！そう、ですね……」

話しながら、何だかエヴァンジェリンさんの保護者になったような気分がして、小さく溜息を吐いた。彼女の方が数十倍年上だというのに、やっぱり見た目のせいなのかな。

チラチラとエヴァンジェリンさんを気にするネギ先生を追いやって、一階に下りる。時計を確認すると、九時になっていた。茶々丸さん、そろそろ帰ってくるだろうか。

お粥と薬を持って階段を上り始めてから気づく。なぜか二階が騒がしかった。

「……………ネギ先生」

「さ、桜咲さん！？」

上がってみると、どういうわけか杖を振り上げているネギ先生がいた。まさか、寝ているエヴァンジェリンさん相手に暴行を……？いや、そんな筈無い。改めて見るネギ先生の迂闊さとか不甲斐なさとかに混乱しているけれど、彼はそんなことをする少年じゃない………んですよね？

「どうしよう、不安になってきた……」

思わずぽつりと呟かれた言葉は、ネギ先生には聞こえなかったよう。慌てて杖を隠そうとする姿から見るに、私を魔法の関係者だとは思っていないらしいけど。修学旅行まで、何も知らないと思ってもらったほうがいいのかなあ。

「あ、あの、これは……！」

「ネギ先生、あまり騒がないでください。エヴァンジェリンさんは

病人ですから」

「あ、あう……」

小さなテーブルにお粥を置いて、エヴァンジェリンさんの様子を見う。

「サ、サウザンドマスター……やめ、ろ……」

「……」

ネギ先生の、父親の夢を見ているらしかった。ということは、ネギ先生はエヴァンジェリンさんの夢を覗こうとしたのか？自分の父親の情報が欲しくて。

「……エヴァンジェリンさん、起きてください」

「あ……！」

体を揺すって起こしにかかる、後ろでネギ先生が声をあげた。それは無視して、そのまま揺らし続ける。

ネギ先生には悪いが、今はエヴァンジェリンさんに朝食を食べさせることの方が優先だ。本当に知りたいのなら、ネギ先生が彼女に直接聞けば良い話なんだし……素直に教えてくれるかは、別として。

「……う……」

「エヴァンジェリンさん」

「……刹那か……なぜ、お前が……」

「茶々丸さんに頼まれて、貴方の看病をしていたんですよ。ほら、起きてご飯を食べてください」

「む、う……」

熱でボーっとするエヴァンジェリンさんの背を支えて体を起こす。

土鍋ごと持ってきたお粥を取り皿に移して、彼女と見比べる。ぼんやりとする彼女が、自力で食べられるとは思えない。

「エヴァンジェリンさん、口を開けてください」

「……あ？」

「あーんですよ、あーん」

「あー……ん？」

私の動作につられて開いた口に、そっとレンゲを差し込む。熱くは無いから、たぶん大丈夫だろうけど。

「ん、ぐ……」

「ゆっくり飲み込んでください。無理しないで良いですから」

「……んく」

「ほら、もう一度口を開けて……あーん」

「あー……ん」

喉も少し腫れているのか、エヴァンジェリンさんは時間をかけて少しずつお粥を飲み込んだ。何度か同じ動作を繰り返し、一杯目を食べ終えたところで首を振られた。少しでも食べてくれたし、十分か。

「それじゃ、次に薬です」

「う……」

「飲んでください」

「う……」

……熱は子どもを更に子どもにするんだっただろうか。薬と水を差しだすと嫌々と首を振るエヴァンジェリンさんを前に、本気でそう思った。

さて、どうしよう。薬を飲まないのは困るし、だからといって強引

に飲ませようとして飲んでくれるだろうか。

『んとなー……せっちゃんが、口移ししてくれたら、飲んでもええよ?』

不意に蘇った声。手の中の錠剤を眺めて、思い起こした声に知らず目を細めた。散々私を困らせて、本当にそうでないと飲んでくれないくて……翌日には治っていたから、よかったけれど。

人を困らせる一環でそういう行動を求めるんだから、お嬢様も人が悪い。それに最終的に応じてしまう私も、私だったけれど。

口に薬と水を含んで、そのまま口付ける。割と強引に流し込んで、口を離すと同時に彼女の口と鼻を塞いだ。

「んゝゝゝっ!!」

「飲まないで死にますよ」

「んんんんゝゝゝっ!!」

子どもから戻ったのかどうなのか、何やらくぐもった声で喚き散らして暴れる彼女を押さえつけて、様子を見る。諦めたのか涙目になって喉が動くのを見て、ゆっくりと手を離れた。

「つぶは!はっ、はああああ……」

「見せてください……飲んでますね。茶々丸さんが大学から薬を貰ってますから、そっちは素直に飲んでくださいよ?」

「殺すぞっ、貴様!」

騒ぐエヴァンジェリンさんを流しつつ、部屋を見回して首を傾げた。

「エヴァンジェリンさん、着替えはどこに仕舞ってますか?」

「あっ!?!……チッ。そのタンスだ。あと、水を寄越せ」

「はい」

尊大に言うエヴァンジェリンさんにコップを渡して、言われたタン
スを開ける。彼女が着ているのと同じような服を取り出して、ちび
ちびと水を飲む彼女に渡した。

「汗で濡れてますから、着替えてください。自分で動けますか？」

「それくらいは出来る」

「なら、私は薬とかを一度、一階に置いてきますから、その間に着
替えておいてください」

「ああ」

お盆に薬とお粥を乗せて立ち上がる。ところで、と振り返り、ぽか
んと口を開けて立つネギ先生に聞いた。

「ネギ先生は、何時までここにいるつもりですか？」

とりあえず彼女が着替えるので出て行って下さいと、強制的に一階
へと下した。

一階へと下りて、お盆を一先ずテーブルに置いたところで、鞆に入
れたままの携帯が振動していることに気づいた。学校に持っていく
ときはマナーモードにしていたから気づかなかったが、着信が二十
件を超えていて驚く。相手は、このちゃんと千雨さんと真名。一番
多いのはこのちゃん、半分がそうだ。

とにかく連絡しようとボタンを押そうとしたら、また携帯が振動し
た。千雨さんだった。

「もしもし」

『あ、おい刹那か。お前、今どこにいるんだよ?』

「エヴァンジェリンさんの家です。風邪をひいていて、今日は看病するから休みます」

『そうなのか? こっちはスゲー騒ぎになってるんだけど。あの子ども先生は来ないし、龍宮より先に出たお前がいらないから、何か事件に巻き込まれたんじゃないかってクラスの連中は騒ぐし、木乃香はずっと泣きながらお前に電話してるし』

「……すみません。あの、このちゃんに代わってもらえます?」

『ああ……おい、木乃香ー』

電話越しの喧騒の中に、千雨さんの声がこのちゃんを呼ぶ。まさかこんな騒ぎになってるなんて……本来なら騒ぎを収める筈のネギ先生がここに居るのも、問題かな。

『せっちゃん!? 今どこにおるん?』

「エヴァンジェリンさんの家だよ、このちゃん。風邪をひいて、エヴァンジェリンさんが今家に一人だから、看病してたんだけど……連絡、出来なくてごめんね」

『ほんとや! ぜ、全然、連絡つかへんからっ、またせっちゃん、あぶなっ、ことしてる、思っ……ふえええん……』

「心配かけてごめんね。大丈夫だから……ね?」

『う、ん。うんっ……』

話しながらまた泣き出してしまったこのちゃんに、胸が痛む。早々に連絡するべきだった。そうすれば、このちゃんがこんなに泣くことも無かつたんだから。

電話越しでどうにかこのちゃんを宥めて、もう一度、千雨さんと代わってもらおう。

『つたく。で、どうすんだよ。まだ騒ぎっぱなしなんだけど』

「ネギ先生をすぐに向かわせます。エヴァンジェリンさんの様子を見に、こっちに来てたので」

『はあ？もう十時過ぎてるぜ？何やってんだよ……』

「とにかく、もう少ししたら行くって……委員長に伝えてくれませんか？そうしたら、少しは収まるでしょうから」

『りょーかい。はあ、やれやれだったの……』

「すみません……」

『そう思うなら、次はちゃんと連絡しろよ？木乃香がこんな泣くなんて、よっぽどだろ』

「ええ、そうします」

千雨さんの言葉に心の底から頷いて、電話を切った。茶々丸さんが来たら、私もやっぱり学校に行こうかな。でも、重症のエヴァンジェリンさんを茶々丸さん一人に任せてしまうのは忍びないし……どうしよう。

とりあえず、早急に行動するべきこととして、ネギ先生に向き直った。

「ネギ先生」

「は、はい？」

「早く学校に行ってください。ネギ先生が来ないと、クラスで騒ぎになってます」

「えっ、えええ！？」

過剰なほどの驚いて、ネギ先生はバツと時計を見上げた。十時を回り、もうすぐ十時半になる。

「う、うわわわっ、どうしよう！大変だ！！」

「早く行ってください。それと、エヴァンジェリンさんと茶々丸さ

んは欠席です。私も……行けそうなら行きますが、たぶん休みます」
「えっと、あう、はい。そ、それじゃ……!!」

ぐいぐいとネギ先生を玄関へと押して行きながら伝えることを伝えて、見送る。何度か振り向いてはいたが戻っては来ないので、扉を閉めてその扉に背中を預け、ズルズルと座り込んだ。

「はぁあ……」

深く深く、溜息。このちゃんにも、千雨さんにも、あとおそらくは真名にも、心配をかけてしまった。

膝を抱えて自己嫌悪に陥る。何だか、自分が間違ったことをしているんじゃないかと、思ってしまう。

このちゃんが死なない未来を目指して、それで動き始めたけれど。結局、このちゃんを泣かせてしまった。図書館島といい、今回といい……私は、失敗してばかりだ。もしかして私は、手を出さない方が良かったんだろうか。昔の私と同じように、今はまだ、見守るべきだったんだろうか。

分らない。そもそも、今私がしていることで、本当に未来が変わるのだろうか。仮契約をさせず、このちゃんが望む世界で生きられるように長たちにも話をして、何かが変わるんだろうか。

このちゃんに心配をかけて、泣かせて、本当にこのちゃんは幸せになれるんだろうか。

「――何を悩む。刹那」

「ツエヴァンジェリンさん……」

階段の途中に立つエヴァンジェリンさんが、私を見下ろしていた。ゆっくりと下りてくる彼女を視線だけで追って、駄目ですよと声をかける。

「まだ寝てないと……」

「平気だ。それよりも、そんな所でいったい、何に悩んでいる？」

「……悩んでなんか、いませんよ。私の事より、とにかくベッドに――」

「お前の事だ。どうせ、自分が間違っているんじゃないかとも、考えていたんだろう」

「ッ……」

面白いくらいにピタリと言い当てられて、言葉も無い。はんつとエヴァンジェリンさんが馬鹿にするように笑って、腕を組み私の前に立った。

「近衛木乃香は、随分と泣いているようだったな」

「なんで、分かるんですか……」

「電話越しでも十分聞こえるくらいに騒がしかったからな。ましてや、泣き声なんてすぐにわかる」

「……………私は、本当にこれでよかったんでしょうか」

抱え込んだ膝に額を乗せて、目を閉じる。暗闇は心地よさも何も与えてくれなくて、私の中ではぐちゃぐちゃの感情が入り混じり続ける。

「このちゃんと元の関係に戻ってから、私は二回もこのちゃんを、私のせいで泣かせてしまって……このちゃんが、あんな風に泣くこと、滅多に無いのに」

散々、心配をかけて、泣かせて。このちゃんは、強い人だから……心がとても強くて、ちよつとやそつとじゃ、折れたりしないのに。あんなに、泣かせてしまった。私は、あんな風に泣くこのちゃんを、

殆ど見たことが無い。未来でも、このちゃんはあんなに泣いたり、しなかったから。

それを、戻って来てからの私は、二度も泣かせてしまった。私が、関わったせいで。

「本当なら、私はまだこのちゃんに関わらない筈だった。影からこのちゃんを見守るだけで良かった。それなのに、私は——」

このちゃんを見た瞬間、手を取ってしまった。一度失った手を取り戻して、自分からまた離すなんて、出来なくて。それならこのちゃんの隣に立って、このちゃんを護ろうと。今度こそ、死なない未来を得ようと、そう思っ。なのに、その結果がこれだ。

「私がいなければ、このちゃんは泣かずにすんだ！図書館島で、飛び出して残った私に泣き叫ぶことも無かった！！今日、連絡がつかない私に心配して泣くことも無かった！！！」

全部全部全部、私がいなければよかったこと。昔のように、あまり深く関わらずにいればよかったことなのに。どうして私は、それが出来なかった。

「泣かせたくなんて無かった！！笑っていてほしかった！！このちゃんに——このちゃんに幸せになっ。てほしくて、私は別の未来を選ぶ決意をしたのに！！！！どうしてこのちゃんをこんなにも泣かせてしまった！？」

私はまた、間違えてしまったのかもしれない。

「——刹那」

静かに、何も言わずにただ、私の言葉を聞いていたエヴァンジェリンさんが、私を呼んだ。

目を開けて暗闇から戻り、ゆっくりと顔をあげる。私の目の前に膝をついた彼女と目が合い、瞬間、パシンッと音が響いた。

「エヴァン、ジェリンさん……」

左頬が熱い。ヒリヒリとした痛み、衝撃でずれた視界を前に戻せば、怒った表情のエヴァンジェリンさんが、変わらずそこにいた。

「お前は、馬鹿だ」

「え………?」

「馬鹿だと言ったんだ。お前は」

叩かれた頬に、手が伸ばされ、優しく撫でられる。怒った顔をしているのに、その手は慈愛に満ちていて、その言葉も何も分からなくて、私はその瞳を見つめるしかない。

「刹那。全く同じ人生なんて、絶対に無い」

「なに、を……」

「過去のお前の行動を、お前がそのまま真似をしたとして。確かにそれは、同じ人生を辿っているように見えるかもしれん。けどな、そう見えるだけで、違うんだよ」

「ちがう、って……」

「お前だよ、刹那」

エヴァンジェリンさんの言葉に、首を傾げる。私が、違う?

「近衛木乃香を見守るお前が、どう思うのか。たとえ行動を真似しても、お前の中身までは同じじゃない。過去のお前と、今のお前。」

思うことは、違うだろう。現にお前は、近衛木乃香を見て我慢できなかった。見守り続けるという選択を、選べなかっただろう？」

「で、も……それが、まちが、って……」

「はあ……お前は、間違わずに生きていけると、本当に思っているのか？」

「そうじゃ、なくて……私は、間違えてはいけないんです……」

たった一つの間違いのせいで、このちゃんは死んでしまった。もう二度と、同じ間違いは許されない。絶対に。

「このちゃんが、死なない未来を……私は、このちゃんを今度こそ護ると、誓ったんです」

「……ああ。そう誓うのは悪いことじゃない。ならなおの事だ、刹那——間違いを恐れるな」

エヴァンジェリンさんは、そう私に言って、言葉を続ける。

「人は間違えることで何かを学び、成長する。護りたいなら、間違いを恐れて立ち止まるな。進み続ける。そうして間違えたなら、それを飲み込んで、踏み潰して、また進め。今のお前は、犯した間違いに怯えて、ただ震えている馬鹿な奴だ」

このちゃんを泣かせてしまったと、怯えて。そうして、動けなくなつて。終いには全てを間違えてしまったと、思つて。

ああ、なるほど。確かにエヴァンジェリンさんの言うとおり、私はただ怯えて、震えているだけだ。

また泣かせてしまうかもしれない、間違えてしまうかもしれない。過去の末に辿り着いたこのちゃんの死という未来に、また辿り着いてしまうかもしれない。全てに、怯えている。

「間違えない人生なんて無い。全く同じ人生なんて無い。全く同じ未来なんて無い。お前が過去に戻ったという時点で、未来はもうお前の知るものとは別の方向に向かってるんだよ」

「……たった、それだけのことでですか？」

「十分だろう。お前はお前が生きた分だけ、間違えを犯して、成長している。その結果お前は、近衛木乃香と仲直りをしている。長谷川千雨を捨て置けず、暇を見て話し相手になっている。私や茶々丸と、共に学校に行っている。過去のお前と、どれだけ違うんだ？」

「……全然、違います。このちゃんとはまだ、話すことなんてできなくて。長谷川さんだって、話したことも無くて。エヴァンジェリンさんや茶々丸さんを、このちゃんを傷つけるんじゃないかって警戒してて……全然、違いますよ」

「当たり前だ。私はお前に興味を持ち、呼び出した。過去に戻ったというお前の気配が、変わっていたからだ。そうでなければ、私は今の時点で、お前にそれほど興味を持っていないかもしれない」

「そうかも、しれませんね……」

くつりと喉を鳴らして言った彼女に、思わず苦笑いした。確かに、昔の彼女は私に、どれだけの興味を抱いていたのだろう。昔の私は、こうして彼女の家にお邪魔する私を、想像できただろうか。

「……お前は、少しだけ変わった知識を持った奴だ。ただ、それだけだ。神でも何でもない。知らないことを、間違えることを恐れるな。お前が進む限り、私の目の前にいる桜咲刹那の未来は、変わり続ける」

「……はい」

小さく、頷いて。ゆっくりと離れていく彼女の手を追った先で、その瞳と合った。

「過去のお前じゃない。今のお前を生きる。刹那」

それは、まるで母親のような。そんな瞳だった。

「――ありがとうございます、エヴァンジェリンさん」

未来はもう、変わり始めているのなら。私は、歩き続けよう。
犯した間違いを忘れずに、それを踏み越えて、誓いを胸に飛び続けよう。

看病をした日（後書き）

いつになく刹那がテンパってましたが、おかしい部分などありましたら見逃してくれると助かります……。。

約束をした日

あれから、葉を貰って帰ってきた茶々丸さんにエヴァンジェリンさんの事を任せて、私は昼から学校に行くことにした。心配をかけたこのちゃんに、きちんと会って安心させたいし……でも、今の状態で魔法について話したら、このちゃんはどんな反応をするんだろう。なんだか、余計に心配をかけてしまう気がする。

「……………」

クラスの扉の前に、違和感に立ち止まり首を傾げる。今は昼休みで、廊下にも人が溢れて騒がしいのに、なぜかうちのクラスだけやけに静かだ。

緊張に汗が滲む。よし、と意気込んで、それでも静かにゆっくりと、扉を開けた。

「……………」

なぜか、クラスの人たち全員がぐったりしていた。教室にこれ以上入るのに躊躇を覚えるが、中に入り扉を閉める。音に気付いた一人がむくりと顔を起こし、私に気づいた。

「あ、桜咲さん」

「せっちゃん!？」

バシッと弾かれるように飛んできたのは、案の定このちゃんで。全身でぶつかってくるこのちゃんを受け止めて、どうしようかなと悩

んだ末に笑った。

「このちゃん、おはよう」

「おはよっ、せっちゃん！うう…せっちゃんやあ……」

「心配かけてごめんね。エヴァンジェリンさん、思ったよりも具合悪かったみたいで、どたばたしちゃって」

「ええよ、もう……でも、また同じことしたら、許さへんからね？」

言い訳がましいな、と思ったけれど。このちゃんはギュウツとしがみ付いたままでもとりあえずは許してくれた。相変わらず、優しいこのちゃん。

「にしても……このちゃん、何かあったの？やけに静かだけど……」

「あー、それはなあ……」

「騒ぎ過ぎて新田先生にぶちぎれられたんだよ」

バシッと頭を叩かれて、降ってきた声に顔をあげると千雨さんがいた。はあ、と溜息を吐いて顔を背けられる。

「あんま心配させんな」

「はい……すみませんでした、千雨さん」

千雨さんにも、随分と心配と迷惑をかけた。抱き着いたままのこのちゃんの背中を撫でつつ、今度お礼をしようとも思う。このちゃんにも、何かお詫びしよう……何がいいかな。

「……あ、桜咲さん……えっと……」

教壇にてこれまたぐったりしていたネギ先生が、戸惑いつながらも近づいて来た。彼も新田先生に怒られたんだろうか……新田先生は、

良い先生だけれど、怒ると怖い。すごく怖い。

「エ、エヴァンジェリンさんの具合は……」

「少しは良くなったみたいです。今は、茶々丸さんが看病してますから……二、三日中には治ると思いますけど」

「そうですか……」

ふらふらと教壇へと戻っていくネギ先生。依然、私たち以外は誰一人と動かないけれど……明日には、治ってるかな？

「このちゃん、お昼は？」

「まだ……」

「一緒に食べよ？」

「うん」

「私も一緒にいいか？……っつか、食べるなら他行こうぜ」

「そうしましょうか……」

此処で食べるのは、さすがに厳しいものがある。

放課後、千雨さんとこのちゃんにお詫びとしてケーキを焼いてみました。私が作れることに驚いていましたけれど……喜んでくれたようでした。その後は、真名にもあんみつを作って食べてもらいましたが、好評でした。三人にまた作るよう言われたんですが、今度は何を作ろうかな。

翌日、私は少し早めに寮を出た。理由は簡単で、このちゃんに散歩

に行こうと誘われたからだった。

前に、エヴァンジェリンさんと一緒に学校に行ったときに、誤魔化すために散歩という言葉を使ったが、その時にこのちゃんと今度一緒に行く約束をしていた。その約束を果たそうということだ。

「おはよ、せつちゃん」

「おはよう、このちゃん」

寮の前で合流して、歩き出す。とりあえず学校に向かいながら、のんびりと。

「いい天気やね」

「そうだねえ」

日差しが暖かい。他愛も無い話をしながら、まだ静かな道を進む。

「そういえば、ネギ先生のペットは元気ですか？」

「ああ、カモ君のことやね？んー、最近は明日菜に懐いてるみたいや。よく一緒にいるえ」

「このちゃんには？」

「うちはあんまりやなあ。ちょっと寂しいんよ」

「そう……」

明日菜さんに、というのはちょっと気になるけれど……このちゃんの方には、まだあまり関わっていないみたいか。安心は出来ないけれど。

「今日は停電の日やし、カモ君恐がらんとええけどなあ」

「大丈夫ですよ、たぶん」

「せやな」

停電、か。そういえば、昔はどういうわけか学園結界の効果が切れて、侵入してくる魔物の一掃に駆り出されたんだっけ。原因については結局、教えてもらえていなかったけれど……寮には、結界を張っておいた方がいいかもしれない。

「なあ、せつちゃん」

「ん……なに？このちゃん」

「聞いても、ええんかな？」

少しだけ私の前を歩くこのちゃんの顔は見えなくて、静かに聞かれた声に疑問を抱きつつ、私は何をと小さく返した。

「せつちゃんは、何からうちを護ってくれてるんや？」

「……このちゃん、それは……」

「言えへんこと？」

「……ごめんね」

「そか……」

何から、このちゃんを脅かす危険から。このちゃんを殺す、魔法から。

言えたらどれだけ楽になるんだろう。その存在を知るだけで、このちゃんの周りにある見えない脅威が、見える様になるのに。

長の願いと、私の迷いが、言葉を詰まらせる。間違いを飲み込んで、踏み潰して、進めばいいのに。未だに私は、間違いを犯すことに怯えている。長の言葉を、意向をと言いついて、誤魔化している。

「なら、これだけは教えて」

立ち止まり、このちゃんが振り向いた。じっと私の瞳を見つめて、

逃がさない様にして。

「図書館島で、飛び出したのは——うちの、護衛やったから？」

「……………どうして、そんなことを聞くの？」

「せつちゃんが、うちのせいで危ないことをするのは、嫌やから」
「そう」

私がこのちゃんの護衛だったから、飛び出した。それは確かにある。
でも、それが全てなのかと言われたら

「違うよ」

私は、そう答える。

「確かに、私はこのちゃんの護衛だけど、それだけじゃない。この
ちゃんの為だけに、飛び出したわけじゃない」

「なら、何のため？」

「自分の為」

私の答えに、否を唱える人もいると思う。でも、私は全てをこのち
ゃんの為だったと、言い切ることが出来ない。私はあの時、自分の
為に飛び出した。

「このちゃんは、私にとって大切な友達だから。絶対に護りたいっ
て、思ったから。このちゃんを傷つけさせたくないって、私がそう
思ったから、私は飛び出ただけだよ」

「……………うちが嫌や言うても、聞いてくれへんの？」

「うん、ごめんね。このちゃんが止めても……私は、行くよ」

「どうして、どうしてそこまでするん？そんなにしてうちを護りた
いって、なんでなん？うちに、何があるの？せつちゃんが危ない目

にあつてまで護る価値、うちにあるいの？」

このちゃんの顔が、今にも泣き出しそうに歪む。私はまた、このちゃんを泣かせてしまうのかもしれない。

そつと手を伸ばして、抱き寄せる。背中に手を回して、強く強く、抱きしめた。

「そうじゃないんだよ、このちゃん」

ただ私の想いを伝えるために。

「私がこのちゃんを護るのは、このちゃんが私の友達だから。ただ、それだけ」

「友達、やから……？」

「うん。今は、言えないけど……いろんなこと、いつか絶対に話すから。心配させると思うけど……まだこのまま、このちゃんを護らせて？」

「……止めても聞かない、さっき言うてたやん。言っても、勝手にするんやろ？」

「うん」

「なら、約束してや」

抱き着いたままでこのちゃんは、絞り出すように言葉を紡ぐ。

「いつかうちに、いろんなことを教えて。せつちゃんが、何からうちを護りたいのか、教えて」

「うん」

「それから——絶対に、帰ってきて」

「……………うん」

帰って来るよ、絶対。このちゃんのために、帰ってくるから。

何も知らないこのちゃんには、たくさんの心配をかけると思うけど。何かを知ったこのちゃんにも、やっぱり心配はかけると思うけど。

絶対に、帰ってくるから。泣かないで、このちゃん。

白髪赤目の日

エヴァンジェリンさんが学校に来ていた。風邪はもう大丈夫らしく、いつも通り尊大な態度だったから、安心する。

今日が停電の日ということもあって、売店でロウソクやかんばんが安売りされていた。一応、私と真名の分も買っておくことにするが……使う暇があるのだろうか。

「停電中は部屋からも出たらあかんもんなく。退屈やあ」

「暗くて危ないからね。見回りの先生に見つかったら怒られるし」

このちゃんの部屋でそんな話をして時間を潰す。時刻は午後五時、停電は八時からだからあと三時間か。

「このちゃん、ごめん。今日、これからエヴァンジェリンさんと約束があるから、もう行くね」

「そうなんか？んー、しゃあないなあ……うちもちーちゃんどこ遊びに行つてこよー」

「そういえば、千雨さんの同室ってハカセさんだけど、研究所に泊まるのかな？」

「かもなあ。どっちやろうね？」

ちなみに、エヴァンジェリンさんとの約束は本当だ。このちゃんと話しながら、念話で六時にエヴァンジェリンさんの家に来るように言われている。

階段のところでこのちゃんと別れて、寮の外へ。けれどまだ彼女の家には向かわず、先に一仕事してしまうことにする。

女子寮を囲む結界を張る為に、目立たない場所にお札を張っていく。

後は気を籠めて発動させて、これで完成。

「それと……」

式神を放ち、このちゃんと千雨さんを見張らせる。お守りを持ってもらっているけれど、念のためだ。多少の攻撃力はあるから、式神を盾に時間を稼ぐくらいは出来るし。

これで、仕事に行くことになったとしても女子寮はある程度安全だろう。私は、それからエヴァンジェリンさんの家に向かって走り出した。

からんころんと呼び鈴を鳴らして、ついでに二度ほどノックもする。

「来たか。入れ」

「……？ お邪魔します」

中から聞こえたのはエヴァンジェリンさんの声だった。普段なら、茶々丸さんが扉を開けてくれるんだが、何かあったんだろうか。扉を開けて中に入ると、エヴァンジェリンさんがソファーに悠々と座っていた。なぜかとても上機嫌に唇に笑みを浮かべて、手招きしている。

「こっちに来い」

「……はあ……」

戸惑いつつも、指示に従って彼女の元へ歩いていく。茶々丸さんの姿は無いが、どこかへ出かけているのかもしれない。

そうして私が一步、また一步とエヴァンジェリンさんに近づいて行

った時、それは起こった。

「――ッ!？」

足元に突然、出現したそれは、魔法陣。例えるならネギ先生が仮契約をする際に敷かれる魔法陣に似ているが、それにしても何だか違う感じがするからたぶん別物。

「エ、エヴァンジェリンさんっ!これ、は……?」

「くくくつ、なに。案ずることは無い。お前をもとに戻すだけだ」

「もと、に……っ?」

体の中で這い回る気持ちの悪い感触に呻きながら、言葉を紡いだら、エヴァンジェリンさんはそう笑って私に近づき、魔法陣の前に立った。

「まあ、そのまま待て。もう終わる」

最後に一際大きく、何かが私の中を這い回るのを感じて、膝をつく。魔法陣の光が消え、気持ち悪さに俯いた私の視界に、さらりと垂れた一房の髪。白い髪だった。

「え………?」

認識した途端に、凍りつく。ぐしゃりと髪を押さえて、何だか窮屈な制服に違和感を感じて、辺りを見回す。

すぐ横にあった鏡に映る私の姿に、呆然と目を見開いた。

「これ、は……」

「お前の本来の姿だ。中身の年齢に合わせて、少しばかり体の方も

成長させたがな」

「えっ……えっ？」

混乱する頭にエヴァンジェリンさんからの解説なんて、余計な混乱を齎すだけで。

ただ、鏡に映った私の姿には見覚えがあった。

「まさか、もとに戻すって……」

「お前の記憶で言う、数十年後のお前か。記憶から読み取って成長させた。髪の方は、本来の色はそっちだろう？　なかなか綺麗じゃないか」

「どうも……って、いや、そうじゃなくて……」

褒められてお礼を言っている場合じゃない。両手で頭を抱えて考えた。こんな姿、誰かに見られるわけにいかない。それにエヴァンジェリンさんは、何のためにこんなことをした？　いったい何を企んでいる？

疑問は尽きず、言葉も発せずその波に吞まれた私の上に、ぱさりと何かがかけられた。

「それに着替えろ。今夜は、付き合ってもらおうぞ」

「……何にですか？」

「着替えたら説明してやる」

不満と戸惑いはあるものの、言われたままに着替える。窮屈な制服のままにいるのは嫌だった。

そうして着させられたのはなぜかタキシード。いつもメイド服を着ている茶々丸さんの対のつもりですか。私は貴方の従者になったつもりはないんですけど。

「で、何に付き合えというんですか？」

「そう睨むな。似合っているぞ？」

「……そうですか」

どこまでも自分中心な人だ。何だか、色々と諦めてしまいそうになる。

「今夜、学園がメンテナンスの為に停電となるのは知っているな？」

「それは知ってますけど……」

「それに乗じて、あの坊やと決着をつけてやろうと思ってな。お前には、それに付き合ってもらおう」

「……それ、は……」

止めるべき、なんだろうか。弱体化しているとはいえ、そのエヴァンジェリンさんにネギ先生は一度、負けているわけだし。いや、でも先日、果たし状だとかを持ってやって来てるし……合意の上？というよりも、それ以前にどうして私が付き合わなければならないんだろう。私は、全く関係が無いのに。

「……このちゃんに心配は、かけたくありません」

「別にお前に戦わせたりはしないさ。ただ、そこにいればいい」

「………実は、学園長から、貴方とネギ先生の問題には手を出すなと……」

「誰も今のお前を桜咲刹那だとは思わんだろうよ。それで羽根を出してみろ、完璧だ」

「確かに、私がハーフだとは長や師匠以外知りませんけど……」

でも、だからといって、これは……。

「どうして、私が付き合わなければならいんですか？」

「私がお前を気に入ったからだな」

「……ちなみに、魔法が切れるのはいつですか？」

「明日の朝には戻る」

つまり朝まで寮にも帰れない、と。そしてエヴァンジェリンさんの事だから、引っ張ってでも連れて行かれそうだ。

あれ、もしかして私、逃げ場なくなってるんじゃない……どうしよう。

電力によって学園に張られている結界を無効化し、本来の力を取り戻しネギ先生と決着をつける。というのが、エヴァンジェリンさんのやろうとしていることだ。

目当てはネギ先生の血液だという。それで本当に登校地獄の呪いが解けるのかどうかは知らないけれど。あとこの前、茶々丸さんを傷つけようとした報いは受けてもらうと言っていた。……ネギ先生、死ななければいいけど。危ない様だったら止めに入ろう…。

「――時間だ」

停電が始まった。塔の上でその景色を眺め、同様に麻帆良の街を見下ろすエヴァンジェリンさんの表情は、歓喜に染まっている。

雲に隠れた月が姿を見せた頃、幼い子どもの姿は無く、綺麗な女性がそこにいた。

「凄い魔力ですね……」

「これが本来の私の力だ。さて、下に降りて坊やを待つとするか」

「あ、はい」

塔から飛び降り移動するエヴァンジェリンさんを追って、私も翼を

広げる。

白い髪、赤い瞳、伸ばされた髪、成長した体、白い翼。それが今の私の姿だった。

「…………エヴァンジェリンさん」

ネギ先生を待ち構える場所としてやってきた大浴場で見た光景に、私は半眼になってエヴァンジェリンさんを見る。彼女はなんだ、と心外とばかりに見返してきたけれど、私がこうなるのも仕方が無いと思う。

「最初の一人だけで終わらず、またクラスメイトを餌食にするのは……さすがに、どうかと思うんですが」

「心配するな、坊や相手にちょっと働いてもらうだけだ」

「……怪我は絶対にさせないようにしてくださいね」

「坊や次第だな」

聞く耳持たずとは、このことなんだろうか。そう思う。

それから、やけに重装備のネギ先生が現れた。エヴァンジェリンさんを見て開口一番に誰ですかと問うのには、思わず苦笑する。やはり、こうも変わると分らないんだろう。彼女も早々に幻術を解いていた……やっぱり、幻術だったんですね。

「——さあ、行け」

その合図で、大河内さんたちが飛び降りてネギ先生に向かっていく。そういえばネギ先生、エヴァンジェリンさんの隣にいる私には無反応だったけれど、それどころじゃなかったということだろうか。正直、いないものとされた方が楽なので、私としては好都合だけだ。

「あう、うううっつやめてください！ 風花・武装解除！！」

魔法薬を使った無詠唱呪文で、大河内さんと和泉さんの服が吹き飛ば。次いで唱えられた魔法で眠らされた二人に、エヴァンジェリンさんが本格的に仕掛けはじめた。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

「失礼します、ネギ先生」

魔法を唱え始めた彼女の守護に、茶々丸さんが前に出る。

私はというと静かにその場を飛び立ち、眠らされた大河内さんたちの回収に向かった。

「氷の精霊17頭 集い来りて敵を切り裂け」

茶々丸さんたちに追いついて立てられたネギ先生の背後には大きなガラス窓。

エヴァンジェリンさんの魔法が発動する前に二人を抱えて飛び立ち、天井すれすれで眼下の光景を眺めた。

「魔法の射手 連弾・氷の17矢！！」

「うあっ」

ガラスが割れて外に落ちるネギ先生。それを氷の矢が方向を変えて追いかける。

エヴァンジェリンさんたちが割れたガラス窓から飛び出していくと、下に降りて抱えていた二人を床に寝かせる。眠っているだけだし、いずれ目覚めるだろう。

「にしても……」

一人で大丈夫なんだろうか、ネギ先生。エヴァンジェリンさんには茶々丸さん以外にも従者がいるから、圧倒的に不利だろうけど。割れた窓のところに立って見下ろす。停電中だから、魔法の光がよく分かった。それを目指して飛び立ち、ネギ先生を追うエヴァンジェリンさんと茶々丸さんに追いついた。

「ネギ先生は、どうですか？」

「今は佐々木まき絵と明石裕奈の相手をしているよ。一人でどこまでやれるか、楽しみだな」

心底楽しそうにエヴァンジェリンさんが言う。ネギ先生一人でどう出てくるのかは分からないが、上手く全てが終わってくれればいい……。

けれど不意に思い出す。ネギ先生は、明日菜さんと仮契約していた筈だけれど……どうして今、いないんだろう。どこかに隠れているわけでは無さそうだし。ネギ先生は、明日菜さんを連れてきていないのか？

「……………それが、正しいのかもしれないな」

昔の明日菜さんと、今の明日菜さんは違うから……………でも、本当にどうするのが一番いいんだろう。明日菜さんの事情を考えるなら、ネギ先生に関わってもよかったという事なのか？けれど、それで明日菜さんが危険な目に合い続けたのも確かだし……………。

「刹那。余計な事を考えるなよ」

「エヴァンジェリンさん……」

「確かにお前は私たちも知らない事を知っているが、そればかりに

囚われて今を見失うなよ。どうにもお前は、それに縛られ過ぎている」

「それは、そうですよ。私にとっては大事な記憶ですから」

「別に全く気にするなどは言わん。ただ、本当に必要な時だけ頼ればいい。常にその記憶から考えて動いていたら、まともに立つことも叶わなくなるぞ」

「……………はい」

結局答えは、出ないまま。私はエヴァンジェリンさんの言葉に、頷き返した。

停電が終わるまで、あと一時間弱……私は、どうすればいいんだろう。

一つの事件が終わった日

佐々木さんと明石さんを倒して、あとはエヴァンジェリンさんと茶々丸さんだけか。こうして見ると、ネギ先生結構強い……エヴァンジェリンさんも、だいぶ手を抜いているようではあるけれど。

「氷爆」

「う、うわあああ!？」

でも時々、本気で危ない時があるんだが……茶々丸さんの事、やっぱり怒っているんだろうな。頑張れ、ネギ先生。巻き込まれないように、私は三人のだいぶ上を飛んで、様子を見ることに徹する。やがてネギ先生は追い詰められて、橋の上。杖からも落とされて、倒れたまま起きない。これで決着がつくんだろうか。

エヴァンジェリンさんも決着がつくと思ったんだろう、ネギ先生に近づいて行って——ネギ先生の仕掛けた、捕縛結界に捕まった。私の使う捕縛結界と違った、西洋の結界か。

流石に予想しなかったらしいエヴァンジェリンさんが、無邪気に喜ぶネギ先生に感心しているけれど、すぐにおかしそうに笑いだした。

「本来ならここで貴様の勝ちだろうが、残念だったな。茶々丸!」

「はい、マスター。結界解除プログラム始動……解除します」

パキッピキッと音をたてて、エヴァンジェリンさんたちを縛る魔法が壊れる。茶々丸さん、すごい……。

「西洋の結界なら、このとおりさ。まあ、東洋の結界には時間が必要だったがな……」

チラリとエヴァンジェリンさんが上に視線を向けて、私と目が合った。なるほど、それで私と戦ったときは茶々丸さんは動けなかったのか。こっちにまで対応していなくてよかった。

これで逆転した形勢はまた逆転して、ネギ先生のピンチは変わらず、か。エヴァンジェリンさんが投げた杖は、私が湖に落ちる前に受け止めてその辺に置いておいた。湖に落ちるよりは見つけやすいと思う。

「さて、血を吸わせてもらおうか……」

ネギ先生が泣いて、エヴァンジェリンさんが怒って。勝負がついたなら敗者が何をされても文句言えない世界だから、助けるつもりも無い。エヴァンジェリンさんがネギ先生を殺したりは、しないと思うし。

「コラーツ、待ちなさい!!」

「ふん、来たか。坊やのパートナー、神楽坂明日菜」

橋を駆けてくる人影、明日菜さん。寮にいたところを、カモさんが連れてきたのか。彼女がネギ先生と組んで戦うというなら、また状況は変わってくるんだろうけど。

それを、止めるべきなのかどうか、分からない。

「オコジョフラッシュ!!」

カモさんが囷となって、明日菜さんは茶々丸さんを擦り抜けてエヴァンジェリンさんを蹴り飛ばす。そのまま、ネギ先生を連れて物陰に隠れた。エヴァンジェリンさんは、二人を見失ったようだけれど……少しだけ、明日菜さんたちの様子を見ようと、近づいた。

「明日菜さん、ごめんなさい……僕、明日菜さんに迷惑かけないようにつて、一人で頑張ったのに……駄目でした」

「馬鹿。無理しちゃって……」

涙ぐむネギ先生に、明日菜さんは笑って返す。弟を見る姉のよう、そんな風に思えた。

エヴァンジェリンさんに勝たなきゃというネギ先生に、カモさんがそそくさと二人の周りに陣を書く。あれつて、まさか仮契約か？二人は既に仮契約している筈じゃ……。

「前回みたいなおでこにチューじゃ駄目ですぜ！姐さん、お願いします！！」

「う、うん」

「えっ…えっ…？」

カモさんの言葉通りなら、今の二人に結ばれた仮契約は正式なものじゃない。それなら、まだ明日菜さんは……戻れるかも、しれない？分からないけれど、きちんと結んでしまったら、後戻りできなくなる。

「いいんだろうか……」

今の明日菜さんは、何も知らない。そのまま巻き込まれて、今までの平穩を捨てることになっても、いいんだろうか。

気づかぬうちに犯した間違いが、とてつもなく大きな間違いとなることも、ある。

「——待ってください」

そう思ったら、私は彼らの元に降り立っていた。

「えっ、だ、誰!？」

「貴方は……エヴァンジェリンさんと一緒にいた!？」

「嘘、それじゃあ……敵なの？」

「違います」

敵ではない、そうは言っても当たり前だけれど警戒するのを止めることは出来ない。けれど、別に警戒されてもいい。言葉を聞いてくれさえすれば。

「仮契約を結んだなら、平穏な日常に戻るのはとても難しくなります。戻れないかもしれません。それでも、いいんですか？」

「どういう意味よ……」

「魔法の世界はとても危険なんです。命のやり取りをする世界です。貴方は、今の平穏を捨てて、その危険な世界に飛び込む覚悟が本当にありますか？」

「っそれは……」

「君もです、少年」

明日菜さんが言葉に詰まり、ネギ先生が驚き身を竦ませる。明日菜さんだけでは無い、ネギ先生も、知っていた方が良いこと。

「誰かをパートナーにすることは、その人を巻き込むこと。エヴァンジェリンさんのような人との戦いに、危険に、巻き込むことになるんです。覚悟は、ありますか？」

「覚悟、ですか……？」

「隣に立つその人を護り抜く覚悟」

「!!」

言ってから、心の裏側で自嘲する。護り抜く覚悟、どの口がそんな

言葉を言えるのか。

護ると決めたくせに、私は未だ逃げている。このちゃんにすべてを話すことから、逃げているのに。どうして偉そうなことが言えるのか。

「平穏を捨てて着いていく覚悟、巻き込んでしまったその人を護り抜く覚悟。貴方たちには、ありますか？」

けれど放っておけなかった。何も知らずに、平穏を捨てることになったら。何も知らずに、相手を巻き込んでしまうことになったら。気づいた時には全てが遅かった、取り返しがつかなかった。そんな思いを、二人にはしてほしくなかった。

「覚悟が無いなら、何もせず、このまま引いてください」

「でっ、でも、エヴァンジェリンさんが！」

「彼女にも引いてもらいます。そうして、もう彼女に手を出さないでください。覚悟も無しに、魔法に関わったら——死んでしましますから」

今の私に出来るのは、言えるのは、これだけ。いいのかどうかも、分からない。

エヴァンジェリンさんの言うとおりだ。私は神では無い、ただ少しだけ人が知らないことを知っているだけで。けれどそれすらも、日々変わる今を前にすれば曖昧なもので。

結局、私は悪戯に彼女たちの前に壁として現れただけで、全てを彼女たちに任せてる。任せた今も、不安で仕方が無い。私の知る二人が、消えてしまうんじゃないかと、不安になる。

「僕、は……」

さあ、どうしますか。ネギ先生？

「……っ僕は、エヴァンジェリンさんと戦います!!」

叫ぶようにして、ネギ先生はそう答えた。けれどそれで終わらず、でもと続けて、明日菜さんを見る。

「仮契約は、しません」

「ちよっ、アニキ!? どうしてだよ!!」

「……考えたんだ。僕に、明日菜さんを護る力があるのか……護りたい気持ちはある。でも、護り抜く自信が……無い」

「ネギ……」

「でも、だからってエヴァンジェリンさんを放っておくことも出来ません。彼女は僕の生徒だし……父さんのことで、聞きたいことだってあるんだから」

「そうですか……なら、戦うことを私は止めません」

ネギ先生は、強い。逃げ道を前にしても、覚悟を持って前に進む選択をした。

「ちよっ、待ちなさいよ!」

意を決して足を踏み出そうとしたネギ先生の腕を、明日菜さんが掴み止める。困り、悩み、戸惑う感情が複雑に混ざり合って、瞳が揺れていた。

「仮契約とか、それをしないで……エヴァちゃんたちに、勝てるの?」

「……分からないです。でも、このまま逃げたら……僕は、一生父さんに会えない気がするんです。だから、逃げたくないんです」

「…………止めても、聞かないのね？」

「はい」

そう、と明日菜さんは呟いて、そうして不意に、ネギ先生に口づけた。目を見開くネギ先生と瞳を閉じた明日菜さんの下で、魔法陣が光る。仮契約が、結ばれた。

「あ、明日菜さん！？なんで——」

「あんたを一人に出来るわけないでしょ。危なっかしくて、見てられないわよ」

「でもっ！明日菜さんだって危ないですよ！？」

「護る覚悟は、あるんでしょ？」

「…………え？」

必死で言い募るネギ先生に、明日菜さんはポンツと軽くその頭に手を置いて、笑った。

「なら、強くなって私を護りなさいよ。それまでは、私があんたを護ってあげるから」

「明日菜、さん……」

「危ないのは、分かったわよ。でも、そんな中にあんた一人を置きたくない。護る覚悟があるんなら、強くなりなさいよ。いいわね？」

「——はいっ！」

明日菜さんの言葉に、ネギ先生が力強く頷いた。それを眺め、私は結局、何かできたのかと疑問に思う。結ぼうとしていた仮契約は結局結ばれて、二人はこれからエヴァンジェリンさんに戦いを挑む。何も変わらない。

私は静かに羽根を広げ、また空へと飛び立つ。下から私を見上げる二人に、小さく笑った。

「頑張ってください」

変わらない、でも。その瞳の奥の色だけが、何だか違う色に見えた気がした。

二人がエヴァンジェリンさんに向かっていき、戦いが始まる。ネギ先生が従者を得た今、戦況はまた変わり、条件としては互角だろうか。

「リラ・ラク・ラ・ラック・ライラック!!!」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!!!」

エヴァンジェリンさんとネギ先生が後方で魔法を唱え、茶々丸さんと明日菜さんが前に出る。

ぶつかり合う魔法の威力はすさまじく、近づけば巻き込まれかねない。

「——ん？」

一瞬、視界の端で動く何かを見つけて、目をこらす。暗い塔に入っていく誰かが、いたような気がしたけれど……電力が復旧していないのに、どうして？

そう思って、ハッと気づいて時計を探す。暗いなかに見つけた時計の時刻は、十一時五十分。もうすぐ、停電が終わる。

「エヴァンジェリンさん!!!」

戦闘の決着はまだついていなかった。けれど、エヴァンジェリンさんの服は脱がされているが、それでも彼女は戦える。

停電が終わるまで十分を切っているが、まだ彼女は大丈夫だと。そ

れは分かっているのに、嫌な予感がした。

「いけないマスター！戻って！！」

茶々丸さんが言うと同時に、バツと電気がつく。街も橋もどんどん明るくなっていき、予定よりも早く停電が終わってしまった。

「ッ！」

急いでエヴァンジェリンさんの元へ飛んでいく。結界が発動し、魔力を押さえられた彼女が湖へと落ちていくのを、ギリギリのところで受け止めた。

「刹那……助かったよ」

「いえ、無事でよかったです」

エヴァンジェリンさんも茶々丸さんも、ネギ先生も明日菜さんも。

みんな無事でよかった。

そのまま橋へと戻る途中、エヴァンジェリンさんが聞いてきた。

「お前、坊やたちに何を言ったんだ？」

「え？」

「なかなかいい覚悟を持っていたみたいだからな。お前が、何か言っただんじゃないのか？」

「………少しだけ、聞いてみただけです」

橋に降り立ち、エヴァンジェリンさんを茶々丸さんに任せて。私は先に、彼女の家へと戻る為にまた飛び立った。飛び立つ直前に、ネギ先生と明日菜さんが何か言おうとしていたけれど、それは聞かなかった。

「……………このちゃん」

何も知らないこのちゃん。知らないわけにはいかないこのちゃん。知らなければならぬこのちゃん。知りたがっているこのちゃん。危険を分かっている飛び込んだ明日菜さんと、護る為に強くなると決めたネギ先生。二人は覚悟を決めたのに、私はまだ決めきれなくて。

それでは駄目だと、あの二人を見て思った。私ももう一度、覚悟しなければならぬ。もう一度、誓わなければならない。その為に――

「全てを話すよ、このちゃん」

夜の月の下を、私は飛び続けた。

一つの事件が終わった日（後書き）

不自然な点とかありそうですがスルーしてくれると助かります……。。

全てを話した日

タイミングが良いというのは、このことだろう。

一晩経って、エヴァンジェリンさんの言葉通り元に戻った私は、寮に帰り届いていた手紙を見て、つくづくそう思った。

「……」

長からの手紙だった。内容としては、簡単に纏めるならこのちゃんに魔法について教えること。ただし、その存在を教えるだけで、現時点ではなるべく関わらせないでおくこと。

他にも、修学旅行で京都市行きを打診されていることや、強硬派に不審な動きが見られるので注意を促すもの。そして、このちゃんに一度、京都へ戻ってもらいたいということだった。ただ、強硬派の動きが落ち着いてからにしなければ危険があるということなので、今すぐには無理だということも。

……長は、このちゃんに全てを話すことを承諾した。

「このちゃん……」

このちゃんの内に、あれほどの力が無ければ、このまま平穏に暮らせてもらえたのに。その平穏を、私が壊さなければならぬのは、少し……悲しい。

「お邪魔しまーす」

「どうぞ」

放課後、このちゃんを部屋に誘った。いつ話そうかと考えていたが、結局、放課後が一番無難だと気づいた。

お茶を淹れて、テーブルを挟んで座る。楽しそうに笑っているこのちゃんを前に、どう切り出せばいいのか分からなくて、言葉が出ない。

大事な話がある、そう言ってしまうえば良いだけなのに。話すべきだと分かっているのに、最初の一言が言葉にならない。

「せっちゃん、どうかしたん？」

「っ……」

このちゃんが心配そうに瞳を揺らして、首を傾げる。また、心配をかけてしまった。そう思って、これから自分が話そうとしていることは、さらにこのちゃんを心配させるかもしれない事実であることに気づいたら、何だか逆に落ち着けてきた。

「…………あのね、このちゃん」

ゆっくりと、言葉を紡ぐ。なに、と聞いたこのちゃんに、私は覚悟を決めた。

「話せなかったこと、話すよ」

無知は罪だ。ならば知りすぎることが罪かは、私には分からないけれど。でも、それでも。

変わり続ける未来が、より良い方向へと向かうことを、私は願う。

それから、話せる限りの事を話した。魔法の事も、このちゃん力や、立場の事も。出来る限りこのちゃんが混乱しない様に、ゆつくりと話した。

このちゃんはずっと無言で、けれどとても真剣な表情で話を聞いてくれた。嘘とも取れる有り得ない世界の話を、理解しようとしてくれた。

「……このちゃん、大丈夫？」

「うん。平気や」

話し終わって、硬い表情のままのこのちゃんに不安になって尋ねると、そう頷き返されて。今後の事は、長たちも交えてでなければ話せないことになる。これ以上、今の私に話せることは無い。

「あの、このちゃん——」

「せつちゃん」

大丈夫。もう一度尋ねようとしたら、このちゃんが立ち上がって、私の隣に座った。間近でじっと見つめられて、どうしようもなく不安になる。また間違えてしまったのではと、強く拳を握って。その拳にそっと、このちゃんの手が重ねられた。

「魔法がな、凄い力で、危ないものやって、分かったえ」

「……うん」

「せつちゃんは、そんな危ないのから、ずっとうちを、護ってくれてたんやね……」

頷こうとして、抱きしめられた。聞こえるこのちゃんの声が震えていることに、目を閉じる。

「ありがとう、せっちゃん。ありがとう……」

「……泣かないで、このちゃん」

また私は、泣かせてしまった。でも、これでよかったんだと思う心
があつて、後悔はしなかった。

「ねえ、このちゃん。私は、絶対にこのちゃんのところに、帰って
くるから」

「……」

「だから、心配かもしれないけど、これからもこのちゃんのこと、
護らせてほしい」

「嫌やって、言ったら……？」

「勝手に護る」

「……絶対に、帰ってくるんやね？」

「絶対に」

「破ったら、泣くからな。ずっと、泣きっぱなしや」

「泣かれるのは、嫌だから……帰って来るよ」

「……うん」

このちゃんが泣かないように、絶対に帰ってくるから。今度こそ、
護らせて。

夜、エヴァンジェリンさんのもとにやって来た私は、このちゃんと
のことを話した。

「そうか……で、どうするんだ？」

「少なくとも、今は何もできません。長以外の重役の意見も聞かな

ければなりませんし、何より、このちゃんに今すぐ決断させることも出来ませんから」

「悠長なことだ。ぼんやりしているうちに、手遅れになっても知らんぞ」

「このちゃんの立場上、急ぐわけにもいかないんです」

こと魔法に関しては、慎重に進めないと危ない。このちゃんの意味はもちろん尊重されるが、穏健派や強硬派の折り合いを上手くつけなければ、過去の二の舞だ。そんなことは許されない。

「お前については、話したのか？」

「……いえ。今回は、魔法について話すので私も手一杯で……」

「はんっ。私に偉そうに言っておきながら、随分と臆病なことだな」

「……言葉も無いですね」

本当に、自分でも呆れるほどだ。

「……お前の、記憶については話さんのか？」

「話しませんよ」

「……随分と早い答えだな。なぜだ？話してしまった方が、お前も動きやすいだろう」

「このちゃんの死ぬ未来を、このちゃんに話すなんてこと、したくありませんから」

絶対に話したりしない。エヴァンジェリンさんの言うとおり、その方が間違いを回避しやすいとしても、話すつもりは無い。

「仮契約については、このちゃんにも話してありますから。自分の意志することは無いと思いますし、私も止めます」

「……まあ、お前がそうしたいなら、私は止めんさ。せいぜい、頑

張ることだな」

「はい。……ところで、エヴァンジェリンさん」

「なんだ？」

「一つ、付き合ってもらいたいことがあるんですが」

笑って、私は懷からお札を取り出した。

「おい、刹那。どこまで行く気だ？」

「外ですよ」

「ここはもう外だろ。いったい、私をどこへ連れて行く気だ」

エヴァンジェリンさんと茶々丸さんを連れて、森の中を移動する。だんだんとイラついた様子でエヴァンジェリンさんに後ろから睨まれるが、気づかないふりをしておいた。文句を言いつつつ着いてきてくれるあたり、エヴァンジェリンさんも随分と優しいと思う。

「刹那さん、これ以上進むと学園の外になります」

「むっ……それはまずいな。おい、刹那」

「良いんです。このまま進みます」

答えると、エヴァンジェリンさんに腕を掴まれる。引き留められ、剣呑に煌めく瞳を受け止めて口を開いた。

「登校地獄の呪いを、誤魔化せるか試したいんです」

「なんだとっ!？」

「刹那さん、それは不可能なのでは？」

「……出来る可能性は低いですけど、それでも試したくて。成功したら、エヴァンジェリンさんには協力してもらいたいこともあります」

すし」

「……………いいだろう。外に出られたなら、それ相応に答えてやる」

「お願いします。それじゃ、進みましょう」

進み続け、森が終わり川が流れていた。茶々丸さんの話だと、ここまでが学園の敷地。エヴァンジェリンさんが、これ以上進むことは出来ない筈だ。

「エヴァンジェリンさん、お願いします」

「……………ああ」

一歩、先に進む。エヴァンジェリンさんが、肩を震わせた。

「エヴァンジェリンさん……………？」

失敗したか、そう思った矢先、振り返った彼女は歓喜に顔を綻ばせていた。

「くっ、くくくっ、こういう仕組みだ、これは。こんなにもあつさり外に出られるとはな」

「それじゃあ……………」

「結界の外で、魔力も戻っている。お前、いったい何をした？」

笑みを浮かべたまま、エヴァンジェリンさんは心底楽しそうに聞いてくる。十五年間、ずっと出られなかった外だ。喜んでくれているなら、私としても嬉しくなる。

「さっき、エヴァンジェリンさんに魔力を籠めてもらったお札がありますよね」

「ああ、あれか。あれはいったいなんだ？私の姿をしてはいたが」

「身代わりです」

ただし、囃用の物だけれど。過去に修学旅行でネギ先生に渡した物は、姿形を真似する物だったけれど、エヴァンジェリンさんに使ってもらったのは違う。

その人の名前を書き、更に魔力を籠めることでより本物に近い身代わりを作る。ただ、効果は籠められた魔力の量に比例する上に、その人の魔力が強ければ強いほど身代わりを保つ魔力が消費されて短くなる。お札の限界ギリギリまで籠めたとして、せいぜい三日……エヴァンジェリンさんの場合、学園結界で魔力を最低限まで抑えられるから、五日くらいは持つかもしれない。

それをエヴァンジェリンさんの家に置いてくることで、学園の敷地内にエヴァンジェリンさんがいると思わせたんだが、呪いの精にも効果はあったらしい。

「この方法なら、エヴァンジェリンさんも修学旅行に来れるでしょう？」

「ああ……ははっ、にしても本当に愉快だな。まさか、そんな方法で呪いを騙すとは」

「ただ、それだけでは足りないかと思って、あと少し手を加えてはあります」

言って、エヴァンジェリンさんの手首を指差す。私の持つ勾玉とは色違いの物で、私のは赤で、彼女のは青色だ。

「認識障害と似た効果を持っています。それを持つことで、呪いが学園内にいるエヴァンジェリンさんを、更に本物だと認識するように。ただ、式神がいなくなると効果が弱いので、それだけで外には出られません。あと、近くにいる人間には効果が無くて……呪い限定の物と考えてください」

目の見えない物には効果があるが、それ以外には無いにも同じだ。今回の場合は、これで我慢してもらうしかないが。

エヴァンジェリンさんの存在を不確かにし、本物とそっくり同じ式神を、本物だと思わせる。からくりとしてはとても単純なものだった。

「完全に呪いを絶つ術を、私は持ってませんから……一時的なもので、すみませんけど」

「構わんよ。今まで、一秒も外に出られなかったんだ。全く、つくづくお前のことが気に入った」

「それは……まあ、嬉しいですけど」

「これからは私をエヴァと呼ぶがいい。お前にはこれからも楽しませてもらえそうだ」

……本当に、随分と気に入られたようだ。とりあえず、学園長たちに見つかる前に戻ることにして、私たちはその場を離れることにした。

「む、そういえば、刹那」

「なんですか？」

「坊やたちにお前の事を随分と聞かれたんだが、本当にお前、あいつらに何を言ったんだ？」

「……私の事？」

「ああ。私と一緒にいた、羽根の生えたあの人に会えないかってな」「そうですか……なんででしょう」

分からないけれど、一度、ネギ先生や明日菜さんの様子を伺った方が良いのかもしれないな。

全てを話した日（後書き）

浅くなってしまった部分もありますが、そのうち触れていければと思っていますので、今回はお見逃しください。

魔法使いの従者の日（前書き）

今回は普段と視点が違いますのでご了承ください。

魔法使いの従者の日

新聞配達バイトが終わって、いつもならすぐに帰って二度寝するところなんだけど。

何となく、落ち着かなくて。気が付いたら、世界樹の根元で、ぼんやりとそれを見上げていた。

一昨日の夜の事が、夢みたいで、現実味の無いことに思えてくる。でも、私は確かに、ネギと一緒にエヴァちゃんと戦った。昨日、昼休みにエヴァちゃんと話したのも、一昨日の事が現実だという証拠。ネギのお父さんの手がかりが京都にあるかもしれないって分かって、修学旅行で京都に行くってなってから、ネギはすごくはしゃいでる。本当に、ガキみたい……ガキ、なんだけど。

ガキのくせに、お父さんを探すって一生懸命で、頑張ってるから。放っておけなかった。危なっかしいから、一人に出来ないなって、しょうがないなあって思って、手を貸したけど。

「覚悟、かあ」

ネギのいる魔法の世界は、私の思う以上に危ない世界だったみたい。ネギとエヴァちゃんが戦ってるのを見て、茶々丸さんが攻撃してるのを見て、そうなるから本当の意味で、分かった気がする。

覚悟が無いと、生きられない世界。その覚悟の意味を、私は本当に分かっているのか、考えても分からない。

ただ、頑張っているあいつを放っておけない。一人じゃともに戦えないんだったら、私が力になってやりたい。私が護ってやろう。そう思ったから、飛び込んだ。

「どうしたらいいんだろう……」

飛び込んだことを、後悔しているわけじゃない。ネギを護ってやりたいと思う。

ただ、このままでもいたら駄目なんじゃないかっていう気持ちだが、ど
んどん沸いてきて、私を焦らせる。

昨日から、あいつの様子が何となく変なもの、理由だと思う。京都
に行けるってはいやいだと思ったたら、不意に、何かを考えてとて
も真剣な顔をしてるから。聞き出そうとしても、どうしてか絶対に
言おうとしない。いつも途中で逃げてっちゃう。すごい頑固。

「本当に、どうしよう……」

あの羽根の人とまた話せたら、なんか分かるんじゃないのかなって。
そんな事を思ってる。

覚悟があると教えてくれた人。危ない世界だって教えてくれた人。

私とあいつに、一瞬でも考える時間をくれた人。何も知らずに、私
を踏み込ませないでくれた人。

どうしたらいいのか分からない私に、何か教えてくれるかもしれな
いって、勝手に思ってる。

「――悩み事ですか？ 神楽坂さん」

そんな時、後ろから声をかけられた。誰、そう思って振り返った先
で、桜咲さんが立っていた。

「おはようございます」

「おはよう……」

全然、気づかなかった。いつ来たのか、いつからいたのか。驚いて、

振り向いた体勢で固まってしまった。

「そういえば、新聞配達をしてるんでしたっけ。帰り道ですか？」

「う、うん……桜咲さんは、なんで？」

「走ってたんです。朝の日課ですね」

「そうなんだ……」

確か、桜咲さんは剣道部……だったっけ。体力作りとか、やっぱ鍛えてたりするのかな。

私も鍛えたり、した方がいいん、だよな？あんな、戦ったりするんなら……でも、どうしたら、いいんだろう。全然、わかんない。

「……さっきも聞きましたけど、何か悩み事ですか？」

「ど、どうして？」

「そんな気がしたので。私でよければ、話だけでも聞きましょうか？」

話、か。でも、魔法の事は桜咲さん知らないかもしれないし……。

「……えっとさ、悩みとかじゃないんだけど、質問しても……いい？」

「私に答えられることでしたら」

「その、桜咲さんって……護りたい人とか、いたり……する？」

「いますよ」

即答。自分でも変な事聞いたと思ってたけど、まさかの即答にこっちが呆気にとられてしまう。私の様子に気づいて、桜咲さんが苦笑いを浮かべた。

「あはは……すみません。驚かせましたね」

「い、いや、聞いたのはこっちだから……でも、そっか。ねえ、そ

れって木乃香の事？」

「ええ、そうですよ。どうして分かったんですか？」

「……んー、勘？」

「勘、ですか…」

言ってから、冗談、と笑う。本当は勘なんかじゃなくて、桜咲さんと木乃香を見てたら、何となく分かったというか。いますって即答した桜咲さんに、そうなんじゃないかって、思っただけ。でも、たぶん切欠は、あれかなあ。

「桜咲さん、図書館島で飛び出したでしょ？あの後、エレベーターの中で大変だったのよ。木乃香は泣き出すし、まきたちも大騒ぎするしで」

「それは……ご迷惑をおかけしました」

「うん。でね、泣いてる木乃香を見て思ったの。桜咲さん、木乃香の為に飛び出したんじゃないかって」

木乃香が、飛び出した桜咲さんを凄く心配しているように、桜咲さんも木乃香の事が大切だから、飛び出したんじゃないかって。二人とも、相手がとても大切なんじゃないかって。

「このちゃんは、私にとって大切な友達ですから。今度こそ護ろうって、誓ってるんです」

「今度……？」

「……小さい時、このちゃんが川で溺れたことがあって。その時の私は、助けることも出来なかったから」

「そっか……」

……何となく、本当に何となくんだけど。それだけじゃないような気がした。桜咲さんが木乃香を護るって言った時の横顔が、誰か

別の人みたいで。

でも、パッとこっちを見て笑みを浮かべる桜咲さんは、私の知る彼女だった。

「神楽坂さんは、護りたい人がいるんですか？」

「わっ、私？」

「はい」

ど、どうしよう、まさかネギですなんて言えないし……でも……。

不意に過ったあの桜咲さんの横顔に、もしかしたら、っと思う。もしかしたら、私の中から沸き起こるこの焦りを、どうにかする答えが、出るんじゃないかって。

そう思ったら、私は戸惑いながら、口を開いていた。

「あ、あのさ……例えばの、話なんだけど」

「はい」

「子どもがね、凄く頑張ってる子どもがいたとして……その子どもが、凄く危ない世界に関わってたとして、その子どもを護るには、どうしたらいいのかな……」

「その子は、危ない世界から切り離せないんですか？」

「う、うん。その子どもの……探しものを見つけるには、そこで頑張らないといけなくて。でも、その子ども一人じゃ危なっかしくて放っておけないなって思ったりして……もしも私が、その子どもを護る為に、その世界に関わったとしたら……私はどうすれば、いいのかな？」

「……そうですね……」

顎に手を当てて、桜咲さんは真剣に考えている。一方、私はといえば、言ってしまったから緊張でときどきしてた。例えば話にしたってどうなのよ、これは。

「……」
「……」

沈黙が恐いのって、初めてかもしれない。少ししてから、桜咲さんは首を傾げて口を開いた。

「神楽坂さんは、その子どもを護りたいんですよね？」

「うん」

「なら、強くなるのが良いと思います」

「……強く？」

「はい」

桜咲さんは、指を一本立てて、私に教える様に話し出した。

「誰かを護る、それも何かしらの危険から護るんでしたら、第一にまず、自分で自分を護れるくらいに強くなないと駄目です。誰かを護るのはとても難しい事ですから、自分すら護れないのに護ることは出来ません」

「そっか……」

「それから……これは、私の言えた義理じゃないんですけど……」

気まずげに視線を彷徨わせて、桜咲さんは力の抜けた笑みを浮かべて続ける。

「傍にいてあげるのが、良いと思います」

「傍にいる？」

「……子どもながらに、悩むことはあるでしょうから。後戻り出来ないなら、傍にいて一緒に頑張っていくのが、一番だと思いますよ」

「……そっか」

強くなって、ネギの傍にいる。それってつまり、羽根の人が言っていたみたいに、私が過ごしてきた日常からは遠ざかるってことよね。桜咲さんの言うとおり、後戻りは出来ないんだし……でも、選んだのは、私。

「ありがと、桜咲さん」

「少しはお役に立てましたか？」

「うん。何となく、分かった気がするから」

「そうですか」

それならよかったと、笑ってくれた。

「……なんでかなあ」

「何がですか？」

「桜咲さんって、凄い大人みたいっていうか……なんか、凄い」

「私よりも、真名の方がよっぽど大人みたいですよ。言えば怒られますけど」

「うーん、そういうんじゃない……」

「気にしないで良いですよ。どう思っても、私は私でしかないですから」

そう言った時の表情が、また別の人みたいに思えて。でも、何も言わない。桜咲さんがそう言うなら、そうなんだろう。彼女は、彼女でしかない。

ピョンピョンと飛ぶようにして何歩か歩く。心なしか、足が軽い。焦りも落ち着いてる。きっと、桜咲さんのおかげ。そう思ったら、ふと浮かんだことがあって、くると振り返った。普通に歩いてきていた桜咲さんに、問いかける。

「ねえ、桜咲さん。聞いてもいい？」

「私に答えられる事でしたら」

「……えっと、あのさ。前にも聞いたけど、図書館島で、どうやって助かったの？あの石像とか、どうしたの？」

「どうした、と言われても……正直、なんて言ったらいいのかわからなくて」

「ふうん……」

初めて、別の答えを聞いた。いつも、笑って誤魔化されるか、内緒ですって言われるだけだから、ちょっと進展した気分。

でも、ここまで来るとやっぱり答えが知りたいもので、もう少しだけ粘ってみようかな。

「実は桜咲さん、凄い怪力だったとか？」

「さあ？」

「じゃあ、凄いジャンプ力だったとか？」

「どうでしょう？」

「……答える気、ある？」

「どう思いますか？」

「……」

明らかに、はぐらかされてる。とても露骨に、分かりやすく。自分がムツとしてるのがよく分かった。

そうしたら、桜咲さんがくすくすと笑って、ごめんなさいと謝ってきた。

「それじゃあ、分かりやすい方法をとってもいいですか？」

「へ？うん、いいけど……」

「なら、失礼しますね」

言った瞬間、桜咲さんが視界から消えて、体を浮遊感が襲ってくる。景色が一気に流れて、見えた空は雲一つないいい天気。背中にとても軽い衝撃が襲って、痛みも何も無く、気づいたら私は地面へと仰向けに倒れていた。

「……………え？」

何が起こったのか、全然分からない。空だけの私の視界に、桜咲さんの顔が逆さまに入ってきて、おかしそうに笑いかけられた。

「どうですか？ 神楽坂さん」

「えっと……………ごめん、何が起きたのか全然分からない」

「そうですか…つまりですね」

呆然とする私に、桜咲さんは言った。

「私は、結構強いかもしれないってことですよ」

それが答えですと言われて、何となく納得する自分がいた……………ような気がする。

魔法使いの日（前書き）

途中から視点が変わりますので、ご注意ください。

魔法使いの日

今日の放課後は、このちゃんと明日菜さん、ネギ先生と、修学旅行の為の買い物をする。

といっても、ネギ先生はたった今、たまたま見つけて一緒に行くことになったところだけだ。

どうやらネギ先生、スーツ以外の私服はあまり持っていないらしい……正直、私も人の事を言えなかったような気がするけれど。

他にも旅行用の鞆だったりいろいろと買うものはあるみたいだ。

「ん……なあ、ネギ君。それなんや？」

「え？」

ネギ先生のポケットから僅かにはみ出したそれに、このちゃんが首を傾げて問う。言われるままにそれを取り出したネギ先生が、あつと声をあげた。

「こ、これはっ」

「なんやコレ？ 凄いかわええな。明日菜が描いておるよ」

「え、嘘。何よこれ……いつの間に作ったのよ」

「えっと、えっと……」

明日菜さんを引っ張ってこのちゃんから離れるネギ先生。私は小声でこのちゃんに話しかけた。

「あれが、仮契約の証ですよ」

「タロットカードみたいなやつだったっけ？ そっか、あれがそうな

んか……」

「昨日も言ったけど、仮契約は魔法陣の中でキスすると結ばれてしまうから……カモさんには、気をつけて」

「うん、分かってるえ」

魔法の存在をこのちゃんが知った今、目の前で魔法を使われることは、好ましくは無いが大きな問題にはならない。このちゃんが、それに気づかないふりをすればいいだけだから。

でも、仮契約は駄目だ。あれは知らないふりをする事が出来ない。してしまったら最後、関わったことを否定できなくなってしまう。今はまだ、このちゃん自らが関わってはいけないと言ってある。それはこのちゃんも承知してる。

「明日菜、ネギ君。そろそろ行くえ」

でもそれ以外は、今までと変わらず。平穏な日常を過ごしてくれれば、それでいい。

明日菜さんたちと一緒に、修学旅行の買い物。昨日は西に届ける親書を貰って、それについて考えるのでいっぱいだったから、誘ってもらえて有難かった。

服をたくさん持たされて、試着室に押しこめられてしまったのは、ちょっと困ったけれど。木乃香さんたちも楽しそうだし、まあいいか。

「なあ、アニキ」

「何？カモ君」

試着室で着替えようと思って服を脱いだところで、カモ君が言ってきた。

「木乃香姉さんの唇を奪っちまえよ！」

「!？」

突然の言葉に、ガンツと試着室の壁に背をぶつけてしまう。全く予想しなかった言葉に頭が混乱しながら、叫ぶようにして言った。

「なな、何を言い出すんだよカモ君!？」

「違う違う。仮契約の話だよ、仮契約」

「仮契約……？」

仮契約、エヴァンジェリンさんとの戦いで、明日菜さんと結んだ契約。

カモ君の話はつまり、修学旅行の最中にまた、エヴァンジェリンさんのような敵に会うかもしれないから、仮契約をして戦力を増やしておいた方がいいってことなんだけど……。

「いいよ、僕……明日菜さんだけで……」

「チツチツチ、分かってねーな、アニキ」

煙草を手にとって、カモ君がスッと目を閉じた。

「人生の先輩として忠告しておくぜ。若いうちってなあな、なんでもいろいろ経験しとくもんだぜ。小さく纏まっちゃったらおしめえよ」

「でも――」

「兄貴の親父のサウザンドマスターも、本当は千人の女と仮契約したからその名がついたって噂も……」

「ええっ、本当!？」

「ホントホント」

父さんが、そんなに……なんか、凄くショックを受けたような気分でも、そっか。父さんはそんなにたくさんの人と、仮契約をしたんだ。

「でも、それって――」

「ネギ先生、着替え終わりましたか？」

「うあっ、は、はい!」

試着室の外から、桜咲さんの声が聞こえて慌てる。急いで服を着てみて、カーテンを開けた。

「す、すみません。お待たせして……」

「いえ、大丈夫です。ただ……」

桜咲さんは、困ったようにお店の外を見て言った。

「このちゃんたちが、あっちの服屋も見ろって行っちゃって……とりあえず、ここで買うのを買ってしまってから、追いかけてみましょう」

「わ、分かりました。すぐに出ますね」

「ゆっくりでいいですよ。このちゃんたちも、色々楽しんでるでしょうから」

焦る僕に、桜咲さんはそう言って笑ってくれる。凄く優しいようで、実は少し恐かっただけに、何だかほっとした。

エヴァンジェリンさんの家で会った時、言い方がきつくて怖い人だと思ったけど、あれもエヴァンジェリンさんを心配してのことだった。

たんじゃないかって思う。呆れられたような目で見られたことはあった気がするけど……冷たい目じゃ、なかったと思うから。

「お、お待たせしました……」

「結構たくさんありますね。全部、買いますか？」

「えっと、どうしよう……」

「……他にも、色々と見て回りますから、気に入ったのだけ買いましょうか」

「は、はいっ」

桜咲さんの言葉に頷いて、何着か気に入った物を選んで買おうと、僕たちはそのお店を出た。明日菜さんたちは、どこにいるんだろう。

「三階のお店で、鞆を見てるそうですよ」

「そうですか。それじゃ、行きましょう」

「はい」

木乃香さんと連絡をとった桜咲さんの言葉に従って、人込みの中を歩き出す。修学旅行でセールをやっているから、学生の姿が多い。

「アニキ、アニキ」

「何？カモ君」

「何って、何を悠長に構えてるんですかい！コイツは、エヴァンジェリンの仲間かもしれない相手ですぜ？」

「そんな、まさか桜咲さんが……」

「茶々丸の奴をコイツが助けたのを忘れたんですかい！？」

「……それは……」

小声で話しかけてくるカモ君の言葉に、半歩先を歩く桜咲さんを見上げる。

あの時、カモ君のアドバイスで茶々丸さんを狙った時、僕は茶々丸さんに魔法を撃った。直撃すれば、茶々丸さんを壊してしまいかねない……壊していただろう攻撃。その間に、桜咲さんが飛び込んできた。

なのに、彼女は無傷だった。茶々丸さんも怪我一つ無くて、そのまま飛び立っていった。残された桜咲さんは、あれを雷だと思っていた。僕は凄く混乱していた。

あの場を一步も動いていなかった二人に、魔法を外したとは考えられなくて、それならどうして無傷だったのか。明日菜さんは僕が外したとか、失敗したとか思ってるみたいだけれど、違う。たぶん、何かに防がれたんだと思う。

「敵と二人きりなんて、こんなヤバイ状況はないですぜ」

「でも、エヴァンジェリンさんはもう敵じゃないから。それに、桜咲さんに聞くことも出来ないし……」

もしも、本当に偶然にも、桜咲さんたちとは関係ない理由で僕の魔法が何かに防がれたんだとしたら。彼女に真実を聞いてしまうのは、いけないんじゃないかと。警告のように鳴り響く声。

『覚悟は、ありますか』

エヴァンジェリンさんと戦った日、明日菜さんと仮契約を結ぼうとした僕の前に現れた、白い羽根を持った人。僕たち魔法使いがいる世界が、危険な世界だと言った人。

魔法は人助けをする力。人知れず人の役に立つのが、魔法使いの役目。ずっとそう思ってた、偉大な魔法使いと呼ばれた父さんに憧れた。

父さんに会いたくて、エヴァンジェリンさんと戦った。明日菜さんと、仮契約をして。戦い終わって、橋のあちこちが崩れているのを

見て、僕は初めて理解できた。

魔法は、人を助けることが出来る力。でも、こうして壊すことが出来る力でもある。

もしも、茶々丸さんに撃った魔法が、本当に命中していたら——今になってそう考えると、ぞっとする。あの人が、命のやり取りをする世界だと言った言葉の意味が、理解できた。魔法は、人を殺せるんだ。

一度、仮契約をしないと行ったのは、明日菜さんを護れる自信が無かったから。危険な世界だと言われて、エヴァンジェリンさんとの戦いで、僕が明日菜さんを護れるのか。護りたいと思っても、本当に護れる自信が無かったから、しないと言った。

結局、結んでしまったけれど。僕は、明日菜さんを巻き込んでしまった。

あの人は、巻き込んでしまった人を護り抜く覚悟があるのかと、僕に言った。……正直、覚悟と言われても、本当に覚悟が出来ているのか分からない。でも、護りたい気持ちはある。

だから、その為に——

「ネギ先生」

「っは、はい!？」

考え込んでいた僕の顔を、桜咲さんが覗き込んでいた。どうしたんですか、そう首を傾げる彼女に、僕は首を振る。気づけば三階、桜咲さんは携帯を片手に困った笑みを浮かべていた。

「このちゃん、電話に気づいてないらしくて……どこにいるのか、分からないんです」

お店はたくさんあるから、一つ一つ回って探すのも大変だ。困りましたね、と僕が頷くと、刹那さんは近くの休憩所を指差した。

「とりあえず、そこで休みませんか？このちゃんから、電話が来るかもしれないし」

「そうしましょうか」

促されるままに休憩所のベンチに座る。みんなまだ買い物に夢中なのか、休憩所にいるのは僕たちだけだった。

「飲み物を買ってきますから、少し待っててください」

「あ……」

僕が行きます、言う前に桜咲さんが自動販売機に向かってしまつて、立ち上がりかけた腰を下ろす。テーブルに乗ったカモ君が、話しかけてきた。

「なあ、アニキ。いつそのこと、あの女と仮契約しちゃいませんか？」

「うえっ!？」

「味方につけちまえばこっちのもんでさあ。一発キスしてくれりや、それでOKっすよ!！」

カモ君の言葉に、喉の奥から潰れたような変な声が出た。

「だ、駄目だよ!カモ君!！」

「なんでだよアニキ!西と戦うためにも、戦力はあった方がいいぜ!」

「確かにそうだけど、でもっ」

誰かと仮契約を結ぶということは、その人を巻き込むという事。

僕は明日菜さんを巻き込んだ。明日菜さんも、自分から飛び込んで

きた。僕は明日菜さんを護る為に、強くならないといけない。護り抜かないと、いけない。

なのに、今の僕にはその力が無くて。そんな僕が、また誰かを巻き込むような事を、本当にしてもいいのかな。

「サウザンドマスターがやれたことだ。アニキなら大丈夫だって」「っ……」

父さんが、やったこと。それは僕の心を大きく揺さぶった。

仮契約は、その人を巻き込むこと。巻き込んだその人を護る覚悟を、僕はしなければならぬ。でも、今の僕には護り抜く自信が無くて、なんとかしないといけない。

でも父さんは、それが出来た。それをした。憧れの父さんがしたところ。

「だからアニキ！あの女や木乃香姉さんと仮契約を――」

「ネギ先生、お待たせしました」

トンツ、と軽い音をたててテーブルに置かれた缶ジュース。顔をあげると、桜咲さんが笑っていた。そのまま僕の向かいの席に座って、不思議そうな顔でカモ君を見る。

「ネギ先生の、ペットでしたっけ？」

「あ、はい……カモ君っていつて。よく連れてるんです」

「この前も会いましたね。でも、他の人も使うテーブルですから、動物を乗せるのはやめたほうが良いですよ」

「そっ、そうですね。すみません」

言われて、慌ててカモ君を肩に乗せる。目の前の缶ジュースと桜咲さんを見比べて、どうしようと考えた。

「……そのジュース、嫌いでした？」

「い、いえ！そんなことは……」

「よかった。奢りますから、飲んでくれていいですよ」

「そんな、悪いですよ」

「私が勝手にすることですから、気にしないでください」

お金を渡そうとすると、片手で制されてしまった。じゃあ、とお言葉に甘えて缶ジュースに口付ける。オレンジジュースだった。

「このちゃんたち、まだ連絡がつかなくて。どこに行ったんでしょ
うね」

「そうですね……」

視線が彷徨う。カモ君の言葉のせい、桜咲さんを直視できなくて、何を話したらいいのかわからない。

エヴァンジェリンさんとの関係とか、茶々丸さんを助けた時の事とか、聞きたいことはいっぱいあるけれど、それを聞いても良いのかと僕を踏み止まらせるのは、羽根の人の言葉。

『巻き込んだ人を、護り抜く覚悟はありますか』

巻き込んでしまった明日菜さんを護りたい。その想いが覚悟だというなら、覚悟はある。でも、僕に力があるのかが疑問になる。

エヴァンジェリンさんとの戦いも、ギリギリだった。あのまま続いていたら、勝てたかもわからない。そんな僕が、これからも明日菜さんを護ることが出来るんだろうか。

「……ネギ先生？」

「は、はい！？」

声をかけられて、ビクッと肩が跳ねる。心配そうに桜咲さんが僕を見ていた。

「大丈夫ですか？眉間に皺が寄ってますけど」

「えっ、ええっ!？」

考えすぎて、いつの間にかそんな顔をしていたらしい。慌ててぐりぐりと指で押してみると、くすりと桜咲さんが笑った。

「嘘ですよ」

「う、うそ…?」

「はい。皺は寄ってません」

「な、なんだ……」

何となく、ほっと一息。桜咲さんを心配させるほど怖い顔だったのかと思って、吃驚してしまった。

それからくすくすと小さく笑っていた桜咲さんだったけれど、でも、とまた心配そうな顔をして言葉を続ける。

「何だか、凄く悩んでいるようでしたけど、本当に大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫ですよ。心配ありません」

「そうですか……?」

ジッと見つめてくる桜咲さん。誤魔化すように笑ってみても、その視線は逸らされず僕を見たまま、そのうちに僕が負けてしまつて視線を逸らす。

小さな溜息が聞こえて、自分が情けなくなる。

「私でよければ、話を聞きますが……話せないような、悩みですか

？」

「……」

無言は肯定と同じだと、何かで聞いたような気がする。でも、面と向かって否定の言葉を言えなくて。桜咲さんの視線を前に、大丈夫ですよとまた笑うことも出来なかった。

「……このちゃんたちに会えるの、まだかかりそうですね」

「そう、ですね……」

「結構、退屈ですよね」

「す、すみません……」

うう、まともに話も出来ない僕って、どうしたらいいんだろう……。

「そこで、提案なのですが。ネギ先生、例え話でもしてくれませんか？」

「例え、話？」

「例えばこんな話。本当じゃない、嘘の話。そんな話でも、退屈しのぎにはなると、思いませんか？」

困惑する僕に、桜咲さんは小さな笑みを浮かべる。缶ジュースを片手に、目を細めて優しく言葉を紡ぎ出した。

「人に話すと楽になったり、人に話すことで整理出来たりするものですよ」

「あ……」

「あと、例え話を信用するほど、私は純粋な人間じゃありませんから」

最後は悪戯な笑みで言って、桜咲さんは缶ジュースを一口。

彼女の言葉は、僕の中で反響し合って大きくなっていく。たぶん、彼女は僕に逃げ道をくれた。話すだけ話して、ただそれだけで終わるようにしてくれた。

缶を握る両手に力が籠る。話してもいいんだろうか、そんな葛藤が僕の中に生まれて、視線を缶から外せずにいた僕は、やがてゆっくりと口を開いた。

「それじゃ、あの……例えばの、話をするんですけど」

「はい」

逃げ道の前置きを置いて、僕は続ける。

「危険な世界が、命のやり取りをするような、危ない世界があつて。その世界に友達を巻き込んでしまったとしたら……どうすれば、良いと思いますか？」

「どうすれば、ですか」

「はい」

桜咲さんは首を傾げて聞いてくる。

「巻き込まれた人は、どうして巻き込まれたんですか？」

「そ、その……か、仮に僕が、友達を巻き込んだんだとして……あ、仮にですよ？例えば、ですから」

「分かってますよ」

念を押す僕に、桜咲さんは少しだけ笑って頷く。それに落ち着いて、えっと、と口を開いた。

「僕が、敵と戦って……でも、一人じゃ勝てなくて。そうしたら、友達が、一緒に戦うって、飛び込んできたんです。危ないって分か

ってるはずなのに、一人にはしておけないって言って……それで、巻き込んでしまったんです」

「……友達は、危険を承知なんですよね？」

「はい」

「ネギ先生は、その友達をどうしたいんですか？」

「………僕は…」

明日菜さんを、どうしたいのか。元の日常に返してあげることが、難しいとして。それなら、いったいどうしたいのか。その答えは、決まってる。

「護りたい、です」

「なら、答えはもう出ているんじゃないですか？」

「………僕が、強くないと駄目ですよね」

護り抜けるように、強くなって、明日菜さんを護れるように。

「人を護るのは、とても大変な事ですから……でも、強い意志を持つと、人はどこまでも強くなれますよ」

「強い、意志……」

「絶対に護ってみせる、そんな覚悟を持てればいいですね」

「………桜咲さんは、そういう覚悟を、持ってますか？」

「ええ。大切な人を護る覚悟を」

桜咲さんの言う、大切な人を護る覚悟。それは、僕にもあるんだろうか。

……ないなら、持てばいいんだ。明日菜さんを護る覚悟を、強い意志を。そうして強くなれば、明日菜さんを護れるようになればいい。不意に、視界の隅にカモ君の白い体が映る。思い出されるのは、父さんの影。

「……もう一つ、例え話をしてもいいですか？」

「ええ、どうぞ」

「……僕には探している人がいて、その人はすごい人で僕の憧れなんです。もしもその人が、僕が友達を巻き込んだようにたくさんの人を巻き込んでいたとしたら、どうすればいいんでしょう」

「それ、は……」

困ったように、桜咲さんは頬を掻いた。

「ネギ先生は、憧れているその人になりたいんですか」

「……はい。その人みたいになるのが、僕の夢なんです」

「そうですか……きつと、その人には全員を護る力が、あったんでしょうね」

「そう、なんだと思います」

「……ネギ先生がその人に憧れて、その人と同じことを自分もしたいと言うなら、誰も止めないと思います」

「なら……」

「でも、一つ忘れてませんか？」

スツと指をたてて、桜咲さんがジッと僕を見る。真剣な眼差しに、僕は目を逸らせなかった。

「巻き込まれた友達は、平穏な日常を捨てる覚悟をしているかもしれませんよ」

「あ……」

それまでの日常を捨てて、飛び込んできた明日菜さん。だとしたら、仮に僕に父さんのような力があったとして……父さんと同じように、たくさんの人と仮契約をしたとき、僕はその人たちに、それまでの

日常を捨てさせることになるんだ。

「……全員が、覚悟を持って決めたことなら、憧れの人がやったことも間違いでは無いかもしれません。でも、何も知らない人を巻き込むのは……私は、良いとは思えません」

「……」

「……ネギ先生が、憧れのその人のしたことをするのは、悪い事では無いです。ただ、同じことをしても、ネギ先生はネギ先生でしかありませんよ」

「!」

僕は、僕でしかない。父さんの背中を追いかけても、父さんにはなれない。

何かがストンツと僕の中に落ちてきて、どこかにピッタリと嵌ったような感覚。それが、凄く心地いい。

「誰かを護りたいなら、強くなればいい。護れるだけの強さを身につければいい。強くなってもまだ足りないなら、もっと強く。護り抜く覚悟を持って、進めばいい……そう思いますよ」

言って、桜咲さんは笑った。プルルルと味気ない電話の音が鳴る。桜咲さんが電話に出て話し始めると、僕はカモ君に話しかけた。

「カモ君、僕、決めたよ」

「アニキ？」

「仮契約は、もうしない。明日菜さんを護れるように、僕は強くなる」

「な、なんでだよアニキ!? それじゃ、いざって時にこっちが不利に……」

「……僕は、明日菜さんを護ることすら出来ない。そんな僕が、

他の人を巻き込んで……父さんのようには、出来ないよ」

「アニキ……」

「明日菜さんは、僕を護る為にパートナーになってくれた。僕はそんな明日菜さんを護りたい。それに、僕はたくさんの人から、日常を奪うような……そんなことは、したくないんだ」

だから、強くなる。明日菜さんを護って、たくさんの事に立ち向かえるように、強くなりたい。

どうしたらいいのかとか、分からないことはまだたくさんあるけれど、それだけは決めた。

「ネギ先生、このちゃんたちと連絡が取れましたよ。行きましょう」
「はい！」

明日菜さんを護る。これ以上、他の人は巻き込まない。僕は今よりももっと、強くなる。

「桜咲さん」

「はい？」

「ありがとうございます！」

「……いいえ」

まだまだ分からないことだらけでも、大切な事が分かったような、そんな風に思う。

魔法使いの日（後書き）

いろいろとぐだぐだ考えたり話したりしていますが、スルーしてくださると助かります。ご意見などありましたら……お手柔らかにお願いします。

異常事態の日

寮の部屋で、目の前の光景に呆然とする。私と真名の部屋、いるのは当然ながら、私と真名。

何の変哲も無いテーブルには、空の器が五杯重ねられ、あんみつの盛られた器が四杯、そして真名の手には、食べかけのあんみつが入った器が一杯。

全て、私が作った物であり、食べるのは真名だ。三日前のエヴァンジェリンさんとネギ先生が戦った夜、真名には随分と迷惑をかけたらしい。

あの夜、結界の効果が切れたことで私にも仕事の依頼があった。けれど、私は寮にいないどころか、姿を変えてエヴァンジェリンさんの傍にいた。

結果から言うと、真名は私がいなくても担当する羽目になったんだという。

「報酬は二人分だから、まあよかったんだけれど……さすがに、疲れたよ」

ついでに言うと、私の事は寮でこのちゃんを護っていると誤魔化してくれたんだという。これには本気で感謝した。どこにいたのかと言われたら、私は答えようがないから。

目の前のあんみつは、そのお詫びと報酬だった。真名は私が作るあんみつを随分と気になっているらしくて、お礼がしたいと言ったら「あんみつ十杯」と返ってきて正直に言うと言った。

まあ、これだけで済むんだから、安いものか。

「そうだ、真名。修学旅行なんだが……」

「なんだい？仕事の依頼か？」

「ああ」

修学旅行で、有事の際には力を貸してもらおう契約。事件が起こり、人手が必要な場合、真名の存在は心強い。

「友人価格で割引してやろう」

「……助かる」

とりあえず金を取られるのはいつものことだった。

修学旅行まで残り数日。強硬派の動きが不穏なことも長からの手紙に書いてあったし、取れる手段はとっておいた方が良さそう。真名はこれでいいとして、楓とクーフェイにも頼むか……楓はともかく、クーフェイが巻き込んでしまった方がいいか微妙なラインだな。それはまた考える必要があるそうさ。

修学旅行の班もまだ決まっていけないし……明日菜さんやネギ先生にどう対応するかも考えないといけない。親書の事もあるし、事前に強硬派を穏便に止められれば一番いいんだけど……もしかしたら、修学旅行中に、このちゃんを連れて総本山に行くべき、かもしれない。このちゃんの事情をすぐに解決するためにも……。

「…………ッ！」

考える私の元に伝わる、電撃にも似た感覚。お札の持ち主が、命の危険に晒される感覚。

「ッ真名」

「……なにかあったのか」

「ああ。たぶん何かあった」

私の変化に気づいたらしい真名に返しつつ、私は立ち上がり玄関から靴を持ってきて、窓を開ける。窓枠に腰かけ、靴を履いた。

「必要なら連絡する。依頼だと思ってくれていい」

「分かった。すぐ動けるようにしておこう」

「頼む」

玄関から出るより、窓から飛び降りた方が早い。私は、外へと身を落とした。

今日の放課後、図書館島に立ち寄った。パソコン関係の本が読みたくて、時々だけ行くことがある。馬鹿みたいに大きくて、どうにも現実離れたその場所に顔を顰める事の方が多いが、刹那と話すようになってからは、見て見ぬふりも前より出来る様になった。受け入れることは出来ないままだけれど、思ったことはまた刹那に聞いてもらえばいい。

麻帆良には異常が蔓延ってる。裏事情は知らない。ただ、それが本当に危険なのは、刹那の話を聞いて知っている。だから、私は見て見ぬふりをする。その方が良いと、刹那にも言われていることだしな。

図書館島で、興味深いパソコン関係の本を見つけて、それが貸出禁止だったので、ずっと読み続けてた。面白くて、集中し過ぎたらしい。気づいたら随分と遅くなっていて、私らしくないことに舌打ちした。

急いで帰ろう。そう思って図書館島を出て、人通りの全くない道を歩く。恐いくらいに静かで、それがおかしいと思った時には、もう遅かった。

大きな暗闇が、私の上に現れる。暗闇は影だった。

「…………ッ!？」

驚いて上を向くと、大きな口がぽっかりと開いていた。無意識の、咄嗟の判断で、私は転げるように前に出た。ゴロゴロと視界が転がって、体のあちこちが痛い。

「なん、だよ……」

「魔法の射手 連弾・風の11矢!!」

道の横の木々の間から、女の声と一緒に、よく分からない何かが飛んできて、私の後ろで口を開けていたよく分からない奴に当たる。吹き飛ばされたそいつが、反対側の木に当たると、木々の間から知らない女が出てきた。

「なっ、一般人!？ どうしてここに——!!」

「うわっ!!」

女が言い切る前に、吹き飛ばされた奴とは別の形をした何かが現れて、女を吹き飛ばした。よく見たら、そいつだけじゃない。別々の形をした、でもよく分からない奴らが、周りにたくさんいる。

ちよっと待てよ、なんだよこの状況。可笑しいだろ、こんなの。

近づいてくる大きな影に、後ずさる。得体の知れない恐怖に、立ち上がることも出来ない。

「来んな、来んじゃねえよ——!!」

取り囲まれる。前も後ろも右も左も、どこもかしこも埋め尽くされた。

恐怖で体が震えて、奥歯がカチカチ音をたてる。私は、普通の中学

生だ。その私が、どうしてこんな状況になってる。

分らない、何も分らない。誰でもいいから、助けてほしい。鞆のポケットからいつの間にかはみ出していたお守りを握りしめた。

「千雨さん!!」

周りの奴の一体が手を伸ばして来た時、声と一緒に、そいつが私の前に降ってきた。

学園結界で守られた麻帆良の都市が、濃い瘴気に覆われることは殆ど無い。全てを防げるわけでは無いが、殆どの魔物が結界に阻まれて消えていく。

だから、息苦しいほどに濃い瘴気というのは、本当に珍しい。それに足を止める余裕も何も、私には無いのだけれど。

「千雨さん!!」

お札が知らせた千雨さんの危機に、全速力で走った。お札の位置は、魔物たちの群れの中心からで、地面が抉れる勢いで蹴り飛ばして群れを飛び越し、その中心、千雨さんの元に降り立った。

「千雨さん! 大丈夫ですか!？」

「せ、刹那……」

浅い呼吸で、恐怖に体を震わせる千雨さんを前に、勾玉を戻し夕風を握る。そのまま一閃、近くの魔物たちを斬り捨てて、彼女の体を抱き上げた。

「飛びますよ」

返事を聞く前に、地面を蹴って群れの外へ飛び上がる。群れから離れた街灯のところに千雨さんを座らせて、顔を覗く。青褪めて震える姿に、そっと頭を撫でて、その体を抱きしめる。

「千雨さん、聞こえますか？」

「せつ、刹那、なんだよこれ、これ、いったい……」

「……遅くなってごめんなさい。もう、大丈夫ですから」

体を離して、目を合わせる。大丈夫、ちゃんと私が見えてる。少しでも安心してくれたらと、笑みを浮かべて、ゆっくりと頭を撫で続けた。

「あいつらが恐かったら、目を閉じていてください。暗闇が恐かったら、目を開けていてください。大丈夫です。絶対に、あいつらが千雨さんに近づくことはありませんから」

お札を一枚、千雨さんに握らせる。それから、街灯に一枚貼って、千雨さんの周りの地面に、彼女を囲むようにして五枚。絶対に、近づかせない。これ以上、千雨さんに怖い思いはさせない。

「全部、すぐに終わります。終わらせます。だから、少しだけ待っていてもらえますか？」

「う、あ……わか、った……」

「それじゃ、いってきますね」

……本当なら、もっと遠くに連れて行きたい。この場所が見えない場所に連れて行きたい。けれど、それは不安だった。こんなにも濃い瘴気が溢れてるということは、異常事態である証拠だ。もしも、

この状況がここだけでは無かったとしたら……千雨さんを、私の見えない場所に置いておくのは、危ない。いっそ傍にいてくれた方が、見える場所にくれた方が、身の危険は無かった。でも結局、助けに来るのが遅くて、恐がらせてしまったけれど。

「はっ!!」

夕風を振るい、魔物を斬り捨てる。そうして、傷だらけの彼女の元に辿り着いた。

「状況は、どうなっているんですか？」

「……魔法先生が一人、魔物に取りつかれました」

「取りつかれた？」

「寄生型の魔物が侵入したようです。寄生した相手の記憶を読み取り、その技まで使いこなします。寄生された先生が得意としていたのは、結界に関する魔法でした」

「……まさか、学園結界が破壊されたんですか？」

「穴を空けたようです。そこから、魔物が次々に侵入してきています」

「なるほど……」

魔法先生は、この林の奥にいらっしゃるんだという。被害は、今のところはこの辺りで留まっている。

「捕縛結界——魔制環」

お札を指に挟み、気を籠める。感覚が広がり、ギリギリまで広げて円を閉じる。淡い青色に光るお札の文字に静かに息を吐き、お札を地面に張り付けた。

「何をしたんですか？」

「魔物の被害を食い止めるのに、この辺りを結界で囲みました。結界の外に魔物は出られません」

目を見開く彼女……高音さん、だったか。その人に言って、辺りを見回す。魔物は依然増え続けているようで、大元を叩かないと埒があかないだろう。

「救援は、どうなってますか？」

「魔法先生、生徒が既に向かっていている筈です」

「こちらも仕事仲間を一人呼んでいますますが、待っている時間も惜しいですね。危なくなったら、あそこにいる彼女の傍に行ってください。結界を張りましたので、安全ですから」

「彼女は、一般人ですね？」

「私の友人です。傍に行くのは良いですけど、絶対に、一言も話しかけないで下さい」

言って、私は夕風を振るう。まずは近くの魔物を斬り捨て、そうしてから林に向かって走り出す。

「神鳴流——百花繚乱!!」

魔物を吹き飛ばす。が、すぐにまた次々と溢れるように出て来て、キリが無い。それも結界による弱体化が無い分、いつも侵入してくるのよりも強いから余計に厄介だ。早いところ、大元を叩かないと。

「はああああ!!」

一閃、また一閃。斬り捨てながら、先に進んでいく。右を斬り捨て左を突き刺し、後ろを振り上げ前を振り下ろす。四方八方、常に囲

まれたような状況だ。舌打ちの一つも打ちたくなった。

私が前の敵を斬り捨てた時、バンツと後ろから銃声が聞こえ、横にいた魔物が消滅する。後方の木の上から、真名が狙撃していた。

「助かる、真名」

「遅くなって悪かったね。学園長からの依頼だ。そっちの報酬は無しでいいよ」

「そうか、それは良いな」

他の援軍も到着した頃か。後方で僅かに人の声が聞こえる。

「神鳴流——雷鳴剣——！」

雷を纏った刀で、敵を一掃。真名が援護しているとはいえ、数で言えやはり向こうの方がまだ上だ。どうやって突破するか、そう考えた時だった。

『手を貸してやる、刹那』

エヴァさんの声が聞こえて、それと同時にどこからか感じる冷氣に身を震わせる。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック——！」

「っ真名、下がれ——！」

真上から、声が聞こえた。嫌な予感にその場から飛び上がり、真名に叫ぶと同時に自分も木の上を移動し距離を取る。

「来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』——！」

暗闇と吹雪が、襲いかかる。一点に集中させれば強力な攻撃力を持つが、広範囲に攻撃することも可能な、エヴァさんの魔法。

「くっくく、この辺りの結界の効果が弱いおかげで、私も楽で良いよ」

「エヴァさん……」

上空で、上機嫌に笑うエヴァさんと無表情の茶々丸さん。

「……危うく、巻き込まれるところだったんですが」

「お前なら心配は無いさ」

「……真名、無事か？」

「ああ…刹那に言われなければ、危なかったかもしれないがな」

真名の頬を汗が伝う。それはそうだ、一瞬にして目の前の魔物が一扫されたんだから。正直、さすがというしかない。

広範囲に対する攻撃は、あるにはあるが…あれは、今は使えない。いつでも使える技が欲しいところだけれど、刀だと難しいだろうか。

「刹那、ぐずぐずするなよ。この先のを何とかしない限り、何時までも終わらんのだろう？」

「聞いてたんですか？」

「茶々丸に調べさせた。龍宮真名、お前も遅れるなよ」

「分かってるさ」

真名に加えて、エヴァさんに茶々丸さんか……心強いこと、この上ない面子だな。

走り出し、湧き出る魔物を斬り捨てる。すぐに終わらせて、戻ろう。千雨さんの元に。

護り切れなかった日

真名、エヴァさん、茶々丸さんとの四人で森を駆る。進めば進むほど瘴気が濃くなってくることに顔を顰め、何体目とも分からない魔物を斬り捨てたところで、茶々丸さんが告げる。

「そろそろ、結界に辿り着きます」

「チッ、随分と手間がかかったな」

苛立ちにエヴァさんが舌打ちを一つ打って言う。確かに、沸いてくる魔物全部を無視することも出来なくて、相手をしながらだから無駄に時間を消費した。

目の前に現れた大柄な魔物を斬る。ズウンと地面に倒れた魔物の向こうに、黒くぽっかりと空いた穴と、見覚えのある男性の姿があった。

「あれが、今回の原因か？」

「ああ。ただ、あの先生が問題だ」

走りながら、真名たちに改めて今回の異常についての説明はしてある。解決策として考えられるのは、穴を塞ぐことだ。だが、進みながら奇妙に感じたことがあった。ただ穴が空いているだけにしては、魔物が多すぎる。それも、空いている穴を見て理由が分かったが。

「高音さんの話だと、寄生型に寄生された先生が得意としていたのは、結界に関する魔法だと聞いていたが……それだけじゃないようだ」

「どういうことだい？」

「たぶん、何らかの転移魔法の類だと思う。魔物は、結界の外から侵入してくるんじゃないかって、どこからか送り込まれてきてるんだろ
うな」

「それはまた……随分と面白い事をする奴がいるものだ」

感心した風にエヴァさんが笑う。

「まあ、誰かが狙って行っているのか、寄生した魔物が偶然にもそうしたのは分かりませんが……とりあえず、先にあの先生からやりましょう」

タツと軽く地面を蹴り、男性の前に移動する。見覚えはあるが名前も知らない相手だが、斬り捨てるわけにはいかない。刀の背を返し峰打ちで仕留める。そう思ったが、男性の背後から突然現れた触手がヒュッと風を切って襲って来たことに、即座にその場から飛びずさった。

「――ッ！」

距離を取り、男性の背後を見る。寄生型の魔物が触手を伸ばしていた。

「魔法の射手 連弾・氷の17矢!!」

エヴァさんの放つ氷の矢が穴から溢れる魔物を襲う。魔物たちは私たちが獲物と考えているのか、現れた傍から襲って来た。寄生された先生を殺すわけにもいかなないので、エヴァさんの魔法で一掃することも出来ない。厄介だな。

「刹那、あの男をどうにかしろ」

「私たちの方で魔物は相手をしよう。任せたぞ」

エヴァさんと真名の言葉に、頷く。魔物を気にしなくていいなら、私はどうにかして寄生している魔物を倒せばいい。

「刹那さん」

「茶々丸さん？」

刀を構えて身を低くした私に、茶々丸さんが声をかけた。

「寄生された男性ですが、防御に優れた結界を使います。ご注意を」
「……分かりました。ありがとうございます」

忠告に感謝して、私は地面を蹴る。寄ってくる魔物は一切、気にしない。他の三人が引き受けてくれたから、私の目標は一つだけだ。伸ばされた触手を斬る。背後に回り込み魔物を斬りつけようとして、ガキンツと音が響いた。

「チッ」

一旦、飛び退いて距離を取る。茶々丸さんが言った結界というのは、このことだろう。

強度としてはなかなか……壊すのに、苦勞しそうだ。

「神鳴流———斬岩剣!!」

ガキンツ、とまた音が鳴る。壊すことは出来たが、阻まれた間にその場から飛び退かれ、追いかける。追いかける間にまた結界が張られ、襲ってくる触手を斬り捨てて策を練った。

相手の足さえ封じれば、あとは神鳴流の技で終わらせることが出来

る。

「縛」

お札を一枚、投げる。躲された先に回り込み、斬りつけるが結界に阻まれ、また投げる、そして躲される。

五回、それを繰り返した。繰り返したところで、私は飛び退き言霊を唱える。

「捕縛結界——五星陣」

暗い森の中、五カ所で置かれたお札が光、互いを結び合う。作られた陣の中心にいたのは逃げ回っていた魔物。

投げたお札を相手に仕掛けるのが目的ではなく、陣を形成するに必要な場所に設置するのが目的だった。ただし、魔物に気づかれない様に上手く誘導しながらとなったので、少々面倒だったが。

手間はかかるが、陣の中にいる魔物は絶対に逃げられない。

刀を構え、振り抜く。ガキンと音が鳴り、張られた結界を破壊して、一気に気を高めた。

「神鳴流——斬魔剣 式の太刀」

人ではなく魔だけを斬る退魔の剣。魔物の悲鳴とも取れる絶叫が響き、その体が砂のように崩れて消えていく。

解放された男性が倒れ、私は穴の前に立つ。瘴気が流れてくるその穴は、ぽっかりと空中に存在し、私にはどういう仕組みで作られたものか分からない。

「……仕方ない」

とりあえずの応急処置をして、あとは他の先生方に任せるしかないか。調べる事さえできれば、閉じる手段もあるだろう。

「防御結界——魔護壁」

三枚のお札を穴を囲むようにして地面に張りつけ、繋ぐ。お札を繋ぐ線が壁の役割をするものだが、あまり広い範囲に張ることが出来ない。ただし、その分強度は高く、暫くはこれで魔物の侵入を防げる筈だ。

「真名、エヴァさん、茶々丸さん」

「終わったかい？」

「ああ。後は、侵入してきたのを始末するだけだ」

言って、辺りを見回す。見える範囲に魔物の影、影、影。ちまちまやるのは骨が折れそうだ。

「面倒だな。私が一掃してやる」

「あ、いえ……私がやります」

「刹那？」

エヴァさんを止めた私に、三人とも首を傾げた。彼女の魔法に任せても良いんだが、それだと他の先生や生徒が巻き添えをくわない保証が無い。それに、エヴァさんの事を良く思わない人がいないとも限らないし、何よりこれ以上、時間をかけたくない。

「一気にやります」

お札を取り出し構えて、私は翼を広げた。自然と、感覚が研ぎ澄まされる。体の中から沸き起こる気を集中させ、円を広げる。魔制環

で広げた円の感覚は残っていたから、そこまで難しくは無い。

「退魔結界——魔滅環」

唱えた瞬間、お札が光り足元から見えない何かが一気に広がっていく。それは触れたそばから魔物たちを消滅させ、私の体から力を奪っていく。

魔制環と魔滅環。本来は二つで一つの技だが、後の一つを使うことは滅多にない。

魔制環で円を作成し魔物を捕え、魔滅環で円の中の魔物を全て一掃する。説明だけならば広域魔法のように魔物を一掃できる術だが、魔滅環には欠点があった。

大量の気を消費する。というより、術者の持つ気の殆どを使って魔物を消滅させるので、自滅技とも考えられる。

なので今回のように、次から次へと魔物が溢れてくるような場合は、使うことが出来ない。使ったなら、私はその後、戦うことが出来なくなるからだ。

「——ッ……」

術が終わり、お札は炎に包まれ灰と化した。これで、侵入してきた魔物は一掃できた筈だ。

ぐらりと視界が歪み、傾いた私の体を茶々丸さんが支えてくれる。

「ありがと、ございます……」

「顔色が優れません。大丈夫ですか？」

「はい……さすがに、疲れましたけど……」

頭がくらくらする。正直に言うと、立ってるのも辛かったりするが、ここで倒れるわけにもいかない。

支えてくれた茶々丸さんから離れ、翼を仕舞い夕凧を勾玉に戻す。銃を担いだ真名が、辺りを見回して感心したように言った。

「凄い技だな。使い勝手は悪そうだが」

「ああ……多用も出来ないし、正直、戦闘中に使うような技じゃない」

「確かに。その様子だと、お前一人の時にも使えるものじゃないだろう」

「そうなんですよね……」

改良の余地がある術の一つだ。もう少し消費する気の量を減らせればいいんだけど。

「それじゃ、急いで戻りましょう」

「大丈夫なのか？まだふらついているが」

「千雨さんを、待たせてるんです」

だから早く、戻らないといけない。私たちは倒れた男性を連れて、森の外へと急いだ。

森の外に出ると、何人もの魔法教師と魔法生徒の姿があった。茶々丸さんが背負っていた男性を地面に下す。

「刹那君」

「高畑先生……」

寄ってきた高畑先生に、男性の事や穴の事を説明する。たぶん、先生が学園長に報告するだろう。

「さっき、魔物が一気に消えたんだが、それについては？」

「……私の術です」

「刹那君の？」

「はい」

高畑先生の向こう、何人かの人間が目を見開いたり声をあげたりするが、気にしないでおく。今、そちらに構っている余裕は私に無い。

「そこにいるエヴァンジェリンについても、説明願おうか？」

一人の男性教師が、前に出て来てエヴァさんを指差して言った。嫌悪感のにじみ出た声を、はんとエヴァさんが鼻で笑った。

「なんだ、私がいると拙い事でもあるのか？」

「今回ののは、お前が起こした事件なんじゃないのか！？」

「こんなことをして、私に何の得がある」

間に私を挟んだまま、教師とエヴァさんが会話をする。といっても、一方的に教師の方が詰め寄るだけで、エヴァさんはそれを馬鹿にしてすらいるが……私は、体力的にも精神的にも、余裕が無いと言っているのに。

「彼女は、私の手助けをしてくれました。今回の事件に、全く関係はありません」

「しかしだな――」

「私の目の前で彼女は私を助ける行動をしました。その結果、魔物の侵入してきていた穴に辿り着き、操られていた人を助けることが出来ました。彼女が事件を起こしたとして、全てを解決させて得られるメリットはなんでしょうか？」

「うぐっ……」

無駄な話はしたくない。早々に話を切り上げて、私は固い表情で話を聞いていた人たちの間を抜ける。纏っていた服の上着を脱いで、顔も確認する。返り血の確認だ。斬った魔物が消滅するといっても、血が出ないわけでは無い。当然のように、私の服は血でべったりだ。そんな状態で彼女に話しかけるわけにもいかないので、血だらけの上着はとりあえずその辺に捨て置いて、ようやく彼女の元に向かえた。

「――千雨さん」

至極ゆっくりと、街灯に寄りかかる千雨さんの前に膝をついて、話しかける。顔色が良いとは言えないが、魔物が消えたことで多少は落ち着いたんだろう、震えも止まっていた。ただ、私が握らせたお札を持つ手は硬く握りしめられたままで、私はその手をそっと、自分の手で包む。

「お待たせして、すみませんでした」

「刹那……」

「全部、もう終わりましたから。もう、千雨さんを傷つける存在はいないですから」

大丈夫ですよ。笑いかけようとして、唇が笑みを作れなかった。

「……遅くなって、ごめんなさい」

言葉が零れ、衝動のままに千雨さんを抱きしめる。強く、強く力をこめて、そうして感じる彼女の体温に、また言葉が零れた。

「傷つけてしまつて、ごめんなさい。恐い思いをさせて、ごめんなさい。護るって、言ったのに……気づかせてしまつて、ごめんなさい」

千雨さんを、護りたかつた。彼女を襲う危険から、平和な日常を望む彼女が、こちらに気づかないで済むように、護りたいと思つたのに。

このちゃんと、千雨さんは違う。このちゃんは、このちゃんが望む望まないに関わらず、力がある故に日常だけで過ごせない。彼女の周りが、それを許さないから。

でも、千雨さんは違つた。彼女は日常で過ごすことも出来た。ただ、少し息苦しくて、人と分かり合えない部分があつたけれど。欠片を見て、それで少しでも息苦しさから解放されて、楽になれるならそうしてあげたいと思つた。そのまま、日常で過ごし続けてくれればいいと思つた。間違つてもこちらを見ないで済むように、護ろうと思つた。

「護り切れなくて、ごめんなさい」

結局、彼女にこちらを見せてしまった。関わらせてしまった。私は彼女の平和な日常を、護れなかつた。

「……これ、が……お前の、言つてた……世界、なのか？」

「そうです」

「………あ、あ……」

一際強く、抱きしめる。背中に回つた千雨さんの手が、私の服を強く掴んだ。

「んだよ、これっ………こんな、こんなのっ………」

「……ごめんなさい」

「おか、しっ……おかしい、だろ、こんなあ……」

「千雨さん……」

ボロボロと涙を流した千雨さんの頭を抱える様に胸に抱いて、頭を撫でる。この世界は日常を生きる彼女には辛すぎて、理解も、拒絶も、今は出来ないだろう。ただ、振り払っても襲ってくる恐怖と混乱に、私はこれ以上、彼女がこの世界を見ないで済めばと、彼女が何も見えない様に彼女を抱きしめ続けた。

「……桜咲さん、その人をこちらに」

「ッー!!」

ビクッと大きく千雨さんの体が震えて、私は顔だけを振り返り声をかけてきた相手を睨む。

「彼女は、私が何とかします」

「しかし、彼女は一般人だろ？ 記憶の操作を行わなければ」

「……」

記憶の操作。一般人に魔法が知られた場合に行われる、適正な処置。それが本当に適正かどうかを考えるつもりは無い。

ただ、私が気がかりに思うのは、千雨さんに記憶の操作がどこまで効果を持つのか。そして彼らが、どういう風に千雨さんの記憶を操作するのかだ。

認識阻害の影響を受けない千雨さんに、誤魔化しの類は通用しない。今回の事だって、この辺りに人払いの魔法はかけられていた。けれど、千雨さんにそれは通用しなかった。その彼女の記憶を、本当にうまく操作できるのか。

そして、仮にそれが出来たとして、彼らは千雨さんの記憶をどう処

理するつもりなのか。今日は何事も無く帰ったと思わせるのか。それが一番無難だろう。だが、もしさらに遡って、魔法に関する記憶そのものを消すのだとしたら。私が彼女に教えた欠片は、消えるのか消えないのか。消えてしまえば、彼女は理解できない息苦しい日常にまた戻ることになり、更には欠片によって繋いだ私との関係についてでも混乱するだろう。一つが消えれば、芋蔓式にたくさんの事が変わる。それでまた苦しむ千雨さんは見たくなかった。ならば、どうするのか。残された道は一つしかない。ただ、その一つの先はまた分かれ道で、出来るなら彼女には多くの道を与えたかった。

「私の方で、対処をします」

「しかし、それは我々の仕事で――」

「彼女は私の友人です。親しい相手の方が、彼女も余計な混乱や不安を味わわないで済みます。それに、この場で彼女がこれ以上、他の人間に関わるのは、良いとは言えないでしょう」

「というと？」

「記憶の操作が完璧に行われるとは限りません。この場で会った人に対して、後日会った時に既視感を覚えたりしたら、そこから記憶が呼び起される可能性だってあります。それなら、普段から頻繁に会う人間の方が、その可能性も減るでしょう。昨日も今日も会っているんだから、既視感の一つも覚えて当然。それで終わります」

もっともらしい事を並べて、それが通用するのかどうかを考える。これで向こうが納得するならそれでいいだろう。納得しないなら、強引にでも彼女を連れて行く。絶対に、これ以上彼女にこちらの世界を見せるつもりは無い。

「刹那……」

「大丈夫ですよ」

千雨さんが不安げに瞳を揺らして見上げてくるのに、今度こそ笑って返す。さりげなく彼女の眼鏡を取り、囁いた。

「私が傍で、護りますから。眠っていてください」

「……………あ、あ…」

安心して、眠ってくれればいい。閉じていく瞼から零れた涙を拭って、優しく頭を撫でた。

「……………彼女も疲れていますので、そろそろ失礼します。いいですよ、ね？」

「……………ああ」

眠る千雨さんを抱き上げて、近くに落ちていた鞆を拾おうとして気づいた。私が渡したお守りが、近くに落ちていて。それも拾って、立ち上がる。

『エヴァさん』

『なんだ』

『別荘、お借りしても良いですか？一晩だけだと、千雨さんも落ち着くのは無理でしょうから』

『構わん。私たちは先に戻っているぞ』

『分かりました。それと、今日はありがとうございます』

『……………ふんっ』

こちらから繋いだ回線で、エヴァさんをお願いして私は歩き出す。とりあえず、一度寮に戻って、それからエヴァさんの家に向かうことにしようかな。

護り切れなかった日（後書き）

言い分とかいろいろ細かいところはあまり突っ込まないでくれると助かります。

日常から非日常の日

ベッドに千雨さんを横たわらせて、布団をかける。鞆はその辺に置いて、眠っている彼女の寝顔を眺めた。

真名と共に一度、寮に戻ってから。私の部屋に向かい、見張りに注意しながら窓から外へ出て、エヴァさんの家に向かった。結果からすれば、見張りはいなかった。私に気づかれない距離から、監視をしていたのなら別だけれど。

仕事である以上、真名は依頼主である学園長への報告の義務があるが、千雨さんの事を報告はしなくてくれた。真名が関わったのは、侵入してきた魔物の討伐、それだけだと。

それ以外の事は、おそらく他の教師や生徒が報告するだろう。真名にはまた、お礼をしないといけないな。

あと、学園長の依頼なので私が真名に報酬を払う必要は無いが、それとは別件でこのちゃんの事を頼んでおいた。別荘に籠ると、一時間は最低外に出られないから、何かあった時は真名に動いてもらえるように。これは、別荘を使うとき、いつも依頼していることなんだがな。

「ッ……」

くらりとまた襲って来た眩暈に、壁に寄りかかり座り込む。殆ど残っていないなかった気を使ってエヴァさんの家まで急いで来たが、さすがに無理をし過ぎたみたいだ。正直、エヴァさんに別荘を借りた理由は、千雨さんの為半分、私の為半分だ。出来れば暫く休んでいた

「……………」

もう一度、ベッドで眠る千雨さんを見て。私はそっと、瞼を閉じていった。

よく分からない、たぶん化け物といっていい奴らに囲まれたとき、私は凄く混乱していた。混乱と、感じたことの無い恐怖。正直、死ぬんだと思った。助かりようも無い事態だと思った。

でも、そこに刹那が来て。私は混乱して、恐怖に震えていたけれど……心の底から、安心したんだ。

刹那は、やれるだけのことをするんだと、言っていた。私に危険が迫った時、自分のやれるだけの事をする、私に言った。

そして、刹那はその言葉の通りに、私を助けに来てくれた。どういう仕組みかは分からないけれど、化け物は私の傍に来ることは無かった。来たそばから消えて行って、護られているのが分かった。

他のあそこにいた人間の顔は、殆ど見ていない。暗かったし、何より顔をあげるのが恐かったから。だから私は、目を閉じることも出来ないで、刹那に渡された紙切れを握りしめて、じっとしていた。それからのことは、実はよく覚えていない。刹那が戻ってきて、私の手を握ったことに凄く安心していたのは、覚えているけれど。

『護り切れなくて、ごめんなさい』

化け物から私を助けた筈の刹那が、そう謝ってきて。謝る必要はねえよとは、言えなかった。

私の日常が崩れて、刹那たちの住む世界が目の前に広がった。そうして私が感じたのは、恐怖だ。平和な日常が消えていく、恐怖。次々と突きつけられる非日常。誰かが言った記憶の操作という言葉に、恐怖した。私が私でなくなると思わされるような、恐怖。これ

以上、何も見たくないと思った。今はもう、何も知りたくない。

『大丈夫ですよ』

刹那には私に何も見えない様にしてくれた。眠っていいと言ってくれた。あいつが傍で護ると言ったから、それならと安心できた。刹那は護り切れなかったと言ったけれど、私は十分に護られていると、そう思ったから。

だからただ、今は眠ろうと。刹那を信じて眠っていようと、思ったんだ。

目を覚ます。別荘内は、この麻帆良で一番安全だと考えられる、安全圏だ。外にはエヴァさんと茶々丸さんがいるから。おかげで、随分と深く眠っていた。

別荘内にも、朝と夜はある。エヴァさんの話だと、それもエヴァさんの気持ち一つで変えられるそうだが、今の設定ではきちんと再現されている。

外は暗かった。半日以上、眠っていたんだろうな。体がだいぶ軽くなった気はするが、眠り過ぎたせいかな、頭が少し重い。

「んっ、うー」

ぐいっと両腕を上にも、背を伸ばす。座って眠るのには慣れていたから、それほど辛くは無い。

そのまま、軽く体を解すのに腕を伸ばしたり、足を伸ばしたりして、千雨さんを見た。

起きた様子も無ければ、起きる様子も無い。そんな彼女に、眠り過ぎと思うことも無い。

「いっぱい、眠ってくださいね」

日常を崩された衝撃は、私には計り知れないものだ。ましてや彼女は、心底平和な日常を過ごすことを望んでいたのだから、その衝撃も人一倍だろう。さらに言うなら、彼女は死を覚悟するような状況に陥った。普通の強盗に襲われたとしても、彼女のような人間が立ち直るのに時間は必要だろう。

時間は、いくらあっても足りないと言っていい。だから、たくさんの時間を用意するために、彼女を別荘へ連れてきた。これもまた、彼女にとっての非日常だとしても、時間をあげたかった。

「さて……どうするか……」

とりあえず、千雨さんが目覚めるまでの間、何をしているか。そう思って、くうっと小さくお腹が鳴った。

「……何か食べるか」

私以外は聞いていないにしても、何となく気恥ずかしくなりながら、部屋を出る。未だ眠る千雨さんの分も、用意しておくことにした。キッチンに立ち、手軽に食べられる物としてサンドイッチを作ることにした。中身として野菜や卵を用意して、二人分作る。大きめのお皿にまとめて乗せて、部屋へ戻って小さなテーブルに乗せる。

「……」

千雨さんが起きる気配は無い。そのまま、また部屋を出て今度は書庫に向かった。使われていない部屋の一角が、エヴァさんが長い年月で集めた本の置き場に使われている。

初めて見た時、西洋だけではなく、東洋の本まであったのには驚いた。エヴァさんの話だと、集めたは良いが興味が無くて読まなかったんだとかで、片隅で埃を被っていたが。

お札に関する本もあって、見つけた時から何度もお借りしている。古い知識だが、だからこそお札を作るのに役立つ、私の知らない知識もあった。

積まれた本の一冊を持って、部屋に戻る。テーブルをベッドの横につけて、本を片手に食事を始めた。

古い知識を読み進めながら、必要になりそうな知識を選ぶ。探しているのは、解呪に関するものだ。

「…………やはり、そう簡単にはいかない、か」

顔を顰める。

お札の用いられる用途として最も多用されるのは、結界だ。さらに言うなら、何か邪悪なものを封印する際に用いられることが多い。

次いで使われるのが、身を守る結界だ。他にも、捕縛に使ったりもするが、それは封印の派生といってもいい。

攻撃用のお札もある。私は殆ど使わないが、陰陽道において攻撃用のお札は重要だ。炎、水、雷と、召喚できるものもお札の種類で様々だ。

後は、式神を召喚したり、身代わりを作ったりするのにお札を使うもする。使おうと思えばお札は何通りにも使い道がある。

だが、いくら探しても、解呪に関するお札は見つからない。作られていなかった。

悪霊が憑りついたのであれば、封印の派生でそれを祓うお札は存在する。だが、毒や麻痺を治療するお札は無い。ある意味では、悪霊などよりも目に見えないそれを、治すお札が今はまだ存在しない。

「……………」

修学旅行まで、一週間を切った今、私はそのお札を作ろうとしている。必要だから。

このちゃんがネギ先生と仮契約する理由となったのは、ネギ先生の石化を治療するためだ。治癒に秀でたこのちゃんの力を使う為に、潜在能力を引き出すのに仮契約をして。結果として、その時はそれでよかったが、後になってツケが回った。また同じ間違いを犯すような事態を、引き起こせない。

回避できるなら、回避する。私がしようとしていることは、回避できなかった場合の、保険ということになるのだが……なかなか、思うようにはいかない。

「治療では無く、何か別の方法で考えるべきか。身代わり……いや、違うな……」

考えるが、いい案は浮かばない。もっと他にも調べてみないといけないだろう。

小さく溜息を吐き出して、次の項目に目を通した時。微かな身動きの音を聞いて、千雨さんを見た。

「ツ、ん……」

「……目が覚めましたか」

ゆっくりと開く瞼に自然と笑みが浮かぶ。千雨さんはそのまま、何度か視線を彷徨わせてからゆっくりと体を起こして、ぼんやりとした表情で部屋を見回した。

「……、は？」

「安全圏ですよ」

「……それ、答えになってなくねえか？」

「かもしれませんね」

呆れた顔をする千雨さんに笑って言うてから、食べますかとサンドイッチを指差す。数秒の思案の後、彼女がじゃあと頷いたので、とりあえず一つ渡した。

サンドイッチに挟んだレタスがパキパキと音を出すのを聞きつつ、読んでいた本を閉じて机に置く。千雨さんは、とても落ち着いていた。

「…………千雨さん」

「ん？」

サンドイッチを食べ終えた千雨さんに、声をかける。笑みを浮かべることは出来そうも無いことだった。

「護り切れなくて、すみません」

いくら謝ろうと足りない。護ると言ったのに、私は彼女の日常を護れなかった。自分の力が足りなかったが為に、彼女の日常を壊してしまった。それが、悔しかった。

「……………んで、謝るんだよ」

「千雨さん…………？」

「なんで、謝るんだよ。刹那は、私を護ってくれたじゃねえか」

意外そうに、心底不思議そうに、千雨さんは私に言った。

「あんな状況から、私を助けてくれたのはお前だろ。刹那が来なかったら、私はあそこで死んでも、おかしくなかった」

「…………そうじゃ、ないんです。私は、もっと早く千雨さんの元に駆

けつけないといけなかったんです」

彼女の日常を護るというのなら、もっと早くに駆けつけないといけなかった。それが出来なかったのは、私に力が無かったからだ。手が届かなかったせいで、千雨さんを護ることが出来なかった。

「千雨さんに、こちら側を見せたく無かったんです。知ったら、そのままでは戻れない世界でしたから」

「あー……まあ、確かに。正直、ありえねえよなあ。あれが、刹那の言ってた裏事情ってやつか？」

「……ええ。それに関係する事です」

「やっぱり、な……」

……違和感を、覚えた。

「千雨さん……大丈夫、ですか？」

「あ？ ああ、まあ私も吃驚してるんだけど……思ったよりも、落ちていてるんだわ。信じられねえものを見たって気はしてるんだが、見ちまったもんは見ちまったしな」

「……」

奇妙だと思った。落ち着きすぎている千雨さんが、私にはとても奇妙に思えて仕方が無くて。

出所の分からない焦りが沸いてくる。このままではいけないと、勘にも似た何かが訴える。

「なあ、刹那。あれってなんなんだよ。前に、お前が麻帆良には異常がたくさんいて、それが容認されているって言ってたけど、あれもそうなのか？」

「……千雨さん」

「同じ年くらいの奴とか、先生とかたくさん来てたけどよ。みんな揃って戦うって、どういうことだ？」

「千雨さん」

「しかも、なんかよく分かんない力みたいなの使ってたし。なんだっけ、魔法の、しゃ、しゅ？　だっけ？　魔法って、マジで魔法なのか？　呪文唱えてみたい奴か？」

「千雨さん」

「あと、なんか言ってたような……そうそう、記憶の操作とか、そんなこと言ってたよな。あれってどういう事だ？　私に何するつもりだったんだ？」

「千雨さん」

「記憶を弄って、私をどうするつもりだったんだ？　何をするつもりだったんだ？　私は、私の知らないうちに何かをされているのか？」

「千雨さん」

「私が覚えてないだけで、私の知らない何かがあるのか？　私に何かあったのか？　私の記憶は、本当に私の記憶なのか？」

「——千雨さん！」

「……」

強く、名前を呼んだ。こちらの声が一切、耳に入っていないように話し続けた彼女は、ぷつりと言葉を途絶えさせて、何も見えていないかのように視線を彷徨わせた。

……千雨さんは、壊れかけている。私にはそう見えて仕方が無かった。

もしかすると、本当はあの場で、千雨さんを渡した方が良かったかもしれない。認識障害が通用しない彼女にも通用する手立てを、彼らは持っていたかもしれない。そうして今日の、見てしまったものの記憶を消したなら、彼女は何も知らずにまた明日を迎えることが

出来たかもしれない。

だとすれば私はまた、間違いを犯したことになる。

尤もらしいことを並べ立てて、千雨さんを彼らに任せられない理由を作った。震えていた彼女が、泣いていた彼女が、選択も許されな
いまま知らず知らずにこちらに関わることになることから、護りた
かった。彼女に出来る限りの選択肢を与えたいと思った。

けれどそれは全て、嘘にも等しい建前だ。本当は、護り切れなかつた彼女をこれ以上、護れなかったことにしたくなくて、私は私の為に彼女を連れてきた。彼女の為と言いながら、私はこれ以上、自分が何かを護れなかったと考えたくなかっただけだった。

そうしてまた間違いを犯し、千雨さんを苦しめている。私は、酷く、愚かで、狡い。

「……千雨さん」

けれど、そうだったとして。間違いを犯したとして、私が目の前の彼女を放っておくことは到底許されない。

間違いを犯したのなら、私はそれを踏み越えて進むしかない。だから私は、私にやれるだけのことをして、彼女を今度こそ護る。

少なくとも、壊れかけている彼女をこのまま壊してしまうわけには、
いかない。

「千雨さん、思ったことは、全部話してくれていいですから」

「……別に、何もねえ」

「あの時、あの場所で、見たものに、何を思ったのか。何を感じたのか。全部、言ってください。お願い、ですから」

「……………」

感情を、抑え込むことは出来る。けれど、抑え込み続けることは酷く難しく、負担を強いる。抑え込み続けた感情は、見えないだけで膨らみ続けて、やがて爆発する。それがいつになるかは、人それぞれ。

けれど、長く、大きなものを抑え続ければ続けるほど、その人はだんだんと良くない方へと変化していく。そうして爆発した時、それは時に人を傷つける刃にすらなる。

「感じた恐怖でも、嫌悪でもなんでもいいんです。私に対する怒りでも構いません。お願いですから、抑え込もうとしないでください」
「……………」

千雨さんは、目線をシーツに下して、躊躇するように口を開けては閉じるを繰り返した。言ってもいいのか、そんな目がチラリと向けられて、頷き返した。

「――死ぬんだと、思った」

皮切りはその言葉から。

「化け物がたくさんいるって思った。私は殺されるんだって思ったら、恐くて仕方が無かった。震えが止まらなくて、何度もこれは夢だって思った。悪い夢だって、現実じゃないって思った」

「恐くて、当たり前ですよ。夢だと思ったかったのも、当たり前です」

「化け物の手が伸びてきた時、殺されるって……誰でもいいから、助けてくれて思ったら、刹那が来て。凄く、安心した」

「……言った、じゃないですか。千雨さんに危険が迫ったら、私はやれるだけの事をして護る、って」

「ならっ、なんでもっと早く来てくれなかったんだよ!？」

ガシッと腕を掴まれる。跡がつくんじゃないかってくらい、強い力。

「見たくなかった！知りたくなかった！！私は、私は普通の日常を過ごしていたかっただけなのにっ、あんな現実だと思えないようなことがあるなんて、知りたくもなかった！！」

「……」

「非現実なんて大嫌いだっ、あんなの、あんなの信じられるわけないだろ！？見たくない、知りたくない、気づきたくなかったのに！！なんで、もっと早く来てくれなかったんだよ！！護る、って……護ってくれるって、言ったじゃねえか！？」

「っ……」

加護を求めるのは、悪い事では無い。自分でもどうしようもない状況で、その加護を与えようと言われたなら、求めて当然。与えられた加護を、信じるのも当然だ。

千雨さんは、私が護ると言ったことを、信じていた。結果として、命を護るという意味では、護れた。けれど、彼女が大切にしていた日常は、護れなかった。

欠片でも、彼女をこちらに関わらせたのは私で。私には、彼女を護り抜く覚悟が必要だった。覚悟は、していた。手の届く範囲で、私は私に護れるだけ、護ってみせると。その範囲を、見誤った。護り切れなかった。

その代償が、これだというのなら。千雨さんの嘆きが、怒りが、その代償だというのなら。私は彼女を、酷く、傷つけた。

「こわっ、かった……凄く、恐くて、恐くて……何も、知らずにいたかった、のに……」

いつしか彼女はまた涙を流し始めて、私の腕を掴む手は縋るように

変わっていた。

言葉は途切れ途切れの嗚咽に変わり、それを私は黙って聞くことしか出来ない。

「ふっ…うえ…ひっ、ふ…」

…私は、間違えを犯したかもしれない。けれど、立ち止まることは許されず、それを飲み込み、踏み潰して私は、彼女を今度こそ護ってみせよう。

受け入れた日

今日の朝食は目玉焼きとサラダとコーンスープ。ご飯とパンはどちらにしようか悩むので、好きな方を食べてもらうことにする。

別荘に入ってから、今日で四日目だ。一日目、目覚めた千雨さんが感情を吐き出してまた眠った。二日目、目覚めた千雨さんに私は謝られてしまった。謝ることは無いと言っても、謝られてしまった。

それ以外は、殆どぼんやりとしていて部屋から出ようとしない。三日目、やはり部屋から出ようとせず、ぼんやりとしていた。食事は二日目も三日目も部屋で食べることとなった。

そして、今日。朝食を持って行こうと思ったところに、千雨さんが部屋から出てきた。

「今日は、こっちで食べますか？」

「ああ……悪かった、な」

「お気になさらず」

本当に、気にしなくていい。むしろ、こんなに早く出てこられたことに私が驚くくらいなんだから。

二人で向かい合って食事を始める。最初は食欲もあまりなかった千雨さんも、今ではだいぶもとに戻ってきていた。ちなみに私も千雨さんも主食はパンだった。

「なあ……」

「なんですか？」

食事中、手を止めた千雨さんにつられて私も手を止める。視線を手

元に向けた彼女は戸惑うように瞳を揺らして、意を決したように顔をあげて言った。

「教えて、くれないか……私が、知らない事」

「……いいですよ。でも、それは食べ終わってからにしましょう」

頷いた千雨さんがまた食べ始めるのを見つめて、私は僅かに目を細める。私は彼女に、どれだけの選択肢を残せているんだろう、そう思わずにいられなかった。

食事を終えて、場所を移動しソファに座る。お茶を淹れて、場の準備を整えてから、緊張した千雨さんの向かい側に座った。

「さて……では、まず一番最初に、千雨さんに選んでもらいたいんですが」

「私に？」

「あの夜に見たものの記憶を消して、これまで通りそういう存在があるのだと認識した日常に戻ると、一切合切のあの夜に関係する記憶、私が教えたことも含まれますが、そういった記憶を消して日常に戻るのと、このまま私の話を聞いて、死の危険が付き纏う裏事情を知るの……どれがいいですか？」

言葉を紡ぐために千雨さんの目が見開かれていった。わなわなと唇が震えだし、やがて絞り出すように問いかけられる。

「な、んで……そんなこと、聞くんだよ……？」

「今ならまだ、記憶を操作した後の弊害が少なくて済むからです。全てを知ってから、記憶を操作するよりもずっと」

「……………いらねえ、よ」

そう言っつて、千雨さんは首を振った。

「確かに、忘れたい記憶だけど……忘れて、どうにかなるもんじゃねえだろ。二日間、ずっと考えてたんだ。知らないまままでいたら、私はまた、同じような状況になるかもしれない」

「では、話を聞くんですね？」

「ああ」

「……これまでと同じ日常には、本当に帰れませんよ？」

「……ああ」

「なら、話します」

千雨さんは、千雨さん自身が考えて下した決断の元、私の目の前にいる。なら私は、それに応えよう。

「千雨さんは、魔法という存在を信じますか？」

「魔法……」

「……魔法、魔法使い。それは、本当に存在します」

ゆっくりと、時間をかけて。千雨さんが混乱することの無いように、慎重に、丁寧に。

魔法、魔法使い、麻帆良の現状、魔物、気、呪術師……たくさんのことを、話した。現実主義者には厳しすぎるであろう非現実。頭を抱える彼女を前に、全てを話し終えた私は、ただそこにいる。そこで彼女が落ち着くのを待続けた。

「……………なあ」

「はい」

「一つ、言っつていいか？」

「どうぞ」

「ありえねえ」

「それが有り得るから、お話ししたんです」

「……………」

見るからにぐったりとした表情で、彼女はソファに身を沈める。そのままあのうーだの唸り始めた彼女に、対して私は感心すらしていた。こんな話を聞かされて、取り乱しもしなければ騒ぎもしない。戸惑いや混乱こそすれ、それでも冷静に考えようとしている。非現実をきちんと見据えようとしている。

初日に思ったことを吐き出させたのが良かったのか、それとも彼女の順応力がまた現実主義者でありながらも高いのか。どちらにせよ、冷静に考えてくれることは助かるばかりだ。

「とりあえず、魔法だとかそういう事は、分かったんだけどよ……」
「ええ」

「……私は、これからどうなるんだ？ いや、どうすればいいんだ？」

ああ、ほらやっぱり。彼女はとても冷静に、自分の立場を理解している。

「本来なら、魔法の存在を一般人が認識した場合、記憶の操作という手段がとられます」

「ああ」

「千雨さんも、そうするのが一番だったと思います。ただ、貴方の場合は問題が一つあって、それが出来ない可能性があります」

「……認識阻害を、受け付けないんだっけか？ 私は」

「おそらく。完全に受け付けないのではなく、効きづらいだけかもしれないが……どちらにしろ、人払いや認識阻害といった一般人対策の魔法や結界で効果が無いなら、同じような記憶操作による効

果もあまり期待できません」

だから私は、千雨さんを彼らに任せずに連れて来たんだ。

「……なので、千雨さんにはそれ以外の選択肢から選んでもらわなければなりません」

「ああ……」

「二つ目は、知ったうえで今までと変わらない日常に、戻ることです。知らない時よりも、自分で遭遇しない様に注意すれば回避できることもあるでしょう。この場合、私は今まで通り、千雨さんが危険に陥った時、私にやれるだけの事をして貴女を護ります」

「……ああ」

「二つ目は、力をつけること。またああいった事態に巻き込まれたときに、自分で逃げられるように何かしらの力をつけてもらいます。ただ、力をつけることで増える危険もあるでしょう。一つ目と同じく私も貴女を護りたいと思いますが、危険が増すことを理解してください」

「……ああ」

「大きく分けて、この二つです。どちらにしろ、千雨さんの体質をどうにかできない限り、危険は消えないと思ってください」

「……………分かった」

たっぷりと、間をあけてから頷いた千雨さんは、静かに息を吐き出して難しい顔をして目を閉じた。

「考える、時間をくれ」

消えそうな声で呟かれた言葉には、声も無く頷き返した。

一度、部屋に戻った千雨さんを見送って、私はまた本を開く。彼女がどんな決断を下すのかは、私にも分かり得ないことだ。ならば私は待つしかない。

本を読み続けて、一時間。戻ってきた千雨さんの瞳には強い意志が宿り、その目は私を真正面から見つめて離さなかった。

「色々、考えたんだけどよ」

「決まりましたか？」

「ああ——私は、力が欲しい」

それが彼女の答え。今まで歩んでいた道よりも、茨の道。

「力を得るのは、大変な事です。力を得てからも、大変な事は消えません。それでも、構いませんか？」

「構わない。私は、知らなかったことを知ったから。今まで通りの生活をするにしても、その危険が消えないってんなら、自分の身を護れるようになりたい」

「……分かりました」

彼女の下した決断に、私が出来るのは応える事のみ。ただ、やはり消えないのは、彼女にその道を選ばせる事態を作ってしまった自分への怒りと後悔。

「千雨さん」

「ん？」

「……護り切れなくて、選ばせてしまって、ごめんなさい」

「だから、なんで謝るんだよ」

心底、呆れたというように。千雨さんは言って手を伸ばしてきた。

「おりゃ」

「うにゃ!？」

変な声が出た。ゆっくりと伸ばされたと思っていた指が、ビシッと私の額を突き刺したからだ。油断していただけに本気で驚いてしまった。

そして千雨さんの手は変わらず額の上でぐりぐりと力を加え続け、思わず紡いだ言葉は戸惑いに満ちていた。

「ち、千雨さん……?」

「確かに、最初は私も、なんで早く来なかったとか色々言っちゃまったけどさ」

「あう……」

「でも、そもそもお前が私に色々と教えてくれなかったら、私はありえない出来事に未だに苛々していたかもしれないし……いや、今でも苛々してはいるんだけど、お前に話聞いてもらえば大分楽になるし」

「そう、ですか?」

「そうなんだよ。それにさ、お前が私に話しかけて……あれだ、護るとかお前に全く得の無い約束をして、それを護りに助けに来てくれただろ」

「でも、千雨さんの日常は護れませんでした」

「馬鹿かったの」

「うにゃっ」

人差し指に追加で中指。二本で同時にぐりぐりされて、痛くは無いけれどどうすればいいのか分からなくて困る。

「お前が来なかったら、私は間違いなく死んでた。それをお前は助

けてくれた。それで充分だろ。私の日常まで護ろうなんて、どんだけお人好しなんだよ」

「けど……」

「けどじゃねえっての。それに、お前は私に選ぶ機会をくれたじゃねえか」

一際強く押されてから、指が離れていく。千雨さんは複雑そうな顔をして、言葉を続けた。

「記憶の操作とかそういうの、するかしないかも私の意思で選ばせてくれただろ。あの場にいた奴らだと、なんかこっちの意思を無視してそういう事、してきそうだったけど」

「……それが、一番いい方法ですから」

「だとしても、お断りだったの。私知ってるはずなのに知らないなんて、んな事あってたまるかよ。……あと……」

「あと？」

「……もしも、刹那が言うみたいに、記憶の操作が上手いかなかったら……私は、どうなってたんだろうな」

「それは……」

それは、私にも分からない。私がしたように、何らかの選択肢を与えたのか。それとも、強制的に何かの道を進ませたのか。あるいは、何もしないでいたりもするのか。

「まあ、それは分かんない事だから言っても仕方ねえけどよ……少なくとも私は、刹那が私に、選ぶ機会をくれたことに感謝してるんだ」

「千雨、さん……」

「だから、んな謝るなって。っつか、お前が全部、背負う必要も無いだろ？だからさ」

唐突に言葉を切って、千雨さんは少しだけ私から視線を逸らした。それから、どこか恥ずかしそうに頬を染めて

「護ってくれて、ありがとな」

そう、言ってくれた。たったその一言で、そんな権利も無いはずなのに私は……凄く嬉しくなった。

「……千雨さん」

「んだよ？」

「これからも、よろしくお願いしますね」

「……ああ」

薄らと笑った千雨さん。私は、彼女を護れたんだと……思っても、いいんだろうか。分からないけれど、でも私は、確かに笑っていた。

受け入れた日（後書き）

いろいろスルーしてもらえるのが助かります。

報告活動の日

学園長室に呼び出された。これで二度目だ。

昨日、千雨さんの決意を聞いた後は、彼女にはそのまま帰ってもらった。今後の彼女の方針を考えるうえで、エヴァさんにも協力してもらいたいところがあつたし、一日おいてからということになった。別荘を出た時、時間が四時間しか経ってなくて驚いていたけれど、ある意味では非常識を実感してもらえて結果的には良かったのかもしれない。

そして、今日はいつものように普通に授業を受けた。千雨さんには、記憶を読んだり心を読んだりする魔法を無効化するお札を持ってもらっているし、聞いたところ妙に干渉してくる人もいなかったそうなので、たぶん大丈夫だろう。余談だが、HRで修学旅行の班を決める時は、随分と苦労した。

放課後になり千雨さんにはエヴァさんの家に来てもらおうと思っていたんだけど……そこに、呼び出しがかかった。

「さて、刹那君。説明してもらえるかの？」

「……………何をでしょうか」

心底、げんなりしながら聞いた。学園長室に呼び出された私を待っていたのは、学園長だけでは無かった。

昨日の夜、エヴァさんに文句を言った男性教師、それ以外にも何人か教師の姿があるが……正直、見覚えの無い人ばかりだ。私が覚えていないだけかもしれないけれど。

「昨日の夜の事じゃよ」

「依頼された事態ではありませんので、私に報告義務はありません」
「まあ、そうなんじゃがのお。事の解決に刹那君は随分と関わっておったし、あの時間になぜあの場に居ったのかとか、色々教えてもらいたいんじゃないよ」

「……………分かりました」

もしかして私は、疑われているのだろうか？ いや、この場合は、警戒されているととるべきか…………千雨さんの事で、自分でも気づかないうちに追い詰められていたんだろうか。魔滅環まで使ったのは、拙かったかもしれない。

「私があの場合にいたのは、偶然です」

「偶然、とな？」

「はい。ランニングの途中で、妙な気配を感じたので辿ってみたらあの場合に遭遇しただけのことです」

「ほう」

「……………そんなに、あの場合に私がいるのが不思議な事でしょうか？」

「いや、そうじゃないんじゃないか…………」

「そうですか。その後は、高畑先生にご説明した通りです。報告があったのでは？」

「うむ。それなんじゃがの、刹那君」

「はい」

「エヴァンジェリンとの関係を、教えてはもらえんか？」

「友達ですが」

「嘘を吐くな！！」

至極真面目に答えたら、昨日の男性教師に怒鳴られた。

「奴は真祖の吸血鬼だぞ！？ そんな奴と友達だとも言うのか？」

「昨日のだって、奴が手引きしたに決まっています！ だから一刻も

早く退治すべきだと言ったんです!!」

「……どうやら、ここに集まっている連中はそれが言いたかっただけらしい。エヴァさんに対して、随分と敵意を抱いているようだ。」

まあ、エヴァさん自称悪の魔法使いだしなあ。にしても、この反応はどうなんだろうと思うけれど……それに、正直なところ、私としてもイラッとくるな。

「……クラスメイトと仲良くすることが、そんなにいけないことですか?」

「そうは言わんよ。じゃがの、刹那君……昨日のエヴァンジェリンの行動について説明してもらわんと、こちらも落ち着けんのじゃよ」

「……………はい?」

学園長の言葉に、本気で、素で、啞然としてしまった。苛々していたのも一瞬、忘れてしまう。

確かに、昨日のエヴァさんは、たぶん私の行動を見て来てくれたんだろうが……彼らからすれば、また別の見方が出来る筈なのに。

「エヴァンジェリンさん、学園の警備もしてるじゃないですか」

「ふお?」

「魔力は抑えられても、結界に何か異常があれば彼女だって分かりますよ。それで、助けに来てくれただけのことですよ?」

「なんだと……?」

ざわざわと驚愕に震える彼らに、むしろ私が驚く。力を抑えられても、エヴァさんはきちんと警備の仕事はしてたのに……桜通りについては、あれだったとして。

もしかして、私の認識が間違っていたんだろうか。不安になって学園長を見ると、学園長も何だか、今更気づいたみたいな顔をしてい

た。

「あの、学園長……私、何かおかしい事を言ったでしょうか？」

「ふおふおっ！いい、いや、うむ……」

「エヴァンジェリンさんが私の友人なのは、先ほど言った理由で納得していただけたと思いますし、昨夜の彼女の行動も、彼女の立場からすれば当然ですし……何も、可笑しい点はないと思いますが」

「そ、そうじゃの！うむ、確かにそうじゃ」

「くっ……だが、奴が真祖であることに変わりはない！！」

「いや、ですから真祖とか関係なしに、彼女はクラスメイトなんですよ。まさか先生、他のクラスメイトに、彼女は真祖だから友人になるなどと言うおつもりですか？それこそ、教師としても、魔法を秘匿する立場である筈のそちらとしても、可笑しいことじゃありませんか？」

「そっ、それは……」

彼らは、難癖つけてエヴァさんを悪く言いたいただけなんだろう。彼女を責められる要因はどこにも無いのに、ネギ先生との対決の時のように利用したいときは勝手に利用して、そのくせ理不尽に責め立てようとする。

そんなことに、私を巻き込まないで欲しい。いや、本当に。

「……それで、学園長。他にお聞きしたいことは？ちなみに、千雨さんについては、こちらの方で昨夜の記憶を消した後、寮の部屋に寝かせてあります。なので、不用意に、最低限以上の、干渉はしないようにお願いします」

「ふお、ふおふおっ。分かったぞい」

とりあえず、聞かれるであろうことは先に答えておいた。当たり前ながら全部、嘘だけだ。

「他に、何かありますか？」

「昨日の君の力について、教えてもらおうか？」

エヴァさんのように尊大に言っただけの教師を見る。腕を組んで警戒心を露わにして見られると、こちらとしても苛立ちを覚える。エヴァさんはエヴァさんだからあんな態度をとっても許せるけれど、それ以外の人に偉そうにされると許す気にもならない。

「話せません」

「なぜだ」

「西の技術を含んでいるからです。東が西に、西洋魔法を教えない様に、西が東に呪術を教えることは出来ません」

「君は、西の裏切り者と呼ばれていると噂されているようだが？」

「……どこから出た噂かは存じませんが、私も西の端くれです。個人の勝手で、西の術を教えることは出来ません」

……普通に、そういった噂を聞いていても、今この場で出してもいいんだろうか。

私が答えるつもりが無いと見るや否や、教師たちの目が剣呑に煌めく。どうにも、随分と短気な方が多いようだな。あと、先入観や、自分たちの方が立場を上と思っているらしい傲慢さが感じられる。そういうのは、好きでは無いな。

数秒の沈黙。学園長が口を開いた。

「まあ、そういうことなら仕方ないのお」

「学園長!？」

「ところで、刹那君。君に一つ、お願いがあるんじゃないか」

「………なんででしょう」

あつさりと引いたが、このタイミングでお願い、か。

「実はの、儂はそろそろ西と喧嘩をするのをやめようと思っておるんじゃよ」

「……」

「そろそろ、お互いに協力し合うべきじゃとは、思わんか？」

「私からは何も言えません」

「……それでじゃ、来週の修学旅行で、ネギ君には西の長への親書を届けてもらおうと思っておる。それを読めば、西もこちらと和解しなければと思うじやろう」

「……」

和解、和解、和解。本当に、それは西にとっての和解なのか。東が西に求めるのは、従属、屈服、それじゃないのか。

……ああ、駄目だ。落ち着かない。気持ちが悪い。未来の失敗は今、この時点だけが原因じゃない。だから落ち着こう。今は何も言わず、何も知らせず、ただ情報だけを得よう。

ぐるぐる回る感情は落ち着けて、顔には無表情を張り付ける。そうして必要な情報を得てしまおう。

「それでじゃ、刹那君には、ネギ君が無事に親書を届けられるように補佐をしてもらいたいんじゃが」

「お断りします」

「ふおっ！なぜじゃ？」

無意識に、反射的に即断して断っていた。けれど、何故と言われてもそれは当たり前と言えない事だった。

「私は、木乃香お嬢様の護衛で麻帆良にいます。修学旅行でも、私は木乃香お嬢様の護衛を最優先にいたしますので」

「じゃ、じゃがのお……なら、依頼として受けてもらえんか？」

「……先ほども言いましたが、私は木乃香お嬢様を護衛するために麻帆良にいるんです。仕事の依頼は、必要であれば受けますが、お嬢様の護衛を疎かにしてまで受ける必要も、私にはありませんので、ネギ先生の件については、たとえ彼本人が私を頼ってこようとも、私が必要と判断しない限り手出ししませんので、そのつもりで」

「む、むう……」

「……桜咲君は、和解が成立しなくてもいいというのかい？」

また別の教師が言って来て、私はといえばそろそろ疲れて来ていた。一度で話が通じなさすぎて、理解してもらえなくて、とても疲れる。

「そんなに心配なさるんでしたら、もっと状況を整えて望むべきだと思います」

修学旅行のついでに、親書を届けるだなんて。ついでで和解を成立させるのに必要と考えられる物を届ける方が、どうかと思う。

「……そろそろ、失礼してもいいでしょうか」

「……うむ。すまんのお、急に呼び出して」

「いえ」

そう本心で思うなら呼び出さないでほしかったと思いつつ、私は学園長室を後にした。最後まで注がれた敵意の視線には、全く気付かないふりをして。

「どうしましょう、長」

学園長室を出た後、その足で私は麻帆良の外に出てきた。電話をするために。

麻帆良では下手をすれば盗聴などされかねないが、外ではその可能性がぐんと減る。もちろん、警戒は解けないが。

電話越しに失礼を承知で、長に事の顛末を報告する。ネギ先生が親書が届けることについてだ。

『修学旅行で、ですか……』

「はい。おそらくは、三日目の自由行動日になるかと」

『……分かりました。それについては、刹那君、お願いしたいのですが』

「はい」

『無事に、届くようにしてくれますか？』

「……いいのですか？」

『ええ。東の方から、和解の申し立てをしてきたとなれば、こちらもそれについて会合の場で出しやすくなりますし……和解を申し立てたのが向こうからとなれば、こちらが優位に立ちやすくなりますので』

「分かりました」

『それから……』

長は少し戸惑いがちに聞いてくる。

『木乃香は、どうしていますか？』

「お嬢様は、今のところは特に変わらず……日常を過ごしています。魔法に関しては、少々考える事もあるようですが」

『そうですか……』

「何か、気になることでも？」

『いえ、単なる私の親心……だけと言えないのが、悲しいですが』

電話越しでも、長が苦笑いしているだろうことは想像が出来た。このちゃんの父親、そして西の長。立場上、親心というのも本当だろうけれど、それ以外の思惑もあったりはするんだろう。

それを責めることは到底、出来ない事だけれど。長としての行動次第で、このちゃんの未来にも大きな影響が、出てしまうのだから。

『刹那君は、木乃香がどんな道を選ぶか……分かりますか』

「いえ」

『私にも分かりません。全て、木乃香次第ではあるのですが……』

長は、とても悩んでいるらしい。このちゃんが今後、どんな道を進むのか分からず……彼女の幸せを、思っただけでいるように、私は思えて。

「……長」

『なんですか？』

「私は、お嬢様がどんな道を選ぶと、それに着いていきます。剣となり、盾となり、お嬢様の幸せを、護りたいと思っています」

『……』

たとえば、どんな道だろうとも。私はこのちゃんの傍にいて、このちゃんを護る。ただ、それだけのこと。

『ありがとうございます、刹那君』

「長がお礼を言う事ではありませんから」

『これは、木乃香の父親としてですよ。娘の幸せを護ろうとしてくれる君に、僕は心から感謝します』

「……ありがとうございます」

なんて返せばいいのか迷った挙句、そんな言葉が出た。電話の向こ

うで長が笑っている。それに少し頬が熱くなった。

『ああ、それから……木乃香なんですが、親書を届ける際に一緒に連れてきてもらえますか』

「構いませんが……大丈夫、なのでしょいか」

『……現時点で、決断させなければならぬかは分かりませんが、一度きちんと話さないといけないんです。それにおそらく、強硬派は木乃香と親書、どちらとも狙ってくるでしょう』

「……護るものは、一か所に集まっていた方が護りやすい、ですか？」

『それもあります。他の場所に比べれば、本山が最も安全なのは確かですし……万が一、滞在するホテルに木乃香を狙って強硬派が押し入り、一般人に被害が出ては事ですから』

確かに、このちゃんはホテルから浚われかけたことが実際にあった……一般人のいない本山は、そういう意味では確かに安全、か。

「分かりました。では、三日目はそちらに伺います」

『よろしく願います』

「それと……あの、長にもう一つ、ご報告しなければならぬことが」

『なんですか？』

いつ言い出そうか、迷いに迷った挙句、恐る恐る私は切り出した。

「西洋の魔法使いで、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルをご存知でしょうか？」

『ええ。確か今は、麻帆良にいらと聞いていますが……詳しくは知りませんが、私の昔の戦友が、何かしたそうですね』

「そのようです。それで、その彼女なんですが……修学旅行で、私

と同じクラスメイトとして京都に入ります」

『それは……難しい、ところですね』

「はい。ただ、彼女自身は東とは関係が無い魔法使いです。それと、彼女には有事の際、一般人である生徒たちの護衛をお願いしたいと思っています」

それが、私がエヴァさんに頼みたいことだった。修学旅行に行けるようにする代わり、有事の際には手を貸してもらう。基本は他の生徒の護衛、彼女の力が必要な事態に陥ったなら、駆けつけてもらうけれど。

「お嬢様の護衛をするにしても、麻帆良とは別の意味で、敵も多く仕掛けてくる可能性がありますので……人手は、あった方がいいかと」

『そうですね。こちらでも、今は誰が強硬派と繋がっているか見極めていくところですから……情けない話ですが、こちらと繋がりが無いそちらの人間の方が、今回は信用できるでしょう』

「では、よろしいでしょうか？」

『他の方たちは、こちらで納得させておきます。組織的に無関係だというなら、まだ納得もしやすいでしょう。刹那君の判断で、味方に出来るならそう動いてください』

「わかりました」

……ネギ先生の場合、東に属する人間というのが、拒否される要因の一つ、か。同じ魔法使いでも、そのあたりの違いも重要なんだな。とりあえず、報告としてはこれくらいか。修学旅行まで、これ以上は不用意に連絡をしない方がいいかもしれない。強硬派を刺激しても困るだけだし。

それにしても、呼び出しに報告と忙しい日だ。千雨さんが、待ちく

たびれていないことを祈ろう。

報告活動の日（後書き）

対応とかいろいろいろいろ無視、スルーでお願いします。

班決めの日

「遅い」

「す、すみません……」

学園長からの呼び出し、そして長への報告を終えて、ようやくエヴァさんの家に行くと、扉を開けてすぐに不機嫌すぎる一言を言われた。

「ずいぶんと待たせてくれたな。え？刹那」

「エ、エヴァさん……？」

「どうした、何をそんなに怯えた顔をする……？安心しろ、私は何も怒っていないさ」

絶対嘘だ。明らかに、どこをどう見ても不機嫌だ。笑っているけれど、あれはどう苛めてやろうかと考えている笑みだ。

「ちゃ、茶々丸さん、千雨さん！！」

「あー？お、刹那。遅かったな」

「いらっしやいませ、刹那さん」

「遅くなつてすみません。あの、エヴァさんはどうして、あんなに怒ってるんでしょうか？」

キッチンからお茶を持って来た茶々丸さんと千雨さんを見つけて、問いかける。

エヴァさんが怒ってるのは、遅れたことだけが理由じゃない。そんな気がする。

「なんだ、エヴァンジェリンの奴まだ怒ってんのか？」

「そのようです。マスターは現在、刹那さんに対して大変、怒っておられます」

「ど、どうしてでしょう……？」

「そりゃ、あれじゃね？」

少し考えて、千雨さんは答えてくれた。

「班編成」

「……あー」

ストンツと落ちてきた回答に、納得して思わず声が零れる。
今日のHRで行われた、修学旅行の班編成。なんでか、凄く大変だったんだよなあ。

修学旅行の班を決める、ギリギリになって言い出すのはどうかと思
ったが、まあそれは良いとして。ほとんどの班が普段の仲良しグル
ープで集まる形になり、一人になっている人は上手い具合に引き込
まれている。そういうところは、このクラスのいいところなんだと
思う。

「せっちゃんは、うちらと回るんや！」

「知らん。刹那は私が連れて行く！」

……ここ以外は、本当にあっさりと決まっていた。

私の両隣では、なぜかこのちゃんとエヴァさんが私を挟んで言い争
いをしている。争いの内容から察するに、私がどちらの班に所属す
るのかということらしい。

班の人数は、一班が四人から六人。ほとんどの班が五人くらいでまとまっているが。

「せっちゃんはどうちとまーわーるー!!」

「だから知らんと云っているだろ。刹那は私が連れて行くんだ!!」

なぜか、どうしてか。二人揃って頑固として譲ろうとしない。

とりあえず、二人の間からそっと逃げ出して、静かに傍観している千雨さんと茶々丸さんの元に逃げ込む。明日菜さんたちは、意外そうに二人が争っているのを見ていた。

「大変そうだな」

「戸惑っていますけどね。エヴァさんがああも譲らないとは……」

「マスターは、刹那さんの事が好きですから。私もですが」

「は?」「え?」

「あと、私も刹那さんと一緒に回りたと思っています」

「……………え?」

淡々と告げられた言葉に、というより二発ほど連続で投下された爆弾に、私と千雨さんが沈黙。その間、茶々丸さんはエヴァさんを見ながら「録画中」と頻りに言っていた。

「ちゃ、茶々丸さん……?」

「なんでしょか」

「その、私はお二人の友達で、良いんですよね?」

「はい」

「なら、その好きというのも、友達としてと判断しても……?」

「はい」

「紛らわしいんだよ!!」

千雨さんが茶々丸さんに叫ぶ。私はといえば、心底安堵。なんでだろう、エヴァさんに対してはそういった感情について本気で警戒する。彼女も茶々丸さんも、冗談が冗談に聞こえないから怖い。どう判断していいか戸惑わされる。

「ったく……で、刹那は結局、どうするんだよ」
「え？」

「私たちの班と、近衛の班。どっちと回るんだ？」

現段階の班構成は、このちゃんの班が、明日菜さん他、宮崎さん、早乙女さん、綾瀬さんの五人。

エヴァさんの班が、茶々丸さん他、千雨さん、相坂さん……相坂さんって、幽霊だけど、修学旅行は来れるのかな……？何となくちらりと、空席を見てみる。一緒にいければ、楽しいと思うんだけどなあ。

「刹那？」

「あ、えっと……茶々丸さんには悪いですけど、私はこのちゃん達と回ります」

「せっちゃん!!」

「なんだと、刹那!!」

茶々丸さんへの罪悪感を感じつつ言うと、後ろからガバツとこのちゃんに抱き着かれる。さらに殺気混じりで睨まれているのを感じて、声を詰まらせる。冷や汗が背中を伝った。

「やっぱり、うちとせっちゃんは相思相愛や」
「このちゃん、その言い方はなんか違うと思う」
「間違っってへんよ」

……あれ？なんか最近、このちゃんとの関係が可笑しな方に行って

いるような、いないような……。

「刹那」

「ツエ、エヴァさん……」

怒気と殺気が入り混じって襲ってくる。喉の奥で、悲鳴が上がるのを何とか堪えた。

「桜咲さん、大丈夫？なんか顔が青いけど……」

「だ、大丈夫です！このちゃん、ちよつとごめんね」

「あつ、せっちゃーん」

抱き着くこのちゃんから離れて、エヴァさんの元に向かう。事情を説明しないと、何時までも怒っていそうだ。

「あの、エヴァさん……」

「……なんだ」

「理由を説明しますから、お願いですから……落ち着いてください」
凄く恐いです。

「理由？」

「はい。今回の修学旅行、一部の人間から襲撃がありそうだと説明しましたでしょうか？」

「ああ、聞いたな」

「エヴァさんには、他の生徒の皆さんが巻き込まれないように、注意してほしいと……この前、お願いしましたよね？」

「むっ」

「敵の目標は、このちゃんやネギ先生の持つ親書ですから……私は、このちゃんの傍にいて護らなければなりませんので」

「むう……」

「ただ、最優先で私はこのちゃんを護ることになります。その間、他の生徒に何かあった時は、エヴァさんに動いてもらえるように…：別行動とした方が良いでしょう」

「……」

「だから、お願いします。エヴァさん」

「………チツ、仕方ない」

「ありがとうございます」

渋々、納得してくれたらしいエヴァさんにほっと安堵の息を吐く。彼女がいてくれれば、私はこのちゃんの護衛に集中できるし……というより、怒りが収まってくれてよかった。これなら、たぶん大丈夫だろう。

「……大丈夫だと、思ったんですけどね」

全然、大丈夫では無かったらしい。

「あの……エヴァさん？」

「ん？なんだ、私は全く怒っていないぞ？」

「……えつと…」

下手な事を言ったら、絶対噴火する。というより、苛められる気がする……今日の修行は茶々丸さんをお願いしようかな、今のエヴァさんとやったら絶対に、氷漬けにされるし。

「エヴァンジェリン、拗ねるのもいい加減にしとけて」

「煩いぞ長谷川。私は怒っていないと言っている」

「顔に書いてるっての。ったく、たかが班一つで……」

呆れたように溜息を吐いて、千雨さんがお茶を啜る。

「でも、すみません。千雨さんまでお願いしてしまって」

「別にこんくらいかまわねえよ。まあ……エヴァンジェリンの相手すんのは、面倒くさそうだけどな」

「っ貴様、さっきから生意気だぞ？」

「お前がガキくさすぎるんだよ」

千雨さんとエヴァさんが言い争いを始めてしまい、苦笑い。千雨さんには、事前にエヴァさんと同じ班になるようにお願いしていた。事情を知っている人が同じ班の方が、エヴァさんも動きやすいだろうから。巻き込んでしまったようで、千雨さんには申し訳ないけれど、彼女もあっさりと了承してくれた。

あとは、こうなったからには、千雨さんに危険が及ばないように注意を払って……万が一に備えて、それなりに実力をつけてもらわないと、いけないよなあ。本当に、申し訳ない。

「……刹那」

「あ、はい」

「お前さあ……私を巻き込んだとか申し訳ないとか、思ってないか？」

「……え？」

じとつと半眼で見られて、さらには凶星を突かれて内心で焦る。それから、はあっと軽く溜息を吐かれて、バシッと頭を叩かれた。

「事情が分かった今、嫌だったらちゃんと嫌だって言うよ」

「でも、巻き込んでしまったのは事実ですし……」

「巻き込まれたと私が思っていないから、良いんだよ。それに、私も多少は知ってるやつと同じ班の方が、楽でいいし……どうせ、エヴァンジェリンとはこれからも、関わりありそうだしな」

「……お前は、もう少し他に頼ることを覚えろ。巻き込んだとか護れなかったとか、考え過ぎな部分が多すぎるぞ」

「千雨さん、エヴァさん……」

二人の言葉に、胸が熱くなる。何を言えば良いのか分からなくなつて、でも、二人の言葉が凄く嬉しい。

「……ありがとうございます」

だから、ありきたりな感謝を告げる。私に向けられた二人の優しさに、その一言だけを。

どちらが良いと聞かれた日

とりあえずエヴァさんの怒りも収まりを見せたので、その間に一先ず場所を移動することにした。

エヴァさんの別荘、今回はエヴァさんと茶々丸さんも一緒に入っている。

「すっげえな、本物みたいだ」

「エヴァさんの話だと、彼女次第で他にも変えられるそうなんですよ」

「マジか!？」

別荘内に広がる海を前に、千雨さんが驚いていた。昨日入っていた時は、ゆっくりするような余裕は無かったし、仕方ないか。

「おい、刹那。さっさと始めるぞ」

「あ、はい。千雨さん、こっちへ」

「ああ？」

千雨さんの隣で海を眺めていたら、後ろからエヴァさんに言われて移動する。千雨さんはとりあえずログハウスの傍に、私は砂浜で待つエヴァさんと茶々丸さんから少し距離を取って向かい合う。

「千雨さん、よく見ていてくださいね」

「あ？」

「この世界について、実際に見てもらった方が早いので」

勾玉を夕風に変え、鞘から抜き構える。エヴァさんがニヤリと意地悪く笑ったのを見て、茶々丸さんが足に力を籠めたのを見て、私もまた足に気を籠め、砂を蹴り飛ばした。

「はあっ！」

「攻撃を確認。迎撃します」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

エヴァさんの呪文が聞こえる。振り上げた刀を振り下ろし、背後に回ってきた茶々丸さんを右足を軸に回転して、そのまま薙ぎ払う。

「斬鉄閃!!」

取られた距離にもう一度、刀を振るう。そうしてすぐさま、その場から飛び退いた。

「凍る大地!!」

「っ…」

空中で見下ろした先、砂浜が凍りついている。飛び退かなかったら、私も氷漬けだろうな。

「——ッ!!」

すぐ頭上から襲って来た茶々丸さんに気づいて、刀と鞘を交差させて受け止める。そのままの勢いで砂浜に落ちるが、間一髪で彼女を弾き身を低くして後ろに後退した。

その矢先、今度は右へと飛ぶ。刹那、私がいた場所で爆発が起った。

「ほう、避けたか」

「容赦無いですねっ……」

「弱音を吐くには早すぎるぞ!!」

「いつ!?!」

茶々丸さんが突き出した拳を、体を捻り回避する。その後ろでまた、エヴァさんの呪文が聞こえてきた。

……さすがに、従者がいると大変だな。茶々丸さんには悪いけれど、先にやらせてもらおう。

「っはああ!!」

「——ッ」

左手の鞘で突き、避けられたところに刀を振るう。

「神鳴流奥義——百花繚乱!!」

至近距離から放たれた技に、茶々丸さんが吹き飛ぶ。飛んで行った先の森で、バキバキと木が倒れる音がした。

手加減なしで放っているから、これで暫くは持つか……壊れては、いない筈。大丈夫だ、大丈夫。

「魔法の射手 連弾・氷の17矢!!」

「っ斬空閃!!」

向かってくる氷の矢を打ち落とす。防ぎきれなかった何発かが砂浜で弾け、一発が頬を掠り血が流れた。

「これはどうだ?魔法の射手 連弾・闇の29矢!!」

「斬空閃・改!!」

格段に増えた矢に、先ほどよりも威力を強めて放つ。空中でぶつかり合った力が爆発を起こし、光で視界が消えると私は砂を蹴飛ばし、その中に飛び込んだ。

「斬岩剣!!」

「ッ、氷楯!!」

光を突き抜けて、エヴァさんの前に飛び出し放った技は、薄青い氷の盾に弾かれる。刀は離さず、鞘で盾を貫き打ち崩した。エヴァさんが空中を移動し距離を取る。私は鞘から一瞬、手を離して掌に気を集めた。

「斬空掌散!!」

「魔法の射手 連弾・氷の11矢!!」

気の弾丸を連続で撃つ。空中でまたも爆発が起きる間に砂浜に着地し、上を見た。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック!!」

エヴァさんが呪文を詠唱し始める。今ならまだ間に合うか、私はもう一度、砂浜を蹴り飛ばし彼女の前に躍り出た。

「チッ、魔法の射手 連弾・氷の17矢!!」

「神鳴流奥義——斬岩剣!!」

私の放った技と、エヴァさんの放った技がそれぞれに襲いかかり、私たちは互いに砂浜へと落ちる。舞い上がった砂の中で立ち上がれば、向こうでもまた立ち上がるエヴァさんの姿。

互いに構えたまま、沈黙する。どちらが負けと決まったわけでは無い今、まだ戦闘を続けることは可能だけれど――

「ここまで、しましょう」

言って、私は構えを解き夕風を勾玉に戻した。

「なんだ、もう終わりか？」

「はい。正直、これ以上やろうとすると……酷いことになりそうなので」

主に私が。別荘内のエヴァさんは、魔力を抑えられていないので本当に、恐いくらいに強すぎる。というより、こんなに強かっただろうかというくらい、強い気がする。私の感じ方がまた違うんだろうか……。

にしても、今日はいつにもまして容赦が無かった。内心、よくどこも凍っていないかと感心してしまう。腕とか、無事でよかった。

「それに、今日の目的は、修行だけではありませんから」

服に付いた砂を払い、歩き出す。ログハウスの傍に立っていた千雨さんに話しかけた。

「千雨さん」

「……っああ？」

千雨さんは呆然とした様子でいたが、ハッと我に返ったみたいでこちらを見る。その姿に僅かに苦笑して、ログハウスを指差した。

「とりあえず、中で話しましょうか」

落ち着いて話すには、その方がいいだろうし。

「大きく分けてタイプは二つです。前衛の戦士タイプと後衛の魔法使いタイプ」

ソファーに腰を落ち着けて、千雨さんの意識も戻ってきたところで、そう話し始めた。

「私とエヴァさん、茶々丸さんがそれぞれのタイプに当てはまるか、分かりますか？」

「…刹那と茶々丸が前衛、だろ？ んで、エヴァンジェリンが後衛…呪文とか唱えてたし」

「他にも、細かく分ければまた別のタイプもありますけど…千雨さんが力を得るにあたって、まずどちらのタイプか、決めてもらいます」

「……」

千雨さんが難しい顔をして黙り込む。さすがに、これだけの情報でどちらかを決めるのは酷だろう…だからといって、私たちがどちらかを勝手に決めたくは無い。千雨さんの意思に任せたかった。

「……具体的に、それぞれの戦い方について説明しますね」
「頼むわ」

「では、最初に戦士タイプ。茶々丸さんのように無手、私のように刀を使ったりと武器を使用して敵に向かっていきます。基本は接近戦、ですね。武器によっては中距離もありますが。身体能力の向上は必須、修行の中心はそこになります。あと、私の場合は、刀以外

にお札を補助に使ったりもします。防御の結界を張ったり、その程度ですけど」

「嘘を吐け。防御に捕縛に殲滅と、なんでもありだろうが」

「……魔法使いについては、エヴァさんをお願いします」

「なにっ？」

可笑しそうに笑われたので、やり返すわけでは無いが次の説明をエヴァさんに投げる。まあ、魔法使い本人の説明の方が、私がするよりも良いだろう。

「……チッ。魔法使いだが、基本は一人で戦わず、私で言う茶々丸のようにパートナーと共に戦う。というのも、呪文を唱えている間、魔法使いは無防備であり、敵からすれば格好の的となる。呪文を唱えている間の守り役として、パートナーの存在は必須だ。後は、後ろでバンバン強力な魔法を撃ちまくる、砲台みたいなもんだな」

「エヴァさんは接近戦も凄いですけどね。魔法使いの場合、修行としては基本はエヴァさんに見てもらうことになります。ただ、敵の攻撃を回避したりといった、接近戦対策は私が相手をすることが多いと思いますが」

大まかな説明は、これくらいだろうか。

視線を下に向けて考える千雨さんの答えを、じっと待つ。ちなみに、エヴァさんに修行を見てもらうように頼んだのは、昨日の事だ。寮に戻ってから、ネックスを通してお願いしてある。

秒針が一回り、更にもう一回りするまで、沈黙が続く。そうして千雨さんは口を開いた。

「私は……魔法使いの方が、いい」

「ほう」

「刹那たちみたいにな、武器を持って向かっていくのは、正直に言っ

て向いてないと思うし……私は、逃げられたらそれでいいんだ」

千雨さんが、膝に置いた手をギュッと握りしめて続ける。

「敵を倒したいとかじゃなくて、自分の身を護れるくらいになりたい。危険から逃げられるようになりたい。それなら、後ろから全体を見て、逃げ道探して隙あらば逃げられるような立場が良い」

「言っておくが、言う程簡単に出来る事では無いぞ？護身程度ならまあ、頑張ればどうにかなるだろうが……逃げられるようになるなら、誰かを護れるようになるのと同等の強さが必要になる」

「……だとしても、私は逃げられるようになりたいんだよ。じゃないと、こいつがまた護り切れなかったとか、言い出すだろ」

「……私ですか!？」

思わぬところで矛先が向いた。驚いて声をあげれば、真剣な表情で頷かれてしまい、何となく落ち込む。エヴァさんがそんな私を見てくつくつと喉を鳴らした。

「なるほど、それで逃げるのか。確かに、護身程度じゃ、刹那はまた勝手にうざいくらいに自分を責めるだろうな」

「だろ？なら、私は怪我もしないで、その場から逃げられるようにしたいんだよ」

……つまりは、私の為ってことだろうか。それを理由に、千雨さんに決めさせてしまって、本当にいいんだろうか。

「……千雨さん、あの……」

「うりゃ」

「うにゃあっ!？」

本当にいいんですか、言おうとしたら、額を二本の指でぐりぐりぐりぐり。また変な声が出た。

「また、私がこうやって決めたのは自分のせいだとも思ってるんだろ？」

「う……」

「なんでお前は、勝手に何でもかんでも自分のせいにしてるんだよ」「で、でも……」

「私が逃げたいのは本当だったの。別に、お前の為だけでも無い。それに！」

「うあっ」

額を強く押されて軽く仰け反る。

「刹那は私に選ばせてくれるだろ。なら、私は私の為になると思う選択をする。だからお前は、そんな気にしないでいいんだよ」

「千雨さん……」

「つつか、私が決めたことくらい信じろよ。なんでもかんでも自分のせいって、思い込みすぎだろ」

「長谷川の言うとおりでな。いい機会だ、刹那。お前は私たちを信じているか？」

「へ……？」

唐突にエヴァさんがしてきた質問に、私は首を傾げた。信じている、つまりは信頼しているかという事だと思うけれど……そんなの、

「信頼していますよ」

エヴァさんも、千雨さんも、茶々丸さんも、私の事を思ってくれていると知っているから。心配してくれていると知っているから、そ

んな彼女たちを信じない筈がない。

けれど私の答えに、エヴァさんは納得いかない顔をしていた。

「そう言うなら、もっと頼れ」

「……頼ってますよ？今回のだって……」

「……そうじゃない、が……はあ、まあいい」

「……？」

諦めたように溜息を吐くエヴァさん、何だか珍しい。

頼って、いるんだけどな。千雨さんの修行のお願いだって、修学旅行のお願いだって、そもそもこの別荘を借りることだって、全部全部、エヴァさんに頼りっぱなしだ。

信じてるし、頼りもしている。なのに、どうしてそんな顔をするんだろう。

「……修学旅行までに、護身が出来るくらいには仕上げてやる。死ぬ気でやれ、長谷川」

「ああ。よろしく頼む」

考える私の横で、エヴァさんの言葉に千雨さんが強く頷いていた。

どちらが良いと聞かれた日（後書き）

千雨の方向性は魔法使い。属性とか何がいいんだろう……いろいろ捏造入ります。注意、注意。あとスルー。

水時々闇風火雷の日

ログハウスを出て、砂浜ではなく少し離れた建物に移動する。障害物の何も無いそこは、昔はネギ先生がエヴァさんと修行するのに使っていた広場だ。

「修行の前に、まずはお前の属性を確認する」

「あ、ああ」

エヴァさんの言葉に、千雨さんが緊張した様子で頷く。無理も無い

短い棒の先に透明な石が付いた杖を、エヴァさんが千雨さんに渡す。しげしげとそれを眺める彼女に、エヴァさんが指示を出した。

「『光れ』と唱えてみる」

「…………『光れ』」

ごくりと喉を鳴らして、千雨さんが呟く。杖に付いた石が、淡い光を放ちだした。

光は青く光ったかと思うと、次に黒く光り、緑、赤、黄色と色を変えて光る。綺麗な光に見惚れる私と対照的に、エヴァさんは目を見開き、面白そうに笑みを浮かべた。

「多属性か。なかなか、楽しみが増えたよ」

「…………今ので、何が分かるってんだ？」

「魔法には属性があるんだよ。大抵の奴は、得意な属性が一つに、後の属性は初級魔法程度か。中級くらいまで使える奴もいるがな。だから、基本は得意な属性を磨くんだ」

「今の色が、得意の属性ですか？」

魔法に関しては、私も素人のようなものだ。魔法使いと戦うことはあっても、私自身が魔法を使うことはなかったから。

「ああ。赤が火、青が水、緑が風、黄色が雷、黒が闇、白が光だ。私の使う氷は、どれかと言えば水に近いな」

「……ってことは、千雨さんの場合、光以外全属性ということですか？」

「そうだな。坊やとは違った意味で、こいつも才能があるよ」

驚きの真実発覚だった。ふと横を見ると、千雨さんが杖を握ったまま膝をついていて、慌てて問いかける。

「千雨さん、どうかしましたか？」

「……喜んでいいのか悲しめばいいのかわからねえ」

「喜んでいいぞ。しかも、お前のもっとも得意とするのは水属性のようだが、他にも闇属性まで得意と来てる。鍛え甲斐がありそうだな」

「それが一番うれしくねえよ！なんだよ闇って。魔王かよ、私まさかの悪役かよ！？」

確かに、闇って聞くと何となく悪魔とかそんなイメージだなあ。

「この際だ、私のように悪い魔法使いを目指すか？」

「お断りだ！！」

「……千雨さん、苦労しそうだな。」

「それでは、私は茶々丸さんと修行をしていますね」

「……その方が良いな。魔法に関して、お前に出来ることは何も無いだろうし」

「あはは……」

エヴァンジェリンの言葉に力なく刹那が笑って、茶々丸と広場から離れてく。

私はといえば、握りしめた杖を眺めて何度目かと分からない溜息を吐いた。いや、それにしても……まさかの五属性とか…。

「いつまで凹んでいるつもりだ？」

「うっせえよ。予想以上の普通じゃない潜在能力に、こっちは今すぐ泣きたいんだよ」

「贅沢な奴だな、いいか？才能は所詮、そこにあるだけだ。あるものをどうするかはお前次第、磨けば光るし磨かなければ錆び付く。

この世界では、お前のように多属性を使えるなんて才能が、どれだけ貴重か分かってるのか？」

「……わかんねえ」

「なら、分かれ。少なくとも、強くなりたいたならその才能を受け入れて、喜んでおけ。磨けば、お前次第で私にも出来ないことが出来る様になる」

「……………」

エヴァンジェリンに出来ないことが出来る、か……こいつも刹那も、私からすれば色々つぶっ飛んでるんだけどな。この世界に飛び込んだことには後悔していないし、むしろ正解だったとも思っているけど。もしも、こいつらみたいなのにならず知らずに遭遇したら、どうなってたか。

……強くなるって決めたんだし、いちいち騒いでも仕方ないよな。

「もう一度、聞きたいんだけどよ。私の場合、水と闇と風と火と雷が使えるのか？」

「使えるというと、語弊があるな。闇や光は才能に左右されやすいが、他の火や水といった属性は、魔法の才能が少しでもある奴なら誰でも使える。ただ、得意な属性は高等魔法まで使えるが、それ以外の属性は初級や中級程度が限界となりやすい」

「それじゃ、私の得意な属性ってやつは？」

「さっきの光り方からすれば、一応は水だな。だが、お前の場合はそれ以外の属性も、高等魔法を使えるくらいには得意だ」

「……もしかして、私って結構な万能型か？」

「強力な万能型だな」

断言された。属性に置いて苦手が無い万能型、魔法とかまだ全然知らないけれど……使い方次第で、私次第で本当にいろいろなことが出来るんだろう。

「魔法使いは、魔法発動体、分かりやすいので言えば杖だな。それを媒介に、呪文を唱えて魔法を発動する。強くなれば長い呪文を唱えず、無詠唱で魔法を唱えることも可能だ。とりあえず、暫くは初心者用の杖を使い」

ポイツと投げ渡された、棒の先に星が付いた杖を慌ててキャッチした。ガキくさい、そう思ったけれど、だから初心者用なのかとそんなことを思った。

「修学旅行まで今日も入れて四日だ。休みがあることを考えて、せいぜい一ヵ月かそこら……護身が出来るくらいには鍛えてやる。精々、死なない様に頑張ることだな」

「……わかったよ」

いやに楽しそうなエヴァンジェリンの笑顔と共に、私の修行は始まった。

広場の空で上がる光を眺めて、お茶を啜る。茶々丸さんが淹れるお茶はとても美味しい。

ログハウスのテラスに出されたテーブルとイスに座って、茶々丸さんと二人、のんびりとする。先ほどまでは修行として模擬戦の相手をしてもらっていたけれど、今は休憩中だった。

「凄いですね……」

「そうですね」

光を眺めて呟くと、茶々丸さんが同意してくれる。にしても、赤青緑に黄色や黒と、何だか花火みたいだな。

「ケケケッ、オイ、刹那。次ハ俺トヤロウゼ」

「チャチャゼロさんですか？」

独特な発音に顔だけ振り返ると、チャチャゼロさんが浮いていた。右手に大きな刀……包丁と言ってもいいんだろうか、それを持って話しかけてくる表情は、変わらない筈なのに何だか楽しそうだ。

「……いい、ですけど……」

「ヨシ。ケケッ、引き裂イテヤルヨ」

「……できれば、五体満足でお願いしますね」

「サアナ」

ある意味では一番、危ない人だ。模擬戦どころか、一步間違えれば腕か足が無くなるんだから。エヴァさんの場合、全身が氷漬けになるけれど。

笑いながらテーブルの上に座ったチャチャゼロさんを前に、軽い溜息を吐いてお茶を啜る。本当に美味しいな、このお茶。

「ところで、茶々丸さん」

「なんでしようか」

「さつきから私を見てますけど……顔に何か付いてますか？」

「いえ、お気になさらず」

「はあ……？」

困惑気味に頷きつつ、とりあえず視線を一度、海に向ける。何となく、茶々丸さんが「録画中」と言ったような気がするけれど、何を録画しているんだろう。

「トコロデ、刹那。オ前、修学旅行ハ御主人ト別行動ナンダツテナ」
「そうですよ」

唐突に切り出してきたチャチャゼロさんに答える。理由があるからエヴァさんとは別の班にしたけれど、茶々丸さんには悪いことをしたな。せつかく、一緒の班が良いと言ってくれたのに。

「ケケッ、残念ダツタナ、我が妹ヨ」

「はい……」

「え？」

思った傍から、目の前で何だかしょんぼりとした茶々丸さんに軽く目を瞠る。もしかして、私が思う以上に望んでくれていたんだろうか……？

「……すみません、茶々丸さん」

「いえ、刹那さんの意思によるものですから、お気になさらず」

「でも…」

目の前でそんな顔をされると、そのまま頷くのも気が引けて。どうしようかと迷った挙句に、私は口を開いた。

「茶々丸さん、私服とかもう用意してますか？」

「いえ」

「でしたら、明日買い物に行きませんか？私も、買っておきたい物があるので」

「……いいんですか？」

「誘ってるのは私ですよ。それで、どうですか？」

「……でしたら、お願いします」

「はい」

私の提案に、茶々丸さんは嬉しそうに頷き返してくれた。それに私も安心して笑うと、じっとまた見つめられた。

「……どうしました？」

「録画中ですので、お気になさらず」

「……？」

後ろを振り返る、何も無い。前を向けば、茶々丸さんと目が合う。

「……録画って、もしかして私をですか？」

「我が妹ハ、気ニ入ッタラ録画ヲスルカラナ。気ニスルナ」

「……えっと、ありがとう、ございます？」

気に入られるのは、嬉しいけれど……録画は少し、恥ずかしいかなあ。

「刹那さん……録画中です」

「あはは……」

向けられる好意をどうしたらいいのか、持て余すのは初めてだった。

水時々闇風火雷の日（後書き）

千雨がなんかチートじみた才能持ちとなりました。
多数のご意見、ありがとうございます。今後も、参考にさせていただきます。
ただきたく思います。

買い物の日（前書き）

毎度のことながら途中から視点が変わりますのでご注意ください。

買い物の日

茶々丸さんと買い物に行く約束をした、翌日。お昼に待ち合わせをして、私は約束の十分ほど前に待ち合わせ場所に来ていた。

特にすることも無く、近くの街路樹に寄りかかって空を見上げる事、五分。茶々丸さんが来た。

「お待たせしました、刹那さん」

「待ってませんよ。こんにちは、茶々丸さん」

そんな言葉を交わして、さっそく歩き出す。今日の買い物は、茶々丸さんの服がメインだ。

やって来た茶々丸さんは制服姿で、聞いてみると服はそれかエヴァさんの用意した物しかないらしい。

「エヴァさんが用意する服って、どんなのですか？」

「メイド服です」

「……………さすがに、それは着ていけないですね…」

京都をメイド姿で歩くのは、注目を集めすぎるだろう。

なんとなしに、茶々丸さんを見上げる。頭一つ分程、私よりも背が高い。正直に言うと、私も服に拘りなんて無いから、どんな服が似合うのか分からないし…………。

「茶々丸さん、どんな服を着ようと思ってますか？」

「……………どんな服を、着ればいいんでしょうか」

「あー…」

本末転倒、二人で来たのは拙かったかもしれない。このちゃんや千雨さんなら、上手く選んでくれそうだけど。

「とりあえず、色々と見てみましょうか」

「はい」

手近な服屋に入って、並べられた服を眺める。さて、と……ここからが、問題だけど、どうしよう。

「茶々丸さんの好きなデザインって、どんなのですか？」

「デザイン、ですか……」

まあ、こういうのは好きな物を着るのが一番いい、と思う。ちなみに、私はジャージが一番楽なので好きだけど、このちゃんに言ったら怒られた。最近では、放課後にこのちゃんと買いに行ったりもして、服が増えてきてる。

「……関節部分が目立たない服が良いですね」

「あ、そうですね。それもあるんだった……なら、長袖の方が良さそうですね」

時期的には長袖でも問題ないし、少し薄着でも大丈夫だろうか。

「でも、いつも長袖だと夏とか暑くて大変ですね」

「問題ありません。溜まった熱を放熱する機能が、私の髪に備えられていますから」

「へえ……」

そういえば、昔にそんな話を聞いたと思う。

じっと茶々丸さんの髪を見つめて、そっと手を伸ばす。サラサラし

た髪は、私たちと大差無い。

「刹那さん？」

「あ、すみません。どんな感じかと思って」

「触りたければ、どうぞ」

「……それじゃ」

服が並んだ棚の間、足を止めて茶々丸さんの髪に指を通してみる。
うん、やっぱりサラサラで気持ちいい。

「ありがとうございます」

何度か、私の髪を手で梳いた刹那さんが、そう言って笑いました。
満足した様子です。

そうしてまた店内を見て回ります。修学旅行にて、私が着る服を買うのが今日の目的ですが、昨日、刹那さんが言うまで私は何も考えていませんでした。

学校指定の制服で活動には十分だと、こうして歩いている今も思っています。昨日の刹那さんの提案も、断ればよかったのですが、気づけば頷いていました。

……最近の私は、どこか可笑しいように思えます。

「茶々丸さん、これとかどうですか？」

刹那さんが見せてきた服を見ます。薄手の長袖のシャツですが、活動には問題が無いと思ったので頷きました。

そうして何着も籠の中に溜まっていきます。基本的に関節部分が目立たなければ良いので、殆どの服が問題ない物でした。後は、動き

やすければ問題ないです。

「(……録画中)」

服を選ぶ刹那さんを録画します。少しだけ笑みを浮かべているのを嬉しく思います。

……どうして、嬉しいと思うんでしょうか。やはり、最近の私は可笑しいようです。私はあくまで機械であり、人間的な感情を抱くことはありません。

けれど、そうすると私が今、感じているこれはなんなのでしょう。

「茶々丸さん？」

「……はい、なんでしょう」

「ボーっとしてましたけど、どうしました？退屈でしたか……？」

「いえ、それは有り得ません」

今、この瞬間を退屈だと感じる筈がないと、私は断言します。パチパチと瞬きをした刹那さんが、そうですかと笑いました。録画と同時にその笑顔を写真に収めます。

録画した映像と、写真が増えてきています。そろそろ整理しなければいけません。フォルダは、刹那さん、マスター、子猫たちで分けられます。ちなみに、刹那さんは日常版と戦闘版があります。

……気づいたら、いつも録画していました。

「サイズとか見るのに、一度、試着してもらえますか？それで気に入ったのを選びましょう」

「はい」

試着室に入り、着替えます。どの服も、刹那さんが選んでくれた物です。そう考えると、全てがお気に入りになります。選ぶことがで

きません。

……最適な物を選べいいだけなのに、可笑しいですね。刹那さんと関わってから、可笑しいことばかりです。

最初は、マスターが刹那さんを呼び出して行われた戦闘です。刹那さんは、私を傷つけるのを止めて、捕縛しました。私はロボットですから、故障しても直ります。けれど刹那さんは、マスターが怒るからと言って止めました。マスターが怒るとは、私には考えられません。そして、刹那さんはマスターと友達になり……私とも、友達になりたいと言ってきました。

それからしばらくして、ネギ先生と戦闘を行ったところ、刹那さんに助けられました。マスターに頼まれたそう。その後、マスターは怒っていましたが、刹那さんが言うには、私が傷つけられたからだ。お礼を言うマスターが珍しく、マスターが私を家族と言ってくれた時、私はおそらく、人間で言う嬉しいという感情を抱きました。

はつきりと、私が抱いた何かに名前を付けたのは、その時が初めてでした。

「……どう、でしょうか」

ただ、いつもと違う服を着ただけなのに、動力の回転数が上がっています。

カーテンを開けた先で待っていた刹那さんが笑いました。

「似合ってますよ」

「そうですか」

ほんと小さく息を吐きます。回転数が少し落ち着きました。これは、緊張しているという事なんでしょうか。ロボットである私が。

カーテンを閉めて、別の服に着替えはじめます。今、着ていた服は

買いましょう。

……マスターの一件から、私は刹那さんを見ることが増えています。それだけでは無く、様々な思考を、人間で言う感情を抱くようになっていきます。

先日の修学旅行の班決めでも、どうしてか私は、気づけば刹那さんに対する好意や望みを言っていました。

感情も好意も、ロボットである私には無縁な物です。望みもまた、マスターの命令に従う私には必要のない物です。

なのにどうして、私はそれを抱き、自覚しているのでしょう。刹那さんと関わるまでは、無かったことなのに。

「……茶々丸さん？」

カーテン越しに呼ばれます。着替えたにも関わらず、それ以降の動きが停止していました。

慌ててカーテンを開けます。刹那さんと目が合い、何故だか顔に熱が集まりました。

「ど、どうでしょうか……」

無言で見ってくる刹那さんに問いかけます。刹那さんは軽く目を見開いて、それからとても綺麗に笑いました。

「凄く似合ってます。可愛いです」

「か、かわっ……!!」

動力の回転数が跳ね上がります。刹那さんの目を見ることが出来ません。

「せ、せせ刹那さんは、この服を、か、可愛いと？」

「ええ。茶々丸さんによく似合ってて、私は好きですけど」
「――！！！！」

言語機能に支障をきたしながら言うと、刹那さんは不思議そうに首を傾げつつも頷いて、そう答えました。私はというと、大変に危険です。動力の異常な回転に、各機能で異常を起こしかねません。

「す、すみません、刹那さん」

「茶々丸さん？」

「一度、スリープモードに入ります」

「え？」

とりあえず、放射しきれない熱を冷まします。その為に、私は意識を落としました。

「ちゃ、茶々丸さん！？」

倒れた私の体を、刹那さんが抱きとめてくれたのが、最後です。

倒れた茶々丸さんを背負って、公園のベンチに座りその体を横たえさせる。

服は、とりあえず着ていたのと最初に着た物だけを買った。茶々丸さんが倒れた時、慌ててエヴァさんに聞いてみたら、スリープモードならそのうち起きるという事だった。

心配ではあるけれど、私よりもエヴァさんの方が詳しいだろうから。暫く待つて起きないようなら、大学に連れて行こうと思った。

膝に乗せた茶々丸さんの頭を撫でる。こうして眠っている姿も、さっきのように話している姿も、ロボットには見えない。本物の人間

のようだ。

「一緒にまわれなくて、すみません」

せっかく、茶々丸さんが望んでくれたのに、エヴァさんだって望んでくれたのに。私はそれに応えられない。

別の班でも、このちゃんたちに頼んで、エヴァさんたちと同じコースに行くことは出来たけれど、それも出来ない。皆で一緒に行けたら、とても楽しいんだろうな。

「……もしも、旅行中に全部、解決出来たら、その時は一緒にまわってくださいか？」

保証は無いけれど、もしもそうできたなら、少しでも一緒に行けたらいいと思う。その時は、今日みたいに楽しんでもくれたら嬉しい。サラサラした髪に指を通して感触を楽しむ。ハカセに頼んで、髪を弄れるようにすれば、このちゃんが張り切って弄りだしそうだ。どんな髪型も、茶々丸さんならきつと、可愛くなるんだろう。

「それにしても……」

今日の茶々丸さんを思い出して、自然と笑みが浮かぶ。

茶々丸さんは、とても楽しそうだった。表情こそあまり変わらなかったけれど、少しだけ笑っていたようにも見えて、試着室を出る時は少しだけ強張った顔をしていて。

ふとした時に、彼女の中にある感情が見え隠れする。出会った時よりもそれははっきりとしていた。

少しずつ、茶々丸さんは成長していく。ロボットでは無く、人のように心を育てる。それはとても楽しみな事だ。

「エヴァさんも、嬉しそうですね」

茶々丸さんを見るエヴァさんが、時々母親の顔をする事がある。彼女にとって、茶々丸さんは従者であり、家族だから。戸惑いながら成長していく姿は、嬉しい事なんだと思う。

「この後は、どこに行きましようか」

眠っている茶々丸さんに問いかけて、良く晴れた空を見上げる。せっかくだし、買い物だけじゃなくて、散歩をするのも良いかもしれない。茶々丸さんに、聞いてみよう。

それから少しして。目覚めた茶々丸さんが、目が合った瞬間に顔を真っ赤にしたのが、可愛かった。

買い物の日（後書き）

さよをどうしようか考え中。修学旅行、連れて行くか行かないか…
…ふうむ…。

足止め任務の日

修学旅行二日前の、日曜日。千雨さんは今日もまた、別荘での修行に勤しんでいる。エヴァさんもまた、とても楽しそうに千雨さんを苛めている。

私とは言えば、朝の特訓、走り込みや刀の素振りなどを終えて、今日の予定を考えている。昼から一日か二日ほど、別荘で過ごそうか。これを渡すのは明日で良いとして、さてどうしよう。そう考えた時、ピンポンと音が鳴った。私がいたのは寮の部屋なので、来客があるのは珍しくは無い。相手も限られているけれど。

「せっちゃん、おはようさん」

「おはようございます。桜咲さん」

扉を開けた先、限られた相手の一人、このちゃんと一緒にいたのは、珍しい事にネギ先生だった。二人揃って私服だけれど、まあそれは日曜日だし可笑しくは無い。

「おはよう、このちゃん。ネギ先生も」

何の用事か、そう問うと、このちゃんは頼みがあるんやと口を開いた。

「明日な、明日菜の誕生日なんやけど、ネギ君が明日菜にプレゼントあげたい言うてな」

「明日菜さんには、たくさんお世話になってるので……少しでも、お返しが出来たらなって」

「ああ……それは、いいですね」

「それで、今からその買い物に行こうと思ってるんや。で、せっかくやし明日菜にバレへんようにしたいんや」

「……とりあえず、神楽坂さんが街に行かないようにすれば良い？」

「そ、そうです！」

何となく、このちゃんの言う頼みが分かったので聞いてみると、ネギ先生が大きく頷いた。駄目ですか、と首を傾げる先生に笑って首を振る。

「分かりました。神楽坂さんは、今どこに？」

「部屋で寝てるえ。お休みやし、たぶんお昼までは起きんと思うなあ。あと、買い物やけど、麻帆良の外に行くつもりや」

「なら、二人が出かけた後で、神楽坂さんのところにお邪魔するね」

「お願いや」

「お願いします、桜咲さん」

今日の予定は、神楽坂さんの事で埋まりそうだ。二人の言葉に頷いて、私はそれはそうと、と別の事を思って口を開く。

「このちゃんに見せたい物があつたんだけど、出かける前に少しいい？」

「ええよ。ネギ君、ちょっと待っててな」

「分かりました」

ネギ先生をその場に残して、このちゃんを部屋に招き入れる。

「……カモさんはいないから、仮契約の心配は無いと思うけど……気をつけてね」

「うん、分かってるえ」

念のために、そう注意だけした。普段は、このちゃんとネギ先生の二人きりになることが少ないから、何だか心配になる。

修学旅行で長に会いに行くまで、このちゃんが関係者であることは、ネギ先生たちに知られるわけにはいかないから。

「……あんな、せっちゃん」

「なに？」

「せっちゃん、明日菜やネギ君に、何か言うたの？」

「え……？」

問いかけに、首を傾げる。このちゃんがうーんと、自分でも良く分からない風で、口を開いた。

「最近な、二人でどっか行ったり……難しい顔で話したりすることが、多いんや。たぶん、魔法関係の事やと、思うんやけど」

「………そっか」

私は私で動いていたから、二人と話して以降、あまり気にしていらなかったけれど。

「少し話をしたりはしたけど、大丈夫だと思うよ」

「そか？なら、よかったわ」

安心したようにこのちゃんが笑う。

明日菜さんもネギ先生も、お互いを大切に想っていたから、きっと大丈夫だろう。

二人が出かけてから、三十分ほど経ったのを見計らって、私は明日菜さんのいるであろう部屋のチャイムを押した。

「ふぁーい？」

あくび混じりの返事と共に、ガチャリと扉が開く。眠たそうな目をしていた明日菜さんが、私を見た瞬間に目を丸くした。

「おはようございます、神楽坂さん」

「桜咲さん？おはよ……どしたの？」

「このちゃんいますか？せっかくだし、お昼をご一緒しようと思っただんですけど」

「あー、木乃香ならネギと出かけてるみたいよ」

「そうなんですか？」

というよりも、どうして明日菜さんがそれを知っているんだろう。このちゃんの話から、てっきり一緒に出掛けていることも知らないと思っていたんだけど……。

「柿崎たちがさ、デートだーとかって騒いでて……そんなわけ無いのね」

「デートは、さすがに……修学旅行の準備とかでしょうね」

「だよねえ」

呆れたように言う明日菜さんは、本当に全く、デートだとは思っていないんだろう。まあ、確かに違うんだけど。

まだ、二人の買い物目的には気づいていないみたいだし……このまま、麻帆良から出ない様に引き留めておこう。

「……神楽坂さん、よかったらお昼、ご一緒しませんか？」

「私？うん、いいよ」

恐る恐る誘ってみると、明日菜さんはあっさりと頷いた。

「すぐ着替えたりしちゃうから。柿崎たちに起こされたばっかなのよ」

「そうでしたか。なら、お待ちしてます」

「ん、上がって待ってて」

明日菜さんが少し身を避けて、中に入るように促す。どうしようかな、と一瞬迷って、お邪魔しますと中に入った。

床に置かれたままの座布団をお借りして、洗面所に入っていく明日菜さんを見送る。何をするでもなく、座ったまま部屋を見回した。

このちゃんと元の関係に戻ってからは、お邪魔することも何度かあったので、特に珍しくは無い。

「ん……」

二段ベッドの上から見下ろしてくる、オコジョが一匹。警戒するようちにこちらを見ている。

……エヴァさんの一件から、随分と敵視されているような気がするな。いい迷惑、とは言わないが、下手に騒動に巻き込まれないかが心配だ。

「お待たせ、桜咲さん」

身支度を終えた明日菜さんと一緒に、部屋を出る。オコジョは置いてきぼりだけれど、まあいいか。

「桜咲さん、何食べる？」

「なんでも良いですけど……神楽坂さんは？」

「んー、じゃあ、ハンバーガー」

「いいですね」

寮の中には、ファーストフード店もあるし、そこで食べる事にした。……後ろから着いてくるオコジョがいるけれど、放っておいてもいいかな？

寮のロビーで、買ってきたハンバーガーセットをそれぞれ食べる。店内は混んでいて、席が空いていなかったので、仕方なく店外で食べる事にした。

「神楽坂さんは、もう修学旅行の準備はしましたか？」

「んー、持っていく服とかはもう決めてる。鞆に入れるのは、明日するけど」

「四泊五日って、結構長いですよね」

「そうよねー」

他愛も無い話をしつつ、ハンバーガーを一口。ファーストフードはあまり食べないけれど、結構おいしい。

「あのさ、桜咲さん」

「なんですか？」

「この前は、話聞いてくれて、ありがとね」

「……」

思いもよらぬ言葉に、明日菜さんを見つめて目を瞬かせた。

「結局、私は何をすればいいかとか、ちゃんと分かってないんだけど……でも、傍にいれるように、話すことは出来たからさ」

「……そうですか。それは、よかったですね」

「うん。だから、ありがとう」

「どういたしまして」

ネギ先生と明日菜さんの関係は、良好なようで。私にどれだけの事が出来たかは分からないけれど、二人にとってそれが良い事であればいいと思う。

そうして、また少し話をしていると、ピロリロリと明日菜さんの携帯が鳴った。

「ちよつとごめん。はーい。なんだ、また柿崎？何の用よ」

電話の相手は、柿崎さんらしい。とりあえずポテトを摘みつつ、会話が終わるのを待っていると、後ろから雪広さんが近づいて来ていることに気づいた。

「あら、明日菜さんに、桜咲さん」

「こんにちは、雪広さん」

電話中の明日菜さんの横で挨拶を交わす。その間に、明日菜さんの方は進展でもあったのか、慌てた様子で電話口に叫んでいた。

雪広さんが首を傾げる。そしてすぐに、携帯がメールの着信を知らせた。

「ブッ!？」

「あ……」

このちゃんとネギ先生が、一つの飲み物を一緒に飲んでいる写真が、

送られてきていた。噴き出した雪広さんが、明日菜さんに騒ぎ立てるのを聞き流しつつ、私はどうしようかと考える。これは、非常にまずい状況なんじゃないだろうか。

「私たちも追いますわよ、明日菜さん!!」

「えーっ、私も!？」

「か、神楽坂さん!雪広さん!!」

あれよあれよという間に、雪広さんが明日菜さんの腕を掴んで走り出す。どうしよう、どうやって止めよう。暴走状態の雪広さんに対して、どうすれば止められるのか。

「神楽坂さん!!」

「ご、ごめん桜咲さん!この状態のいいんちよ止めるのは、ちよつと無理かも」

「ええっ!？」

全く聞く耳持たず状態の雪広さん。ごめん、このちゃん……止めるのは、私も無理かもしれない。

「……ごめんね、このちゃん」

「んー、でも、明日菜喜んでくれたし……一日早いけど、結果オーライってやつや」

結局、雪広さんを止めることは出来ず、明日菜さんにバレてしまったけれど。

たくさんプレゼントを手に喜ぶ明日菜さんを見てみれば、こっちも自然と笑みが浮かんでしまう。終わりよければ、とも言うし……

良かったと思う。

「それじゃ、神楽坂さん。せっかくですし、私からも一日早いですが、お誕生日おめでとうございます」

「桜咲さんも？わ、ありがとう」

実は持っていた、プレゼント。小さな箱を取り出して明日菜さんに渡すと、開けても良い？と首を傾げられた。どうぞ、と頷き返す。

「わあ、可愛い」

箱に入っていたのは、小さな緑色の宝石が一つ付いた指輪。それから、細い鎖。

「身に着けておくと、良いことがあるそうです。鎖に通して、ネックレスにもできますから」

「そうなんだ？明日からさっそく、着けてることにする」

指輪をしげしげと眺めて笑った明日菜さんに、ほっと安堵する。気に入ってもらえたようで、何よりだったから。

その後は、他の人たちとカラオケに行ったり……いい意味で、騒がしい一日だった。

足止め任務の日（後書き）

次あたりで、ようやく修学旅行に行けそう……すごく長かった。
でも、さよを連れて行くなら、もう一話入るかもしれない……
あー、どうすればいいんだろう…。

修学旅行出発の日

『起きろ!! 刹那!!!!』

「…………ッ!？」

現在時刻、午前四時三十分。脳内に響いた声に直接、脳を揺らしに揺らされて起きるという、最悪な目覚め方をした。

『エヴァ、ジェリン、さん……』

『早く起きろ。そしてさっさと出て来い!!』

『……今、どこに……』

眠っていて無防備の脳には、刺激が強すぎる。ぐわんぐわんと脳と視界の揺れる感覚に、ぐったりとベッドにうつ伏せに沈んだ。窓の外はもう明るくなってきているが、それに騙されはしない。今はまだ、あと三十分は寝ている時間だ。

『家だ』

『なんで、こんな早くに……』

集合時間、九時だったと思うけど。こんな早くに行く必要、無いよな。

『お前が来ないと、外に出られんだろうが。たかがお札一枚のくせに、発動方法が随分と面倒くさい』

身代わりのお札。気を籠めれば普通に発動するお札なのだが、あれ

は普通の身代わりを発動させるよりも、気の流し方に注意が必要になる。何気に繊細なのだ。

『……身代わりの用意は？』

『言われた通り、ギリギリまで魔力を箆めた』

『なら、いつでも使えますよね……』

頭を押さえて、もぞもぞとベッドの中で動き回る。まだぐわんぐわんしてる、眠っていたい。

『おい、こら。寝るな』

『……ちゃんと行きますから、大人しく待っててください……』

『待てるか。私は、早く外に行きたいんだ』

『………少し、準備をしてから行くので』

二段ベッドから飛び降りる。絶対だぞ、と子どものように騒ぐエヴァさんとの念話を終わらせて、ふらつく足を踏ん張った。

十五年ぶりの外、だもんなあ。この前のお試しは無効として。

昨日のうちに準備しておいた鞆の前に座って、中身を再確認する。着替えとその他、あとエヴァさん関係で必要な物が入っているのを確認。

「朝ご飯は……エヴァさんのところで、食べればいいか」

真名には軽く何か作っておこう。置手紙も一緒に。このちゃんは、どちらにしろエヴァさんの方に行かなければならなかったから、一緒に行けないと言ってあるけれど。その代り、新幹線は隣同士で座ると約束した。その時のこのちゃんの笑顔が、何だかとても怖かった。

「遅い」

「……遅くないです」

現在時刻、午前五時三十五分。起こされてから、一時間ほどしか経っていない。

「早くしろと言っただろ」

「今から行っても、駅で待ちぼうけになるだけですから。もう少し、待ちませんか」

「い・や・だ」

「……あ、茶々丸さん。おはようございます」

私の目の前に、駄々っ子がいた。最悪な起こされ方で、正直、機嫌が最悪な私は、それを無視してお茶を出してくれた茶々丸さんに挨拶をする。無視をするな、と聞こえたけれど、それを無視した。

「おはようございます、刹那さん。朝食の方はお済ですか？」

「いや、実はまだで……台所、お借りしてもいいですか？」

「いえ……よろしければ、私をご用意しますので、ご一緒にどうぞ」
「……それじゃ、お願いします」

せっかくだし、茶々丸さんの好意に甘えることにして、お茶を飲む。相変わらずとても美味しい……それだけで、機嫌が直った。

ふう、と一息吐いて、持って来た鞆からお札を一枚取り出して、エヴァさんに話しかける。

「身代わりの方は？」

「ここにある」

「家を出る時に、発動させます。あと、それまでの間に、これにも魔力の補充をお願いします」

「なんだ、それは？」

「バッテリーです」

エヴァさんにかけられた呪い対策。必要となるのは、エヴァさんの魔力を持った匣用の身代わり、エヴァさんの存在を不確かにする認識阻害効果を持つ道具。

身代わりに簞められた魔力はエヴァさんの物であり、まずはそれを消費して身代わりを作ること。呪いを誤認させる。次に、本物であるエヴァさんに認識阻害と似た効果を持つ道具、勾玉を持たせ、その存在の認識を不確かにする。それによって、呪いが身代わりを本物とより強く誤認する仕組みだ。欠点は、勾玉の効果が呪いのみで、対人には効果が無い事。

「修学旅行中に、身代わりの魔力が切れる可能性もありますから。それに魔力を簞めて、必要なところから補充できるようにします」

ちなみに、出来たのは昨日の夜。魔力を封じ込めて、必要な分だけ取り出せるようにするのが、意外と難しかった。封印と同じかと思っただけ最初に作ったら、取り出そうとすると全部、まとめて取り出されてしまうし、調整が難しいせいで時間がかった。

「そのお札ギリギリまで簞めて、せいぜい一日分ですけど……身代わりの方で、五日は持つ計算ですから」

「……まあ、呪いに邪魔されるのはイラつくしな」

なかなか出発できないことに不満そうにしながらも、エヴァさんはお札に魔力を簞めはじめる。私は、身代わりのお札を持って状態の確認をする。お札の許容量ギリギリまで簞められてるのは流石だな

あ。これなら、きちんと五日間、持ってくれそうだな。

「マスター、刹那さん。朝食の用意が出来ました」

「ありがとうございます、茶々丸さん」

出発は、朝食を食べて、それからになりそうだな。

身代わりを発動させて、駅までやって来て。とりあえず、エヴァさんから距離を取った。

「ふっ、ふはははは！！外だ！！ようやく外に出られたぞ！！！！」

「よかったですね、マスター」

大喜び、そして大はしゃぎのエヴァさんを遠目に眺める。現在時刻、午前七時十五分。まだまだ、集まっている人は少ない。

「エ、エヴァンジェリンさん！？」

眺めていたら、ネギ先生が驚きながらエヴァさんに走り寄っていくのを見た。エヴァさんは、本来は呪いで修学旅行に行けない筈だから、驚くのも無理は無い。

「……嘘だよな？え…？」

視界の端で、大げさに狼狽えて青褪める瀬流彦先生を見つけた。ネギ先生同様、エヴァさんがここにいることに驚いているんだろう。……西には許可を取ったけれど、東には何も言っていないんだよね。言う必要があるとも、思わなかったから。

エヴァさんも学生なんだし、修学旅行という名の課外授業に参加する権利は、あるんだし。それに、護衛としてもいてもらった方が良
いし。

「……………はあ」

このちゃんたちもまだ来ていない。とりあえず、ネギ先生を適当に誤魔化したエヴァさんが大笑いしているのを、他人のふりして眺めている事にしよう。

……瀬流彦先生が、なんでか縋るような目で私を見ていた気がするけど、気にしないでおこう。

ホームに学生服が増え始めた。ネギ先生たち教員の人たちが、生徒たちに点呼を呼びかけている。

「京都に行くのも何年ぶりやろ。楽しみやね」

「そうだね」

新幹線内、席に座らずはしゃぎまわるクラスメイトをよそに、このちゃんと二人、自分たちの席に向かう。

とりあえず、確認するべきとしては、座席からかな。背もたれや席の周辺を確認して、そうしたら案の定、座席の下からお札を見つけた。

「せつちゃん、それ……」

「今から全部を回収するのは、難しいね。エヴァさんたちにも頼んで、自分の周りだけ片付けてもらおう」

「せやね……」

確認したけれど、害のあるものではない。たぶん、過去と同じように蛙あたりが出てくるんだろう。

エヴァさんたちと、真名と長瀬に頼んで、出来る範囲で回収してもらおう。集めたお札をまとめて封じた。荷物に潜んでいたものも一緒に回収してもらったから、あとは、他のクラスメイトの荷物と、いくつかの座席のだけだ。

新幹線が動き出す前に、席に戻る。窓の外を眺めていたこのちゃんがこちらを向いた。

「せっちゃん、どうやった？」

「出来るだけ回収はしたけど、やっぱり全部は無理だった。他の人の荷物にも、たぶんもう入ってると思う」

「そか……」

落ち込んでいるこのちゃんの隣に座った。出来るだけ、妨害は止めたいが……こちらが動くよりもずっと先に準備されてる状況では、これが限界かもしれない。

「ね、このちゃん」

「なんや？」

「三日目は、ちょっと忙しいけど……それまでは、修学旅行を楽しんで？」

「でも、これってうちのせいなんやろ？」

「まあ……少しは、このちゃんにも関係してるけど。でも、全部じゃない」

騒動に乗じてこのちゃんを誘拐、はあるかもしれないけれど。この妨害の目的は、どちらかといえば、ネギ先生の持つ親書の方だろうな。

「気を抜くなどとは言わないけど、危ない事とかは、私が何とかするから。このちゃんは、楽しんでくれてれば、それでいいよ」

「そんなん、いやや。せっちゃんばかり危ないのは、いや」

「大丈夫だよ。それに、もしも本当に危なかったら、このちゃんにも言うから…その時は、私と一緒に逃げてくれる？」

「……絶対に、言うてくれるんやね？」

「うん」

「………旅行、楽しみやね」

「うん」

新幹線が、動き出す。過去に、取り返しのつかない間違いを犯した場所に向かって。

絶対に、同じ間違いを犯したりしないから。だから、今は楽しんでいて、このちゃん。

修学旅行最初の日

駅を出発した新幹線内は、騒がしさを増していた。その中で私は、静かに席を立つ。

「このちゃん、ちょっとお手洗い行ってくるから」

「わかったえ」

『エヴァさん、このちゃんをお願いします』

『ああ』

こちらを伺っていたエヴァさんに念話でお願いして、車両の外へ出た。動く新幹線内でこのちゃんを浚うのは難しいだろうけれど、万が一の為だ。

いくつかの車両を進んだ先で、足を止める。一般車両を挟んでいるから、クラスの人に見つかることはまず無いだろう。同じ車両で迎撃して、もし見られでもしたら厄介だ。

「――はっ」

短く息を吐くと同時に、右手を一閃。進んできた車両を飛んできた式神を両断する。

ひらりと落ちた親書を拾って、式神のお札を拾ったところで。慌てた様子で、ネギ先生が走ってきた。

「さ、桜咲さん!？」

「ネギ先生……これ、落とし物です」

「それは、僕の大切な親書……!!」

……あまり、大きな声で言わないでほしいな。

「あ、ありがとうございます！助かりました！！」

「いえ……大切なら、もう落とさない様に気をつけてくださいね」

言い残して、その場を後にする。さて、ネギ先生にはいつ話すべきだろう。少なくとも、落ち着いて話せるほうが良いことを考えると、ホテルが妥当か。一応、ネギ先生の対応がどの程度か、確認しておきたい、けど……不甲斐ないかもしれないなあ。

手の中に握り仕舞っていた式神のお札を一瞥して、小さく溜息を吐き出した。

回収できなかったお札によって、蛙騒動は起きたものの、それ以外は新幹線は概ね平和だったと言える。このちゃんの持って来たお菓子が美味しかった。

「京都おーっ！！」

「これが噂の飛び降りるアレ！！」

「誰か、飛び降りれ！！」

「では拙者が……」

「おやめなさい！！」

京都、清水寺。大騒ぎするのは、予想通りの展開だったか。

「ふははははっ、見ろ茶々丸！！この景色、この高さ！！」

「はい、マスター」

「おいこら、下りとけて。文化遺産なんだから」

柵の上に仁王立ちするエヴァさんが大声で叫ぶのを、千雨さんが嫌そうな顔をしつつも下しにかかる。正直に言うと、どちらの騒ぎにも近づきたく無い。

そう思って、全体を見渡せる位置に立って柵に寄りかかる。このちやんが楽しそうに笑いながら、隣に立った。

「懐かしいな。うち、来るの何年ぶりやろ」

「小学校は、もう麻帆良だったから……七、八年くらい？」

「それくらいやね。あ、なあ、あそこに見える川って、昔一緒に遊んだ川やない？」

「どれ？」

「あれや」

柵に片手をついて、このちやんが指差す。その先を辿って見つけた川に、そうかもと頷いた。二人で顔を見合わせて、懐かしいと笑う。それが楽しい。

「木乃香ー、桜咲さーん。移動するよー」

「あ、待ってえな。いこ、せっちゃん」

「うん、このちゃん」

明日菜さんに呼ばれて、このちゃんと一緒に歩き出す。空いていた私の左手を、不意にこのちゃんが掴んだ。

「はよ、いこか！」

前触れも無しに走り出したこのちゃんに引っ張られて、走り出す。顔だけを振り返ったこのちやんが、やっぱり楽しそうだったから、私も同じように笑った。

「これが恋占いの石だって!!」

「で、では早速、クラス委員長の私から……」

「あー、ずるい。私も行く!」

「あ、あの……私も……」

私とこのちゃんが着いたとき、恋占いの石には、既にクラスメイトの大半が集まっていた。これ、道の途中に落とし穴があった筈だけど……目立たないようにはされてるが、あるな。このまま行かせるわけにもいかないし……。

ちらりとネギ先生を伺うと、肩に乗せたオコジョと話していた。気づいていないらしい様子に溜息。少し身を屈めて、足元の小石をいくつか拾った。

「せっちゃん、どうかしたん?」

「なんでもないよ、このちゃん」

不思議そうに聞いてくるこのちゃんに微かに笑みを浮かべて答えつつ、右手に持った石を落とし穴があるらしい場所に気を籠めて投げる。

「さあ、行きますわよ——!!?」

意気込む雪広さんたちの前で、ドシャツと地面の一部が消える。投げた石の衝撃で、落とし穴を隠していた土が落ちてしまったのだ。

「な、これはどういう事ですよ!?!」

「悪戯でしょうか……」

「これじゃ占い出来ないよー」

穴を取り囲んで残念がる人たちを眺める。隣でこのちゃんが呆氣にとられた顔をしていた。

「吃驚したわ」

「そうだね……」

明日菜さんたちと一緒に、穴を覗いていたネギ先生がこちらを見た。私は落とし穴を壊しただけです？

「し、仕方が無いですわね！次は音羽の滝に行きますわよ！！」
「おー！！！」

気を取り直して、団体で動き出した人たちを追いかける。何気に左手はこのちゃんにがっちり握られていて動けない。

「このちゃん……？」

「なんや？」

「……なんでもない」

このちゃんがとても楽しそうなので、何も言えず。音羽の滝までやって来た。

鼻こうを擽る酒の匂いに顔を顰めて、このちゃんの手を引いて滝の前に回り込む。屋根の上を見上げると、酒樽が見えた。一緒に見上げたこのちゃんが、慌てた風に声をあげる。

「明日菜ー、いいんちよたち止めてえなー」

「どうかしたの？」

「縁結びの滝のところに、お酒が混ぜられてるんです」

「ええっ！！」

明日菜さんに叫び、ネギ先生が慌てたが時すでに遅く。雪広さんたちを筆頭に、殆どの方がお酒入りの滝の水を飲んでしまっていた。酔いつぶれてしまった人たちを前に、このちゃんがありゃと頬を搔き、私は遅かったかと呟いた。先に、酒樽を避けてしまえばよかったかなあ。

「おや、どうしました？」

「何だか酒臭いですね……」

「あ、あのこれはそのっ」

通りがかった新田先生と瀬流彦先生に、ネギ先生たちが慌てだす。下手な言い訳をしそうな様子に、仕方ないなと思った。

「音羽の滝に、お酒を混ぜられていたんです」

「なんだって!？」

「それはいけないですね……」

酔いつぶれた人をバスに乗せて旅館へと指示を出した新田先生に一安心。晩御飯までに、酔いがさめてればいいけど。運ばれていく人たちに、このちゃんの手を引く。行こう、そう言っ
て覗き込んだこのちゃんの表情は、少し暗かった。

「……このちゃんのせいじゃないよ」

「わかつとる……」

分かってるけど、思ってしまうのは止められない。そんな所だろうか。

「うちのせいで、みんなの旅行まで台無しになったら、嫌やな……」

「……大丈夫だよ」

そうならない為に、エヴァさんたちをお願いをしたんだから。
なのにこのちゃんにこんな顔をさせてしまったのは、私が後手に回
る間違いをしたから。
なら、今度は間違えない。

「修学旅行、いい思い出になるよ。絶対」

「ほんまに……？」

「うん……このちゃんは、ちょっと忙しいかもしれないけど。でも、
絶対に楽しかったって、思えるから」

だから今は、笑ってて。

結局、クラスの三分の一が酔いつぶれていたもので、それを踏まえて
お風呂の時間などが少し変更になったりするらしい。無事な人が多
い班が、先にお風呂に入ることになるんだそうだ。
新田先生に確認してくる、と部屋を出て廊下を歩く。このちゃんは
部屋で休んでいてももらうことにした。

「真名、長瀬」

「おお、刹那。何やら大変そうでござるな」

「仕事の依頼をするかい？」

少し歩いたところで、二人一緒にいた真名たちに話しかけられた。
こちらも探していたのでちょうどいい。

「今はまだ、警戒のみで良い。ただ、明日からは二人に頼む事も出

てくるかもしれないから……よろしく頼む」

「任されたでござるよ。にんにん♪」

「報酬分はきっちり働くからね。安心しろ」

「ははっ、心強いな」

いつもと変わらない態度だけれど、それが逆に安心する。エヴァさんにも常時警戒してもらっているけれど、二人ともいつでも動ける状態ではいてくれるだろう。

このちゃんの護衛は私が専念するとしても、他が疎かになれば……悲しむだろうからな。

「そういえば、お風呂の時間は聞いたかい？」

「ああ、今から聞きに行くところだったんだ」

「とりあえず、無事な人から二班ずつ合同で入るそうでござるよ」

「順番はどうなった？」

「五班と六班の組み合わせが最初だそうだよ。そこが一番無事なんだと」

「そうか。ありがとう」

先にこのちゃんたちに伝えて、それからエヴァさんたちに声をかけるかな。千雨さんの様子も見ておきたいし……後で部屋に行ってみよう。

お風呂に行く前に、エヴァさんたちの部屋を伺うと、チャチャゼロさんを加えた四人でトランプをしていた。何気に白熱している様子で、お風呂は一勝負終わってからだとエヴァさんに言われた。

だから、このちゃんと明日菜さんと共に、お風呂場にやって来た。……脱衣所に、お札は無し。油断は出来ないけれど。

「露天風呂」

「楽しそうやねー、明日菜」

うきうきと着替える明日菜さんを見て、このちゃんが笑う。そりや
そうでしょ、と話す明日菜さんを見て、ふむと考える。いつ、ネギ
先生と明日菜さんに事情を説明しようか、と。

考えながら服を脱ぎ、下着のみになったところで、その思考は中断
された。脱衣所の外で、微かな気配を感じた。

「っこのちゃん！」

「へっ？」

「うき」「うきき」「うっきっきー」「うきっきー」「うきゃ」「
うききききき」

扉の隙間から、何匹ものサルが侵入してくる。記憶していたよりも、
数が多い。

「ひゃ、ひゃあああああああ！？」

「せ、せっちゃああん！！」

「ちっ」

明日菜さんが突然の事態に悲鳴を上げて、このちゃんにサルが群が
る。なぜか下着を脱がせようとしているのに、ブチリと切れた。

「えっ！？一体これは……！？」

「――神鳴流奥義」

勾玉を夕風に戻し、構える。

「百烈桜華ざ——っ」

「わああああっ!! 何してるの桜咲さん! ってかそれ本物!？」
「駄目ですよ、おサルさん斬ったらかわいそうです!!」

拔身の刀に驚いた明日菜さんと、なぜかしがみ付いてくるネギ先生。
ああ、そうだ。過去もこうやって邪魔されて——

「邪魔をするな!!」

「あうっ!？」

「ネ、ネギ!!」

今にも連れて行かれそうなこのちゃんに、ネギ先生を力任せに押しやった。ゴンツと何だか痛そうな音が聞こえたが、まあいい。
このちゃんを運んで露天風呂への入口に向かうサルを追いかけて、床を蹴る。そうして夕風を振るった。

「神鳴流奥義——百烈桜華斬!!」

左手にこのちゃんを抱きかかえ、サルを一掃。切り刻まれたお札が
花卉のように舞い、私とこのちゃんの周りを揺れる。
露天風呂の壁の向こうで、ガサガサと木々の揺れる音。逃げたよう
だが……深追いをするのは、得策じゃないか。

「ふわあああ……」

「このちゃん、大丈夫？」

「うん……うち、せっちゃんのこないな姿、初めて見たわ」

「そういえば……そうだったね」

このちゃんの前で、神鳴流の技を使うのは初めてだ。基本は、見えない場所で処理してたから。

「せつちゃん、かつこよくて、綺麗やわあ……」

「そう？」

「うん。……うちも、音羽の滝の水、飲んで来ればよかったかなあ」

「……このちゃん？」

「せつちゃん、助けてくれてありがとうな」

笑ったこのちゃんに、何となく妙な思いを感じつつもほっと一息。怪我も無いようで何よりだ。

にしても、もしかすると私が覚えている以上に、強硬派も動いてくるかもしれない……今日のいやがらせは、ある程度で対応してしまってるし、警戒されているかもしれない。

真名や長瀬に、声をかけておいたのは正解だな。いつ面倒事が大きくなっても、可笑しくなさそうだ。

とりあえず、今は――

「……このちゃん、お風呂どうする？」

「んー……あんな、せつちゃん」

「なに？」

「ネギ君が、気絶しとるんよ」

「……………え？」

「ネギー!!」

「アニキー!!」

このまま予定通りお風呂に入ろうか、と思って聞いたら。このちゃんが困ったように笑って、脱衣所の一角を指差して言った。

そこでは、倒れたネギ先生を明日菜さんが抱き上げて、そしてオコジョがネギ先生の耳元で、必死に呼びかけていた。

なるほど、さっきのゴンツという音は、ネギ先生が床に頭をぶつけた音だったらしい。

「……………」

不可抗力、ということで謝ったら許してもらえらるだろうか。

修学旅行最初の日（後書き）

修学旅行編、細かいところはガチでスルー。スルースキルが必要で
すので、ご了承ください。

協力拒否?の日

私たち五班の部屋に敷かれた布団は、既に二か所が占領されている。酔いつぶれた宮崎さんと早乙女さん。綾瀬さんも、パックジュースを飲みながら、窓際の大きな椅子でうつらうつらとしている。

「このちゃん……」

「嫌や」

「大丈夫だから、ね?」

「嫌や」

寝ている二人と寝かけている一人に聞こえない様に、部屋の隅にこのちゃんと二人で座って、そんなやり取りを繰り返す。がっしりと掴まれた右手は、離してもらえないのだろうか。

「すぐに戻るよ?」

「嫌や」

「危なくないから、本当だから」

「嫌や」

「むしろ、このままの方が危ないんだけど」

「……嫌や」

一点張りのこのちゃんに、怒りよりも困惑しか浮かばない。私がこのちゃんに怒るなんて、万に一つ、億に一つありえないのだけど。

「私が危ない事は、しないよ?」

結界を張りに行く、そう言ったら、このちゃんは私から離れようとしなくなってしまった。このちゃんにとって、その私の行動は危険なものという認識なんだろう。とても敏感にそれを感じ取ってしまったらしい。

私を心配しての行動だというのは、分かっているから。だから、私も手を振り払ったり出来ない。出来る筈がない。

「お札を、ホテルの何カ所かに張ってくるだけだよ。張り終わったら、すぐに戻るし」

「…………でも、さっきのおサルみたいな、また来るかもしれないんやろ？」

「それが、ホテルに入ってこれないようにするんだよ。結界を張れば、ホテルは安全になる。このちゃんも私も、安全になるから」

「……」

「この部屋にはもう結界を張ってあるけど、ホテルにさっきのみたいなのが溢れたら、他の人も大変だから…………このちゃんは、ここで待ってて？」

一番の安全地帯は、この部屋。次はその範囲をホテル全体に広げる。エヴァさんたちをお願いしてあるとはいえ、わざわざその手を煩わせるような事態を起こしたくは無いし、何よりその方がこのちゃんもより安全だから。

「お願い、このちゃん」

「…………分かったえ」

「このちゃん…………」

不安そうに瞳を揺らしながら、ゆっくりと手を離してくれたこのちゃんに、微笑む。

そうして私は立ち上がり、音をたてないように静かに襖を開けた。

振り返れば目が合うこのちゃんに笑いかけて、すぐに戻るよと小さく紡いだ。

手早く迅速に、各所の出入り口を結界で囲む。敵意を持つものを中に入れないようにするものだけれど、実は分からないことが幾つかあった。

過去、天ヶ崎千草はホテル内にどうやって侵入したのか。今日の夜にこのちゃんが浚われかけたのは覚えていたが、私はその原因を知らなくて。だからといって、誰一人中に入ることも出ることも出来ない結界を張れば、無関係な人間に怪しまれるし……ん？

「もしかして、誰かが扉を開けたのか？」

正面玄関の上、張り付けたお札を睨むように見る。誰かが出入りするのに便乗して、中に侵入した――有り得る事だ。

となると、可能性としてはこの正面玄関が使われた可能性が一番高い。夜になって出入りは少ないとはいえ、無いわけでは無いから。

「……一応、仕掛けておくか」

台を避けたところ、玄関に敷かれたマットの裏にお札を一枚、忍ばせる。

これで結界も張り終えたし、早いところこのちゃんの元に戻ろう。そう思った矢先、ロビーの奥の廊下から現れたネギ先生と明日菜さんが、私を見つけた。

「よかった、いた。桜咲さん」

「……ネギ先生、神楽坂さん……」

選択肢は、いくつだろう。無礼を承知でさっさとこのちゃんの元に
戻るか、さっきの脱衣所でのネギ先生の気絶を謝罪するか、何食わ
ぬ顔で話に付き合うか……とりあえず、多少の事情は説明してお
いた方が、良いだろう。脱衣所の時みたいに邪魔されたらかなわな
いし。

「先ほどはすみませんでした、ネギ先生。乱暴に扱ってしまって」
「い、いえ。僕の方こそ……邪魔、してしまっただけで」

……邪魔をした自覚は、あるのか。明日菜さんに、さっきのサル
が式神だと聞いたんだろうか。

「あの、えっと……つかぬ事をお聞きしますが……」
「なんでしょう？」

妙に改まった様子で、ネギ先生が口を開いた。一度、明日菜さんと
顔を見合わせてから、意を決したように尋ねてくる。

「桜咲さんは、魔法を知ってるんでしょうか？」

「知ってますよ」

「うわ、凄いあっさり」

大げさに驚いた風の二人に、ああ、と納得。それから、少しだけ苦
笑した。

「すみません、黙ってて。こちらにも都合がありました」

「そうなんだ……ええっと、ってことはさ……あの、私が話したこと
も、全部意味が分かってたりとか？」

後半、声を潜めて言われた言葉に頷き返す。それからネギ先生と明日菜さんを見比べて、口を開いた。

「ネギ先生が魔法使いで、神楽坂さんがその従者というのは、知っていました」

「そ、そうなんだあ……」

「……すみません。お二人を騙す形になってしまった」

「い、いえ！ そんな……凄く、助かったんです。だから、ありがとうございます」

「私も、ありがとね」

「……それなら、よかったです」

騙したのは本当なので、二人の言葉に安堵の息を吐いた。それでも、何とも言えない雰囲気になったのを、明日菜さんが戸惑いがちに口を開いて壊す。

「あ、あのさ、それは？」

「これですか？ 式神返しの結果で……日本の魔法ですよ」

「さっきの刀は、どうやって出したんですか？ 何も無いところから出たように見えたんですけど……」

「普段は、勾玉に姿を変えて持っているんです。持ち歩きに便利ですから」

トントン、とお札を揃えて持ち直す。私の言葉にネギ先生が感心したようにへえ、と声を出して、顎に指を当てた。

「僕もそんな風に出来ないかな……」

「んな事よりも、結局あんたは味方なのか？ 敵なのか？」

「ちよっ、何聞いてんのよ！ このエロオコジョー！！」

「いやでも、姐さん！」

疑うオコジョに、反論する明日菜さん。オロオロしつつもオコジョに反論するネギ先生。

ああだこうだと騒ぐ彼らに、とりあえず私の立場を説明すべきかと思ひ、口を開くのが少し面倒くさかった。

どこまで話すべきか、そう考えながら結局、必要となり得る情報を話した。

呪符使いと神鳴流。私の立場と、私がこのちゃんの護衛であること。このちゃんが強硬派から狙われていることは、言わないでおく。必要なら、言うけれど……今は、いい。

そうして話し終えた私は、ネギ先生たちの反応を伺う。二人と一匹が私を見つめているのを見返したら、ガバツと明日菜さんが立ち上がった。

「私も協力する!」

「僕も、協力します!!」

「神楽坂さん、ネギ先生……」

二人の答えは、予想がついた。だから少し、言わない方が良いかもしれないという気持ちも、あった。

ただ、疑われたままで行動に支障が出るのと、こうなるのを天秤にかけて……結果、この方が良いと思った。遅かれ早かれ、二人が私とこのちゃんについて、知ることになるのは分かっていたし。

でも、だからこそ、私の答えもまた決まっていた。

「――すみませんが、協力はしません」

沈黙が落ちる。ぽかんとした顔で二人が私を見ていた。

「へ？」

「な、なんで？」

「……神楽坂さんは、ネギ先生に与えられた任務を、ご存知ですか？」

「えっと…親書、でしょ？ 届けに行くんだったわよね」

「ええ。ネギ先生、それが狙われているのは、理解していますか？」

「は、はい。それはもちろん……」

まあ、新幹線で一度は敵に盗られかけたのだから、理解してもらわなければ困る。

「ネギ先生には、その親書を確実に、関西呪術協会の長に届けてもらいたいです。だから、その任務に専念してください」

「で、でも、皆をその人たちから守らないと」

「……こちらで、護衛役に何人か話を通してあります。皆さんに何かあれば、その人たちが動きますから」

「それって？」

「内緒です。不用意に接触して、敵の警戒を煽っても問題ですから。なので、ネギ先生と神楽坂さんには、その親書を護ることに集中してもらいたいです。このちゃんの護衛は私が、他の人たちの護衛も、任せてありますから」

「……………」

遠慮も容赦も、気遣いも何も無いかと自覚しながら、私は告げる。ここで必要以上に彼らに動かれるのは、迷惑に近いから。

「……それぞれが護るものは、少ない方が良いんです。ネギ先生は、他の人たちを守りながら、親書を守り通すことが出来ますか？」

「それ、は……」

「私も、このちゃんを護りながら、他の人たちを護れる自信はありません。ですから、他の護衛を頼んだんです……協力して、お互いに護るものを増やすのは、得策じゃないんです」

これは本心に近かった。協力して何かを護るのも一つの手だが、今回はそれは良いとは言えない。自分に護れる範囲を護り、他はまた別の仲間に任せる。信頼のおける相手に任せたなら、それに気を取られる心配は一切、無い。

「だから、ネギ先生たちは親書を護ることにだけ、集中してください。お願いできますか？」

「………はい」

気落ちした声でネギ先生が頷いた。さもすれば傷ついたようにも見えるその表情に、目を閉じて考える。さすがに、言い方が悪かったか。

「……もしも、お互いにどうにもならなくなったら……その時は、協力して互いのものを護りましょう」

だからそれまでは、非協力関係で。互いに護るべきものを護るだけ。それが今の私に出来る、一番確実な護り方。

明日菜さんと二人で部屋に戻る。ネギ先生も部屋に戻るとのこと、たぶん外に出たりすることは無いだろう。

廊下を歩く私と明日菜さんの間に流れる、何だか重い沈黙に困り果てる。ああも断った後で、普段通りにしてくれとは言いがらかった。

「……すみません、神楽坂さん。お二人の好意には、感謝してるんですけど」

「あ、いや、桜咲さんが謝る必要なんて無いよ。うん……」

「そう、ですか？」

疑うように見上げると、明日菜さんの視線が彷徨い、それでも静かに頷かれた。

「桜咲さんの言ってる事、分かるから……皆を護りたいけど、私とネギにそれが出来るだけの力とかあるのか、自信ないのは本当だし。桜咲さん、前に教えてくれたでしょ？護るのは凄く難しいって」

「……ええ」

「私、まだ自分を護れるかも分かんないし、ネギを護れるかも分かんない。護りたいけど……そんな私が、ネギだけじゃなくて、皆を護る事、出来るのか分かんない」

「……私は、一人でクラスの人全員を護れるとは、思ってます。このちゃんを護りながら、他の人たちを護れるとも、思っていないです」

「でも、桜咲さん凄く強いよね。刀でおサルを纏めてやつつけたじゃない」

「あの程度じゃ、誰かを護るなんて無理ですよ」

護りたいなら、もっと強く。さらに強くならなければ、いけないから。そうしないと——また、繰り返す。

「このちゃんが笑っていられるように、私はもっと強くなりますよ」

見つめてくる明日菜さんに言って、私は部屋の襖に手をかけた。出来るなら、このまま静かに夜が終わればいいと思う。

協力拒否?の日(後書き)

一応言っておこうと思いますが、別にネギたちをアンチするつもりは全く無いです。刹那もそんなつもり無し。

ただ、絶対に譲れないところでははっきり言いすぎて、必死になりすぎる刹那なのです。

細かいところはいつも通りスルーが大事です。

可能性を逃がした日

暗い部屋で、目を覚ました。複数の寝息と、壁掛け時計の秒針の音。布団に寝転がった体勢のまま視線を動かして時計を確認すると、夜中の一時を指していて……不寐な客人の存在に、溜息を吐いた。

「いつてくるね、このちゃん」

布団の下で握られていた右手を、そっと外して。枕の下に忍ばせていたお札で、身代わりを一体作りだした。

身代わりの私は、心得たように布団に入り目を閉じる。誰かが起きたとしても、私がない事には気づかない。

そうして私は、襖を少しだけ開けてするりと部屋を抜け出した。耳を澄まして足音を確認、何も聞こえなかった。

寝ていたので下したままの髪を無造作に掻きあげて、私は歩き出した。

結界の他に、同時に使用していたお札がある。こちらに敵意を持った存在が通ったら、それを知らせるものだ。それを、正面玄関の玄関マットの下に忍ばせた。

念には念を入れておくものだ。案の定、それが反応を示した。廊下からロビーの様子を覗く。大きなカートを押した女が一人、人払いでもしたのか、他に人の姿は無い。

カートの中から顔を出したサルを見つけて、このちゃんを襲った同一犯であるとはっきりした。

「さて、お嬢様はどこにおるんでっしゃろ」

狙いはやはりお嬢様のようで……足に気を集めて、女との距離を一気に縮めた。

「んなっ!？」

突然、目の前に現れた私に慌てたらしい女がそれ以上口を開く前に、首を掴んで走る。もう片手はカートを引っ張り、ロビーを突き抜けて外に飛び出した。

カートを宙に放り投げ、女を地面に押し付ける。ガシャンと少し遠くで響いた音に、誰も気づかなければ良いが。

「っあんたは……」

「強硬派の人間だな？天ヶ崎千草か」

「そう、だったら、どうするん……?」

「大人しく投降するなら長に突き出す。暴れるなら殺す」

「っ……随分と、過激な人どすなあ……?」

「……………」

首を掴む左手に力を込めた。長は殺すことを望まないだろうが、このまま暴れてこのちゃんに危害を加えるなら、それも考えざるを得ない。小太刀の一つもあればよかったな、この距離では夕風の鞘を抜けるかどうか――

「ざーんてーっせーん」

上から襲って来た斬撃を、夕風を頭上に構えて弾き飛ばす。一瞬、天ヶ崎を掴む手から力が抜けて、腹部を狙う蹴りに手を離して飛び退いた。

後退して起き上がった天ヶ崎の隣にすたっと着地したのは、眼鏡をかけた少女。

「どうも。神鳴流、月詠います。お初に」

「遅いわ、月詠はん」

「たはは、すみません」

何とも気の抜けた調子で話す月詠に、夕凧を構え直す。天ヶ崎と月詠、二対一だが……問題は無い。

「見たところ、神鳴流の先輩さんみたいですけど、雇われたからには本気でいかせてもらいますわ」

「ほな、よろしゅう、月詠はん。うちはお嬢様を探してきますさかい――」

「神鳴流奥義」

そそくさと移動しようと動き出す天ヶ崎に、夕凧を振るう。

「斬鉄閃」

「わわっ!!」

「っ――なんのつもりや!？」

天ヶ崎に放った技は、間に入った月詠が慌てて受け止めた。その後ろで、思わぬ事に驚いた風に天ヶ崎が声を荒げる。

私は、何を言うかと思いつながら、その問いに答えた。

「お嬢様を狙っている人間を、通すはずが無いだろう」

「っこういう時は、馬鹿みたいに誰か一人の相手をするものやろ!？」

「今、この場でそれをやったら、本当に馬鹿だろう」

むしろ、雇われの月詠よりもその雇い主の天ヶ崎の方が重要なのだし。二人とも通すつもりは無いが。

「先輩はいけずやわ。うちの相手だけしてくれへんの？」

「無理だな」

「どういうことや、情報と違いすぎる……」

……情報？

「私の事を、仲間が調べでもしたのか？」

「そりゃ、東にとられたお嬢様を守る、西の裏切り者やさかいなあ。うちらもようさん調べさせてもらたわ」

うちらということとは、やはり複数犯。強硬派の全てが敵ではないことを祈るしか無いが……一つ、気になった。

「長にも考えあつての、お嬢様の東行きだと……言っただが？」

「そんなことする必要が無いやろ。お嬢様の力があれば、魔法使いなんて皆滅ぼせる。それで終いや」

「……」

つまるところは復讐か。理由は何か知らないが、魔法使いに対する恨みでもあるか。

他の強硬派の狙いは分からないが、復讐で動かれると面倒極まりない。こうして行動を起こすのなら、説得して止まるような相手ではないから。

「西の裏切り者は、猪突猛進型で周りが見えない未熟者……そう、聞いてたんやけどなあ」

「……さて、どうだろうな」

訝しむ瞳で見つめて言った千草と、その隣で両手に刀を構えた月詠を見比べる。狙うとすれば千草の方が落としやすいが、まず月詠の守りが入る。月詠を倒さない事には、千草も倒せない、か。

「チッ、なんや冷静なこって……」

「あのー、もうお話し終わりでいいですよるか？うち、はよう始めたいんですがー」

うずうずと、笑みを浮かべた月詠が千草を見上げた。これ以上、話をするには出来無さそうだな。結局、情報を殆ど聞き出せていないが……どうにも、こういうことは苦手だ。

「ほな、よろしゅう」

「はいー。行きますよー、せーんぱい」

タツと月詠が地面を蹴った。詰められた距離に夕風を振るって牽制、左足を軸に振り抜かれた右手の刀を夕風で受け止めると、左手の小太刀が襲ってくる。鞘でそれを弾き、また襲ってきた刀を夕風で弾き今度は小太刀を弾く。その繰り返し。

「二刀流、か。器用な奴だ」

「先輩も凄いですねー。うちの攻撃、そんな涼しい顔して受け止められたの初めてやわー」

興奮しますー、そう呟いた月詠を強く弾いて、地面を蹴り後ろへ飛ぶ。攻防のさなか、ホテルに向かおうとしていた千草の前に降り立ち、夕風を振るった。青い顔をして千草が一気に後退する。

「まだまだ余裕、ってことかいな」

「面白い人ですね、先輩……うちの事だけ、見てほしいわ」

「それは、無理だな」

薄らと頬を赤らめた月詠に、何故だか寒気が走った。

「あーん、ほんまにいけずやわ」

「月詠はん、遊んでないで、はよ終わらせておくれやす。うちもお手伝いするさかいに」

お札を構えた千草がニヤリと笑う。そうして現れたのは大きなクマとサルで、二対は月詠を挟んでその横に並んでみせた。

「三対一や。あんさんに勝ち目があるとなええなあ？」

「それじゃ、先輩。行きますよう？」 「うきっ」 「くまーっ」

正面から月詠、左からサル、右からクマ、その後方に天ヶ崎。一人も逃がさずに対処しなければならないが、どうするか。

「――神鳴流奥義、百花繚乱!!」

「ぐまっ！」

右から来るクマを吹き飛ばす。正面と左から襲って来た攻撃のうち、月詠の振るった刀を逆手に持った鞘に氣を通して一気に弾き、右足を軸に回転。勢いのまま寸前まで迫っていたサルの手を斬り飛ばした。

「うきぎっ!!」

「はあっ！」

飛び上がりサルを一刀両断する。まずは一体目、次は――

「ざーんがーんけーん！」

「斬鉄閃！」

空中から襲ってくる月詠に夕風を振るう。ガキンツと音が響き渡り、一瞬の交錯の後にどちらも飛び退いた。

月詠の右にクマ、そして天ヶ崎。足に気を集めて、地面を蹴り距離を詰める。

「神鳴流奥義、斬岩剣!!」

「ぐまっ!？」

「なんやてっ？」

クマの目の前に姿勢を低くした状態で急停止、右下から左上へ一気に刀を振り抜いた。目を見開く千草に斬りかかろうとして、後方から襲ってくる斬撃を空中へと飛び回避。

そのまま宙で一回転して、地面に着地する。振るった刀を構え直した月詠が笑っていた。

「うふふ、せーんぱーい」

「チイツ、ほんまに聞いてないで、こんなの。何が未熟者や」

焦りを滲ませた千草を後ろに、月詠が斬りこんでくる。夕風と鞘でそれを防ぎ、また弾く。いい加減に、終わらせないといけないな。

「あや、先輩……本気、出すんですかあ？」

「……さあ、なっ！」

嬉しげな問いかけに、夕風を振るうことで答える。満面の笑みで受

け止めた月詠の刀を弾き、無防備になった所に鞘を空へと放り投げた。

「斬魔掌、二の太刀」

振り下ろした左手に集めた気は、刃を作り。それが月詠の体を切り裂いた。

右肩から振り下ろした左手が月詠の体に大きな傷を作り、血が噴き出す。それに彼女は至高とも言うかの笑みを浮かべて、

「あはは、いいな、いいですよ。せんぱい……」

言って、ゆつくりと地面に仰向けに倒れた。殺さない程度にしたとはいえ、話せる余裕があるとは……恐ろしいな。

「嘘やろ、月詠はんがやられるなんて……」

空に放り投げた鞘を受け止めて、天ヶ崎に視線をやる。青い顔には困惑と焦りと恐怖と——色々な感情が見て取れた。

「……大人しくするなら、今この場で殺したりはしません」

「っ従うと思うとんのか？」

「なら、仕方ないですね」

とりあえず月詠同様、動けない程度にして長に差し出すしかなさそうだ。私は夕凧を構え、足に気を集めようとした。

「桜咲さん!!」

「大丈夫!？」

ホテルから走ってきて、そう叫んだのはネギ先生と明日菜さんで、思わぬ事態に一瞬、隙を作ってしまった。

「いきなはれ!!」

「っ!!」

溢れた無数のサルに襲われる。舌打ちを一つ打ってそれを薙ぎ払い、全てをお札に戻した時はもう、天ヶ崎と月詠の姿がなくなっていた。足元に散らばった切り裂いたお札を睨み付ける。取り逃がした。

「桜咲さん、大丈夫? 今のは……」

「……なぜ来たんですか。ネギ先生、神楽坂さん」

明日菜さんが部屋を出て行ったのには気づいていたが、トイレか何かだと思っていた。戻って来ていないことに、気づけなかった。そのせいで、隙が生まれた。

未熟な自分に苛立ちを覚えて、同時に悔しさが湧き出る。今この場で、天ヶ崎を捕えられたら、このちゃんの安全は増していたのに。夕風を勾玉に戻した私の前に立って、ネギ先生が見上げてくる。戸惑いがちに瞳が揺れていた。

「あ、あの、外の見回りをしてて、そうしたら、桜咲さんが戦ってるのを見つけたので……」

「……見回り、ですか?」

「えっと、その……どうしても、寝られなくて。心配で……」

……話したのは、失敗だったか。明日菜さんは、おそらくネギ先生に呼ばれたんだろう。

親書を守るうえで、わざわざ外に出たりはしないと思っていたが、それが間違いだったということか。

「……親書は？」

「あ、あります」

「……早く、ホテルに戻ってください。結界を張ってあるので、ホテル内が一番、安全ですから」

「けど、桜咲さんは……？」

「私もすぐに戻りますから。だから、早く」

戻ってくださいと、半ば強引に二人をホテルの方に押し戻した。振り返りつつ、それでもホテルに入って行った二人を見送って、その場に立ち竦む。身代わりを通してこのちゃんの様子を確認すれば、静かに眠っていた。

「……………」

苛立ち、転がっていた石ころを蹴り飛ばした。ガツとどこかの木にぶつかる音がした。

過去の繰り返し。ここで天ヶ崎を捕えられたら、未来はどう変わったのか、考えてしまう。可能性を模索してしまう。そのチャンスも、力及ばず逃がしてしまったけれど。

「……絶対に、護る」

過去は繰り返し返さない。同じ間違いは絶対に犯さない。絶対に、犯してはいけない。

過ちを犯したあの瞬間は近い。だからだろうか、こんなにも苛立つのは。焦る心は、どうすれば静まるのか。

考えて、目を閉じて、深く呼吸を繰り返した。冷静であれば、強く念じる。怒りや焦りに飲まれては刀が鈍る。だから、冷静に。

そうして目を開けて、空を見上げた。雲の無い星空は綺麗で、心に

落ち着きを促す。

「……………このちゃん」
『せっちゃん』

呼ぶ声が、聞こえた気がした。

可能性を逃がした日（後書き）

修学旅行編、刹那の心は大丈夫？と思ってしまいました。
戦闘描写は苦手です……。

修学旅行二日目の日(前書き)

最後、視点の変更がありますのでご了承ください。

修学旅行二日目の日

二日目、朝食の場所はホテルの大広間。床に並べられた座布団に、班ごとに座って食べる。

酔いつぶれた人が多かった昨夜に比べて、今日は一段と騒がしい。旅行初日の夜を潰してしまった反動でもあるのだろう。

「美味しいな、せっちゃん」

「うん。関東とは味付けも違うし、やっぱりこっちの方が好きだなあ」

「うちはもう慣れたけど、でもやっぱり、自分で作るといつい薄味になってしまふんよ。明日菜は濃いめの方が好きやけどな。なあ？」

「えっ、あ、う、うん、まあ、ね……」

このちゃんが隣の明日菜さんに話しかけると、歯切れの悪い返事が返ってきた。心なしか、チラチラと私の方を伺っているみたいだ。私は明日菜さんに笑いかけて、豆腐を口に運ぶ。

ぎこちない風なのはただけだが、夜中の事もあったし……いろいろ考えてはいても、まだ無理なんだろう。ネギ先生も同様だ。

「難しいな……」

「何がだ？」

少し驚く。このちゃんとは逆隣で座っていたエヴァさんが、突然話しかけてきた。

さっきまで、黙りながらも嬉しそうに朝食を食べていたのに。

「ふむ、うどんも食べたいな。今日の昼はうどんにするか、茶々丸」

「はい、マスター。でしたら、評判の店を調べておきます」

「頼んだ」

「阿呆か。今日の自由行動は奈良だったの。京都のは食べねえぞ」

「むっ……」

「行くなら明日か明後日にしとけよ」

嬉々として言ったエヴァさんの言葉を、千雨さんが否定する。渋々といったエヴァさんと千雨さんの明日の昼は、うどんが決まったみたいだ。……茶々丸さんから、美味しいお店聞いておこうかな。時間があれば、このちゃんも行っても良いかもしれない。

「で、お前はまた随分と、難しい顔をしていたがどうかしたのか？」

「いえ、別になんでも」

「ふむ、そうか」

やけにあっさりと、エヴァさんが引き下がった。それに少し訝しむと、頭の中に声が響く。

『なぜ、夜中に私を呼ばなかった？』

やっぱり、気づいていたか。エヴァさんが気づかない筈も無いし……真名や楓も、気づいていたのではないかと思う。ホテルからあまり距離を取れなかったから。

『エヴァさんと呼ぶほどの事でも無かったので』

『そのわりに、取り逃がしていたようだったがな』

『思わぬ事態に、驚いてしまったので……私の力不足です』

『坊やたちか』

『……………』

無言は肯定の意。否定したところで、断言したエヴァさんに効果は無いと思うけれど。

『そこまで気にしてやる必要が、あるのか？』

『お二人も頑張っているようなので、私に出来ることがあれば協力したいですね』

『お人よしが。坊やたちまで抱え込んで、どうにか出来ると思うのか？』

『…………どう、でしょうね』

最優先で護るのは、このちゃん。それは絶対だ。

けれど、それ以外に護ると決めたのは、千雨さん。エヴァさんに魔法を習っている最中だけれど、何かあれば当然ながら護る為に私は動く。

エヴァさんや茶々丸さんも、私が護る必要は無いけれど、何かあれば私の出来ることをするつもりだ。

真名や楓は…………どうなんだろう。エヴァさん同様、かな。

こうやって、少し考えただけで、私が護りたいと思う人は、力になりたいと思う人は、たくさんいる。そこに、ネギ先生と明日菜さんか。

『坊やたちは、千雨よりも脆い。お前が護る近衛木乃香のようにな』

『そうでしょうか？』

『少なくとも、一人でどうにか出来るだけの力は、持ってないな』

エヴァさんの言葉に、考える。このちゃんや、エヴァさんの間にある、前提条件。

このちゃんは、弱い。だから護るわけでは断じてないが、それでも忘れられない大事な事だ。

誰かが護らなければ、あっさりと力の前に折れてしまう。それが今

のこのちゃん。

エヴァさんは、強い。それも、学園結界から出た今のエヴァさんに敵う相手は、多くは無いだろう。だから私も、クラスの人たちの護衛をお願いしたわけだし。

なら、ネギ先生と明日菜さんは、どうなのか。

このちゃんよりは強い。それは確か。エヴァさんたちよりは弱い。それも確か。

任せ切るには少々頼りなく、力の前に折れるかどうか分からない。けれど二人なりに頑張ろうとしているから、どうにかできればと思ってしまう。

『お前の考え方は、傲慢だよ。刹那』

『……………ですネ』

『お前はあいつらに道を示した、それだけでも十分だ。道を選んだ先まで、着いて行ってやる必要は無い。道の先で生じる障害まで、お前が面倒を見る必要は無いし、見てはいけない。お前が抱え込んで、道の先まで連れて行ってやろうなんて、俄然無理な話だな』

『……………』

言葉も無い。エヴァさんの、言う通りだったから。

私に出来るのは、せいぜい手助けが限界だ。ネギ先生たちと私の歩む道は異なるのだから。

それは、分かっていた。分かっている。なのに私が、二人を助けたと思ったのは――

『刹那さん』

嘗ての絆を、失いたく無かったから。私が、二人を知っていたから。だから、二人との関係が全く違うものになる可能性を恐れて、絆の糸を手繰り寄せようとしている。

どうすればいいのか、考えている。

『お前が何を思って、あの二人に手を貸そうとするのかは知らんが』
『……』

『全く同じ人生なんて無い。今、ここにいるのは、私や千雨や近衛が知る刹那だ。忘れるなよ』

『………はい』

エヴァさんたちの知る、私。変わってしまった、私。

私の周りは、過去とは全く違っていて。かつての絆を手放すのは、恐くてまだ出来ないけれど。

それでもきつと、少しだけ探すことは、出来ると思う。

奈良見学、ということで定番の奈良公園に来ていた。他にも何班かはここに来ているみたいだ。

「かわええなあ」

「うん。人懐っこいし」

「鹿煎餅あげよう！」

「あ、私もあげる！」

奈良公園、あちこちで鹿にあげる煎餅を販売している。鹿にあげる物だが、あれには注意が必要だ。

「うひゃあああ!!」

「このちゃん、大丈夫？」

「ひーん、助けてえな」

鹿煎餅を買ってきたこのちゃんに、鹿が群がる。それはもうたくさん、逃げるのが難しいくらいに。

同様の悲鳴があちこちであがっているが、鹿煎餅をあげようと思うところなる。群がった鹿が終いには制服を食べようとしてくるのだから、本当に大変だ。

「せつちゃあああん!!」

……いい思い出になるかなと思って見ていたが、そろそろ限界かもしれない。

軽くこのちゃんに群がる鹿たちを威圧する。そうすれば、ピンツと耳を立てせた鹿たちが一目散に逃げて行った。動物は、殺気などにとっても敏感だ。

「ふええ……吃驚したわあ」

「大丈夫？制服は食べられてない？」

「うん、平気や。ありがとうな、せつちゃん」

一安心、といった風に息を吐いたこのちゃんの手には、一枚の鹿煎餅。まだ残っていたようだ。

このちゃんはそれを持ったまま辺りをキョロキョロと見回すと、あ、と声をあげて笑顔を浮かべた。

「おったおった。ほれ、お食べ」

公園内に植えられた木の傍に佇む小鹿。このちゃんはその小鹿に駆け寄ると、最後の鹿煎餅を差し出した。警戒も無く口に咥えた小鹿を、蕩けた笑顔でこのちゃんは見つめる。

「かわええ」

「このちゃん、この子にあげたかったの？」

「うん。でも、他は全部、他の子らに食べられてしもうたわ」
「狙ってるからねえ」

買った瞬間に、群がってくるから。

そのまま、ぼんやりとこのちゃんに撫でられる小鹿を眺めていたら、不意に小鹿が顔をあげてこちらを見てきた。てくてくと寄ってきた小鹿に、首を傾げつつとりあえず頭を撫でてみる。大人しくて、可愛い。

「——きゃわっ!？」

大人しかった小鹿が、何を思ったか少し頭を下げて……スカートの中に鼻先を入れてきた。驚いて悲鳴と共に一步飛び退き、しゃがみ込む。つぶらな瞳が見つめてきていた。

「むう…スケベな鹿さんやねえ」

「……………うん」

鹿相手だけど、恥ずかしかった。

気づけば、なぜか私とこのちゃんだけになっていた。いや、観光客とか人はいるんだが……同じ班の明日菜さんたちがいなくなった。時間的には、まだこの公園を見てる時間だと思っていたけれど……いや、まあ公園も広いし。でも、離れるなら声をかけるよな。

「せっちゃん、どうかしたん？」

「神楽坂さんたちが、いないなって。ネギ先生も一緒に回るって言

ってたのに……」

宮崎さんに誘われて、同じコースを辿る話だったのに……どこに行っただろう？

「あー、そか。せつちゃんに言うの忘れてたわ」

「何を？」

「あんな……」

このちゃんの話をつづめると、こうだ。宮崎さんがネギ先生を好きで、綾瀬さんと早乙女さんの提案の元、宮崎さんとネギ先生を二人つきりにしようと行動した。結果、綾瀬さんと早乙女さんが神楽坂さんを、このちゃんが私を二人から引き離れた、と。

「ネギ先生たちはどこに？」

「どこやろう。ゆえたちが後を追いかけてるはずやけど」

「……そう」

狙われている親書を持ったネギ先生を、放っておくのは不安も残るが……宮崎さんたちの事があるなら、下手に動けないな。おそらくは、終始宮崎さんが一緒にいる筈だから、敵も一般人を巻き込むような事はしない……と思う。

監視用に、式を放っておこう。何かあったら……エヴァさんに頼むべきか。このちゃんを置いていくことも、連れて行くことも出来ないし。

「あ、せつちゃん。お団子屋さんがあるえ。行ってみよ？」

「うん」

このちゃんに手を引かれて歩き出す。何事も無ければいいんだがな。

「うふふ……見つけました、せーんぱい」

声は、聞こえなかった。

大仏、神社、寺と。定番どころは今ので最後か。

茶屋の外に置かれた椅子に腰かけて、茶を啜る。よもぎ団子、美味いな。

「はぁぁ……疲れた……」

「むっ、情けないぞ、千雨。このくらいでどうした」

「私はお前のテンションについていけねえんだよ。行った先々で騒ぎやがって、ちっとは自重しやがれ」

「マスターは、日本の文化が好きですから」

「そういう問題じゃねえよ」

溜息を吐いた千雨が、スプーンでアイスを一口食べる。冷やし善哉、抹茶アイスは少々魅力的だったな。

大きなよもぎ団子を齧る。この後は、どこを回るか。

「ん……?」

妙な気配を感じるな。視線を右から左へ流して確認すれば、あろうことか真正面に気配の正体がいた。

白い髪は無表情な子どもが、どういうわけかこちらを見ている。動きもせず、ただじつとな。

「なあ、エヴァンジェリン」

「……昨日、騒いでいた連中の仲間だろうよ」

「やっぱそうかよ……」

千雨め、緊張しているな。はっきりと敵と認められるのに会ったのは初めてだろうが、そんな調子では相手にもろ分かりだろう。もともと、隠すつもりも毛頭無いがな。

「何を思って来たか知らんが、場所を変えるぞ。せっかく美味しい店を見つけたのに、壊されたらかなわん」

「あ、ああ……」

まったく、いいところで邪魔をしてくれたものだ。

修学旅行二日目の日（後書き）

アンチのつもりは、ないと言ったのに……どうにも、ネギたちへの風当たりが強くなってしまします。

彼ら以外にまともな対応をとれる人がいると、彼らが彼らのままじやちよつと痛いんですよねえ……。

ちなみに、最後の視点はエヴァでした。

一触即発の日（前書き）

視点の変更がありますのでご了承ください。

一触即発の日

団子屋の店内は、少し混み合っていた。それでも席に座ることは出来て、案内された奥の席でこのちゃんと二人、お団子とお茶に一息吐く。

四人掛けの席だが、他に席も空いていなかったから案内されたんだろう。壁を背に二人で並んで座って、のれんのかかった入口から見えるのは膝くらいが限界だ。

妙な視線に気づいたのは、お団子を食べ終えてもう少し休憩しているかと、話した時だった。

「（殺気は無し、だが……何だか、纏わりつくような……）」

「せっちゃん？」

気持ちが悪いというか、寒気を覚えるというか、そんな感覚に思わず両腕を擦ると、このちゃんが不思議そうな顔をして首を傾げた。なんでもないよ、そう言おうとしたとき、店の入り口に感じた気配に顔をあげる。なんだろう、寒気が増したような……。

「せっちゃん、大丈夫？ 具合悪いん？」

「あ、ううん、違うよ。大丈夫」

「ほんまに？」

「うん、別に体調が悪いとかでは、無いから……」

ただ視線が気持ち悪いだけ。本当に、それだけなのだが……それが、駄目だ。

視線の元を探そうと店内を見ても、それは無い。となれば外、しかも入り口の近くからなんだが。確認しようとして入り口を見ると、ちょうど一人の少女が店内へと入ってきたところだった。

まさか、と思う。少なくとも、今日一日は動けない程度に傷を負わせた筈なんだが……お札か？傷の回復を早めるお札が馬鹿みたいに高いが、あるというのは知っていた。

少女は笑みを浮かべたまま、店内を突っ切ると私たちの座る席までやって来て、断りも無く私の正面の席に腰かけた。

「ご一緒にしてもええですか？」

座ってから、そう聞いてきた。聞いてから座ろうとしたなら、即、断られるのが分かっていたんだろうな。

睨み付けると、なぜか月詠は頬を赤く染めてにやけている。両頬を手で挟んで、座ったまま器用にくねくねと身を振った。

「あかんで、先輩。そんな熱く見つめられたら、うち興奮してしまいます」

「黙れ」

「そんなこと言わんと、楽しくおしゃべりしましょうよ、せうんぱい」

ねっとりとしつこく視線に、寒気が走る。殺気も、敵意も無い。なら、お前がその視線に込めているのはなんだ——なあ、月詠？

茶屋を出て、少し歩いたところで小さな広場に出た。ところどころにベンチや自販機があるから、休憩として利用されてるんだろうな。ご丁寧にも、人払いを張ってくれているらしいから、私たち以外に一人も人の姿はねえけど。

「で、お前は私たちに何の用だ？え、若造？」

広場の中心辺りまで進んだところで、エヴァが振り返り言う。私たちと一定の距離を保って歩いて来ていた白い髪の子どもが、無表情で私たちを見ていた。

不気味なくらいに表情が無く、薄気味悪さを覚える。作り物めいた雰囲気、感情が全く表に出ないだけで、こうも恐怖を抱くものなのか？

「貴方に興味があつてね。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

「若造に興味を持たれるような事をした覚えはないがな」

「ホテルにいて尚、あれだけの殺気を向けておいて、よく言うよ」
「安心しろ。向けてやったのはお前だけさ」

その答え、嬉しくないと思うけどな。

刹那が、外で戦っていた時。私もエヴァンジェリンも茶々丸も、皆起きていた。私の場合、エヴァンジェリンの殺気に飛び起きたって方があつてるけどな。

黙って窓の外を睨み付けていたけれど、たぶん、刹那に呼ばれるのを待ってたんだ。感じからして、相手は複数だったみたいだし。私が行っても足手まといにしかならねえけど、エヴァンジェリンなら戦力としては強力すぎるくらいだ。結局、呼ばれないまま終わっちゃったから、すげー不機嫌だったけど。

「なあ。あいつも、刹那と戦った奴なのか？」

「いいや？刹那と戦ったのは、また違う奴らさ。その若造は、離れたところから見学していたにすぎん」

「気づかれない距離を選んだつもりだったんだけどね。どうして分かったんだい？」

「確認していたんだろう？お前たちの計画に障害となり得る実力者

が、どれだけいるのか。辿ってみれば、すぐに見つかったぞ」

「……………なるほど。次は、もっと気をつけて調査することにしよう」

……………あー、駄目だ。言ってる意味がところどころ理解できねえ。

このガキたちの計画は、ガキが刹那と戦ってた奴らの仲間だって言うなら、刹那の言ってた強硬派とかいう連中の計画ってことで良いんだろう。

で、その計画の邪魔になりそうな奴がいるか調べて、それを辿って？ わかんねえな、魔法なんだろうけど……………後で、聞いてみつか。

「それで、私の楽しみを邪魔して、わざわざこんな場所まで用意した理由なんて一つだろう？ 言っておくが、今の私の機嫌はすこぶる悪いぞ」

「……………そのようだね。でも、その方が都合が良い」

くつくつと喉を鳴らしたエヴァンジェリンが、右手に魔力を集める。いやいや、理由ってまさか。会話の流れから嫌な予感のはしてたけどよ。

本気で、おっぱじめるつもりか、こいつら。

「安心しろ千雨、すぐに済ませてやる」

「そういう問題じゃねえって！ 明らかにあのガキ、私より強いじゃねえか。巻き込まれたら、逃げ切る自信ないぞ!？」

「……………巻き込むつもりは無いよ」

ガキが服のポケットから、一枚のお札を取り出して地面に投げる。そうしたら、そのお札が大きな蜘蛛に変わった。

「彼女を捕まえて」

「はぁあ!？」

いやいやいやいや！！巻き込むつもりは無いって、いや、そうじゃなくね！？」

「その辺で寝ていてくれればいい」

「私がよくねえ！！」

「はっ、ちょうどいいじゃないか千雨。実践だ」

「はああ！？」

この状況で、普通そういう事言うか？焦りに混乱する頭を抱えたままエヴァンジェリンを見ると、奴はにんまりと笑って蜘蛛を指差した。

「私と茶々丸が若造の相手をしている間、お前はあれから逃げきれ。もしくは倒せ」

「マジで言ってるのか！？」

「当然だろう。遅かれ早かれ、初陣は必ずあるからな……まあ、少々過激な初陣だが、なァに問題ない。今のお前なら、少なくとも逃げ回することは出来るだろうよ」

行け。そう命令したエヴァンジェリンに、唇を引き攣らせて蜘蛛を見る。

大きな蜘蛛、私の身長よりも高さはあるし、足も体も長いしでかい。それを相手に、逃げろってか。

「……いや、待て。あのガキが蜘蛛に命じたのは、私を捕まえる事だ。少なくとも、命の危険は無いし、そう考えればまだ何とか……」

「ああ、お前がああ蜘蛛に捕まって、若造が捕まったお前を人質にしたとしても、私は見捨てるからな」

「助けるよオイ！！」

命の危険は無さそうだしとか思ったら、あっさりと見捨てられる可能性が浮上しやがった。ってか、そうか。捕まったら人質になる可能性もあるのか……おいおい、それならやっぱ、捕まったら終わりも同然じゃねえか。

「あああああ……」

やるしかねえのか？腹を括れて事か？修行は来るまでに散々やって来たが、真正正銘、ぶっつけ本番の敵と戦うってのは、初めてだ。……死ぬかどうかもわかんねえ、でも死ぬかもしれない戦い。

「（押しつぶされたら死ぬ、足に蹴られても死ぬ、噛みつかれても死ぬ、首を絞められても死ぬ）」

ただ捕まえるだけでも、それまでの工程で死ぬ危険はある。この世界では死が隣り合わせ。

自分の身も守れなければ、一人で勝手にくたばって、死ぬ。

「……っ……」

鳴りかけた奥歯を噛みしめる。

恐がるな。この世界を知ることにした時から、何時かはこうなることを覚悟した筈だ。巻き込まれた時の為に、こうやって遭遇した時の為に、力が欲しいと私は刹那に答えたんじゃないかったのか。

『護り切れなくて、ごめんなさい』

今になると、刹那の言葉に別の想いが沸いてくる。護れなくてごめんと謝ったあいつに、何て言ったらいいか分からない想いが沸いて

くるんだ。

私は言った、全部背負う必要は無いと。私の命も日常も、あいつが勝手に背負うと言ったから、そんな必要は無いんだと。

刹那は、たくさんものを背負っているみたいだった。そのくせ、どんだん上へ、目指すものへ向かって進んで行く。そして、私が危なかったら、上った道を下りて助けに来て、私のものまで背負ってまた上っていく。一人でどんだん、先に進んで行っちゃまう。

前の私は、それに何となく気づいていても、見送るしかなかった。今の私は、どうだろうな。

「――ふう」

短く息を吐く。体の内側で心臓が痛いくらいに騒いでた。

今の私は、刹那に追いつけない。というよりも、そもそも私は、刹那を追うことが出来ない。あいつの目指すものは、きっと私が求めるものとは、違うから。

でも、見送るだけは、もう嫌だ。あいつに謝られるなんて、真っ平だ。私のものを背負わせたままにいるのも、お断りだ。

叶うなら、刹那の力になりたいと思う。あいつが私を護ってくれたように、私もあいつを……いや、違う。

力になりたいとか、護りたいとか、そんなんじゃない。私はただ、刹那の友達でいたいだけだ。

対等な友達。護られるばかりじゃなくて、背負わせるんじゃない。自分の足で、あいつの隣に立っていられるように。

この世界で、私が私でいられるように。私が刹那の友達でいられるように。力に飲まれて、潰されないように。私は力が欲しかったんだ。強くなりたかったんだ。

「…………よし」

蜘蛛を見据える。ガキの相手はエヴァンジェリンたちがする。なら、私はこの蜘蛛から、逃げ切ってやろう。

自分のものくらい、自分で背負う。背負って、私は刹那の隣で、あいつに護られないでいられるように——あいつの友達で、いられるように。

「やってやるよ」

これくらい、何とかしてみせるっての。

一触即発の日（後書き）

さあ、いろいろななんかアレな気がします、細かいところはスルーが大事です。

次回は……刹那たちが先か、エヴァたちが先か。うん、どっちにしよう。

というより、千雨の始動キーどうしよう。花の名前で考えつつ（エヴァつながりで）。いいのが無いです……。気長に考えるべきですね。

彼女の戦いの日

私がそれを渡されたのは、修学旅行前の事だ。別荘に入って、エヴァンジェリンの修行を受け始めてから十日が経っていた。

一カ月ちよいで護身が出来る程度にはしてやると言われたけれど、正直に言っておくが、死ぬかと思った。いや、マジで。

呪文を覚えたり、魔力をどう扱うとか、基礎を習って実際に魔法を使えるようになったのが二日目。座学が長かった。

それからひたすら、実際に魔法を使って感覚で覚えるというか、習うより慣れろを実際にやらされた。食事と合間の休憩以外は、一日中、杖を片手に五属性それぞれの初級の魔法を唱えていた。ぶっ通しで五日間。

計七日が経った八日目、基礎の反復から応用を混ぜる様になった。とりあえず、闇以外の四属性の中級程度だとか。比較対象がいなかったから、私の習得の速さが普通なのか違うのか分からないが、私の中では異常な気がしている。

また新しく呪文を覚えて、またぶっ通しで唱えるのを繰り返したのが二日間。

十日目、使っていた杖が壊れた。実は、初心者用の杖をエヴァンジェリンが強化した物だったとかで、本来は中級魔法に耐えられるほどの強度は無いんだとか。

壊れた杖にどうすんだと思っていた時に、それを渡された。

魔法媒介、杖と同じ役目をする指輪だった。左手の人差し指にピツタリ嵌った指輪が、私の武器になった。

蜘蛛が動き出したのを見て、私はすぐに走り出し呪文を唱える。

「風の加護」

ふわりと体が軽くなった。初級程度は呪文詠唱無しで基本、発動できる。

風の加護は、私の体に風を纏う魔法。身体能力の補助がされるので、足が速くなったり結構高くジャンプできる。魔法障壁の強化版にもなるから、防御の強化にも。

刹那やエヴァンジェリンとの修行で、手合わせをするとき。必ずこの魔法をかけていた。というよりも、かけないとまず、終わる。あいつら、ぜんっぜん手加減しねえし。毎度毎度、気絶させられるこっちの身にもなってくれ。

「魔法の射手 連弾・水の11矢!!」

バックステップで大きく後退しながら、新たに唱える。予想以上に蜘蛛が素早くて、頬を汗が伝う。

水の矢が蜘蛛に直撃して少し怯んだが、あまり効果は期待できないな。

「魔法の射手 連弾・炎の11矢!!」

次は炎。これも水同様、怯みはしたが……でも、水よりは良いか？体がでかい分、生命力も強いのか。それとも体が頑丈なのか。どっちにしろ、矢程度じゃ逃げるのも倒すのも、難しそうだ。

「……とりあえず、最初の目的は達成できたか」

遠目に見えるエヴァンジェリンたちの姿に、十分に距離を取れたか

と思う。戦うにあたって、まず私が決めたのは、逃げる事だ。ただし、蜘蛛では無く、エヴァンジェリンたちからだけだな。

「巻き込まれたら、蜘蛛どころじゃねえっての……」

私が危なくなっても、助けてくれるとは思えないし。あのガキと戦ってるエヴァンジェリンが、私に配慮してくれるとも思えないし。蜘蛛より先に、エヴァンジェリンの戦闘に巻き込まれないだけ逃げる必要だった。

「ギ、ギ、ギギ……」

「……」

微かに聞こえた蜘蛛の鳴き声に、顔を顰めた。

どうやって逃げるか。人払いの範囲から出るわけにはいかねえし、エヴァンジェリンが戦い終わるまで待てば、何とかしてくれるだろう。

それとも、やってみるか。私がこの蜘蛛を、倒してしまえるか。分からないけれど、逃げ続けるよりはきつと、早く終わる。

「――演奏、開始」

全力でやってみよう。それで、どちらになるかは分からないけれど。少なくとも、刹那がまた煩く言わないように、怪我だけはしないで終わらせないとな。

私の周りで、ほんの少しの音を奏でながら風が吹き回る。そうして私は呪文を唱え出した。

「セル・ネイ・リ・ウィズ・ゼラニウム」

蜘蛛が迫ってくる。呪文は止めずにその場から高くジャンプすると、太い糸を吐いて来た。風を使って方向を転換、くるりと後ろ回りに一回転して少し離れた場所に着地する。運動神経とは無縁だけれど、風を使えば簡単に出来ちまうんだから、魔法ってこええよな。

「焰よ、敵を捕らえ燃やし尽くす刃となれ 炎の鎖」

赤い炎が蜘蛛の足を捕まえる。ただ捕えるのではなく、炎はそのまま捕まえた相手を燃やす鎖だ。まあ、私程度の実力じゃ相手を一気に燃やしたり出来ないから、時間稼ぎが良いところだけだな。動こうともがく蜘蛛の目が光り、糸が吐き出される。蜘蛛の巣状のそれに捕まるのは拙いと思い飛び退いたら、蜘蛛が続けていくつも吐き出して来た。全部避けんのは、無理だな。呪文を唱える時間も無い。

それなら、と右手の指でパチンと音を鳴らす。瞬間、私の周りに無数の炎が現れて、蜘蛛の巣に着火してそれを燃やし尽くした。

呪文演奏、と私は呼んでいる。風を使って音を奏でて、それで呪文を唱える魔法。唱えた呪文は、そのまま溜めておいて、必要な時に解放させる。私の場合は、指を鳴らすのを合図と考えてた。

それで解放したのが、炎の花びら。触れたものを燃やす魔法。

呪文演奏の特徴は、いくつもの呪文を同時に唱える事が出来る事だ。といっても、エヴァンジェリンの話だと、呪文の同時詠唱は普通なら二つ三つが限界なんだとか。

私が、これで一度に詠唱できるのは最高で八個。HPでファンたちの相手してて、一度に二桁相手にチャットすることもよくある事だから、一度に何個も考えるのは慣れてる。

……普通、こういうのって漫画とかだと、切り札や奥の手にしてたりするよな。ピンチになったらそれ使って逆転とか。そんなこと、私がするわけねえけどな。

最初から全力出して、さっさと終わらせる。無駄に怪我とか怖い目

にあらうような事、誰がするか。

「セル・ネイ・リ・ウィズ・ゼラニウム！」

蜘蛛が鎖を壊して動き出した。足の一部が燃えちゃいるが、あんまりダメージになってねえな。

呪文を唱えながら、また右手の指を鳴らす。風の刃が蜘蛛の足を一本、切断した。切断系なら、初級でも効果ありだな。続けて二回、鳴らす。水の刃と炎の刃が、また蜘蛛の足を切断する。バランスを崩した蜘蛛が倒れたのを見て、一気に畳み掛ける。

「数多の水よ、集い来りて我に仇なすものを貫け」

蜘蛛の上に、キラキラと光に反射しながら水が集まる。

「水の槍！！」

頭上にあげた左手を勢いよく振り下ろす。それに合わせて、蜘蛛の上に集まった水が四本の槍となり、蜘蛛を一気に貫いた。

蜘蛛の体を貫通したそれは地面まで深く突き刺さり、蜘蛛が大きく悲鳴をあげる。

「ギイイイイイ！！！」

「っ……」

耳を塞ぎたい衝動に、耐えた。ポフンツと音をたてて、煙に包まれた蜘蛛が一枚のお札に変わる。ひらひらと地面に落ちたそれを見て、私は静かに、息を吐き出した。

「はぁぁぁぁ……しんど……」

視界に入るエヴァンジェリンは、まだ戦っている。私はといえば、とても疲れていた。

蜘蛛が近づく事に恐怖を感じた。捕えた鎖が壊された時は心臓が跳ねた。終わった今になって、感じる恐怖。冷静に戦えていた自分が、他人のように思える。

「刹那も、エヴァンジェリンも、すげえよ……」

命のやり取り。こんな世界で、よく他人を気遣う余裕があるよなあ。特に刹那。正直、私には無理だ。自分の事で精いっぱいだったの。

「でも、ま……足手纏いにならないように、しねえとな」

逃げるにしろ、なんにしろ。刹那たちに護られてばかりの存在は、絶対に嫌だ。

「式神を倒したんだ……思ったよりも、やるようだね」

「甘く見ない方がいいぞ？ あいつは、自分で思っているよりも強い」

じゃなければ、私が教えたりするはず無いだろう。千雨の呑み込みの速さは異常と言っても良いくらいだ。

まあ、おかげで私も苛めるのが楽しくて仕方ないがな。

「ところで、一つ確認してもいいかな？」

「何をだ？」

茶々丸の攻撃を避けながら、若造が聞いてくる。私もまた無詠唱の

準備をして答えてやった。

「千草さんたちが戦ったあの子は、何者なんだい？」

「さあな。お前が見た通りだろうよ」

「貴方に匹敵する実力者と思ったけれど、違うのかな？」

「どうだろうな」

わざわざ、答えてやったりせんよ。知りたければ自分で知れ。

水の矢を若造は打ち落として、どこか考えるような素振りを見せた。無表情だから、何となくそう思っただけだな。

「仕方が無い。そろそろ引くとするよ」

「なんだ、逃げるのか？」

「真祖の吸血鬼相手じゃ、分が悪いからね」

「知っていたのか」

「さっき、気づいたよ」

傷の治りが随分と早いからね。答えもそこそこに、若造が水たまりの中に姿を消した。自分から仕掛けておいて、やるだけやって退散か。随分と馬鹿にしてくれたものだな。

にしても、あの若造から感じた気配は妙だったな。作り物めいた感じがしたところを考えると、人形か……。私には関係が無いな。

「マスター、お怪我は」

「問題ない」

不死の私に怪我の心配など無用だ。学園の外にいる今、魔力も完全の私の怪我は、次の瞬間には治っているのだから。

『エヴァさん』

茶々丸に服の埃を払われている最中、刹那から念話が繋がってきた。

『なんだ』

『お怪我は、ありませんか？』

『お前は私に不死だと知っているだろうか？心配するな』

『知っていても、心配しますよ。それで、大丈夫なんですか？』

『……平気だ』

私の心配をするとは、茶々丸もそうだが物好きな奴らだ。……悪い気は、しないがな。

それから刹那は、とても不安そうな声で尋ねてくる。

『千雨さんは……？』

『安心しろ。怪我一つ負っていないだろうさ』

『そうですか……よかった』

ふんっ、安心してんだろう刹那の顔がよく浮かぶな。それに、こいつのはまた、うじうじと考えているようだな。心の揺れがこっちにまで伝わってくる。懲りない奴だ。

『エヴァさん』

『謝るなよ』

『……』

なぜ黙る。やはり謝るつもりだったな。

『お前は、気にし過ぎだ。少なくとも私は、お前に謝られるようなことをされた覚えは無い』

『でも……』

『いいか？今後、お前から私に謝ることは一切するな。茶々丸や千雨にもだ。私たちが、お前に迷惑をかけられたと思って文句を言った場合だけ、謝ることを認めてやる。いいな？』

『でも、エヴァさ』

『いいな？』

『……………はい』

まったく、こうでもしないと刹那は何十回と謝ってくるだろうからな。どうすればこいつの性格も矯正できるんだか。

良くも悪くも、刹那は優しすぎる。しかも、不器用なくせに器用にこなし始めて、失敗する。こっちの意思を無視して、勝手に自分を責めて潰れようとする。手にかかる奴だ。

『困ったら、遠慮せずに言え。いいな？』

『……………はい』

……………言うかな、刹那は。おそらく、本当に危なくならないと、言わないだろうな。

「馬鹿な奴だ」

私が、お前に頼られたくらいで倒れると思うのか？私が、自分を殺してまでお前の願いを聞いてやると思うのか？

私は、私がしたいと思うからするんだ。お前になら、力を貸してやっても良いと思うから、するんだ。それに気づけ、刹那。

「マスター？」

「……………なんでもない。さて、修学旅行の続きと行くか」

「はい」

本当に、馬鹿で手のかかる奴だよ。

彼女の戦いの日（後書き）

戦闘とか魔法とか千雨とか千雨とかエヴァとかエヴァとか、なんかもうもろもろスルーしてほしいです。はい。

困惑する彼女たちの日

さて、どうしようかと、私は考えを巡らせる。

座っているのは四人掛けの席。後ろには壁、右隣にこのちゃん、左は通路、正面には月詠、その後ろに出入り口。店内には他に一般人が多数。

いくら強硬派といえども、そうそう一般人を巻き込むような事はしないだろう。なら、この場合は穏便に済ませて離れてしまうのが一番だろうか。

そう結論を出しかけた私のスカートの裾を、テーブルの下でこのちゃんが引つ張った。どうしたのかと隣を見ると、このちゃんは困惑した表情で月詠を一瞥した後に私に首を傾げてくる。声には出さず、けれどその目が、知らない月詠の存在にどうしたらいいいのか分からずに困っているのを、克明に伝えていた。

「……………」

このちゃんの方に顔を向けたまま、視線を月詠に一瞬だけ向けてすぐに戻す。その一瞬で目が合ってしまったのは、気にしない事にしよう。

月詠について紹介するにしても……おそらく、敵対している強硬派の連中は、このちゃんが魔法を知っている事を知らない筈だ。長を含めた重役数名のみしか、事実を知らない。

敵に情報を与えるようなことをするのは、この場合得策とはいえないし……となると、どう月詠について紹介するべきか。というよりも、紹介する必要があるのか？

三秒ほどの沈黙。いっそもう店を出ようかと考えたところで、月詠

が浮かべていた笑みをいつそう深いものにした。

「うちは、月詠います。先輩の後輩やさかいに、よろしゅうお願いします。木乃香お嬢様」

「ふえ？」

「月詠」

「いいやないですか。嘘は言うてませんよ？」

「……」

突然の自己紹介にぽかんとしたこのちゃんに、私は警戒を強める。本当にこいつは、何をしに来た？殺気とは違う何かを籠められた視線が、落ち着かない。

「あの……うちの事、知ってるん？」

私と月詠を見比べながら、このちゃんはおずおずと切り出した。このちゃんは、あまり人見知りをする事は無いが、月詠の持つ空気を敏感に察しているのだろう。少々、怯えた様子だった。

「うちも神鳴流剣士ですから。お嬢様のご実家の事は知っていますわ」

「そ、そうなんや……」

「その先輩とは、手合わせさせてもらたことがあったんです。先輩ったらもう凄く強くて、うち是非とも、先輩の名前を知りたかったんですわ」

「……手合わせ？」

「麻帆良に行く前の話だよ、このちゃん。なあ、月詠……？」

「……その通りですわ」

「……そうなんか……」

首を傾げたこのちゃんにすかさず答えて、余計な事を言うなど、言外に籠めて月詠に言った。何も知らないこのちゃんに、夜の戦闘の事を言うのはおかしいことだからな。

頷いた月詠に、このちゃんは未だ僅かに首を傾げながらも引き下がる。

それにしても、名前か……本当に、それだけの為に来たのか？それも千草に聞けば分かることの筈だ。

「……桜咲刹那だ。これで満足か？」

「刹那先輩ですか。ありがとうございます」

「……用が終わったなら、去れ。お前と話すつもりは無い」

「ええ、そんな殺生な……もっとお話したいわ」

「私にそんなつもりは無い」

そう言っているのに、月詠は気にした風も無く誘いをかけてくる。正直、こいつと話してろくなことになる予感がしない……早いところ、この場から立ち去ろう。

そう、思った時だった。少しだけ走った感覚に軽く目を見開き、それと同時に、エヴァさんから念話が繋がってきた。

『刹那、動くなよ』

『……千雨さんは？』

『ちょっと邪魔者を排除するだけだ。気にせんでいい』

『でも、危険が』

『千雨なら十分に対処できる。私も傍にいる。心配するな』

私を信じろ、と一方的に念話を切られてしまう。参ったな、この状況でエヴァさんたちに敵襲か。

「このちゃん、いこ」

「せっちゃん？………うん…」

このちゃんの手を取って、席を立つ。レジで会計を済ませて店を出ると、当然のように月詠が着いて来ていた。

式神を飛ばして、エヴァさんたちの様子見に行かせる。分かっていた事だ、エヴァさんと同じ班に千雨さんを入れれば、彼女が巻き込まれる可能性があったことは。

修学旅行中、私は基本、このちゃんの傍を離れない。だからエヴァさんたちに他の護衛をお願いした。護衛役を敵が狙わない保証は無い。

なのに千雨さんに頼んだ。エヴァさんが動きやすくなるように、巻き込む可能性を高めた。

「千雨さん……」

千雨さんは、強くなった。少なくとも、そんじょそらの術者にやられたりはしない。エヴァさんだっているのだから、万が一は……有り得ない筈だ。

「せっちゃん？どうかしたん？」

「なんでもないよ」

……信じるしか無いんだ。このちゃんを護る為には、エヴァさんや千雨さんたちを。

だから私は、千雨さんの周りに現れた危険を知らせるサインに、目を瞑る。

「………お前はいつまでついてくるつもりだ？」

そして、私がすべき事をする為に……こいつをどうにかするとし

よう。

「そしたらせっちゃん、クラスの皆に囲まれてしもうてな」

「そうなんですか。見たかったですわ、その時の刹那先輩。きつと困ってたんでっしょろね」

「そうなんよ。凄く可愛くてな、ほんととは写真撮りたかったんやけど、カメラ持ってなくてなあ」

「惜しい事しましたね」

「ほんとや」

……私は、どうすればいいんだろうな。

早いところ月詠の目的を聞き出して、終わらせようと思っていたのに。なぜか私は、このちゃんと月詠に挟まれて歩いていた。もちろん、月詠とはある程度の距離を保ってたが。

「月詠ちゃんとは、話が合うなあ」

「うちもお嬢様とのお話、楽しいですわ」

「……」

切欠は、たった一言。いつまでついて来る気かと問うた私に、月詠は笑いながら、

「先輩のお墓まで一緒に行きます」

……そう、言ったんだ。理由は簡単、私が、好きだからだとか……私にその趣味は無い。断じて、無い。

ただ、それが切欠となってしまった。何をどうしてかどう思ったのか、このちゃんが月詠の言葉に、とてもとても嬉しそうに、同意し

てしまったのだ。

「うちもせっちゃん、大好きや」

「あ、ほんまですか？それならうち、木乃香お嬢様とも仲良くなれそうですわ」

「そうかもしれんね」

それから、この状態だった。裏の事情さえなければ、確かに月詠は……ちよつと危ない変わった奴でしか無いが、だとしても。出来ればこのちゃんの前で流血沙汰は避けたいから、戦いにならない方がいいのだとしても。月詠の方に、今のところ戦う意思は無いのだとしても。

「絶対に、何かおかしい」

「ん？どうしたん、せっちゃん？」

「ご気分でも悪いんですか？」

「……九割お前が原因だ、月詠」

「やんつ、そんな睨まんといってください」

僅かな殺気を箆めてしまいかけながら、睨み付ける。月詠が自分の体を抱きしめて、くねくねと体を揺らした。

そうすると、私の左腕に抱き着いていたこのちゃんが、むっと頬を膨らませて見上げてくる。

「月詠ちゃんばっか相手したら嫌や」

「うん、分かった。というわけだ月詠、早く消えてくれ」

「酷いわあ、刹那先輩。うちにばかり冷たくするんやから」

「自分の胸に手を当てて考えてみろ。そうすれば理由がすぐに分かると思うぞ」

「え、先輩が当ててくれはるんですか？」

「はあっ!？」

「せっちゃん、それは駄目や!！」

「い、いや、このちゃん!？」

「触っちゃ駄目やー!！」

「そんなこと言わんと、触ってえな刹那せくんばい」

「駄目やー!！」

……頭痛い。本当に頭痛い。というよりも、出来れば今すぐこのちゃんの目に目隠しして、月詠を斬ってしまいたい。そのままのちゃん連れて何処かに行きたい。一般人が多いからやらないけれど……ああ、視線が痛い。

「このちゃん、お願いだから落ち着いて!」

「触っちゃ駄目や!」

「触らない。絶対に触らない。だから落ち着いて、お願い」

「触ってくれないんですかあ……?」

「お前は黙れ」

落ち着きそうなこのちゃんを前に、余計な事を言い出す月詠を睨む。そうしてあやす様にこのちゃんの頭を撫でて、困ったように笑った。というよりも、このちゃん。どうしてそんなに怒ってるの?

「……触ったら駄目や」

「うん、頼まれても触らないから」

「ほんとに?」

「本当だよ」

「……うちのは?」

「……え?」

……これは、あれか?このちゃんお得意の、私を困らせるための策

略だろうか。ああ、うん。絶対にそうだな、そうに違いない。でなければ、このちゃんがこんなこと言い出す筈……無い。あったら長に申し訳が立たない。だからそう信じよう。

「このちゃん、あの……」

「どうなん？」

「……………あー」

考えを巡らせる。触らない、と言えばこのちゃんが泣く。触る、と言えばこのちゃんが喜ぶ、ただし絶対に進んではならない方向に進む可能性がある。

どっちを答えても道は無し、か。本当に、このちゃんの策略は頭に痛い……。

「ね、このちゃん」

「……」

「今度、お風呂で洗いっこしよう？」

「……………うん」

胸を触る、つまりはスキンシップ。とりあえず、どうかと思うが……過剰なスキンシップで満足してもらおう事にしよう。そうしよう。少々不満げだけれど、一先ずはこれで満足してもらえたかな。

「いいな。うちも先輩と……」

「来るな」

「え〜」

……………というよりも、本当にこいつは何がしたいんだ。そう思ったら、頭に響いていたサインが消えた。千雨さんを襲っていた敵がいなくなったらしい。

「……月詠」

「なんですか？」

「結局、お前は何をしに来たんだ」

エヴァさんたちの方は、おそらくはエヴァさんを潰そうとしたのか、実力を確かめたかったのか。その辺りの理由だろうが。

月詠は、何もしていない。いきなり姿を現して、勝手に自己紹介して、このちゃんと接触して、話して。その間、一切の殺気も敵意も感じなかった。だからこそ、こいつの目的が全く分からない。

「うちは、先輩に会いに来ただけですよ」

それだけです、そう答える月詠は笑っていた。それが本心なのか嘘なのかは、私には分からない。

「……それでは、うちもそろそろ帰らせてもらいますわ。木乃香お嬢様、楽しかったです」

「もう行くん？」

「お迎えが来るんです。刹那先輩も、また手合わせお願いしますね」

「……お断りだ」

「あんっ、やっぱりいけずやわ」

それでは、と最後にまたにこりと笑って、月詠は人の中に紛れて行った。残されたのは、私とこのちゃんの二人だけで。

妙な静けさの中、私の腕を抱きしめていたこのちゃんの体から、ふっと力が抜ける。

「大丈夫？このちゃん」

「……うん」

じつとりと、触れ合う肌で感じる汗。このちゃんはゆっくりと体を話し、手を繋ぎ直した。静かに呼吸を繰り返すこのちゃんの頭を撫でて、ベンチへと誘導する。

「……月詠ちゃんって、うちを狙ってる人たち？」

「首謀者に雇われた、神鳴流剣士だよ。他にも仲間はいるみたいだから……気を付けて」

「うん」

ベンチに座らせて、辺りを一度伺ってから、近くの自販機で飲み物を買ってきた。お茶の缶をこのちゃんに渡して、隣に座る。

「……悪い子や、無いと思うんや」

「そう」

「でも、な——なんや、恐かった」

「……そう」

今回、月詠が敵にいるのは、敵に雇われたから。だからこのちゃんを狙う。そういう意味では、他の敵に比べて悪意は少ないだろう。けれど、それでもこのちゃんが恐いと感じたのは……あいつが持つ、隠し切れない狂気が原因だろう。

「無理矢理でも、引き離せば良かった。ごめんね」

「せっちゃんのせいや無い。話せたのは、悪い思わんし……せっちゃんがいってくれなかったら、うちもつと恐かったと思う」

「……そっか」

敵だと分かっている、話そうとするこのちゃんの姿に、感服する。

たとえば一般人というふりをしていても、たとえば月詠が一切の殺気を持たずに接してきていたとしても。

「このちゃんが話せて良かったと思うなら、それでいいよ。相手を理解するのは……大事な事だから」

「うん」

もしも、それを邪魔するものがいたなら、私が斬るから。だからこのちゃんは、このちゃんのまま……幸せな未来へ進んで行ってね。

「うふふ。桜咲、刹那先輩ですか」

「どうだったんだい？月詠」

「やっぱり、いいですわ。早う斬り合いたいです」

「……やらなかったのかい？」

「今日はお預けでしたわ。傷が治るの、明日になりそうなんです」

「手負いでも、やるかと思ったけれどね」

「それじゃ面白くないですよ。刹那先輩とは、完全に回復してか
らやないと……うふふ」

「……そ。帰るよ」

「了解です」

困惑する彼女たちの日（後書き）

ごめんなさい、ふざけすぎました。刹那のキャラが、若干崩壊……？というより、月詠も木乃香もこんなキャラじゃないですよ……。色々と突っ込みたいでしょうが、下手に突っ込まれると作者が自爆しますのでお手柔らかにお願いします……。

ちなみに最後は、月詠とフェイトです。会話文だけは仕様ですのでご了承ください。

二日目の夜の日

私とこのちゃんの前に現れた月詠、エヴァさんたちの前に現れた白い髪の少年……は、フェイトだろう。ネギ先生たちでは、相手をするのは厳しいだろうな。

一先ずは、今日の情報の共有の為に、私はホテルに戻ってからエヴァさんたちの部屋を訪ねていた。このちゃんは、宮崎さんの事について綾瀬さんたちに聞きに行っている。

「で、奴らの狙いは近衛木乃香と、坊やの持つ親書に変わりはないのか？」

「おそろくは。首謀者と思われる天ヶ崎千草の目的が、魔法使いへの復讐のようですし。このちゃんの魔力と、和平に関する親書を狙うのは、何ら不思議ではありません」

「復讐ねえ……私にはわかんねえ話だな」

「分からない方が幸せですよ」

「ああ。分かったところで、良いことは無いさ」

少なくとも、行動を起こすほどの強い復讐心を抱くような事態は、そうそう起こらないし、起こってほしく無い。

「それで？ 坊やはまだ親書を届けていない様子だが、どうするんだ？」

「明日は班別完全自由行動日ですから、隙を見て行くつもりなんですよ。私も、ある程度動いたら総本山に行きます」

「すぐには向かわんのか？」

「ネギ先生や神楽坂さんに続けて、私とこのちゃんまで立て続けに

いなくなったら、班の人たちが混乱しますよ」

「途中まで一緒にいても同じじゃねえの？」

当然のような疑問に千雨さんが首を傾げる。まあ、確かにそうなんだけれど、いきなり四人も行方不明になって騒がれても困るし。

「茶々丸さん、明日の他の班の行動で、何班かぶつかる時間と場所ってありませんか？」

「明日の午後一時半から午後三時にかけて、三班、四班の各数名がシネマ村を訪れる予定のようです。それ以外ですと、被る時間も短いようですね」

「そうですか……」

参ったな。シネマ村は、過去にも襲われてるし……確か、芝居に見せかけてきたんだったか。となると、避けるか、便乗して適当なところで逃げるかだな。

「シネマ村が、どうかしたのか？」

「他の班の人に、綾瀬さんたちを引き受けてもらおうかと。人数が増えれば動きも鈍くなりそうですから。ただ……シネマ村は、あまりいい予感がしなくて」

「ふうん……」

とりあえず数分の足止めをしてくれる役割が欲しいんだが、どうするか。シネマ村なら、麻帆良のようにお芝居ということで誤魔化す事が出来るけれど、襲われる可能性は……いや、それはどこにいても同じか。もしも月詠が来るとすれば、人混みでも戦いを挑んでこないとも限らないし。

「ふんっ……おい、茶々丸。その時間の私たちの予定はどうなって

いる」

「京都神社巡り昼の部の予定です」

「気が変わった。シネマ村に行くぞ」

「エヴァさん？」

なにを、突然……。

「千雨も構わんな？」

「別にいいぜ。っつか、神社ばっかよりは面白いだろ」

「む、貴様にはあの良さが分からのか」

「わからねえよ」

「ほう……ならば私が今夜一晩かけて、京都の神社、寺のあらゆる知識を教えてやろう」

「いるか!!」

……何を言えば良いんだろう。つまりは、エヴァさんたちがシネマ村に来るわけで……えっと……。

「私に任せろ、という事だと思います」

「茶々丸さん……」

「ですから刹那さんは、動きたいように動いてくだされば、それでよろしいかと」

「いい、んでしょうか？」

頼んでも、いいんだろうか。いや、ここまで巻き込んでおいて、お願いしておいて、今更な気がするけれど。さらにもお願いしても、いいのかな……。

「いいも何も、私が行きたいから行くだけだ。お前がいちいち気にするな」

「何も心配はないんじゃない？ エヴァンジェリンがいるんだし」
「まあな」

胸を張るエヴァさんが、得意げに唇を釣り上げた。その笑みが、頼もしく見えるのだけれど。

「……」

口を開く。迷惑をおかけしてごめんなさい、と言いかけて、昼間のエヴァさんの言葉が脳裏を過った。

謝るな、と言われたのを思い出して、視線を彷徨わせて口を閉じる。

「……エヴァさん、千雨さん、茶々丸さん」

「ん？」

「ありがとうございます」

「気にするな」

それでも、ありがとうございます。

その後、エヴァさんがお土産を見たいと言い出したので、ホテル内のお店に行くことにした。昨日と同じホテルだが、トランプに夢中になり過ぎて昨日は行き損ねたんだとか。

このちゃんはまだ綾瀬さんたちと一緒にいるみたいだし、私も付き合うことにした。

「ど、どうすんのよ!？」

「とっ、とにかく朝倉さんを説得して――」

お店はロビーを通った先にあって、当然ながらロビーを通るのだけれど。慌てた声が飛び込んできて、自然と私たちは足を止める。ロビーでは、ネギ先生と明日菜さんが騒いでいた。……そうだ、明日の事で頭がいっぱいだったけれど、ネギ先生で問題が起きるんだった。

たしか、オコジョが仮契約カードを大量に作って……その原因に、私が渡した身代わりのお札も関わっていた筈。

「騒がしい奴らだな」

煩そうに顔を顰めてエヴァさんが呟く。千雨さんもげんなりとした表情で頷いていた。二人とも、基本は騒がしいのを好まないしなあ。私はといえば、この後の事を思い出すと、この騒ぎの原因も思い出せたわけで……朝倉さんに、魔法がばれたんだろう。

「エヴァさん、先に行ってももらえますか？」

「余計な事に首を突っ込むつもりか？」

「このちゃんの安全対策の為の、情報収集ですよ」

「どうだかな」

唇を僅かにつり上げて、エヴァさんは笑った。このちゃんの安全の為、九割。残り一割は——助けになってあげられたらと、思うから。

何が出来るかも分からないし、何をすればいいのかも分からないけれど。困って動けないままにいるよりは、話すことで道を見つけれられるかもしれないから。

「ほんつとに、お人よしだな。お前」

「あはは……」

千雨さんに深々と溜息を吐かれて、私は笑うしかなかった。

「ネギ先生、神楽坂さん」

「あ、桜咲さん！」

「どうかしたんですか？」

一瞬、困り果てていた二人の表情に、希望が見えたように思えたけれど、それはすぐに消えて曇ってしまった。

「えっと、あの……」

話しても良いんだろうかという躊躇。一度顔を見合わせた二人は、チラチラと私に視線を向けてくる。私はその視線を、僅かに首を傾げて受け止めた。やがて、意を決したようにネギ先生が口を開く。

「実は、ですね——」

騒ぎの原因は、私が覚えていた通りだった。なんでも、子猫を助けるようにネギ先生が魔法を使い、その後も朝倉さんの策に嵌って魔法を使ってしまったんだとか。

今はそれについて明日菜さんに報告した後で、先ほどの光景に至るわけなのだが……。

「ネギ先生は、どうしたいんですか？」

「僕、ですか？」

「……結局のところ、その問いに戻るんですよ。ネギ先生が朝倉さんをどうしたいのか」

「僕は……」

ネギ先生は困り果て、終いには泣いてしまいそうな、そんな目をして考え込んだ。

「……巻き込みたく、ないです」

「ネギ……」

「明日菜さんみたいにな、これ以上巻き込みたくないです。護れる自信が、無くて……」

「そうですか」

それが答えなら、それに準ずる道を選ぶだけでいいだろう。明日菜さんを見ると、真剣な眼差しでネギ先生を見つめていた。私が見ている事に気づくと、小さくだけれど頷かれた。同じ気持ち、ということだろう。

「魔法使いで、一般人にばれた場合の対処法は決まっているのでは？」

「はい、えっと……記憶を、消す事ですよね」

「それに則るのが一番良いでしょう。自信が無ければ、事情を話して学園長たちに実行してもらうのも手ですね」

「……あれ？でも学園長は、ネギ先生のパートナーを増やしたいんじゃない……記憶操作、してくれるのかな。」

「理解のある人なら、記憶を消さなくともこちらに関わらないように、強く説得することも可能かもしれませんが、あまりいい手とは言えないですね」

「どうして？」

「未知のものを前にして飛びつかない人間の方が、少なくともいいですか？」

千雨さんとかは別として。

「朝倉さんなら、喜んで取材に奔走しそうですが」

「た、確かに……」

「そっ、そんなことされたら僕、オコジョにされちゃいますよ!？」

「ですから、そうならない為に記憶操作か、説得をするんです。学園長たちに記憶操作を頼むにしても、少なくとも修学旅行中は必要以上に関わってこないように説得しなければなりません」

「そうですね……あうう、どうしよう……」

記憶を消すか、説得か。二択の一つで、ネギ先生は混乱する頭を抑えようとしながら、それでも混乱して言った。

「い、一番良いのは記憶を消す事ですし。ちょっと頭がパーになるかもしれませんけどそれで」

「やめなさい!!」

「あだっ!？」

聞き捨てならない単語に、明日菜さんが過激に止めに入った。

……さすがに、頭がパーは拙いですよ、ネギ先生。

「危ない事しようとすんじゃないわよ!」

「うっ、でも……」

「とにかく、桜咲さんの言うとおり、修学旅行中はなんとか大人しくしてもらって、帰ってから学園長に相談すればいいでしょ」

「……はい」

明日菜さんの言葉に、力なくネギ先生が頷く。とりあえず、私に出来るのはここまでかな。

後は二人が朝倉さんを説得するだろうし、エヴァさんたちも待たせているし。

「ああ、そうだ。ネギ先生、朝倉さんには私の事は言わないようにお願いします」

「え？ どうしてですか？」

「……要らない情報だからです。それに、興味を持って周りをうろつかれたら、このちゃんの護衛に支障がでます」

「それもそうよね……うん、分かったわ」

「ありがとうございます、桜咲さん」

「いえ。……あと、親書を守るつもりでしたら、くれぐれもホテルからは出ないようにお願いします。昨日張った結界の効力は、まだ続いていますから」

「……分かりました」

微かに息を呑んだネギ先生に笑いかけて、私はその場から立ち去った。

さて、エヴァさんたちが待ちくたびれていないと良いけれど。

二日目の夜の日（後書き）

とりあえず復活しました。

仮契約大作戦の日

見上げた時計は九時を指そうとしていた。就寝時間も近くなり、にも関わらず騒がしい他の部屋に、先ほどついに新田先生の怒りが爆発した。

お邪魔していたエヴァさんたちの部屋から、千雨さんと一緒に顔を覗かせるようにして伺うと、殆どの人たちが怒りを買っていたようだ。

「こりねえな、あいつ等も」
「そうですね」

このちゃんの姿もあったから、驚いてしまった。いったい何を騒いでいたんだろう。

「はははっ、革命だ！」
「ゲッ」
「……革命返しを」
「んなあ!？」

……この部屋も、随分と騒がしいな。
静かに扉を閉めて、盛り上がるエヴァさんたちを眺める。千雨さんと私は先に上がっていた。

「そろそろ、私も部屋に戻ります」
「ん?なんだ、もう行くのか」
「就寝時間ですから」

新田先生の説教も、もうすぐ終わるだろうし。それにそろそろ戻らないと、このちゃんが呼びに来るだろうから。

「（朝倉さんの動向も、気になるし……）」

ネギ先生たちが説得できたかどうかは分からないけれど、万一に備えておいたほうが良いだろう。

そう考えた時、軽いノックが聞こえ、こちらが返事をする前に扉が開いた。

「やつほー、エヴァちゃんたちご一行！って、あれ、桜咲さんまでいるし」

「こんばんは、朝倉さん」

「何の用だよ」

「んー、いやね。あんたらも企画に参加しないかな？って思ってたさ」

「企画？」

千雨さんが首を傾げた。にやりと笑って説明を始めた朝倉さんに、ネギ先生たちの説得が失敗に終わったのだと知る。

それにしても、こんな企画だったのか。結果として仮契約が行われたのは知っていたが、経緯までは知らなかった。

今回は、ネギ先生に身代わりを渡してはいないけれど……もしもキスをしてしまえば、本契約になってしまうな。どうするか……。

「うちらは参加しねえ。めんどくさいっての」

「いやいや、それじゃ困るんだって。参加者は多い方が良いしさ、ね？」

「ね？じゃねえよ」

千雨さんと朝倉さんの押し問答が隣で続いている。エヴァさんたちの方は、勝負の決着がついたようだが、我関せずを突き通していた。

「ちなみに、朝倉さん。もう出る事を決めた人はいるんですか？」

「お、興味あるの桜咲さん？ んっとね、参加するって言ってるのは」

朝倉さんは、パラパラと手帳を捲った。

「一班からは、鳴滝姉妹。二班はまだ決まってるね。三班は、いいんちよがやる気だったけど、相方が決まってる。四班もまだだね。五班は、ありゃ。桜咲さん、残念だったね」

「何がですか？」

「もう本屋とゆえの図書館組が参加するってさ」

「そうですか……」

「で、六班は誰が出るのさ？」

「だからでねえよ！」

苛立った千雨さんが、強引に朝倉さんを部屋の外へと追いやって扉を閉める。一気に静まり返った室内で、で、とエヴァさんが口を開いた。

「どうするんだ？」

「ゲームは好きにすればいいですが、仮契約をさせるわけにはいかないですよ」

乗り気になっている人たちもいるのに、強引に止めるのは後腐れが残りそうだ。それなら、ゲームは実行してもらって、周りの環境を変えてしまえばいい。

「魔法陣を破壊して、あと、念のためキスも実際にされないように、邪魔する役目を頼もうかと」

「邪魔？」

「はい」

好都合にも、まだ参加は決まっていらないらしいし。あの二人に頼むとしよう。

「私らも手伝うか？」

「あ、いえ。魔法陣の破壊は私一人でも可能ですし、大丈夫ですよ」

「ふんっ……」

千雨さんの問いに答えると、エヴァさんが不満げに鼻を鳴らしてそっぽを向いた。怒らせてしまったらしい。

「エヴァさん……」

「……」

「あの……」

「……」

「………茶々丸さん」

「マスターは、刹那さんが自分を頼って下さらないので、拗ねていらっしやいます」

「っ余計な事は言わんでいい!!」

返される沈黙に困ったように茶々丸さんを見ると、そんな答えが返ってきた。

頼る、と言っても、十分に頼ってるんだけど……そういう事ではないんだろうか。

「なら、あの……一つ、お願いしたいんですけど」

「なんだ」

「カモさんを、見張っててくれませんか？余計な事をしないように」

「……ああ、良いだろう」

「ありがとうございます」

これなら、魔法陣を再度書かれたりする心配は無くなる。心なしか、機嫌良さそうに唇を少し上げて笑うエヴァさんに安堵した。

「……それじゃ、私は行きますね」

「なんかあったら、声かけろよ？」

「はい」

声をかけてきた千雨さんに笑い返して、部屋を出る。まずは、何をしようか。

新田先生たちの監視の目を避けて、二階の窓から外に飛び降りる。このちゃんたちの様子を見たり、邪魔役をお願いしたりしていたら、思ったよりも時間がかかってしまった。十時四十分、あと二十分でゲーム開始だ。

「長瀬やクーフエイがいるから、始まってからも大丈夫な筈だが……急いだ方が、いいだろうな」

ゲームで、実際にキスがされないように頼んだ、邪魔役。それが長瀬とクーフエイだ。

とりあえず穏便な方法で、参加者とネギ先生がキスしないように、邪魔をしてほしいと頼みである。穏便な、とは言っただけ……大丈夫だろう。おそらくは。

「エヴァさんの話だと、大型の魔法陣は幾つかの小さな魔法陣で形成される、って言ってたけれど……」

それがどこにあるのか。軽く目を閉じて、意識を集中させる。

僅かながらに感じ取れる魔力を頼りに歩みを進めて、草を掻き分けて進んで行った先で、目的の魔法陣を見つけた。

しゃがみ込んで指で触れてみる。魔力が流れているせいか、ただ擦っただけで消えるようなものでは無いらしい。

「仕方ないな」

勾玉を夕風に戻して、鞘から抜く。横に一振りして、空気を切り裂く音の後にビシッと地面に浅く切れ目が入った。

暗闇の中でもはっきりと浮かび上がっていた白い魔法陣が、だんだんと闇に飲まれていく。効力が切れた証拠だ。

「次は、あっちか」

夕風を戻して、私はまた歩き出した。

拙者とクーは今、枕を両手に持って廊下に立っているでござる。もうすぐ、ネギ坊主の唇争奪戦が始まるでござるよ。

「張り切って邪魔するアル！」

「頑張るでござるよ♪」

最初は、拙者とクーも普通に参加するつもりであった。けれど、刹

那に頼まれたんでござるよ。他の参加者がネギ坊主とキスしないように、邪魔してほしいと。

理由は分からないでござるが、勝負に障害は付き物だからして、引き受けたでござるよ。

「帰ったら刹那と真剣勝負ネ!!」

「楽しみでござるな♪」

協力の見返りは、麻帆良に帰ってからの刹那との勝負でござる。修学旅行中に何か頼む事があるかもと言われていたでござるが、その見返りがそれなのだから安いものでござるよ。

春休み前に、刹那と一戦交えたでござるが、とても強くなって驚きでござった。拙者もまだまだ未熟と思わされたでござるよ。

刹那はなかなか手合わせをしてくれない故、この見返りは有難いでござるな。

……ところで、刹那はいつになったら拙者を楓と呼んでくれるんでござろうな。真名は名前なのに、拙者だけ寂しいでござるよ。

「では、クーよ。そろそろ行くでござる」

「了解アル!」

十一時になって、さっそく行動開始でござる。歩き始めてすぐに獲物を発見、ゆうな殿とまき絵殿にいいんちよにザジ殿でござるか。既にザジ殿以外は戦闘を開始しているでござるな。

「いくアル!!」

クーが突撃していったのを見送って、拙者は一人離れているザジ殿を見る。目が合ったザジ殿に問いかけたでござる。

「いいんちよの助太刀はしないでござるか？」

「……」

首を振られてしまった。どうやら、この争奪戦自体に参加するつもりは無いようでごさる。

「クー、拙者は別の班を探しに行くでござるよ」

「了解アル！こっちは任せるネ！！」

では、手始めにネギ先生の部屋に行ってみるでござるかな。にんにん♪

二つ目の魔法陣を破壊し終えた頃には、既に十一時を過ぎていた。意外と分かり辛い場所に魔法陣が描かれていて、探すのも大変だ。残りは二つ。ホテルの中の状況が気になるけれど、立ち止まる余裕も無い。

夕風を勾玉に戻して歩き出し、一度草むらから出たところで、カタリという物音に頭上を見上げた。

「あ、桜咲さんです」

「どうしてそんな所に……」

「それ、私がお聞きしたいですよ」

二階の屋根に、宮崎さんと綾瀬さん。ゲームに参加している筈だけれど、まさかこんなルートで向かっているとは思わなかったな。

……二人とも、図書館探検部に所属してるんだっけ。意外と体力とがあるんだなあ。

「ネギ先生のお部屋を目指してるんです」

「そうなんですか。頑張ってくださいね」

「桜咲さんは、何をしていますか？」

「私は、夜の散歩です」

今日は月も綺麗ですから。そんなことを言って、二人を見上げて笑う。

そのまま、もう一度一言だけ応援の言葉を投げかけて、私はまた歩き出した。今はあの二人に気を取られている場合では無いからだ。歩きながら振り返って、二人が屋根伝いに歩いていく後姿を確認する。タツと地面を蹴って走り出した。

残る魔法陣は二つ、微かな魔力を頼りに進み、今度は簡単に見つかった魔法陣を斬りつけて破壊する。後、一つ。

『おい、刹那』

『エヴァさん。どうしましたか？』

『オコジョが何やら騒ぎ出したからな。仕留めるぞ』

『殺さないでくださいね。あと、朝倉さんは？』

『オコジョの傍にいるな』

『……』

魔法陣が壊されているのに気付いて、焦りだしたんだろうけれど……朝倉さんが傍にいるんじゃない、下手に手出し出来ない。私だけでは無く、エヴァさんもあまり正体を知られない方が楽で良いのだ。

おそらくは、まだ騒ぐだけで動き出しはしない。それなら、まだ放っておいていい。

『朝倉さんの目があると面倒ですから、まだいいです。ただ、何か行動しようとしたら再度連絡してください』

『ああ。終わりそうか？』

『あと一つですから、すぐに終わらせてます』

念話を切って、早足で進んでいた足を速めて走り出す。エヴァさんも何も言っていないし、魔法陣が反応した様子も無いから、まだ誰もキスはしていない。

とりあえず、このまま平和的に終わらせてもらおう。事故でこのちゃんとキスしました、なんてなったら、洒落にならないどころじゃないんだから。

走った先で見つけた魔法陣は木に描かれていて、それを夕風で斬りつける。深く斬り過ぎて一瞬、木がぐらついたけれど問題は無さそうだ。

これで四つ全て破壊した。ホテルを囲む魔法陣も消滅しただろう。夕風を勾玉に戻して、一階の窓からホテルの中を伺おうと思ったら、従業員用の出入り口があった。中を覗いて、人がいないのを確認してから入り込む。エヴァさんたちと訪れたお店のすぐ傍だった。

「あの、友達から——お友達から、始めませんか？」

静かに扉を閉めたところで聞こえてきた、ネギ先生の声。お店の陰からロビーを覗くと、ネギ先生と宮崎さんと綾瀬さんがそこにいた。……宮崎さんの告白に対する、ネギ先生の返事、かな？盗み聞きになってしまつて、少々申し訳ないな。

「……………」

少し視線を逸らした先、廊下の角で朝倉さんとオコジョを発見する。エヴァさんも近くにいるだろう。

……宮崎さん、このゲームで仮契約を結んだんだったよな。なら、いつ結んだんだろう。少なくともこのままなら、キスをしても結ばれたりはしないけれど。

「あっ」

様子を伺っていたら、戻ろうと歩き出した宮崎さんが転んで、そのままネギ先生の方に倒れ込んだ。瞬間、走った予感に視線を巡らせる。オコジョが動き出そうとしていた。

「チイツ」

直接、魔法陣を描くつもりか。動きが速いあのオコジョならそれも可能かもしれないから、余計に焦る。飛び出すか……このままで？ 視界に入ったそれを手に取り顔に被って、更には商品を覆うように被せてあったシーツを身に纏って、髪を解いた。足に気を集めて床を蹴り一気に距離を詰める。

角から飛び出そうとしたオコジョの前で急停止して、思い切り手を振るう。バンツと壁にオコジョが叩き付けられた。

「ンギヤッ!!」

「うえっ、ちょ!?!」

突然の事態に、朝倉さんが動揺する。その目が私に向けられて、ビクツと後退りされた。

飛び出す直前に、咄嗟に手に取ったのはお店で売られていた狐の面だった。それを顔に被り、シーツで体を隠す。これなら、私の正体は分からないだろう。

「……………あまり、関わるな」

「へ…………?」

「死にたくなければ、関わるな」

私に出来る精いっぱいの低い声で告げる。そうしてまた足に気を集めて、私はその場から立ち去った。

……後でお面とシート、返してこないとなあ。

身を隠してネギ先生たちが立ち去るのを見送ったところで、こそこそとお面とシートをお店に返す。後は新田先生たちに見つからないように、部屋に帰らないと。

「刹那」

声をかけられて振り向くと、無然とした表情で立つエヴァさんがいた。私は笑みを浮かべて頭を下げる。

「エヴァさん、ありがとうございました。カモさんを見張ってくれて」

「……」

「エヴァさん？」

「なぜ、私に頼まなかった？」

「え？」

頼まなかったって、何を？

「わざわざお前が行かなくとも、私に言えばアレを止めるなどすぐにできた事だろう。違うか？」

「そう、ですね……」

「なぜ、自分で飛び出した？」

「……」

なぜ、か。なぜだろう。止めなければと思って、どうやって止めるか考えて……。

「私の事を、忘れていたな？」

「……そうじゃ、ないんですけど……」

「ならば、私に頼む事が思いつかなかったか？」

「………はい」

エヴァさんの言う通りで、私はあの瞬間、エヴァさんに頼むという考えは頭から消えていた。それを、怒っているんだろうか。

「なぜ、私を頼ろうとしない？」

「……頼らせてもらってます。十分すぎるくらいに」

「その割に、私には頼られた記憶が殆ど無いな」

「………」

なんと返せばいいのか分からず、押し黙る。何も言えなくて、僅かに視線が彷徨った私に、エヴァさんは溜息を吐いた。

「お前の性格は、なかなか矯正が難しいな」

「……すみません」

「謝るなど言っただろう？別に、迷惑とは思っていない」

ただ、とエヴァさんは一度言葉を区切り、ジッと私を見つめて口を開いた。

「お前は何も気にせず、もっと楽に私や千雨を頼れ。あれこれ考えず、どんなことでも良いから……私たちに、頼れ」

いいな？と言ってくる瞳があまりにも強い光を宿していたから、私

はただ、頷き返す事しか出来なかった。

三日目の朝の日

仮契約大作戦が、事実上の失敗に終わった翌日。

宮崎さんには朝倉さんから、景品としてネギ先生の写真（隠し撮り、寝顔）が渡されていた。仮契約で発生するカードが出来なかったから、代わりの品という事なのだろう。

それでもクラスの人たちが羨ましがって、宮崎さんを囲んでいた。それを遠目に眺めつつ、私とこのちゃんは今日の予定を確認する。

「昨日も確認した通り、一時半から三時の間にシネマ村に行って、そこで宮崎さんたちと別れて総本山に向かう。それまでは、何も気にしないでくれればいいから。タイミングもこっちで見ろし」

「ネギ君たちは？」

「今日、総本山に向かうと思う」

「そか」

とりあえず、このちゃんは普段通りにしてくれれば、それでいい。

そう伝えたと、頷きながらもこのちゃんが僅かに視線を下げて、申し訳なさそうな顔をした。

「ごめんな、せっちゃん」

「何も謝ることは無いよ」

「でも、うちの問題なのにせっちゃん、ずっとがんばっとるし……修学旅行、楽しめないやろ？」

「まさか」

驚いたように笑って見せる。

「私がこのちゃんを護りたくて、勝手にやってるだけ。それに、久々に京都に来て、十分に楽しいよ」

「ほんまに？」

「本当に」

「……なら、よかったえ」

でも、無理はせんでなと、安心したように笑ったこのちゃんが言ったのに、私は頷き返す。

無理もしていなければ、このちゃんが心配するほどの事はしていな
いし、起きていない。むしろ、私が気をつけるべきはこれからで……
……まずは、無事にこのちゃんとネギ先生の親書を、長の元まで届
けなければならぬ。

強硬派の妨害は必須だろうが、まあどうにでもしてみせるさ。

そう私が考えたところに、エヴァさんたちがやって来る。それぞれ
が私服に着替えていて、私は茶々丸さんが着ている服を目にとめて
笑みを浮かべた。

「おはようございます、エヴァさん、千雨さん、茶々丸さん」

「おはよーさん」

「ああ、おはよう」

「おはようございます、刹那さん、木乃香さん」

「はよ」

挨拶をすると、エヴァさんが淡々と、茶々丸さんが僅かに頭を下げ
ながら、千雨さんがあくび混じりに返してくれた。

私の隣で、このちゃんが茶々丸さんの姿を視界に収めると、はわあ
と息を吐いて言う。

「茶々丸ちゃん、かわえくなあ」

「ありがとうございます」

「刹那が選んだんだろ？いつの間に買いに行ったんだよ」

「修学旅行前に、少し」

千雨さんの問いに答えて、上々の反応に私は何となく、満足感を覚えた。

今度は千雨さんとこのちゃんに選んでもらおう。きっと、私が選ぶ以上に茶々丸さんを可愛くできるだろうから。

「エヴァさんは、今日はシンプルなんですネ」

「いつも着ているのはかさばるからな。皺になったら敵わん」

「ああ、なるほど」

いつもよりひらひらが少ないエヴァさんに納得する。確かに、いくらエヴァさんの身長が低いとはいえ、ドレスのようなあの服を持ってくるのは面倒かもしれない。

「おーい、木乃香、桜咲さーん」

「行くですよー」

「あ、はーい」

のんびりと会話をしていた私たちの周りは、気づけば人の姿も少なくなっていて。ホテルの出入り口で手を振る早乙女さんと綾瀬さんに、このちゃんが手を振りかえし答える。

私はそれでは、と一度エヴァさんたちに声をかけて、軽く頭を下げた。そうしてこのちゃんと共に、綾瀬さんたちの元に向かう。

「お待たせやー」

「すみません、遅れました」

「いやいや。それじゃ、レッツゴー！」
「オー！」

手を振り上げた早乙女さんに、ノリ良くこのちゃんが答えて。私たちはホテルを出発した。

出発して早々、単独行動を取ろうとしていた明日菜さんを捕まえて、芋蔓式にネギ先生も捕まった。

「せっちゃんせっちゃん、プリクラとろー！」
「え、わっ」

ネギ先生たちがどうするのか、気にしながら歩いていたらこのちゃんに手を引かれた。見つけたゲームセンターに連れ込まれて、プリクラ機に押し込まれる。

シャッターの瞬間に抱き着いてきたこのちゃんを受け止めた写真をこのちゃんが選んでしまつて、意気揚々とゲームセンター内を歩くこのちゃんにちよつと恥ずかしくなった。

次に綾瀬さんたちが見つけたのは、彼女たちも遊ぶカードゲームのアーケード版。このちゃんも知っているらしく、後ろから画面を見て楽しそうにしている。

ネギ先生が実際にやってみる事になり、より一層騒がしくなつたところで、隣の機械に少年が立った。

「隣、入ってええか？」

「え？ あ、うん」

「おー」

「勝負だよ大丈夫！？ 先生」

どうやら、コンピューターではなくネギ先生と少年の戦いになるらしい。

私は始まった勝負の動向はあまり気にせず、隣の機械に入った少年を眺める。

「（小太郎君、だな）」

何十年と見ていないが、少年は彼で間違いないだろう。分かったところで、今この場でどうするわけにもいかないのだが。

勝負の決着がつき、ネギ先生側に負けの文字。立ち去ろうとする小太郎君に、早乙女さんが勝ち逃げだと叫んでいた。

「……ん？」

僅かに後ろを見ながら走っていた小太郎君にぶつかりそうになって、体をずらして避けると、小太郎君は足を止めて眉をピクリと動かし、視線が合って、それから納得したように獰猛な笑みを浮かべる。

「なんや、楽しそうなのがおるやないか」

「何がですか？」

「なーんも！ほなな、ねーちゃん」

ゲームセンターを出て行く小太郎君に、残された私は困ったように頭を掻いた。目をつけられた、かもしれない。

これで月詠に続いて、か。彼は女を殴るのを嫌っていた筈だけれど、どうなんだろう。

式神に小太郎君の追跡をさせようか考えて、やめておく。こちらが警戒していると思われる、用意周到に来られたら、相手をするのが大変になるから。それなら、油断していると思わせておいた方が良

いかと思った。

「よぉーし、関西限定レアカード、全部集めちゃうよー！」

ネギ先生と小太郎君の離れたゲームには、入れ替わりで早乙女さんが入っている。張り切る彼女たちから、こそこそと離れるネギ先生と明日菜さんを見つけた。どうやら、これから総本山へ向かうつもりのようなのだ。

「桜咲さん、私たち行ってくるね……えっと、木乃香の事、お願い」「お任せを。そちらも、気をつけてください」

静かに声をかけてきた二人に頷いて、その後ろ姿を見送る。追跡用に式を飛ばした。ゲームセンターを出て行く二人を追うように動く宮崎さんを見つけて、声をかける。

「宮崎さん？」

「えっ、あ!？」

「どうかしましたか？」

「あ、そのー……」

立ち止まった宮崎さんは、チラチラとネギ先生たちが出て行った出入り口を見ては、私を見てオロオロと言葉に詰まって慌てている。私は少し首を傾げて、そんな彼女に笑いかけた。

「早乙女さんたち、何だかボスと戦ってるみたいですよ」

「は、はい。そうですねー」

「行かないんですか？」

「えっと……行き、ます」

小さく頷いた宮崎さんは、名残惜しげにまた出入り口を見つめた後、早乙女さんたちの元に駆けだした。それを見て私も、彼女たちの元に向かう。今から探しても、ネギ先生たちは見つからないだろう。

……一時間ほど経っても、早乙女さんたちのゲームは終わりを見せないでいた。意外と時間がかかるようだ。一方で、式神を通して確認したところ、総本山に向かったネギ先生たちは敵の結界に閉じ込められてしまっていた。

「(……仕方ない、か)」

非協力体制とはいえ、ネギ先生たちは自分たちの現状を分かっているように。このまま放っておくと、敵に閉じ込められたまま親書を奪われてしまう可能性もある。

『ネギ先生、神楽坂さん』

式神と繋ぐお札に少しばかり気を多く流した。オコジョが契約執行について説明しているところに割って入る。

ちびせつなに説明は任せ、意識の一部だけを繋いでおく。半自立行動型にしたから、こちらで戦闘があっても大丈夫な筈だ。

「あ、せつちゃんおったー」

このちゃんが駆け寄ってくる。早乙女さんたちは未だゲームに夢中なようで、このちゃんとはまた別のゲームを指差した。

「まだ時間かかるみたいやから、別な事して遊んでよー」

「見てなくていいの？」

「飽きてもうた」

あっけらかんと言いつこのちゃんに笑って、手を引かれて歩く。
もうしばらくは、ここにいる事になりそうだ。

三日目の朝の日（後書き）

ところで、シネマ村で刹那に仮装をさせるべきか否か。というか仮装するにしてもどうしよう……原作通り、新撰組でいいですかね？男装か、普通に和装でもいいですけど動きづらいとあれですよね。戦闘がね。

いっそもうそのまま仮装しないでいかせてやろうか……。

千本鳥居の日（前書き）

とところどころで視点変更がありますから、ご注意を。

千本鳥居の日

親書を届けるために、関西呪術協会に向かった僕と明日菜さんとカモ君は、敵の結界に捕まってしまいました。

無間方処の咒法という、東洋の魔法みたいです。桜咲さんが飛ばしてくれた式、えっと、ちびせつなさんが教えてくれました。

「敵の狙いは、ネギ先生の親書です。おそらくは、戦力の分断を目的に結界を張ったんでしょうね」

「そ、それじゃ木乃香さんは!？」

「ご心配なく。本体が付いていますから、問題はありません」

「桜咲さんなら、大丈夫よね。私たちより強いだろうし……」

明日菜さんの言葉に頷く。桜咲さんは、本当に強いと思う……実際に戦ってるところは、見た事無いんだけど。なんだか、そんな気がする。

「ともかく、今すべきはこの結界からの脱出です」

「でもよ、どうやって脱出するってんだ?どっちに進んでも出られねえんだろ?」

「大丈夫です。この結界を形成するお札が、結界内のどこかにあるはずですから、それを探して破壊します」

「な、なるほど……それなら、早く探しに――」

そう、明日菜さんが足を一步踏み出したその時。ドスンッと、僕たちの目の前に大きな蜘蛛が落ちてきた。

「なっ、なに!？」

「敵です! 気をつけて!!」

慌てて杖を構える。蜘蛛の頭に男の子がすたっと着地して、驚いて声をあげた。

「き、君は——っ!!」

「ゲーセンにいた子じゃない!」

「覚えとったか。ほんまは、お前やなくてあっちのねーちゃんとりたかったんやけどなあ。仕事やし、しゃあないわ」

ねーちゃん? 誰の事だろう。

「ほな、やろうや。西洋魔術師、ネギ・スプリングフィールド」

「っ……」

たぶん、あの大きな蜘蛛が、前に桜咲さんが説明してくれた護鬼……僕で言う明日菜さんのような存在。

なら、明日菜さんと蜘蛛、僕とあの男の子で戦う事になるのか。

「ネギ!」

「ハ、ハイ! —— 契約執行、90秒間! ネギの従者『神楽坂明日菜』!!」

魔力の供給。明日菜さんが蜘蛛を殴り飛ばして、カードからアーティファクトを呼び出す。

パアンツと呼び出したハリセン（ハマノツルギ）で蜘蛛を叩くと、一瞬にしてそれが一枚のお札に戻った。

「明日菜さん、凄い!」

「神楽坂さんには、式払いの力があるようですね。さすがです」

ちびせつなさんも、感心したように明日菜さんを見ている。

「でもネギ先生、気をつけてください。あの少年、術者ではありません」

「えっ？」

「でも、あいつ桜咲さんの言っただゴキとかいうの連れてきて……」
「そのちっこい式神の言う通りや！」

ダンッと男の子がすごい速さで飛び込んできて、僕と明日菜さんは咄嗟にそこから飛び退く。

男の子のパンチが石畳の地面を大きく削って、パラパラと小さな石の破片がそこらじゅうに転がった。

「俺はお前ら西洋魔術師みたいに、女に守ってもらわな戦えん弱いやつとちゃう。言っとくけどな、俺はそのチビ助みたいな奴が大嫌いなんや」

「っ僕は弱くなんか――」

「はっ、なら証明してみい！！」

杖を握りしめた僕に、男の子はにやりと笑って向かってくる。その間に明日菜さんが飛び込んできてハリセンを振るうけれど、男の子はひょいひょいとそれを躲して笑った。

「ははっ、当たらない意味がないなあ！」

「っのおお！！」

ブンッと振るわれたハリセンが宙を切って、男の子が魔法を唱えようとした僕の目の前に。

「風花、武装解除!!」

魔法は間に合った。けれど、男の子が何枚ものお札をその手に持っていて、どういいうわけか僕の魔法は男の子の帽子を吹き飛ばすだけに終わってしまう。

「風楯ツ——」

握りしめられた拳に、護りを固めようとして失敗した。障壁越しでも強い力で殴られ、僕は大きく吹き飛ばされる。

「ネギッ!!」

「おらおらおらおらおらあああああ!!!!」

「ッ、うわあああ!!」

どうにか、腕で身を守るのが精いっぱい。魔法を唱える暇も無い。明日菜さんの攻撃も、男の子が速すぎて当たらない。防戦一方っていうのは、こういう事を言うんだと思う。

「ッ!!」

ついに、障壁を貫かれた。頬を襲った痛み、口の中に血の味がして、地面に手を着いたままペツと血を吐き出す。

「へへっ、障壁抜いたで。今のはきいたやろ」

「う……」

痛い。こんなに痛いので、初めてじゃないかな。エヴァンジェリンさんとの戦いときも、前衛は明日菜さんに任せていたから、こ

んな風に——戦いで僕が殴られるなんて、無かった。

「（……そもそも、こんな風な戦いなんて、全然したこと無いけど）」

修行相手はいても、敵はいなかったから。こんな戦いをしたのは、エヴァンジェリンさんくらいだ。

「明日菜さん！ネギ先生を頼みます！」
「っ何するつもり——」

ボフンツと煙がこの辺り一帯に立ち込める。ちびせつなさんが、目くらましをしてくれたみたい。

「ほら、行くわよネギ！」
「明日菜さんっ……」

引きずられるようにして、僕は明日菜さんたちと一時撤退の為に走り出した。

「だああああ！ほんまに逃げよったあいつら！」

煙が晴れたら、あのちび助たちがいなくなりおった。結界から出られん言うても、探すのかて楽やないんやで。ったく。

「これやから西洋魔術師は嫌いなんや」

女に守られてばっかで、自分は戦おうとせんし。男としてそれはど

うやっちゅうねん。

俺は女殴るのややし。あのねーちゃんはなかなかやりよったけど……でもなー。

「あ、でもあっちのねーちゃんとはやってみたいなあ」

ゲーセンですれ違ったあのねーちゃん。千草ねーちゃんの話やと、あいつが護衛なんやろうな。どうせやったら俺もそっちが良かったわ。

「月詠ばつかずるいで、ほんまに。俺も強い奴とやりたいわー」

一昨日やって、月詠あのねーちゃんとやった言うし。ごつつ強いんやろなあ。

「あー、ったく。しゃあないな！」

あのちび助相手はつまらんけど、あっちは俺の仕事や無いし。千草ねーちゃんに言われとるし……ちび助、探すかあ。

林の中を走りながら、僕は息を整えようと必死で呼吸を繰り返した。あの男の子は、明日菜さんじゃなくて僕を狙ってくる。それは、魔法使いとしては致命的な弱点を突かれたも同然だけど……今の僕には、むしろ有難かった。

「（僕じゃまだ、明日菜さんを守れない）」

明日菜さんの為に魔法の補佐を満足にすることも出来ない。明日菜

さんだって、契約執行をして速く動けても、あの男の子はそれ以上に速い。

それなら、明日菜さんでは無く僕を狙ってくれた方が……明日菜さんが、必要以上の怪我をしないで済む。それに、僕の考えた作戦だって、成功させられるかもしれない。

「（絶対に、負けない）」

父さんを探す為に、明日菜さんを守る為に、この勝負は負けられない。負けちゃいけないんだ。

「広いところで迎え撃つぜ、兄貴！」
「うん！！」

林から道へと飛び出して急停止。鳥居の上を凄い速さで向かってくる男の子に、僕は覚悟を決めた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！風精召喚・剣を執る戦友！！」

「来るわよ！！」

明日菜さんの言葉とほぼ同時に、男の子が鳥居を蹴って高く飛んだ。

「迎え撃て！！」

「ハッ、よーやく本気かちび助！いいで、相手したる！！」

八体の風精を相手に、男の子が軽い身のこなしでそれを消していく。でも、そっちは囧だ。

最後の風精が消された時には、次の魔法の詠唱が完了していた。

「魔法の射手 連弾・雷の17矢!!」

「うおっ!」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ」

そうしてまた、魔法を唱える。畳み掛けて一気に仕掛けるんだ。

「白き雷!!」

「つつがあああああ!!」

カツと僕の手が光って、雷が男の子に襲いかかる。まともに喰らった男の子が鳥居から地面に落ちて、砂埃が宙を舞う。

まともに入った、はず——そう思ったら、男の子がボツと砂埃から姿を現して向かって来た。

「なかなかやるや無いか、ちび助! 今のはまともに喰らったらヤバかったわ」

「っ」

「この、来なさいよ! 同じ戦士同士、相手になるわよ!」

明日菜さんが僕を庇うように前に立つ。男の子はそれにニヤツと笑って、その姿は一瞬の後に僕たちの視界から掻き消えた。

「!？」

「らっ!!」

次の瞬間、男の子は僕のすぐ後ろにいて、僕は守る間もなくお腹に拳を叩きこまれてしまった。

一瞬、宙を飛んだ僕の体を追いかけて放たれた拳が、僕を地面に叩き付ける。殴られたお腹を抱えて、僕は地面に倒れたまま力ハツと

息を吐き出す。

「ネギ!!」

「ああ、ねーちゃん。言っとくけど俺は戦士とちゃうで」

男の子が言うと、その影から何か……黒い犬が何匹も出てきた。

「狗神使い言うんや。覚えとき」

「なっ、何アレ。あいつの影から変な犬が!」

「式神のようなものです。気をつけて!」

「ほらお前ら、あのねーちゃんと遊んでやり」

明日菜さんがハリセンを構える。けれど振るわれたそれを嘲笑うように軽々と避けると、黒い犬が明日菜さんたちに群がった。

「きゃあああ!! な、なんなのよこれー!!」

「あ、明日菜さっ」

「お前の相手は俺や!!」

「っああ——」

叩きこまれる、拳の嵐。顔も腕もお腹も足も、全部に打ち込まれる。その嵐にもう悲鳴をあげる暇すら無くなって、それでも僕は懸命に意識を繋ぎとめて時を待つ。

大丈夫、もう少し、もう少し——吹き飛ばされた体が大きな岩にぶつかって、男の子が追いかけて来て拳を構える。

「勝ったで!! とどめ!!」

——今!!

「契約執行、0.5秒間。ネギ・スプリングフィールド」

その瞬間、僕の体は嘘のように軽くなる。突き出された拳を左手で逸らし、右手で男の子を宙へと殴りあげた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

体が軽くなったのは、ほんの一瞬。今はもう痛む体が鉛みたいに重くて、それでも僕は詠唱を続けた。

「闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ」

宙を舞う男の子の下に入り込み、右手を上突き出して、

「――白き雷!!」

零距离から、直接叩きこむ。その威力は絶大で、辺りは砂埃に覆われて何も見えなくなった。

そして、それが晴れた時、僕の目の前には地面に倒れ込む男の子がいた。

「ぐあ、がつ……ぐっ」

「――どうだ!これが西洋魔法使いの力だ!!」

今はまだまだ、弱いけれど。僕は、もっと強くなってみせる!

はっ、ははっ、はははははははっ!!

なんや、守られるだけの弱虫思ったら、なかなか面白いやないか。

「さっきのは、取り消すで。ネギ・スプリングフィールド……ただの人間に、こないやられたのは初めてや…」
「!?!」

でも、俺を舐めたらいかんぞ。

「まだ、終わらへんで。まだまだや」

こないな奴は初めてや。あのねーちゃんと戦えなくて残念やったけど……それでも十分に楽しいなあ。

「こっからが本番や——ネギ!!」

「つて、ええええええ!!」

「獣化……変身した!?!」

そう、これが俺本気の姿。人間と狗族のハーフの俺が、狗族に近い姿をとった時の姿や。こっちは、さっきの人間に化けた時と違って、もっと速いし強いぞ?

「さあ、やろうでネギ」

「っ仕方ない」

ネギが杖を構えて、俺が拳を振り上げる。今度は負けへん、俺が勝つ。

「——その必要はありませんよ、ネギ先生」

「っなに!?!」

俺の後ろから声が聞こえた。咄嗟に振り返ろうとした瞬間、首筋に

ちくりとした痛みが走る。

バツと右腕で後ろにいた何かを振り払おうとしたら、そいつはひらりと宙を浮いて回避しよった。

「お前は――」

「ちびせつなさん!？」

「はい、ネギ先生。僭越ながら、お力添えをさせていただきました」
「力添えて……」

俺の後ろにいたのは、ちっこい式神。右手に持ってるのは小さな刀やな、もしかして今の痛み、あの式神か？
ざっと構えて俺が警戒すると、式神はにこりと笑ってきおった。その笑みが、突然ぐにやりと歪む。

「っなんや……!？」

式神だけやない、視界全部がぐにやぐにやになって、体からも力が抜ける。な、なんや、何がおこつとるんや？

「さ、脱出しましょう」

「っ待てや!お前、俺に何しよった!？」

起き上がれない体を、何とか起こそうとしながら俺が声を張り上げると、式神の声がすぐ真上から聞こえてきた。

「麻痺毒を注入しただけです。そのうち、痺れも取れますよ。軽い物ですから」

「麻痺、やと……」

「はい。私の刀は、麻痺毒を塗ってありますから」
「っ卑怯やぞ!！」

戦うんなら、拳で戦わんかい!! そう叫んだら、式神が嗤った気がした。

「卑怯で護れるなら、いくらでもやりますよ」

その言葉を残して、足音が遠ざかっていく。動けない体で、俺はギリギリと奥歯を噛みしめた。

「っ次は絶対に負けへんからなああああ!!!!」

ところで、あの式神って誰の式神やったんや？

千本鳥居の日（後書き）

……今回の話、びみょー。ネギ側がちと大変ですね。
話の構成とか甘いところありますが、今の限界点です。二日もかけ
てこんなので申し訳ないです……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9232x/>

逆行した日

2011年11月26日21時50分発行